念仏林南遺跡Ⅰ

新設道路改良事業（市道建設）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４年３月

石川県小松市教育委員会

念仏林南遺跡Ⅰ

新設道路改良事業（市道建設）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４年３月

石川県小松市教育委員会

例　言

1．本書は、小松市月津町ヲの部において小松市（建設部土木課）が実施した新設道路改良事業（市道建設）に伴う念仏林南Ｂ遺跡（ねんぶつりんみなみＢいせき）の発掘調査報告書である。ただし、昭和59年に、特別養護老人ホーム「松寿園」建設に伴い実施した念仏林南Ａ・Ｂ両遺跡にまたがる調査（第１次調査）のＢ遺跡部分の報告を含めた。このことから、本書を「念仏林南遺跡Ⅰ」とし、特別養護老人ホーム建設に伴う報告書をＡ遺跡を対象とした「念仏林南遺跡Ⅱ」として刊行するものとした。

2．市道建設に伴う発掘調査は、小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が主体となり、平成３年９月９日より同年12月24日まで実施した。尚、調査実施に伴う経費の執行は、担当課である土木課の直営とした。

3．発掘調査は、樫田誠が担当し、望月精司の協力を得た

4．出土品整理は、遺物洗浄までを、平成４年１月13日より同年３月31日まで、土木課の直営により実施した。注記・接合・復元及び報告書の作成作業は、平成５年度において、教育委員会予算により実施した。

5．出土品整理及び報告書作成は、樫田が担当し、下記各氏の協力を得た。

石田和彦、打田外喜代、江野直子、国本久美子、林真樹、宮田佐和子、望月精司、山口美子

6．本書の執筆・編集は、樫田が担当した。

7．本書で示す方位はすべて磁北である。尚、第３図念仏林南遺跡の立地の図には、小松市発行2,500分の１国土基本図（平成２年修正「四丁」「矢田野」）を、第４図周辺の遺跡分布の図には、国土地理院発行25,000分の１地形図（昭和62年発行「小松」「動橋」）を使用した。

8．本遺跡の遺構図、現場写真、出土遺物、遺物実測図などの資料は、小松市教育委員会で一括して保管している。

9．発掘調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体からのご協力とご指導を得た。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。（敬称略　50音順）

上野与一、加納他家男、北野勝次、津田隆志、橋本澄夫、橋本正博、浜岡賢太郎、久田正弘、平口哲夫、福海貴子、本田秀生、安英樹、吉岡康暢、石川県立埋蔵文化財センター

目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境 …… 1
第１節　位置及び地理的環境 …… 1
１．小松市の地形 …… 1
２．月津台地と遺跡の立地 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 4
１．周辺の遺跡 …… 4

第Ⅱ章 遺跡と調査の概要 …… 7
第１節　遺跡の概要 …… 7
１．念仏林遺跡と念仏林南遺跡 …… 7
２．念仏林南遺跡の概要 …… 8
第２節　経緯と経過 …… 9
１．調査に至る経緯 …… 9
２．発掘調査の経過 …… 9
第３節　調査方法と遺構分布の概要 …… 11
１．グリッドの設定 …… 11
２．調査の方法 …… 11
３．遺構分布の概要 …… 11

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 13
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
１．遺構 …… 13
２．出土土器 …… 23
３．出土石器 …… 39
４．小結 …… 56
第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 58
１．全体の概要 …… 58
２．１号土坑 …… 58
３．11号住居跡 …… 60
４．小結 …… 71
第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 74
１．全体の概要 …… 74
２．２号住居跡 …… 74

3．4号住居跡…… 82
4．5号住居跡…… 88
5．6号住居跡…… 98
6．7号住居跡…… 106
7．9号住居跡…… 110
8．小結…… 114
第4節　包含層出土遺物と土器観察表…… 115
1．包含層出土遺物…… 115
2．出土土器観察表…… 124

第Ⅳ章　補足検討……135
第1節　弥生～古墳時代出土土器の分類……135
第2節　弥生時代後期～古墳時代中期の住居……143

表目次

表1　月津台地の古墳一覧……6
表2　縄文土器出土地点一覧・胎土観察表……38
表3　石器属性表……52～55
表4　遺構別出土土器観察表……127～130
表5　包含層出土土器観察表……131～134
表6　弥生時代後期～古墳時代中期の住居跡一覧……143

挿図目次

第1図　小松市の位置と地形…… 1
第2図　月津台地と周辺の地形…… 2
第3図　念仏林南遺跡の立地…… 3
第4図　周辺の遺跡分布…… 5
第5図　念仏林古墳の位置…… 8
第6図　調査区域及び遺構配置図……10
第7図　念仏林南B遺跡遺構全体図（S＝1/400）……12
第8図　グリッド別縄文遺物出土量……13
第9図　1号住居跡平面・断面・遺物出土状況図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)…15・16
第10図　3号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)…17・18
第11図　3号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……19
第12図　8号住居跡ピット土層断面図(S=1/30)……20

第13図　8号住居跡平面・断面図(S=1/60)……21
第14図　10号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……22
第15図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅰ群1～6類）(S=1/3)‥26
第16図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅰ群7～11類）(S=1/3)‥‥27
第17図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅱ群1～5類）(S=1/3)……29
第18図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅱ群5・6類）(S=1/3)……30
第19図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅲ群）(S=1/3)‥‥31
第20図　縄文土器拓影・実測図（浅鉢Ⅰ・Ⅱ群）(S=1/3)……33
第21図　縄文土器拓影・実測図（底部）(S=1/3)……35
第22図　縄文土器拓影・実測図（底部）(S=1/3)……36
第23図　石錘法量分布図……41
第24図　石鏃・石鏃未成品実測図(S=2/3)……43
第25図　石錐・スクレイパー類実測図(S=2/3)……44
第26図　スクレイパー類実測図(S=2/3)……45
第27図　石斧実測図(S=1/2)……46
第28図　石核実測図(S=1/2)……47・48
第29図　石錘・凹石実測図(S=1/3)……49
第30図　凹石・磨石類実測図(S=1/3)……50
第31図　磨石類・敲石実測図(S=1/3)……51
第32図　1号土坑平面・断面・遺物出土状況図(S=1/30)……58
第33図　1号土坑出土遺物実測図(S=1/3)……59
第34図　11号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……61
第35図　11号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……63
第36図　11号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……65
第37図　11号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……67・68
第38図　11号住居跡出土砥石実測図(S=1/4)……69
第39図　11号住居跡床面設置礫実測図(S=1/5)……70
第40図　鹿頭上の出遺跡出土山陰型甑形土器……72
第41図　念仏林南A遺跡22号住居跡出土遺物実測図(S=1/4)……73
第42図　2号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)‥75・76
第43図　2号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……78
第44図　2号住居跡床面出土遺物実測図(S=1/3)……80
第45図　2号住居跡覆土出土遺物実測図(S=1/3)……81
第46図　4号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……83
第47図　4号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……84
第48図　4号住居跡床面・覆土出土遺物実測図(S=1/3)‥86
第49図　4号住居跡覆土出土遺物実測図(S=1/3)……87
第50図　5号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)‥89・90
第51図　5号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……91・92
第52図　5号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……96
第53図　5号A住居跡覆土出土遺物実測図(S=1/3)……97
第54図　5号A住居跡覆土出土遺物実測図(S=1/3)……98
第55図　6号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……99
第56図　6号住居跡遺物出土状況図（1）(S=1/60)‥‥100
第57図　6号住居跡遺物出土状況図（2）(S=1/60)‥‥101
第58図　6号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……103
第59図　6号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……105
第60図　7号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……106
第61図　7号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)……107
第62図　7号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)……109
第63図　9号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)……111
第64図　9号住居跡覆土出土遺物実測図(S=1/3)……113
第65図　包含層出土遺物実測図（1）(S=1/3)……118
第66図　包含層出土遺物実測図（2）(S=1/3)……119
第67図　包含層出土遺物実測図（3）(S=1/3)……120
第68図　包含層出土遺物実測図（4）(S=1/3)……121
第69図　包含層出土遺物実測図（5）(S=1/3)……122
第70図　包含層出土遺物実測図（6）(S=1/3)……123
第71図　器面色調分類別量比……125
第72図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（甕形土器Ⅰ）(S=1/8)‥‥139
第73図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（甕形土器Ⅱ）(S=1/8)‥‥140
第74図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類図（壺形土器・その他）(S=1/8)‥‥141
第75図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類図（高坏形土器・器台形土器）(S=1/8)‥‥142
第76図　念仏林南A遺跡の弥生後期～古墳中期竪穴住居跡(S=1/120)‥‥145

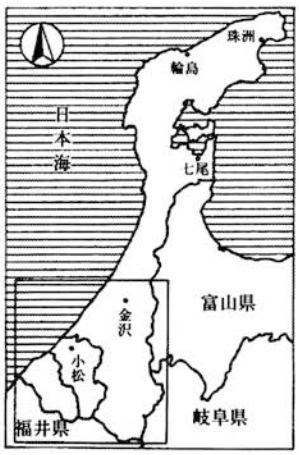
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

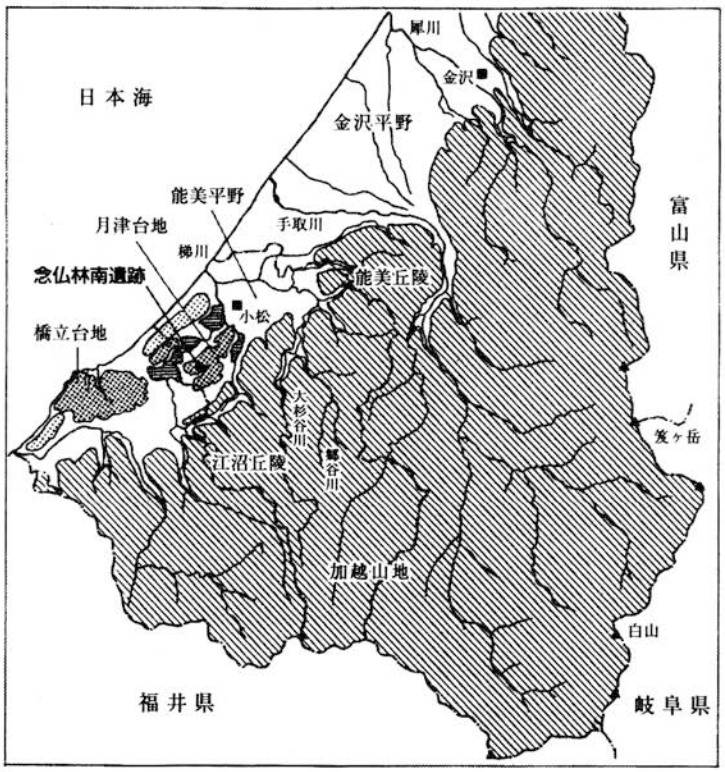
第１節　位置及び地理的環境

１．小松市の地形

小松市は、石川県下第二の都市で、人口・面積ともに金沢市に次ぎ、県下南西部（南加賀地域）の中心都市をなしている。市域は、北西縁で日本海に面し、南端は、市域の最高峰大日山（1369 m）を境に福井県勝山市に接している。海岸部から山岳部までを擁する南北に長い市域は、その大部分が山地・丘陵で占められており、海岸線に沿った狭長な平野部に市街地と農地が集中している。行政上、人口の集中するこの平野部を主たる対象として、北部・東部・中部・南部の各地区に呼称区分されている。市域の北部地区は、手取川扇状地の南縁と接して、梯川の沖積低地が広がっており、西に中心市街地及び東に農地が展延している。また、その東側は、白山より連なる加越山地の北西縁をなす能美丘陵がとりまいている。沖積地を西流する梯川は、県下では手取川に次ぐ規模をもつ一級河川で、その流れは東側丘陵部を境に90度方向を変えて南へ遡上し、上流部の郷谷川・大杉谷川を介して、白山山系大日連峰に源を発している。

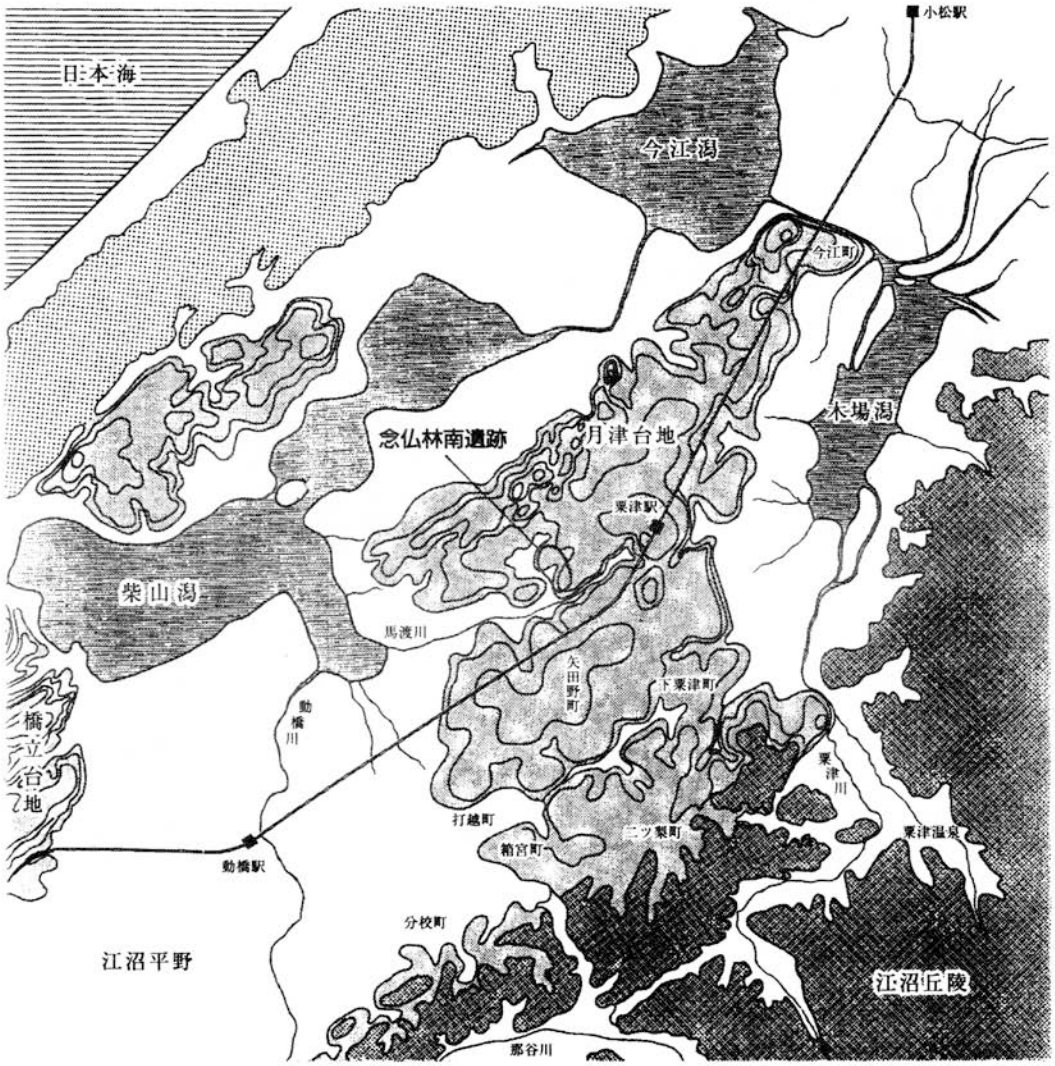
中南部地区は、かつては、今江潟、木場潟、柴山潟という、いわゆる加賀三湖を擁して、たぐいまれな水郷風景をとどめていた。しかし、大規模な干拓事業によって、今





第１図　小松市の位置と地形

江潟はそのすべてを、柴山潟はその3分の2を失い、いまは幻の景観となってしまった。この加賀三湖は、もともとは沿岸州によって閉塞されて生じた海跡湖(ラグーン)である。今江潟のみが、梯川の河口部で合流する前川によって、海と連結しており、さらに、木場潟と柴山潟は、それぞれ今江潟と芋蔓のごとく小河川で連結していた。現在は、木場潟が前川によって、柴山潟が新設水路の新掘川によって、日本海と連結している。各湖の周囲には、閉塞後の潟埋積平野として、低湿地帯が形成されている。一方、加賀三湖及びその潟埋積平野によって囲まれている標高10～20mの月津台地は、柴山潟西接部の台地及び加賀市橋立台地と同様の中位海成段丘として、更新世堆積物をのせているが、橋立台地に比べれば平坦な地形で占められている。そして、今江潟・柴山潟と海岸線の間は、北を梯川、南を橋立台地が区切る、完新世の大規模な海岸砂丘が形成されている。月津台地上からは、木場潟を前にして白山を望むことができる。白山を頂点として、



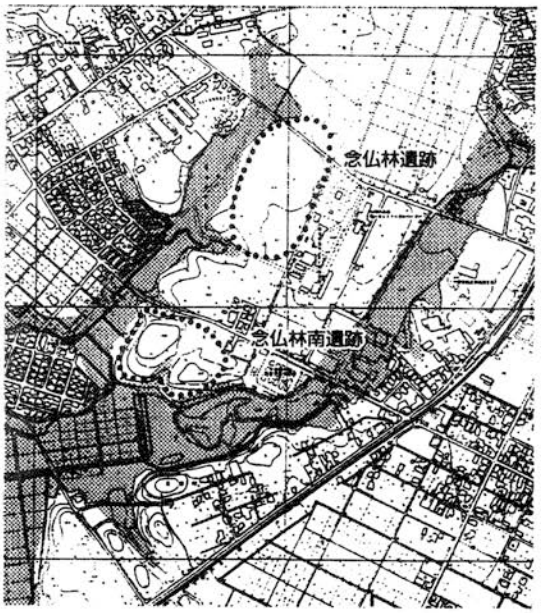
第2図　月津台地と周辺の地形

その前山地帯をなす広大な加越山地は、漸次高度を減じて平野部に達している。この加越山地の前縁をふちどって平野部に面している丘陵部を江沼丘陵と呼んでいる。江沼丘陵は、途中に梯川の大きな開析をはさんで北方の能美丘陵に連なっていく。丘陵縁辺、そしてそこから海岸部にかけて分布する各地形の配置は、海岸線と平行する北東－南西方向への傾きをもっており、海成地形の名残りを示している。

以上のように、小松市中南部は、背後に広大な山地・丘陵を擁し、平野部を潟湖と潟埋積平野及び台地と砂丘が構成する、豊富な地形構造となっている。

2．月津台地と遺跡の立地

遺跡の所在する月津台地について、もう少し詳しく見てみたい。月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋立、農地開発等によって、現在ではほとんど旧地形の把握が困難な状況にある。そこで、陸地測量部発行で、明治42年測量の５万分の１測量図をもとに、往時の地形を読み取ったのが第２図である。江沼丘陵の前縁部には、木場潟に注ぐ粟津川と、柴山潟に注ぐ動橋川の支流那谷川との開析によって分断された南西方向に細長い低丘陵が横たわっている。台地地形は、その丘陵の北東半部から派生して、今江・柴山潟と、木場潟を分かつように、一見能登半島のような形状で広がっている。柴山潟・今江潟に面する北西縁辺部の標高が高く、複数の小頂部をもつ起伏の激しい地形となっており、他は、比較的平坦な地形である。台地を刻む大小の開析谷が、周囲の低地部に向かって発達している。わけても、打越町から下粟津町にむかって長く延びる谷は、丘陵前縁の台地部から一旦区切るかたちとなっており、一応これを月津台地の南東端の境としておきたい。月津台地はそのほぼ中央部で、馬渡川による開析谷が粟津駅に向かって深く入り込み、木場潟側からの開析谷とともに台地を強くくびれさせて、ちょうど粟津駅を境に北西半部と南東半部に台地を区分している。馬渡川による開析谷は、その中位で北東方向に分枝してＹ字形をなすが、この二つの谷にはさまれた台地先端部が念仏林南遺跡である。背後（北側）の台地奥部には、浅谷二つで区画された空白部(遺跡の詳細未詳)をはさんで念仏林遺跡が存している。台地先端部は、実際には中央部に幅の狭い開析谷が１本入り込んでいて二つの舌状台地を成してており、地形的には二つの遺跡として区分されるべきものを合わせて念仏林南遺跡と呼んでいる（詳細は次章)。



第３図　念仏林南遺跡の立地

第２節　歴史的環境

１．周辺の遺跡

小松市中南部地区では、台地部と丘陵部の二極を舞台に、特徴的な遺跡の分布が示されている。即ち台地部は、縄文時代～中世にまでわたって断続的に営まれた集落の舞台となっており、その東南部の戸津町から加賀市分校町にかけての江沼丘陵前縁部では、古墳時代から中世にかけての窯跡が密集し、北陸有数規模の南加賀古窯跡群を形成している。また、製鉄遺跡も多く、この窯跡群と重複しながら、北方の木場潟東岸丘陵部にまで分布を伸ばしている。

それでは、中南部地区の本遺跡周辺を中心に、具体的な遺跡展開のあり方を追ってみたい。この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡(27)出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場潟東南岸丘陵縁の大谷山貝塚(25)など、貝塚を伴った集落が、潟に面して営まれているが、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、本遺跡(28)、茶臼山Ａ遺跡(33)のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合するかたちで採取されている。後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵部に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末に属するもので、本念仏林南遺跡では、良好な竪穴住居跡を検出している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな開析谷の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡(35)・矢田Ｂ遺跡(36)・刀何理遺跡(38)などが群集し、該期の古墳分布との重なりをみせている。本念仏林南遺跡は、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。

次に古墳の分布であるが、月津台地上の多くの古墳は、一括して三湖台古墳群と汎称されているが、現在知見にのぼっている古墳のほとんどは開発によって消滅している。台地上では今までのところ後期古墳以外の展開は確認されていない。最も古墳が集中するのは、柴山潟に通ずる馬渡川の開析谷周囲で、右岸には念仏塚古墳(11)、念仏林古墳(12)、左岸には、無名古墳群(16)、百人塚古墳(15)、矢田野古墳群(14)、30m級の前方後円墳２基を含む借屋古墳群(13)など、小規模円墳を主体とした濃密な分布状態を示す。６世紀前半代を中心とした小円墳の多くは、粘土室（箱形粘土棺）を内部主体とすると考えられている。この左岸部の西端には、家形石棺を持つ狐森古墳(17)、横穴式石室内に家形石棺をもつ矢田新丸山古墳(18)が盟主墳的な内容を示して存在している。後者は採集遺物から６世紀中葉頃に位置付けられる。谷奥部の粟津駅方向に進むと、多量の円筒埴輪や人物埴輪・馬形埴輪が出土した矢田野エジリ古墳(10)と、40m級の前方後円墳の蓑輪塚古墳(９)が隣接しており、谷頭部にあたる粟津駅のすぐ東には、切石積横穴式石室をもつ

第 4 図　周辺の遺跡分布

1～19表1参照　20御幸塚城跡(中世)　21吾郎座貝塚(縄文)　22薬師遺跡(時代不詳)　23池田城跡(中世)　24木場古墳群(古墳)　25大谷山貝塚(縄文)　26島遺跡(古墳～奈良)　27念仏林遺跡(縄文)　28念仏林南遺跡(縄文･弥生末･古墳)　29月津新遺跡(縄文)　30額見遺跡(縄文～中世)　31額見神社前A遺跡(縄文)　32額見神社前B遺跡(弥生～古墳)　33茶臼山A遺跡(縄文)　34茶臼山祭祀遺跡(奈良)　35矢田野遺跡(古墳)　36矢田B遺跡(古墳)　37矢田新遺跡(奈良)　38刀何理遺跡(古墳)　39矢田野神社前遺跡(平安)　40南加賀古窯跡･製鉄跡群(古墳～中世)

符津石山古墳(5)がある。同種の石室と考えられるものが、矢崎B古墳(4)、矢田野町の中村古墳(19)でも検出されたと伝えられており、一定距離をおいた散在傾向がみられる。いずれも6世紀の後半代のものであろう。また、谷部を望んで展開するこれら地区とやや距離を置いて、二つのグループがみられる。一つは、柴山潟に面する台地の北東縁沿いに存する臼のほぞ古墳(6)と左門殿古墳(7)、茶臼山古墳(8)である。臼のほぞ古墳は全長52mを測る月津台地最大の前方後円墳、茶臼山古墳は、径約25m二段築成の円墳である。両者は重要な位置付けを担うものと考えられ、本地域では墳丘の完存する希有の存在でもあるが、残念ながら年代的決め手に欠けている。もう一つのグループは、台地最北端のいわゆる三湖台と称する高台にある御幸塚古墳(1)、近隣の土百古墳(3)、狐山古墳(2)で、先にふれた切石積横穴式石室の矢崎B古墳を含めて、一応一つのまとまりを成している。木場潟を挟んだ対岸の木場古墳群(24)の内容は不明である。

奈良時代になると木場潟西岸台地上の島遺跡(26)、柴山潟に面した矢田新遺跡(37)、中世までの複合遺跡である額見町遺跡(30)等の存在が知られている。しかし、この時代以降、特に平安時代を中心とする時期の集落の展開はまだ確認されていない。

南加賀古窯跡群(40)は、現在確認されているもので、須恵器窯跡 160基、土師器窯跡27基、中世陶（加賀古陶）窯跡31基を数える大窯跡群で、中世陶への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連綿と生産を行っている。須恵器生産の開始は、5世紀末ないし6世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山（殿様池）古窯跡が含まれていおり、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。

表1　月津台地の古墳一覧（番号は第4図共通）

No	名称	所在地	墳形	規模 m	埋葬施設	備考
1	御幸塚古墳	今江町	前方後円	全長30	不明	後円部先端削取、埴輪・須恵器・直刀
2	土百古墳	〃	円	径10	不明	消滅、管玉
3	狐山古墳	〃	円	－	切石組合石棺？	消滅
4	矢崎B古墳	矢崎町	円	－	切石積横穴式石室	消滅、馬具・金環他
5	符津石山古墳	符津町	円	－	切石積横穴式石室	消滅、須恵器・直刀・金環他
6	臼のほぞ古墳	串町	前方後円	全長52	不明	主体部・墳頂部破壊
7	左衛門殿古墳	額見町	円	－	不明	大部分削平
8	茶臼山古墳	月津町	円	径28	不明	主体部破壊、2段築成、須恵器
9	養輪塚古墳	島町	前方後円	全長40	箱形粘土棺	消滅、須恵器・玉他
10	矢田野エジリ古墳	矢田野町	前方後円	全長30	不明	消滅（地下に周溝残）、埴輪・須恵器
11	念仏塚古墳	月美丘町	円	－	不明	消滅
12	念仏林古墳	月津町	円	－	箱形粘土棺	消滅、須恵器・直刀・鉄斧・金環他
13	借屋古墳群 1～8号墳	矢田町	前方後円2基 円6基	7号全長35 8号全長30 径9～13	2・4号－箱形粘土棺、7・8号－不詳、他－不明	消滅、2号－須恵器・直刀他、1・3号－須恵器、4号－須恵器・埴輪・玉類、7号－須恵器・埴輪・直刀他、8号－須恵器・埴輪・銀環
14	矢田野古墳群	矢田野町	円2基	－	不明	墳丘破壊
15	百人塚古墳	矢田町	円	－	不明	消滅
16	無名古墳群	〃	円10基？	－	箱形粘土棺？	消滅
17	狐森古墳	〃	円	－	家形石棺	消滅
18	矢田新丸山古墳	矢田新町	円	－	切石積横穴式石室	墳丘裾一部・主体部破壊
19	中村古墳	〃	円	－	切石積横穴式石室	消滅、須恵器・金環

第Ⅱ章　遺跡と調査の概要

第１節　　遺跡の概要

１．念仏林遺跡と念仏林南遺跡

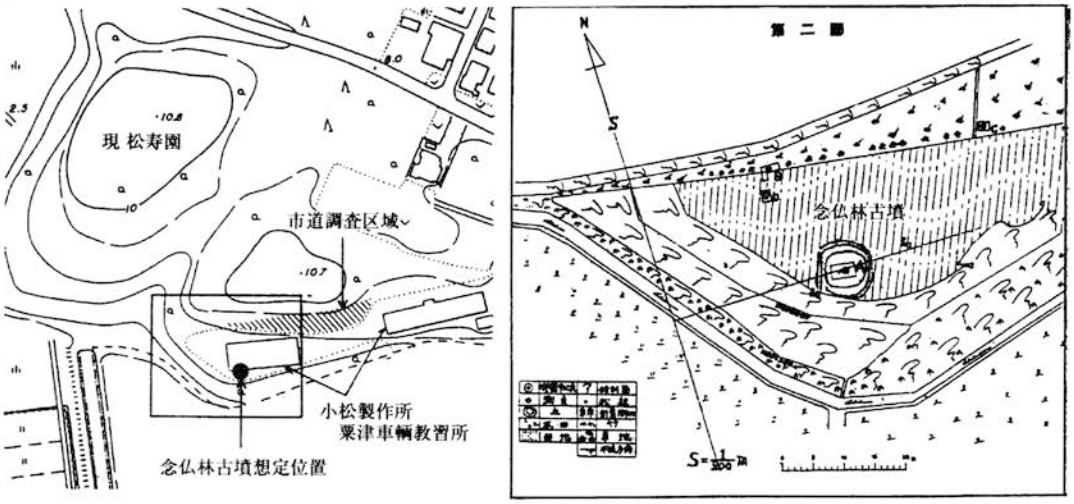
粟津駅の南西部一帯は、藩政時代に６万坪にも及ぶ官有林であった。そして、この密林の広大さに、この地を抜ける人々は心細くなり、知らず知らずのうちに念仏を唱えてしまうといったことから、俗称「念仏官山」あるいは「念仏林」と呼ばれるようになったという。大正14年には、70万㎡の広大な粟津牧場がこの地に開場している。現在の遺跡地図上における念仏林遺跡を包括する区域である。戦後、牧場が閉鎖されてからは、荒蕪地となっていた。

念仏林遺跡は、昭和24年に小松高等学校地歴班考古部の分布調査によって発見された。台地上の畑地となっている箇所で、弥生土器や土師器及び縄文土器を採取したことから、縄文遺跡研究の目的で試掘調査を実施したのである。ところが、このとき設定したトレンチに粘土使用の特殊な埋葬施設が発見され、急遽、古墳調査に切り変わった。これが念仏林古墳であり、南加賀における特殊な埋葬施設「箱形粘土棺」の発見初例となった調査である。そして念仏林遺跡は、念仏林Ａ（縄文）・Ｂ（弥生）・Ｃ（土師器）・Ｄ（古墳時代須恵器）・念仏林古墳という５つの複合遺跡として周知され、遺跡地図上に記載された。この念仏林遺跡は、小松短期大学建設に先立ち、昭和60・61年度の２次にわたってその半分近くが調査された。

一方、念仏林南遺跡が発見されたのは昭和59年、特別養護老人ホーム松寿園建設に先立つ試掘調査によってである。当時この地は雑木林で、開墾を受けた形跡はなく、この一帯では珍しく良好な自然地形を残していた。台地の先端部にあたり、踏査の段階から、なんらかの遺跡が眠っているであろうことは容易に予測できた。案の定、試掘調査によって縄文時代から古墳時代にいたる良好な集落跡が展開していることが確認されたのである。

念仏林遺跡と念仏林南遺跡の調査を通じて不思議なことに気付き始めた。昭和24年に小松高等学校地歴班によって出された念仏林古墳発掘調査報告書に記載された内容と、念仏林遺跡の内容に食い違いがみられるのである。まず第一に、念仏林遺跡は縄文時代単独遺跡で、弥生土器や土師器の散布がみられないこと。第二に、古墳の立地についてであるが、台地の南向き先端部にあり、眼下に田地がひろがって眺望が良いとされているが、遺跡地図に記載されている範囲ではとうてい考えられない立地であること等である。一方、この矛盾点は、本遺跡にあてはめると全て解決する。つまり、今回報告に至った、市道建設に伴う発掘調査地が、土地利用の状況からいって、まさに小松高等学校地歴班によって調査された地点であった公算が大きいのである。古墳調査当時、耕地となっていた部分が、現在小松製作所粟津車輛教習所の施設が建設されている部分に該当しているのではないだろうか（第５図）。これらのことから、周知の念仏林遺跡が実は新

発見の遺跡であり、念仏林南遺跡が真の念仏林遺跡であった可能性が極めて高いと言える。小松高校地歴班による念仏林古墳の報告文記載位置図がやや漠然としていたことから、その誤認が一人歩きしてしまったものと思われる。



第５図　念仏林古墳の位置

２．念仏林南遺跡の概要

念仏林南遺跡は、第Ⅰ章の遺跡の立地でも述べたように、中央に開析谷を挟んだ二つの舌状台地の先端部からなり、地形的には、２つの遺跡として捉えられるものである。ここで、北西側台地をＡ遺跡、南東側台地をＢ遺跡と呼ぶことにしたい。（第６図参照）

念仏林南遺跡に対する調査は、本報告の市道建設に伴う調査を含めて５回にわたる調査が行われている。市道建設に伴う調査以外は、全て老人ホーム第二松寿園建設にともなうものである。第１次調査が昭和59年度の老人ホーム本体工事に伴うもので、それに先立つ試掘調査では、Ａ遺跡の台地のみを対象として行っている。実際の工事区域は、谷を挟んだ南東台地縁辺にも及び、本調査によって、この対岸の台地にも遺跡が広がっていることが確認されたわけである。この対岸のＢ遺跡の調査は、台地のごく縁辺部、即ち遺跡の縁辺部に該当するものであったが、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前～中期にわたる複合遺跡であることが確かめられた。（今回の報告は、Ｂ遺跡の市道調査に伴うものであるが、この昭和59年度のＢ遺跡の調査を含めた。）

一方、Ａ遺跡の方は、古墳時代後期を主体とする良好な集落遺跡で、老人ホームの拡張等に伴う第２次（昭和60年）、第３次（昭和60年）、第４次（平成５年）にかけての調査は、すべてこの遺跡に対して行われた。この結果、ほぼＡ遺跡全体が調査対象とされたことになり、全貌が明らかにされた。検出された主な遺構は、その中心となる古墳時代後期（６世紀後葉～７世紀前葉）では、竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡17棟、土坑７基、溝２状で（詳細は現在整理中）、それに、縄文時代の落とし穴10基、弥生時代後期の竪穴住居跡３軒、古墳時代中期の土坑６基及び竪穴住居跡１軒等が重複している。県内屈指の良好な集落遺跡となった。

第２節　　経緯と経過

本報告書は、市道建設に伴うものであるが、特別養護老人ホーム建設に伴う第１次調査で実施したＢ遺跡部分の報告も含めることにした。報告書の区分と遺跡区分との混乱を避けるためである。ただし、以下の経緯と経過に関しては、市道建設に伴うもののみとし、老人ホーム建設に伴うものは、その報告書を参照されたい。

１．調査に至る経緯

平成２年６月１３日付けで、市土木課より、当地における新設道路改良事業実施に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。工事予定区域は、昭和59年度に調査したＢ遺跡ののる台地に該当し、遺跡の存在は確実であった。このことから、台地上の路線全域を対象として発掘調査を実施する必要がある旨の回答を同年８月29日付けでおこなった。ただし、他の調査計画との関係から、発掘調査の対応は平成３年６月以降とした。

平成３年７月３日付けで、文化財保護法第57条の３第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を受理。これを受けて、７月11日付けで、小松市教育委員会を調査主体とする埋蔵文化財発掘調査の通知を県文化課に提出した。

２．発掘調査の経過

台地上を走る工事区域のほぼ中央部に、すでに削平された駐車場部分があり、それを境に東側をＡ地区、西側をＢ地区とに分けた。Ａ地区は、道路延長に沿ったトレンチによる試掘調査というかたちをとった。平成３年８月19日より調査を開始したが、良好な遺構は存在せず、遺物もほぼ皆無に等しかったため、本調査対象外とすることに決定した。Ａ地区の試掘調査は、同月29日に完了した。

９月９日より、Ｂ地区の重機による表土除去を開始。同時にグリッド設定と人力による包含層掘り下げも順次おこなう。

９月20日より、東側から順次プラン確認作業に入り、10月９日までに、１号住居跡から３号住居跡までのプランを確認する。

10月14日、１号住居跡の掘り下げ開始。同月21日からは、２号住居跡及びそれと重複関係をもつ３号住居跡の掘り下げを開始した。

10月30日、４号住居跡のプランを確定。

11月７日に１・２号住居跡の床面精査を完了し、柱穴等の掘り下げにかかる。また、４号住居跡の掘り下げを開始、そして５号住居跡のプランが確定する。が、８日より長雨となり15日まで中止続き。この時期恒例の土日仕事に踏み切る（なぜか土日に晴れる）。

11月16日より５号住居跡の掘り下げを開始。

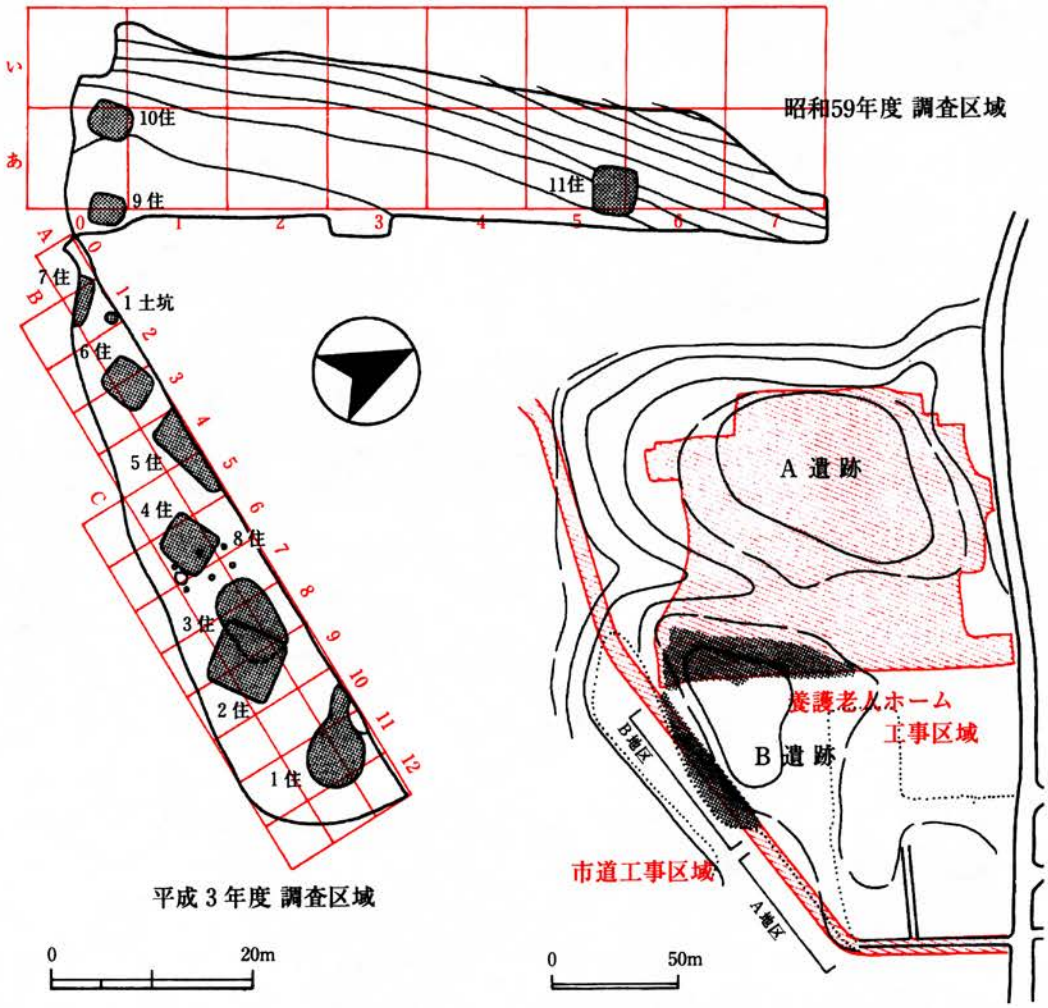
11月21日に６号住居跡、29日に７号住居跡のそれぞれプランを確定し、掘り下げを行う。

12月９日、４号住居跡を完掘し、写真撮影のために周囲の精査を行ったところ、縄文の３号住居跡と全く同じ柱穴・土坑配列を示す竪穴を伴わない遺構の重複を確認。８号住居跡とした。そして、４号住居跡で確認した２本柱穴の一方がこの８号住居跡に付随するものである可能性が高くなり、急遽床面の再精査。隣接して柱穴が確認され、４号住居跡の２本柱穴に変更なく、両者確定した。

天候悪く、12月16日にようやく５～７号住居跡の掘り下げをほぼ同時に完了する。17日に最後に残された８号住居跡の柱穴を掘り下げ、全ての遺構掘り下げを完了。

12月21日に全体清掃及び写真撮影。

12月24日に全測図を作成と機材運搬を行い、調査を完了した。



第６図　調査区域及び遺構配置図

第３節　調査方法と遺構分布の概要

１．グリッドの設定

昭和59年度調査区域は、老人ホーム建設工事用に設定された建物予定主軸を利用し、任意の点から10m方眼を組んでいる。Ａ・Ｂ両遺跡を包括する方眼であるが、グリッド名称に関しては、Ａ遺跡と区別している。Ｂ遺跡工事区域南端東隅を起点として、北東方向に「０～７」、北西方向に「あ・い」の記号を付し、「あ－０グリッド」というように呼称した。

一方、市道建設に伴う調査区域は、市道の工事用主軸を利用し、調査範囲西端（これより西は過去に削平されていた。）を起点として、５ｍきざみで「０～12」の記号を付した。工事範囲は道路主軸から左右４ｍ、即ち幅８ｍのものであったが、これでは、広い雑木林の残る北側は良いとして、南側に関しては、車両教習所の建物のある削平部分との間に狭長な残地が生じることになる。これを残すことは、いずれ遺跡の破壊を招く可能性が高いと考えたため、南側は削平部分に至る範囲を全面調査対象とした。これにより、主軸より北側のＡ列グリッドは４×５ｍ、主軸より南側は、５ｍの方眼としてＢ・Ｃ列を設定し、「Ａ－０グリッド」というように呼称した。

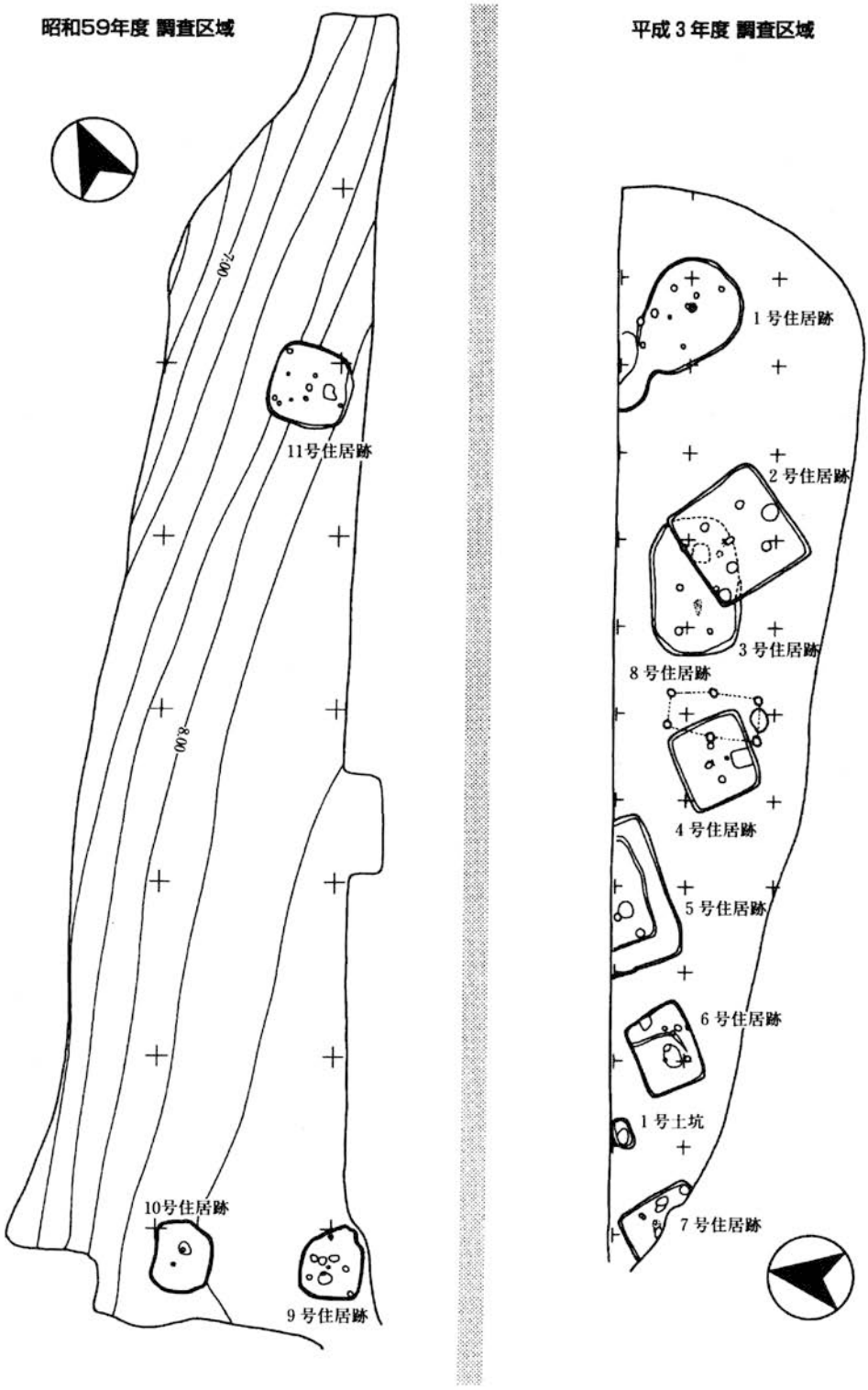
２．調査の方法

地山面までの層厚は約30cmあり、表土層約15cmを重機により除去。以下、地山面までの主たる包含層を人力によって掘り下げを行った。この間の出土遺物はグリッド単位で一括して取り上げており、層位区分等は行っていない。地山面においてプラン確認を行い、プラン確定後は、平板を用いて遺構毎に、覆土遺物を全点ドットで取り上げた。床面遺物は、単片かそれ相当の破片はドットで取り上げたが、ある程度の形態を示す遺存状況にあるものについては、出土状況図を作成した。床面下の調査は、時間的制約により、断念せざるを得なかった。

３．遺構分布の概要

第６図に示すとおりである。昭和59年度調査区域の住居跡番号は、谷対岸のＡ遺跡調査との連番となっており、７～９号が割り振られていた。しかし、市道調査でも７・８号住居跡があり、今回の報告書作成にあたっては、番号の混乱を避けるため、市道調査の後続番号を新たに付し、９～11号住居跡に改変した。そして、Ａ遺跡の報告では、７～９号は欠番として取り扱う。

１号住居跡（第６図では「１住」と略称。以下同じ）・３号住居跡・８号住居跡・10号住居跡が縄文時代中期に属する。弥生時代後期の遺構は１号土坑と11号住居跡。残る住居跡は全て古墳時代中期に属している。５号住居跡は、二つの住居跡が拡張を示す関係で重複しているものであるが、住居の大半は調査区域外にあり、一部のみの調査となっている。７号住居跡も半欠しているが、すでに削平されていたためである。包含層遺物には縄文・弥生ともに多く、調査区でＶ字に挟まれた台地中央部未調査区域に、この時代の遺構がかなり分布しているものと予想される。



第7図　念仏林南B遺跡・遺構全体図（S＝1/400）

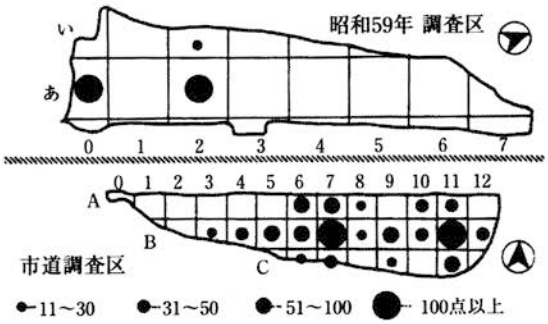
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．遺　構

(１)全体の概要

市道調査区に３軒、59年度調査区に１軒の計４軒の住居跡を検出している。グリッド毎の縄文遺物出土量は、遺構分布と良く合致する。あ－２グリッドにも集中があり、住居跡の存在を匂わせるが、遺構検出には至っていない。



第８図　グリッド別縄文遺物出土量

(２)１号住居跡

形　態　平面形は、南北に長い卵形を呈し、幅５.４m、長軸約７ｍを測る。北側は、木根等の攪乱が著しく、プランや立ち上がりの把握が不明瞭で、竪穴が伸びるかたちの掘り上がりとなった。しかし、覆土や床面の状況から、破線で示した範囲でほぼ竪穴が収まるものと考えられる。また、全体としても不整形で、壁の認定に検討余地の残される個所も多い。西南部の円形に膨らむ部分が特に掘り過ぎの可能性を含んでいる。竪穴の深さは平均で約20cmを測るが、壁の立ち上がり方は総じて斜傾ぎみで、床面がやや中央凹みとなっているため、皿状の印象を受ける。

床面中央部には、直径約50cmの不整円形の硬質焼床面があり、住居跡としての認定を補強するが、床面全体では、硬質ブロック化した地山土を確認できる部分が乏しい。平面形や床面の曖昧な点とともに、柱穴に関しても、平面プランと整合する規則的な配置を得るに至っていない。Ｐ１～Ｐ９を検出しているが、この中で、柱穴らしい形態を持つものはＰ１とＰ５で、焼床を挟むように対峙している。Ｐ９もある程度の深さを有するが、覆土がやや異質で、この住居に伴わないものである可能性が強い。Ｐ１とＰ５を柱穴と認定すると、未検出の柱穴があったとしても、通常の小判形住居の柱配列のパターンを想定できない。従って、西南部壁が膨らみ過ぎの可能性も交えて考えれば、この住居が２本柱穴の小規模なものであったとも考えられる。

遺物出土状況　覆土の遺物分布は散漫であるが、プラン確認以前の包含層グリッド取り上げ遺物では、該期遺物はやはりこの住居に重複してかなり集中している。断面でみる遺物分布や接合状況は、通常の自然堆積で形成された流れ込みに近いあり方を示している。床面遺物では、確かに床直のものが存在しているが、土器に関しては、生活者の使用土器として認定できるような遺棄または一括廃棄として捉えられる遺物の出土は無かった。石器に関しても、特に際だった分布の傾向は見いだされていない。

（3）3号住居跡

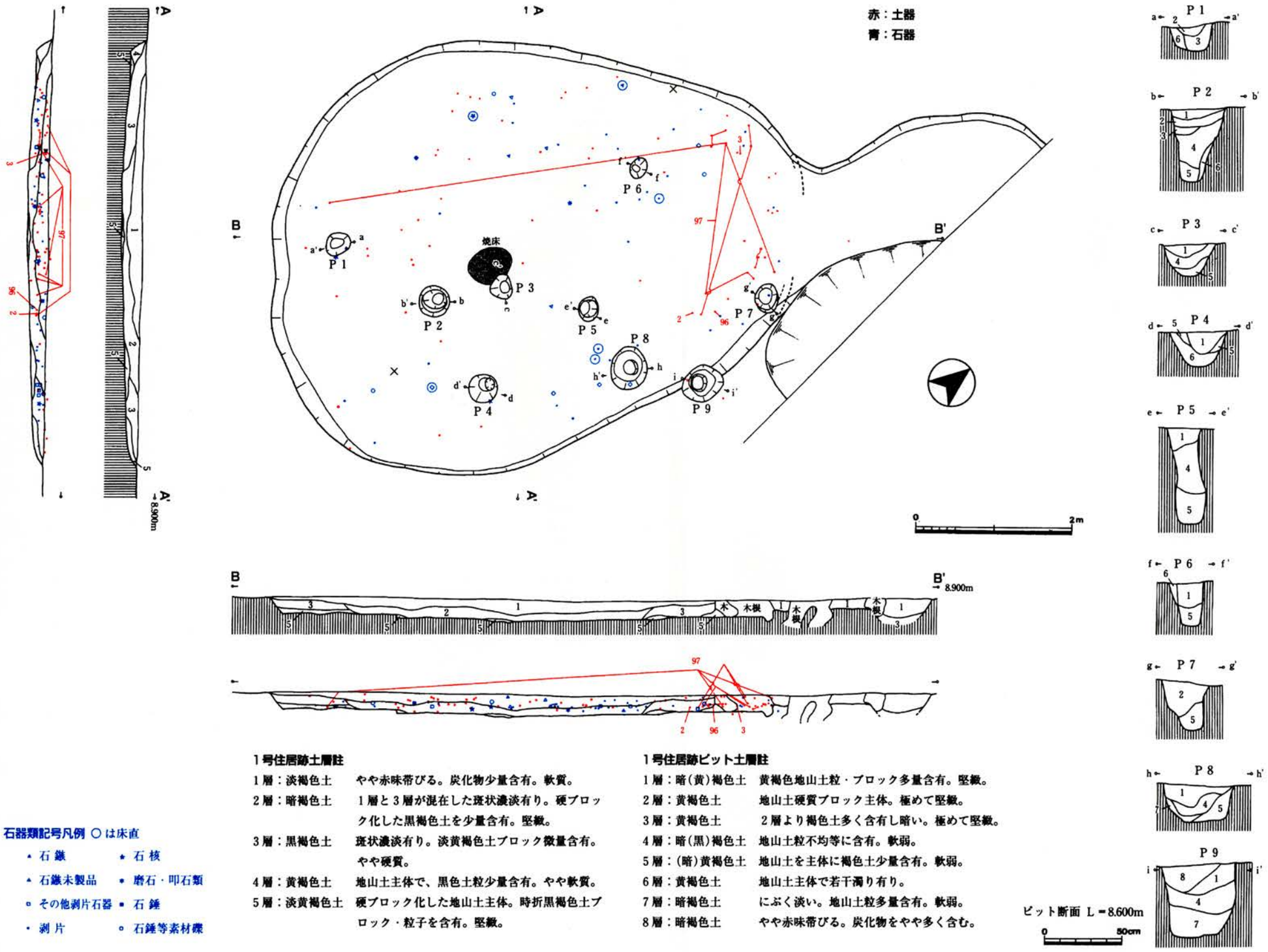
形 態　長軸をほぼ東西に向けた、約８×５.１mの小判形を呈する。南壁の東半部から東壁にかけては、古墳時代の２号住居跡によって切られているが、本住居の床面自体は２号住居跡の床面より下位にあり、全体形状は把握された。地山への掘り込みの深さは約30cmを測り、この地域の当該期竪穴住居跡としては、最も深い掘り込みを有する良好な例であろう。壁の立ち上がり方は、１号住居跡と同様、やや斜傾する。床面は、中央部が若干凹むものの全体としては概して平坦である。西半部中央付近に、住居長軸に沿った不整長楕円の硬質焼床面があり、この周囲が地山土の硬質ブロック化した比較的良好な床面となっている。

柱穴は、Ｐ１～Ｐ６の６本が検出されており、主軸上にのる妻側の柱穴をもたないタイプである。柱配置は整然としているが、Ｐ５に関してのみ、位置及び形態・規模の点で違和感が残る。精査不足であったかもしれない。その他の柱穴は、中位の直径15～25cmで、深さは50～60cmを測る。主軸を挟んだ柱間寸法は、西妻側のＰ１・Ｐ２間が約１.６m、Ｐ３・Ｐ４間が約２m、東妻側のＰ５・Ｐ６間が約２.１mである。北側柱列では、Ｐ１とＰ６を直線で結ぶと、中央のＰ３が若干壁寄りとなるが、南側の柱列では直列となる。やはりＰ５の認定には検討余地を残す。

東妻側の２本柱に挟まれたＰ７は、当該期の住居跡に特徴的に認められるいわゆる貯蔵穴風の土坑で、２段掘りの通有の形態である。１段目の掘り込みは、長さ120cm、幅108cm、深さ６～10cmで、隅丸の長半円形を呈する。その１段掘り込みの中央部に、長軸を南北に向けた楕円～不整長方形の土坑が掘り込まれている。長さ93cm、幅64cm、深さ60cmを測る。土層の堆積状況では、土坑における通常の自然堆積土層とはやや異なる。長軸上の北半分が他の柱穴と同様の土層（２・３層）を示すものの、南半分は、比較的堅く締まり良く、地山土をやや多く含む土層が堆積する。あたかも柱穴掘方埋土との関係のようにも見える。これは、念仏林遺跡１号住居跡（小松市1988）で検出された土坑と極めて良く似た状況であり注目される。

遺物出土状況　覆土の遺物分布は、１号住居跡と同様に散漫である。土器片の大半は、覆土上層（１～３層）からの出土で、床面実測遺物とは明瞭なレベル差による区分を成し得る。上層土器は、土壌の自然堆積に伴う流れ込みと判断される。Ａ－Ａ'ラインの断面で、４号住居跡床面下となっている一群の遺物ドットは、その右方の覆土中のドットよりもレベル的に一段落ちるようになっているが、厳密には、２号住居跡の床内出土遺物であり、貼床時に撹拌・圧縮された可能性をもつ。床面実測遺物の３点は、いづれも完全な形には復元できず、居住者使用土器が遺棄されたものとは言い難いが、上層遺物との時間差は明確である。この他にも、床面出土の土器破片はいくつかあるが、積極的な性格付けはできないため、覆土のドット遺物からは特に区別していない。

石器に関しては、床面遺物は比較的多く、その分布は、中央部に少なく周囲に多い。また、剥片は覆土中に多く、床面では、石核、石鏃とその未製品、石錘とその素材礫が分布している。これもレベル差は比較的明瞭なので、住居廃絶時により近い遺物といえる。



1号住居跡土層註

1層：淡褐色土	やや赤味帯びる。炭化物少量含有。軟質。
2層：暗褐色土	1層と3層が混在した斑状漫淡有り。硬ブロック化した黒褐色土を少量含有。堅緻。
3層：黒褐色土	斑状漫淡有り。淡黄褐色土ブロック微量含有。やや硬質。
4層：黄褐色土	地山土主体で、黒色土粒少量含有。やや軟質。
5層：淡黄褐色土	硬ブロック化した地山土主体。時折黒褐色土ブロック・粒子を含有。堅緻。

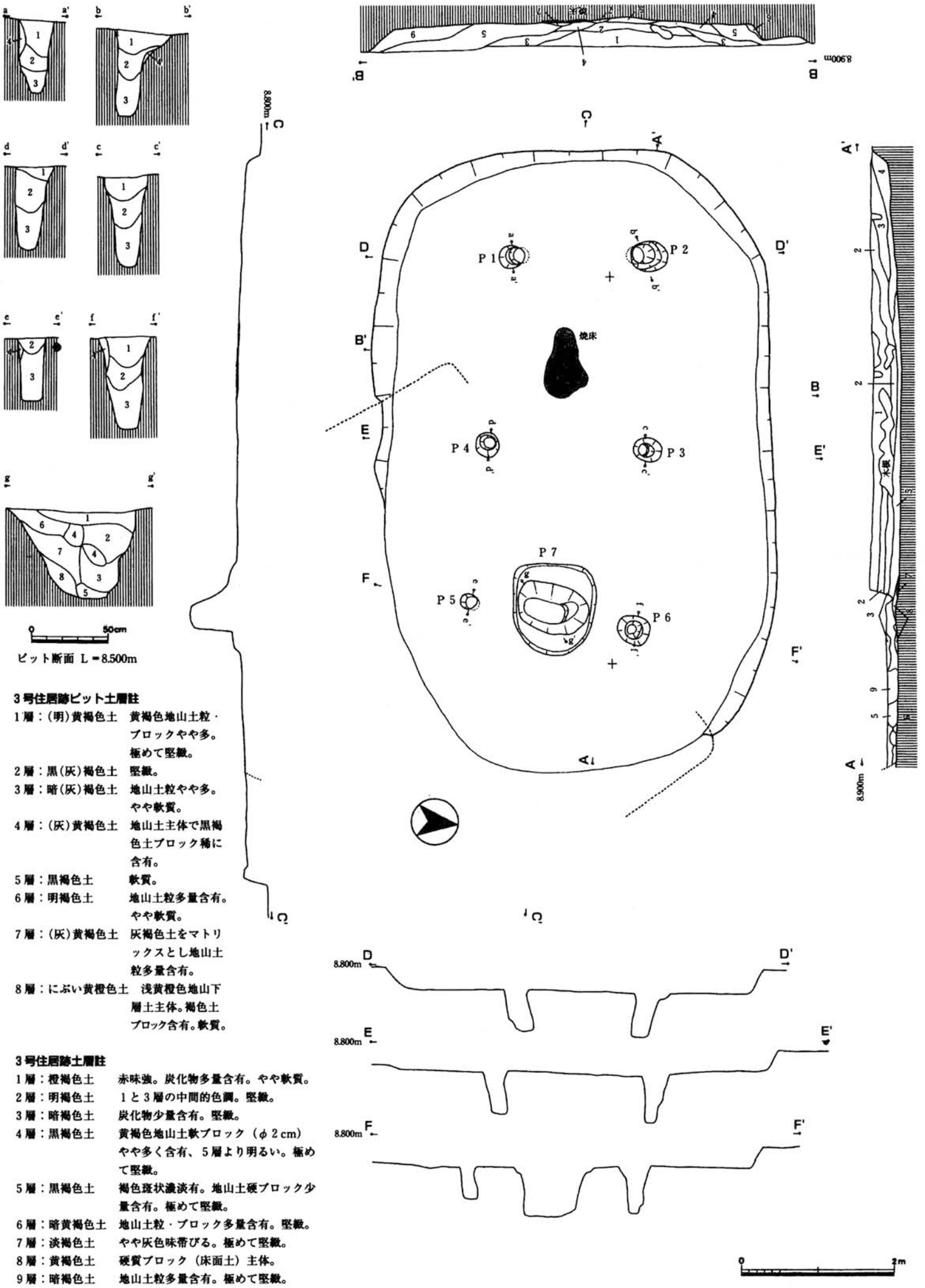
1号住居跡ピット土層註

1層：暗(黄)褐色土	黄褐色地山土粒・ブロック多量含有。堅緻。
2層：黄褐色土	地山土硬質ブロック主体。極めて堅緻。
3層：黄褐色土	2層より褐色土多く含有し暗い。極めて堅緻。
4層：暗(黒)褐色土	地山土粒不均等に含有。軟弱。
5層：(暗)黄褐色土	地山土を主体に褐色土少量含有。軟弱。
6層：黄褐色土	地山土主体で若干濁り有り。
7層：暗褐色土	にぶく淡い。地山土粒多量含有。軟弱。
8層：暗褐色土	やや赤味帯びる。炭化物をやや多く含む。

石器類記号凡例 ○は床直

- ▲ 石鏃
- ★ 石核
- ▲ 石鏃未製品
- ● 磨石・叩石類
- ▫ その他剥片石器
- ■ 石錘
- ・ 剥片
- ▫ 石錘等素材礫

第9図　1号住居跡平面・断面・遺物出土状況図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)



ピット断面 L＝8.500m

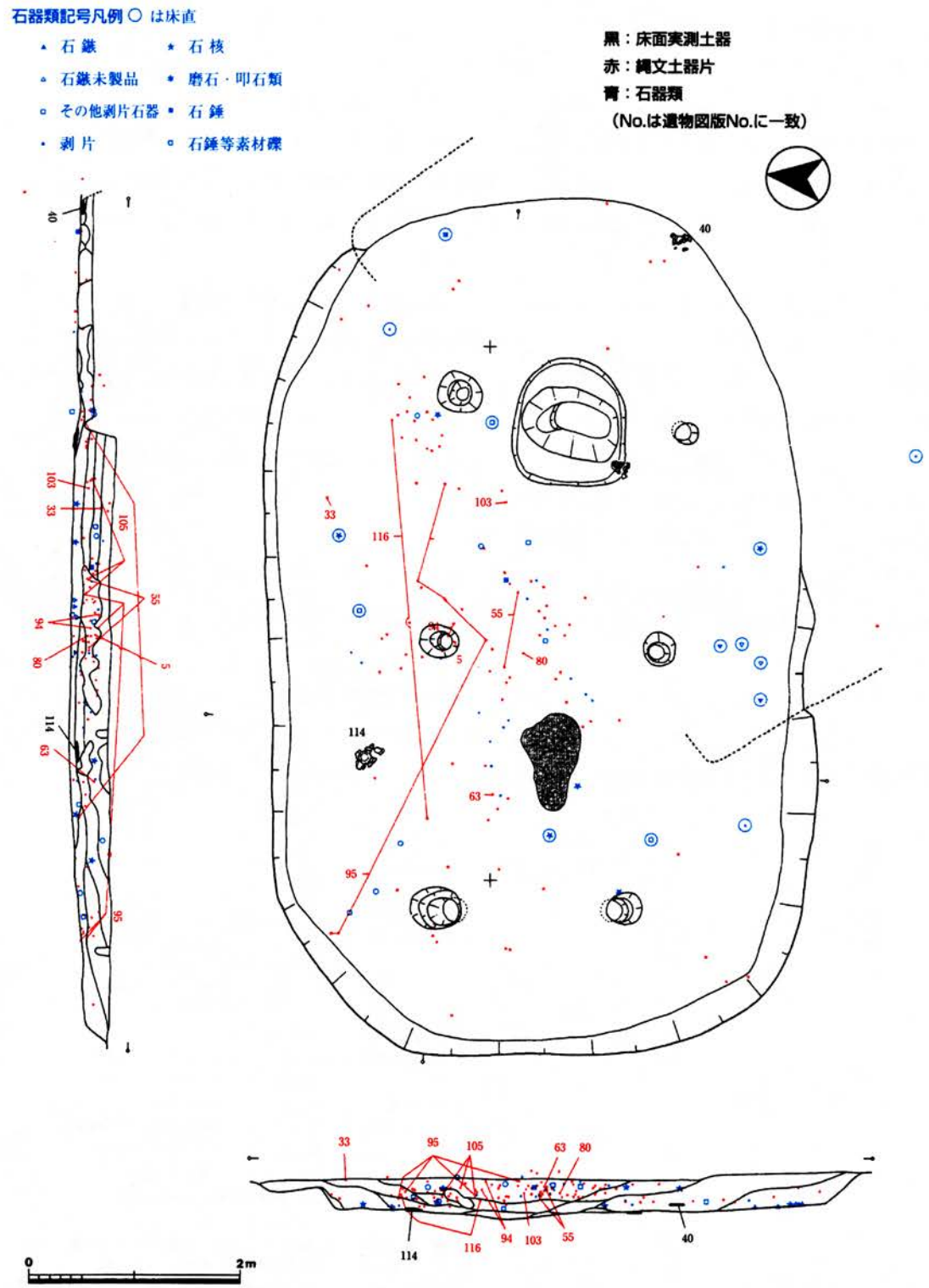
3号住居跡ピット土層註

1層：(明)黄褐色土　黄褐色地山土粒・ブロックやや多。極めて堅緻。
2層：黒(灰)褐色土　堅緻。
3層：暗(灰)褐色土　地山土粒やや多。やや軟質。
4層：(灰)黄褐色土　地山土主体で黒褐色土ブロック稀に含有。
5層：黒褐色土　軟質。
6層：明褐色土　地山土粒多量含有。やや軟質。
7層：(灰)黄褐色土　灰褐色土をマトリックスとし地山土粒多量含有。
8層：にぶい黄橙色土　浅黄橙色地山下層土主体。褐色土ブロック含有。軟質。

3号住居跡土層註

1層：橙褐色土　赤味強。炭化物多量含有。やや軟質。
2層：明褐色土　1と3層の中間的色調。堅緻。
3層：暗褐色土　炭化物少量含有。堅緻。
4層：黒褐色土　黄褐色地山土軟ブロック（φ2cm）やや多く含有、5層より明るい。極めて堅緻。
5層：黒褐色土　褐色斑状濃淡有。地山土硬ブロック少量含有。極めて堅緻。
6層：暗黄褐色土　地山土粒・ブロック多量含有。堅緻。
7層：淡褐色土　やや灰色味帯びる。極めて堅緻。
8層：黄褐色土　硬質ブロック（床面土）主体。
9層：暗褐色土　地山土粒多量含有。極めて堅緻。

第10図　3号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）



第11図　3号住居跡遺物出土状況図(S=1/60)

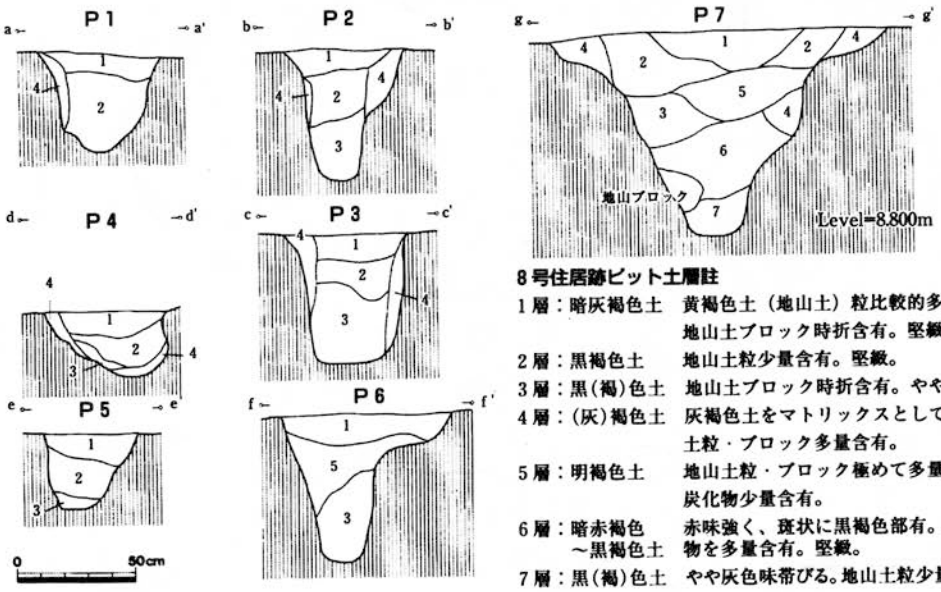
（4）8号住居跡

形 態　3号住居跡のすぐ西側にあって、完全に直交する主軸を成している。柱穴及び土坑の配列のみで、竪穴プランは確認していない。床面は、明らかに地山漸移層中～上面にあって、3号住居跡床面とのレベル差を考えると、もともとから平地式であった可能性も強い。西側中央部を4号住居跡（古墳中期）が切っており、柱穴のひとつP4は、この4号住居跡の床面において検出されている。柱穴配置、貯蔵穴風土坑、地床炉の位置関係等は、3号住居跡と全く同じである。柱間寸法はひとまわり大きく、梁間は、北から順に、2.1m、2.7m、2.6mを測るが、一方の妻側で寸法が小さいのは3号住居跡に共通している。桁行は左右で長さが異なり、東列で5m、西列で5.3m、北妻の2本柱（P1・P2）を基準とすれば、西列南端のP5が浅いうえに位置的にも収まりが悪く、いびつな柱配置の原因となっている。この点も3号住居跡と妙に合致する。P7の貯蔵穴風の土坑は、1段目の掘り込みが1.5×1.3mの不整隅丸三角形を呈し、その内部に1段目の縮小形態を呈する大きめの土坑が穿たれている。深さは約90cmとかなり深い。

P1北側に長楕円形の大型礫が主軸と並行に横たわっていた。長さ52cm、最大幅18cmで、横断面が若干扁平な三角形、両端はまるく収まる。立石であった可能性がある。

3号住居跡とは非常に近接しており、この2棟が同時並存していたかは疑わしい。しかし、極めて類似した形態を有しており、時間差をもちながらも、有機的に強く関連していたことも考えられる。

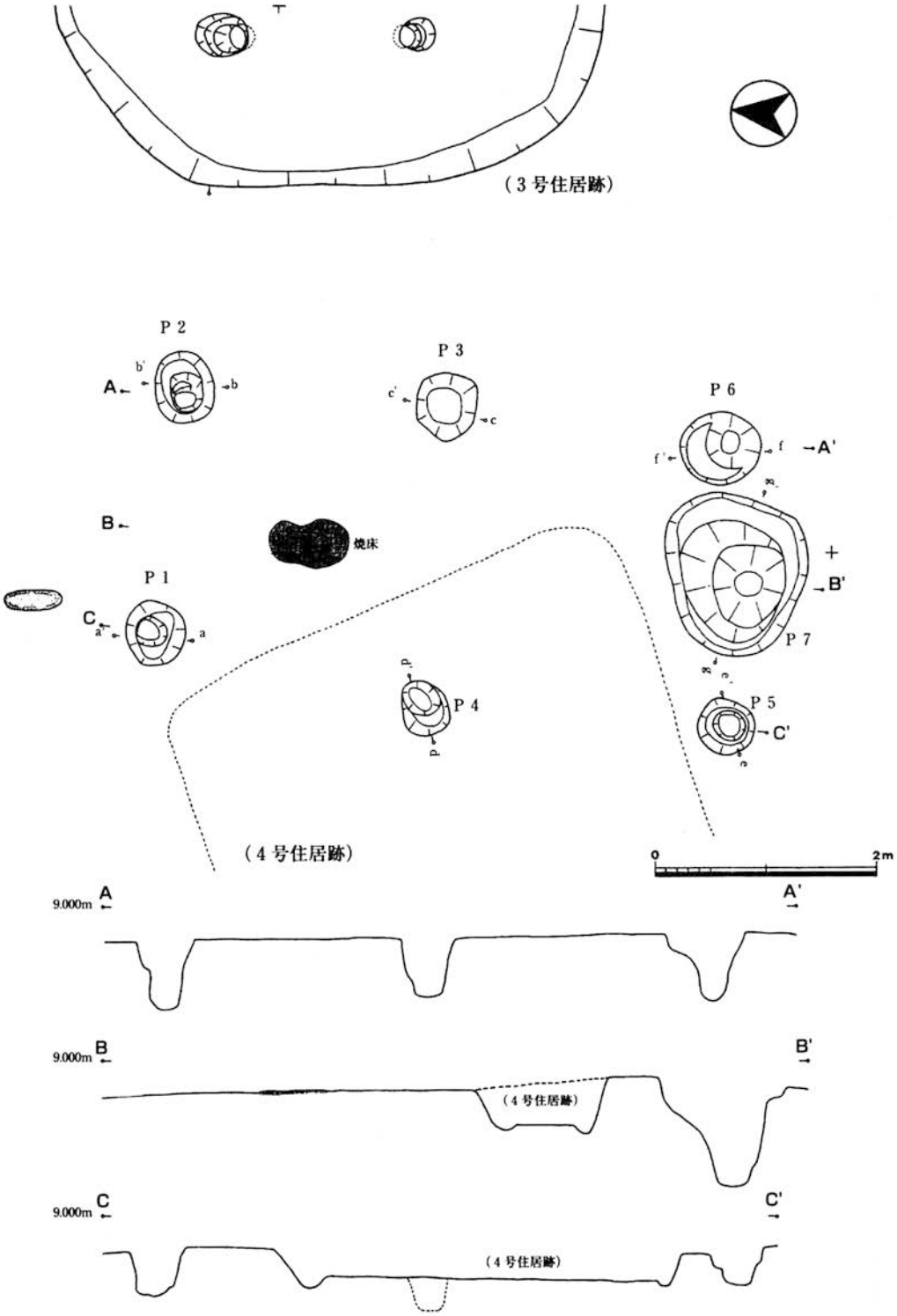
遺物出土状況　遺構の状況から、すべてグリッド遺物として取り上げてしまっている。A－6・7グリッド、B－6・7グリッドが該当する。縄文遺物の集中するグリッドであり、このグリッド遺物の一部は本住居跡の床面遺物であった可能性もあるが、区別はできなかった。



8号住居跡ピット土層註

1層：暗灰褐色土　黄褐色土（地山土）粒比較的多量、地山土ブロック時折含有。堅緻。
2層：黒褐色土　地山土粒少量含有。堅緻。
3層：黒(褐)色土　地山土ブロック時折含有。やや軟。
4層：(灰)褐色土　灰褐色土をマトリックスとして地山土粒・ブロック多量含有。
5層：明褐色土　地山土粒・ブロック極めて多量含有。炭化物少量含有。
6層：暗赤褐色～黒褐色土　赤味強く、斑状に黒褐色部有。炭化物を多量含有。堅緻。
7層：黒(褐)色土　やや灰色味帯びる。地山土粒少量含有。

第12図　8号住居跡ピット断面図（S＝1/30）

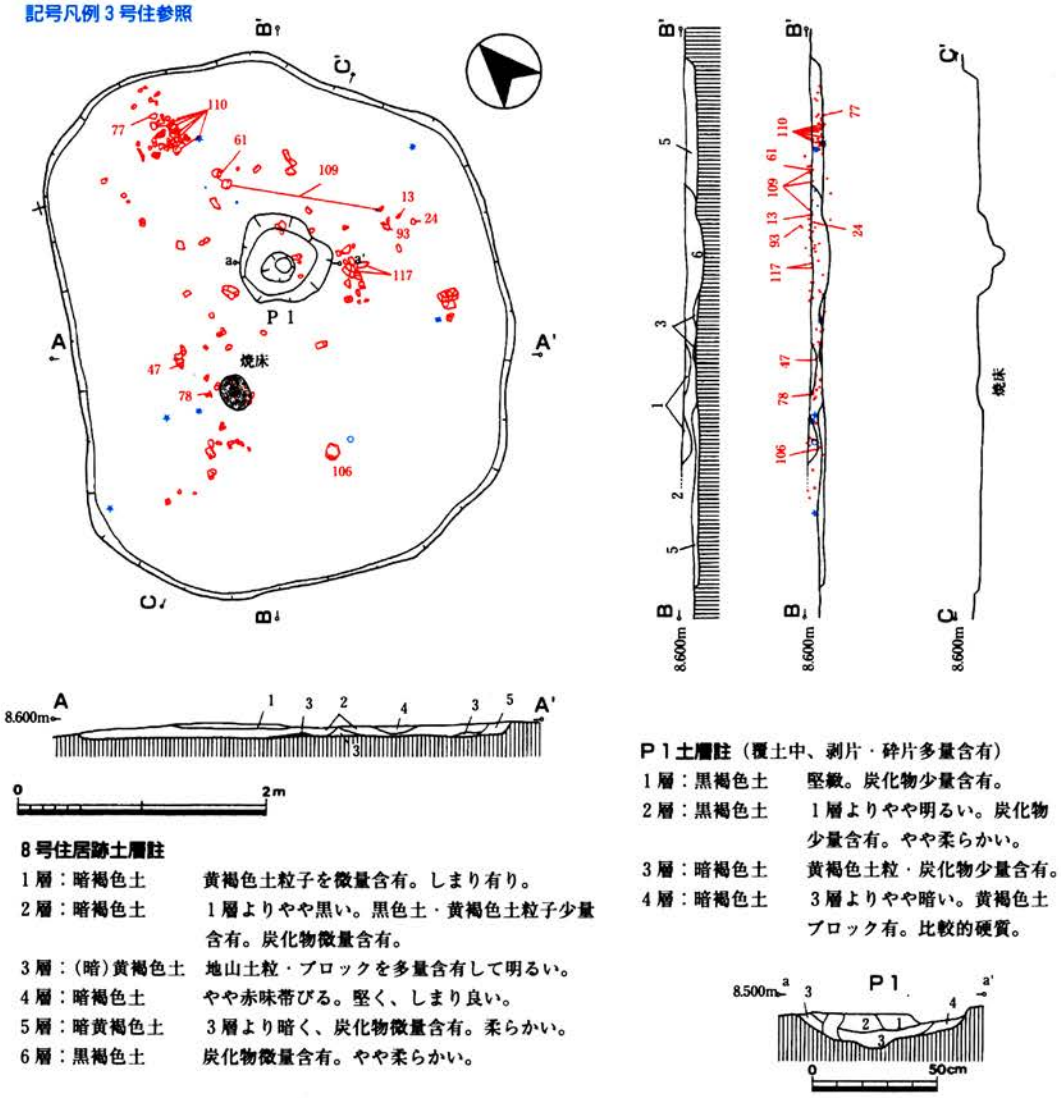


第13図　8号住居跡平面・断面図（S＝1/60）

（5） 10号住居跡

形 態　昭和59年度調査区の南端の谷寄り斜面部に位置する。不整楕円形から略長方形を呈し、規模は、約４.3×３.5mを測る。深さ10cm程の竪穴プランをとるが、立ち上がり及びプラン形状は極めて不確実なものである。中央部に浅い土坑がみられるものの、柱穴は検出されず、20×30cmという小型地床炉の存在及び土器の集中出土が、住居跡として認定する根拠とされる。

遺物出土状況　この年の調査では、比較的大きな土器片を実測により取り上げており、ドット扱いはしていないが、反面、床面遺物との区別は怠っている。実測遺物以外に、かなりの量の遺物を覆土遺物として一括で取り上げている。断面分布から、床面遺物に近いものと判断されるのは、北西コーナー付近の一群（77）や（110）などである。



８号住居跡土層註

１層：暗褐色土	黄褐色土粒子を微量含有。しまり有り。
２層：暗褐色土	１層よりやや黒い。黒色土・黄褐色土粒子少量含有。炭化物微量含有。
３層：(暗)黄褐色土	地山土粒・ブロックを多量含有して明るい。
４層：暗褐色土	やや赤味帯びる。堅く、しまり良い。
５層：暗黄褐色土	３層より暗く、炭化物微量含有。柔らかい。
６層：黒褐色土	炭化物微量含有。やや柔らかい。

Ｐ１土層註（覆土中、剥片・砕片多量含有）

１層：黒褐色土	堅緻。炭化物少量含有。
２層：黒褐色土	１層よりやや明るい。炭化物少量含有。やや柔らかい。
３層：暗褐色土	黄褐色土粒・炭化物少量含有。
４層：暗褐色土	３層よりやや暗い。黄褐色土ブロック有。比較的硬質。

第14図　10号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図(S=1/30)

2．出土土器

出土した縄文土器は、昭和59年度調査区でパンケース２箱、市道調査区で５箱を数える。包含層及び住居跡覆土遺物主体であることと、一括遺棄または廃棄土器が極めて乏しいことから、全形を知ることのできる復元個体はほとんど無い。従って、その分類に際しては、破片個々の有する主体的文様を個別に基準とするのみで、文様構成による類型の抽出は成し得ていない。

構成器種は、深鉢形土器と浅鉢形土器で、それぞれに分類をおこなった。

（1）深鉢形土器

深鉢形土器の分類は、先に述べたように文様構成による把握が困難であるため、「群」単位より下位の「類」単位で行った。「群」については、文様帯をもつものと、文様帯をもたないいわゆる粗製土器との分類基準にあて、前者を第Ⅰ群、後者を第Ⅱ群とした。ただし、外来系と思われる一群が検出されており、これについては第Ⅲ群を割り充てた。

① 第Ⅰ群（文様帯をもつ深鉢形土器）

第Ⅰ群は文様によって類別するが、類数の増加による繁雑さを避けるため、類別できるものであっても、より上位の類縁性で包括できるものについては、一つの類のなかで細別し、「１Ａ類」の如くＡ～Ｄのアルファベット付した。形態については、ａ種をキャリパー形、ｂ種を円筒形とし、口縁部が平口縁のものを１、波状のものを２として、「ａ１種」の如く各種名に付加した。尚、群毎に類設定しているので、混同を避けるため、各類名の頭にⅠ～Ⅲの群別記号を冠した。

Ⅰ－１類（第15図１）

口縁部に斜格子目文をもつものである。小破片１点のみである。口唇部が外側に細い幅で肥厚し、内傾する弱い平坦面をつくっている。格子目はヘラ先を使い、縦位に連続して沈線を施した後、右下がりの斜沈線を重ねている。この文様帯直下には、横走する半隆起線が施されているようである。形態は、ゆるく外反する口辺部を成す円筒形平口縁のｂ１種となろう。

Ⅰ－２類（第15図２～４）

口縁部に正位蓮華状文を施すものである。施文方法は、いずれもまず半截竹管状工具（幅６～７㎜）を押しつけて蓮弁端部とした後、続けて引き降ろして半隆起線状とする作業を右方向へ連続して行う。その後、花弁内に縦位沈線を１条施して蓮弁を完成させ、最後に、下端を半隆起線を横走させて切り整えるものである。口唇部は、外側に肥厚あるいは突出して平坦面がつくられる。尚、不鮮明ではあるが、１と３は、蓮華状文施文以前に縄文または撚糸文を地文として有していた可能性がある。細片のため、形態の詳細は不明である。

Ⅰ－３類（第15図５）

半截竹管で逆「Ｕ」の字状の半隆起線文を描く連続弧線文（西野 1983)の中に近似するものがみられる。確かに、半隆起線文で描かれた蓮弁の雰囲気をもっているが、これが横に連続して描かれていたかどうかは部分片のため判らない。キャリパー器形の口辺下半で縦位半隆起平行線文中に施される部分的装飾、あるいは５類の縦位沈線文の部分的装飾の可能性も考えられる。

Ⅰ－4類（第15図６～９）

口辺部に縦位半隆起平行短線文をめぐらせるものである。６の口縁部上端は、口唇部外方寄りに細い粘土紐をのせて縁取らせたもので、口唇部に強い段が残存する。口縁上端は、破片右端で若干上方へ向く様子が看取され、半隆起線文もそれに伴い上方へ引き上げられているので、恐らくは山形の突起に連なるのであろう。７は、口縁部上端が外方に屈曲するかたちで、その口唇部外面を半截竹管でなぞって爪形半隆起線としている。

Ⅰ－5類（第15図10～20）

ａ種すなわちキャリパー形の形態で、口辺部から頸部にかけて縦位半隆起線文あるいは縦位沈線文を狭い間隔で施すものを一括した。縄文地文の有無により二細別した。

Ⅰ－５Ａ類（10～16）縄文地文をもつものである。縦位の沈線は、半截竹管状工具を用いたと思われるものも確かに存在するが（14・15）、その他は、１本づつ縦位に平行沈線文を施した可能性が強い。いずれにしても、まず縄文地文を消さないような縦位沈線を下ろす文様帯をつくり、その中で、半截竹管状工具を強く引き降ろした縦位半隆起線（縄文消失）１～２本が一定間隔を置いて配されるのが通有のようである。また、部分的加飾としては、10が、中位の突起から隆帯を右下がり弧状に頸部に下ろすもの、13が、横走する半隆起線が小規模なＵ字（あるいは円か？）を描くもの、16が、隆帯二本を巴で結んで突起とし、そこからそれぞれ上方と下方に伸ばしてゆくもので、突起部左を丸く縁取ったあと垂下する半隆起線が１条描かれる。

口唇部を残すものは10のみで、上端内側と外側に細粘土紐を貼り付けて末端肥厚の口縁端部を作り上げているが、２本の貼り付けた粘土紐の間に一段下がって前段階の口唇部が垣間見えるようになっているため、複雑な口唇部断面形となっている。

Ⅰ－５Ｂ類（17～20）無文地に、縦位沈線が連続して描かれているものである。17～19の３点は同一個体と考えられる。口縁部が緩やかな波状となるか、または弱い三角突起をもつ。その頂部から隆帯が緩い「し」の字に垂下して丸い突起をつくり、突起で折り返して逆「し」の字を描いて再び垂下する。頂部内面にも隆帯が縦位に短く降りるが、剥落部が多く詳細は不明である。隆帯装飾周囲は半隆起線が縁取り、また口辺部各所に２～３本一単位の縦位半隆起線や区画文状のものも描かれている。縦位沈線は極細い断面Ｖ字で、ヘラ先を用いて一本づつ引いたことが明瞭であり、半隆起線文の半截竹管状工具とは区別できる。

Ⅰ－6類（第15図21～23）

３点は同一個体と思われるものである。縦位沈線の間隔が広いこと、そして、沈線の上端に小さな三角形の彫去を施すという特徴から５Ａ類とは区別した。徳前Ｃ遺跡の第３群１類Ｇに類似する。ただし、浅鉢の可能性もあり、そうとすれば、浅鉢Ⅰ－１類の類縁種に分類される。口唇部外方に粘土紐を貼り巡らせて上縁を肥厚させ、その一部で粘土紐に膨らみを持たせながら２方向から衝突させるようにして中割れの突起をつくる。口辺部の縄文地は、半截竹管状工具による半隆起線、および同じ工具による爪形半隆起線の２本を基本的セットとして縦位に区画される。

次にこの区画内に縦位沈線文が施され、最後に沈線上端に三角彫去が加えられる。口縁部に粘土紐を垂下させる加飾がみられるが（21）、剥落が多く実態は不明である。

Ⅰ－7類（第15図24～27、第16図28～33）

口辺部に、幅の狭い横走する区画帯をもつものを一括した。3つに細分される。形態は全て円筒形平口縁のｂ１種となるようである。

Ⅰ－7Ａ類（24～27）縄文地文を残すものである。上下の区画には半隆起線が複数条描かれている通例である。27のみが口唇部までを留め、口唇外方半隆起線の直下に区画帯を有し、下縁は細めの半隆起線、その下に同じ太さの爪形半隆起線を施したものがみられる。

Ⅰ－7Ｂ類（28・29）無文帯のものである。28は、下方に細めではあるが力強い半隆起線が多数横走する。横位無文帯と半隆起線の境には、斜め上方からみて「の」の字を描く突起が付され、その直下から縦に半隆起線が下ろされて横位半隆起線の束を分断する。この縦位半隆起線を境に左右で１段分の食い違いがみられる。29は、横位半隆起線の１本が爪形文で飾られる。

Ⅰ－7Ｃ類（30～33）無文帯の上下縁に楔形刻目文を施すものである。30～32では、口縁部から横位半隆起線２～３本を挟んだ口縁部に近い部位で無文帯が設定されているのがわかる。33は、上縁の半隆起線が左上方へやや反り上がる状況が認められ、波状口縁に連動するものかもしれない。刻目は、31・32では、刺突したヘラ先を揺り動かして楔形状とするが、30・33は、ヘラで三角形に彫去しているようである。

Ⅰ－8類（第16図34・35）

口縁部下に、横位半隆起線文を多数引き並べるものである。主文様は不明であるが、恐らくは横位の無文帯の類をもつ７類に属そう。形態はいずれも円筒形平口縁のｂ１種である。

Ⅰ－9類（第16図36～41）

半隆起線による区画文をもつ胴部片を一括した。区画内の文様で二つに細分した。

Ⅰ－9Ａ類（36・37）区画文内に、正位格子目文を充填する胴部片である。格子目施文は、タテ線→ヨコ線の順で、半隆起線区画文より後出の可能性が高い。

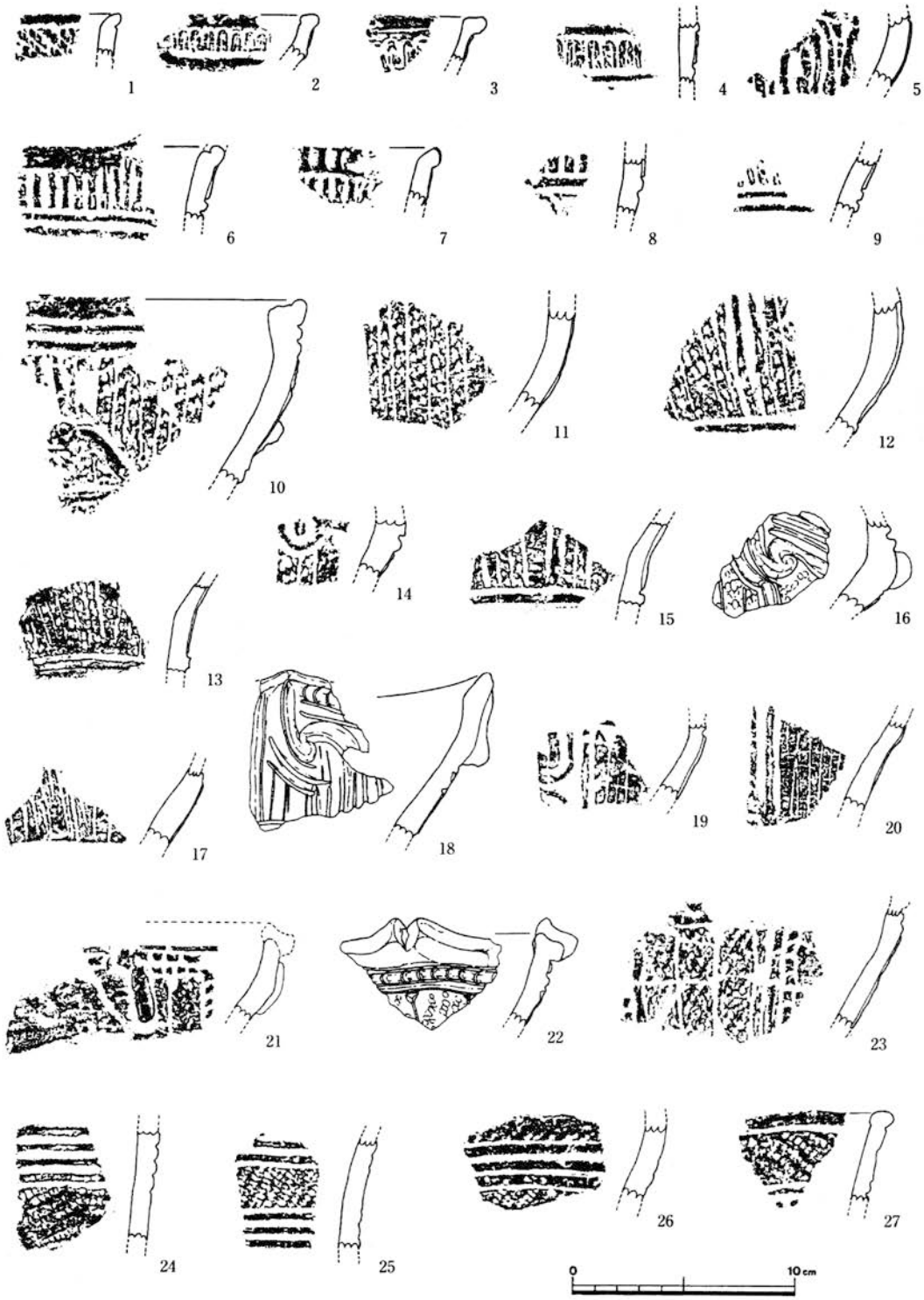
Ⅰ－9Ｂ類（38～41）縄文地文の上に縦位主体の区画文を施すものである。39を除いては、いずれも小破片であるため、浅鉢　類の破片とも考えられる。

Ⅰ－10類（第16図42～47）

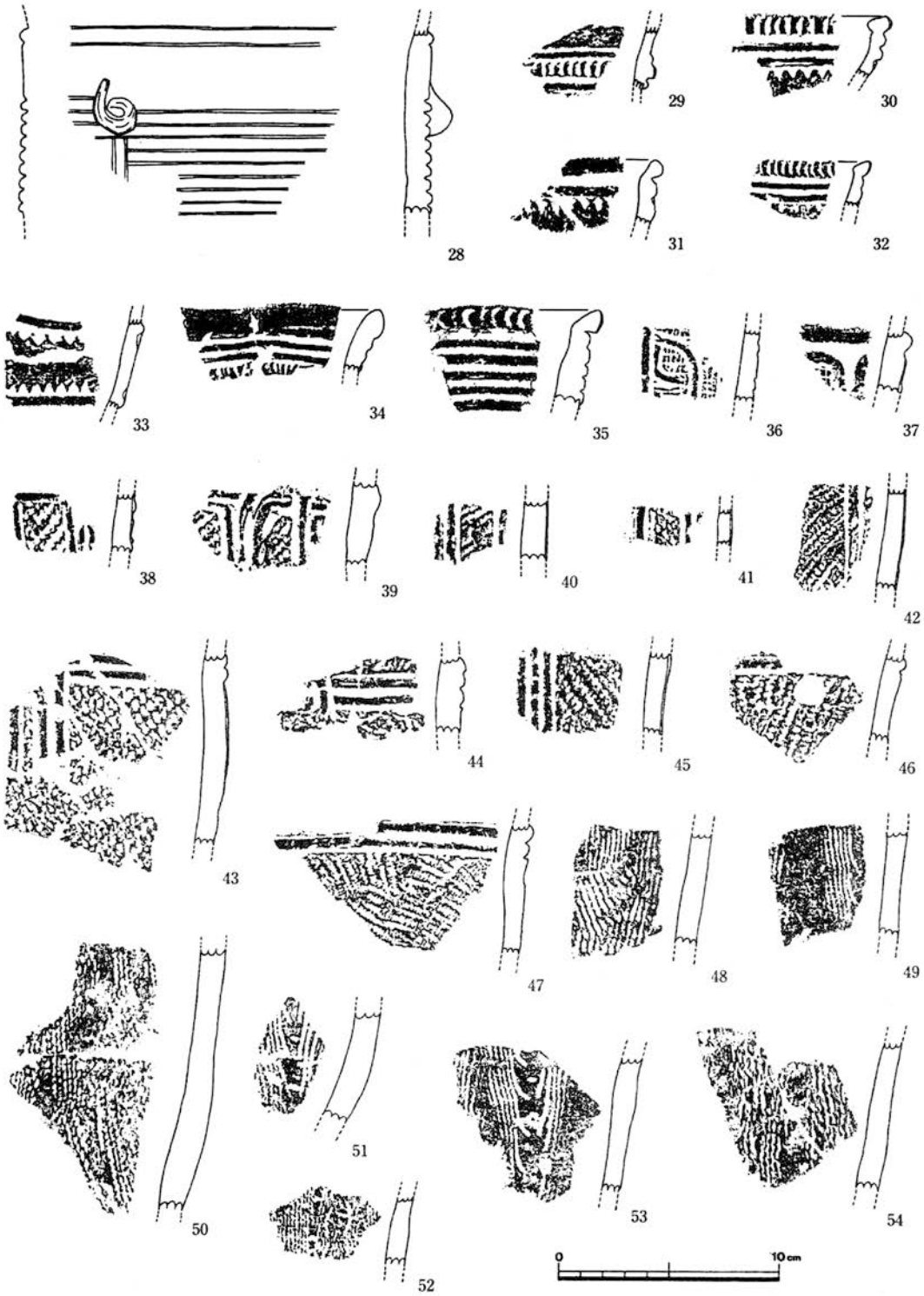
胴部を縄文施文のみとした口縁部文様帯をもつもので、その口縁部の多くが欠失した胴部片を一括した。全て胴部との境に横位半隆起線が複数引かれ、多くは、それを分断して胴部中途へ垂下する縦位半隆起線類の加飾で文様帯が２～４等分されるものである。

Ⅰ－11類（第16図48～54）

撚糸文を施した胴部片を本類にあてた。もちろん文様をもつか否かは不明で、いわゆる粗製土器の第Ⅱ群の可能性もある。縄文のみの胴部片については分類から除外しているため、撚糸文の存在を示す意味で本類を設定した。図化破片大きさが示すとおり、量的には極めて乏しい。



第15図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅰ群1～6類）（S＝1/3）



第16図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅰ群7～11類）（S＝1/3）

② 第Ⅱ群（文様帯をもたない粗製深鉢形土器）

第Ⅱ群の分類は、口縁部の形態や、その端部の収め方等の差を主な分類基準とした。

Ⅱ－1類（第17図55～57）

いわゆるキャリパー形を呈するものである。いずれも口縁端部外側に粘土紐を貼付して段を残す口縁帯を持ち、その部分において内面は外側に短く屈曲する形態を成す。口縁帯に施される縄文は、55では、口辺部と施文単位を別としながらも同方向に回転させているが、56・57では、90度近い方向のズレが伴っている。また、55には装飾があり、口縁帯直下から長さ3cm程の粘土紐2本を間隔を置いて平行に垂下させ、その間で粘土紐が「し」の字にまるまって突起をなすものである。そしてこの装飾上にも縄文が施されるが、周辺の単位とは連続せず、口縁帯と同じく別に付けられたものである。

Ⅱ－2類（第17図58～61）

キャリパー形に類するが、口縁端部が内屈せず、外反してのびる口辺部が、端部で直立ないし外傾ぎみに立ち上がるものを1類から区別して一括した。4点が4者4様で細分され、分類基準の表現では先述の言い方で一括し得ても、個々の具体相ではかなり趣を異にする。

Ⅱ－2Ａ類(58) 無文で、内面は比較的丁寧なナデがみられるが、外面はいかにも粗製で指整形痕の凹凸が激しく残されていて無骨である。

Ⅱ－2Ｂ類(60) 口縁端部が短く直立する。破片が小さいため、分類上保留点を残す。

Ⅱ－2Ｃ類(61) 1類の55に類似し、粘土紐貼付による口縁帯をもつが、縄文は施文されない。口縁帯直下の一部に半截竹管による半隆起線が横位に短く引かれ、さらにカギ形に折れて垂下するようであるが、ちょうど小欠失部と重なっているため判然としない。口縁帯下縁がその位置で段違いとなっていることから、何らかの突起が貼付されていた可能性もある。

Ⅱ－2Ｄ類(59) 胴部・口辺部からの連続的な口縁部形態で捉えられる前3者とは基本的に異なり、内湾ぎみに立ち上がる短い口縁部が胴部に付加されるかたちで、無文帯を成す。

Ⅱ－3類（第17図62・63）

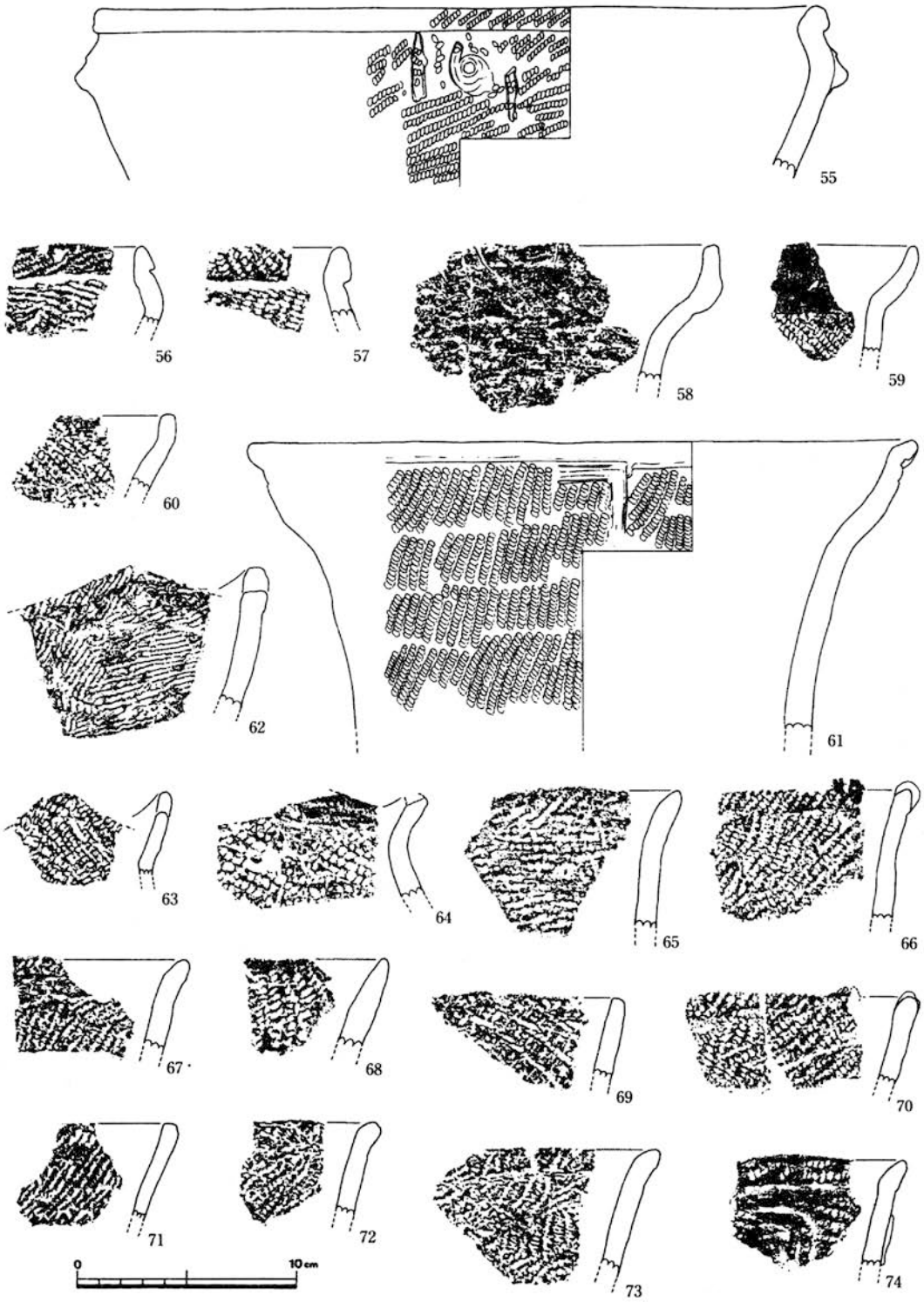
外傾する口縁が、緩く内湾する傾向をもつもので、内湾形をとる部分の幅が広く、2類のキャリパー系統とは趣を異にするので区別した。口縁部上端は粘土紐の貼付け痕を外面に残し、他の粗製土器の傾向と共通するが、口縁形は、山形突起に近いものの緩い波状を呈する。57の縄文原体が無節というのもここでは珍しい。63は62の縮小形というような要素をもっている。

Ⅱ－4類（第17図64）

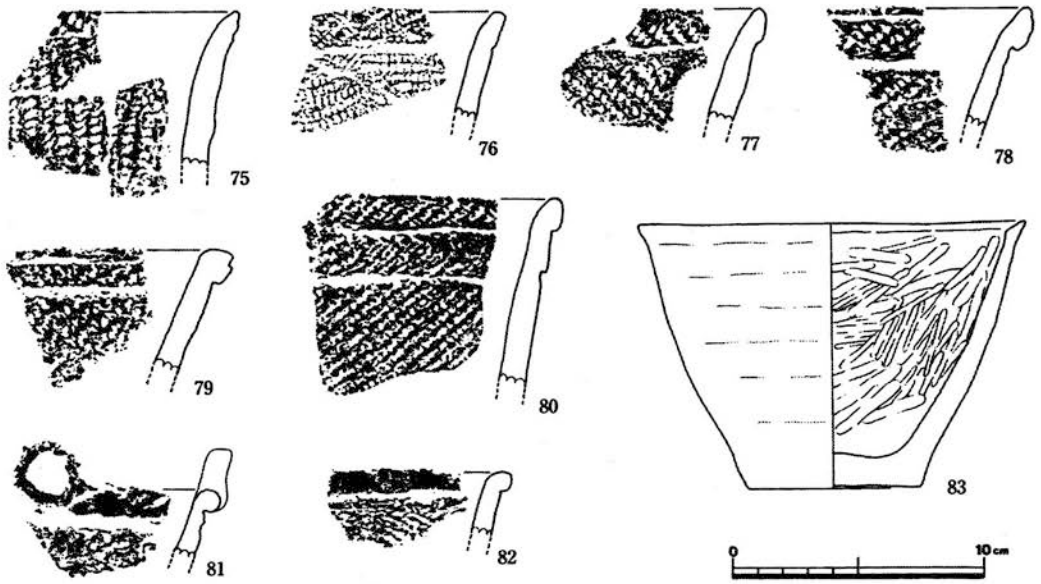
口縁部が「く」の字に外反するものである。上端部分の欠失が多く、断面傾きの当否や、波状か平口縁かなど不明な点が多い。口唇部内面に幅の狭い粘土紐の剥落痕があり、端部を内屈させていた球形の体部を成す部類（真脇遺跡9群　期－1・Ｂｂ形態）に属するかもしれない。

Ⅱ－5類（第17図65～74、第18図75～82）

直線的ないし若干外反ぎみに外傾する口縁部となるものを一括した。



第17図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅱ群1～5類）（S＝1/3）



第18図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅱ群5・6類）（S＝1/3）

Ⅱ-5A類(65～80) 無文の口縁凸帯をもつ5B類以外のものである。まず断面形態では、外反するものとしないものの両者は確かに存在するが、小破片の判断では微妙なところもあり、あえて分類を保留した。外反傾向の強いものとしては65～67がある。次に、口縁凸帯の存在で、明瞭な段をもつものと、そうでないものが存在し、分類は可能である。しかし、口縁上縁部は粘土紐を貼り付けて最終整形とする点がほぼ全体的に共通しており、実際には、縄文施文時に口縁凸帯が潰されて接合痕に近いかたちで外面に現れているものが中間形態として存在している。従ってここでも、あえて分類を保留することにした。内容としては、69が粘土紐による口縁整形もたない唯一異質のもので、口唇部は平坦面を成し、縄文原体も異条で珍しい。その他は、口縁帯相当部に弱い膨らみを持ったり、逆にその直下が弱く凹むなどの形跡を留めるものや、あるいは段を持たずに接合痕としてのみ明瞭に残存するものが多い。一方、78～80は明瞭な段を成す凸帯となっている。特に78と79は、他のものが口縁帯を成す粘土紐が最終輪積みとして口唇部形成を兼ねるのとは異なり、口縁部外面に粘土紐を貼り付けて凸帯としている。即ち、実際には、意匠としてこのような口縁帯をもつものの分類は成立する。

この他、加飾として、74口辺に粘土紐貼付によるカギ形の文様が、66と70の口縁には粘土紐2本束で口唇を挟む小突起がつく。

Ⅱ-5B類(81・82) 無文の口縁凸帯をもつもの。縄文を転がしていないためか、断面形は粘土紐そのものの如く丸い。81は、口縁帯粘土紐が半円形突起をつくり、突起外面は指で押し込んだような凹みをもつ。口縁帯右端に縄文の圧痕がわずかにみられ、5A類で突起付近のみ無文であったものの可能性がある。

Ⅱ－6類（第18図83）

唯一底部から口縁部までの復元品である。形態は、底部から直線的に広がる逆台形を呈し、深浅の区別が妥当でない小型鉢形である。口唇部は内傾する平坦面となり、直線的で一切の装飾をもたない。底面はナデ、外面は無文で、横方向のケズリを多用したのち若干の部分的縦ナデがみられる。内面は、底面にケズリとナデが施されるが、他は比較的丁寧にミガキで仕上げている。

③ 第Ⅲ群（外来系と思われる鉢形土器）

西日本系船元様式と考えられるものが出土している。これについては、筆者の勉強不足から基準資料との具体的な対比には言及できなかった。胎土は特徴的であり、搬入品と考えられる。いずれも小破片で、点数は30片に満たないが、バラエティーは豊富である。

Ⅲ－1類（第19図84～86）

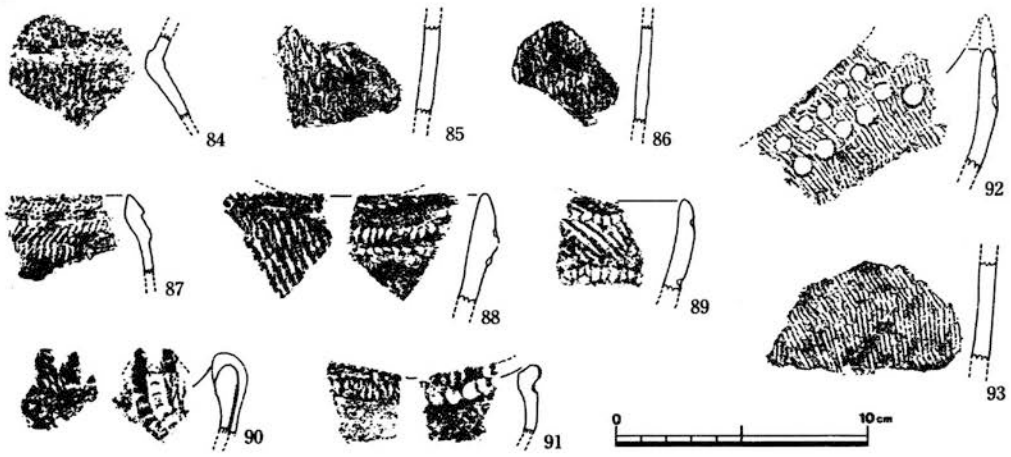
節が粗く長い特異な撚りの原体を回転押捺するもので、3点は同一個体であろう。84は、頸部が強く「く」の字に屈曲して開くもので、口縁が波状を呈すると思われるが、欠失部との区別が不鮮明で断定できない。手元の文献では、福井県右近次郎遺跡　第6群にみられる器形に対比させてみた。

Ⅲ－2類（第19図87）

横走する2本の緩い山形隆起線が並び、その凹凸を通しで斜めによぎるようにハケ目様の細かい条線が施される。器肉は極めて薄い。

Ⅲ－3類（第19図88）

無文地で口縁部中程に爪形半隆起線が1本横走するが、Ⅰ群のものとは様相を異にする。半截竹管状工具の両角部の状態が異なるのか、小刻みで浅い爪形半隆起線の上下を連続刺突（刻目）文が飾る仕上がりである。口縁上端近くでも弱い連続刺突文が並ぶが、やや上向きとなるので、波状口縁となろう。1類と同じ特異な撚りの縄文が内面に施されており、本様式の指標となる。



第19図　縄文土器拓影・実測図（深鉢Ⅲ群）（S＝1/3）

Ⅲ－4類（第19図89）

横位連続刺突（刻目）文２列の間に斜行する条線（ハイガイ類の貝殻腹縁か？）がひかれる。口縁は波状を呈していたと思われる。雲母片の目立つ特殊な胎土である。

Ⅲ－5類（第19図90・91）

２点は同一個体と考えられ、爪形半隆起線と、爪形沈線(？)をもつものである。後者の正式な文様呼称は判らないが、円柱棒状具の端面あるいは先端の丸いヘラ状具を強く押し当て、小刻みに引きずって沈線下底を爪形または鱗状とするものである。90は半隆起線２本が口唇に至って突起を成す。両者の口縁内面肥厚部にはやはり、特異な撚りの縄文がみられる。

Ⅲ－6類（第19図92・93）

ハケ目様の条線を地文とし、波状の口縁に２段の円形刺突をめぐらせる。上山田貝塚出土第33型式と同様のものと理解した。

（２）浅鉢形土器

文様帯をもつ第Ⅰ群と縄文施文のみの第Ⅱ群とに分けられる。量的には少ないが、小破片の深鉢形土器のいずれかが本器形に含まれることも考えられる。

① 第Ⅰ群

Ⅰ－1類（第20図94・95）

口縁部に２～３本の半隆起線を横走させ、その下の縄文地に、半隆起線を垂下させて縦長短冊状の区画を並列させるものである。また、区画内には縦位沈線１～３本が引き下ろされる。

95は口唇部が二重隆帯を成し、玉抱三叉文につながる。玉抱三叉文の位置がごく弱い波頂部となり、そこから「し」の字粘土紐を途中二つ巴で噛み合わせて垂下させた突起が付される。短冊状の区画は、上縁を半隆起線で囲むものと、楔形刻目文（恐らく半截竹管状工具を垂直に押し当てたもの）を施すものの二者が交互に配される。いずれの区画も下方で解放され、文様帯下縁の区切りはみられない。区画内縦位沈線はヘラ状工具で１本づつ引いたものである。尚、口縁の上面観は、玉抱三叉文の波頂部を四隅とした方形に近い形態であった可能性がある。

94は、口縁が強く内屈し、口唇部内面に爪形文が施される。楔形刻目文はみられず、半隆起線で四角く囲む区画が並列する。ただし、文様帯下縁区画線の有無は分からない。

Ⅰ－2類（第20図96）

小片で判然としない。口唇部に玉抱三叉文を有するが、摩滅が激しい。無文地で、細めの半截竹管状工具による半隆起線が右下がり弧状に並走しているのがみえる。

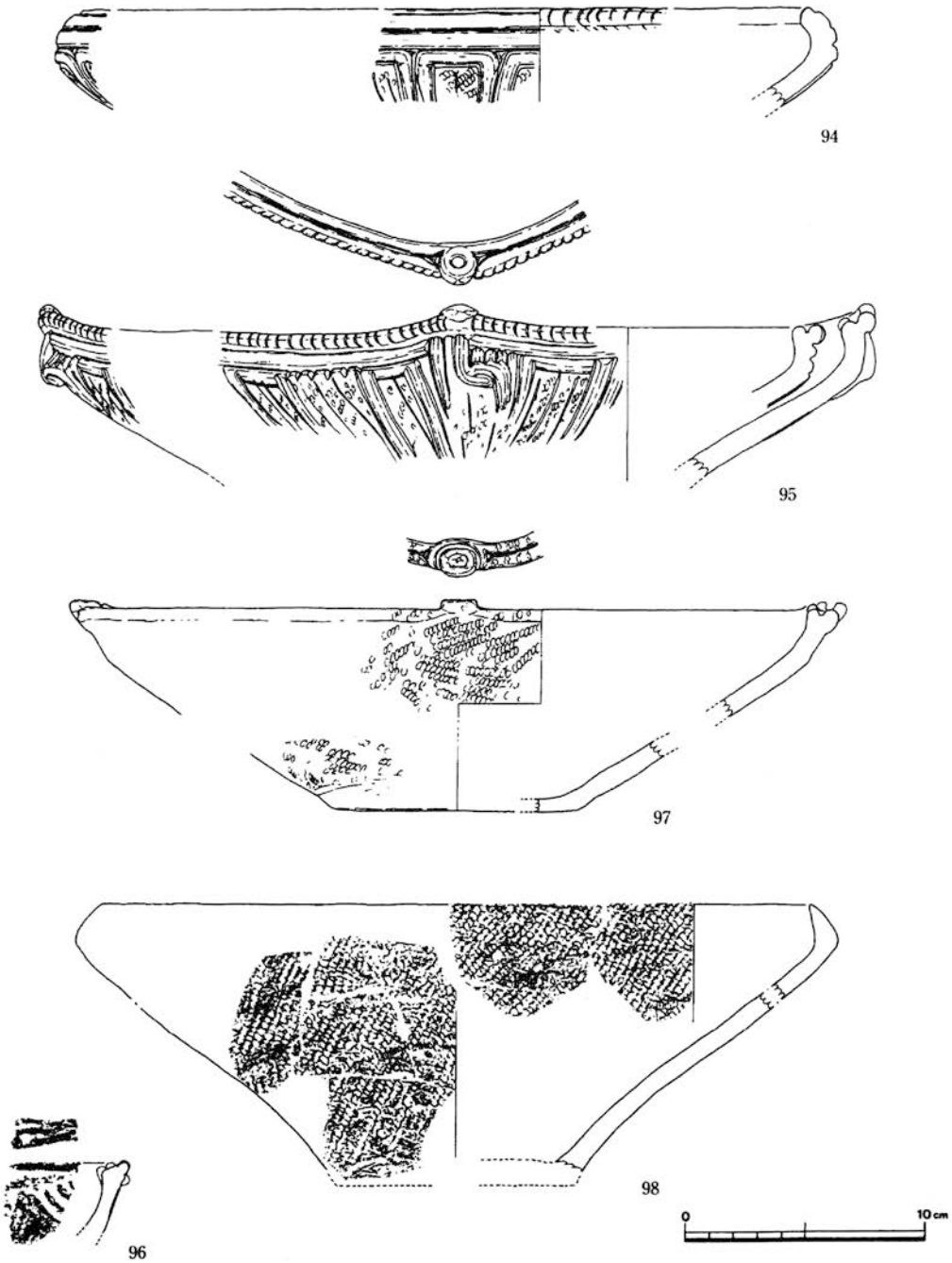
② 第Ⅱ群

Ⅱ－1類（第20図97）

口唇は二重隆帯でかつ縄文が転がされ、弱い突起を成す玉抱三叉文をもつ。内面は丁寧なミガキ調整が施される。比較的小型の浅鉢形土器である。

Ⅱ－2類（第20図98）

口縁部が強く角張って内屈し、口唇部は鋭く収まるものである。未接合だが、同一個体と思われる胴・底部片があり、底部からやや外反ぎみに開く形態を示す。内面は丁寧にヘラミガキ調整されている。



第20図　縄文土器拓影・実測図（浅鉢Ⅰ・Ⅱ群）（S＝1/3）

（3）底　部

接合後の底部片総数は51点と少なく、個体別数量でいくとせいぜいが30点前後と考えられる。口縁部の分類点数からすると、狭長な調査区で制約を受けた数値と受け止められる。

底部の分類は、立ち上がりの角度で分類し、さらに、底径で細分した。底部付近で縄文以外の文様が施されたものは検出していない。また、底面に残される網代圧痕の種類は、ほぼ１つのパターンに限られるようで、１本超え１本潜り１本送りとなっている。

①　１類（第21図99～109、第22図110）

底線からの傾き（開き）が110度未満のもので、円筒形の胴部形態に連なると思われるものである。底径によって２つに細分される。

１Ａ類（99～101）

底径５cm程度の小型品である。底面には敷物圧痕を留めず、入念にヘラでナデあるいはミガキ調整されている点で共通している。

１Ｂ類（102～110）

底径９～11cmの中型品である。10cm以下と11cm程度に二分されるが、小片のため底径推定に誤差も多く、区分はひかえた。底面には、網代圧痕を全面に残すもの（100）と、周縁部など部分的に残すもの（102，106，108，109）がある。後者の内、109は丁寧なミガキ調整によって仕上げを行ったものであるが、他は比較的荒いナデ調整で、意識的な違いがあったようである。109は、立ち上がり部がふんばる他の形態のものとはやや異なるうえ、胴部はしっかり押捺された複節斜縄文を有し、底部近くでは丁寧なナデによる無文帯を成すなど、精製品であったことが予想される。110は、口縁部を欠失しているため本項に含めたが、上端に垂下する粘土紐貼り付けの装飾がみられ、そしてその粘土紐上にも縄文が転がされていることから、第Ⅱ群の粗製深鉢と考えられる。底面はナデ調整を受けているが、木葉痕を持っていた可能性がある。

②　２類（第22図111～117）

底線からの傾きが120度前後のもので、胴部下半に膨らみをもって立ち上がる形態と思われるが、浅鉢の器形となる可能性を持つものを含む。底径によって３つに細分される。

２Ａ類（111）

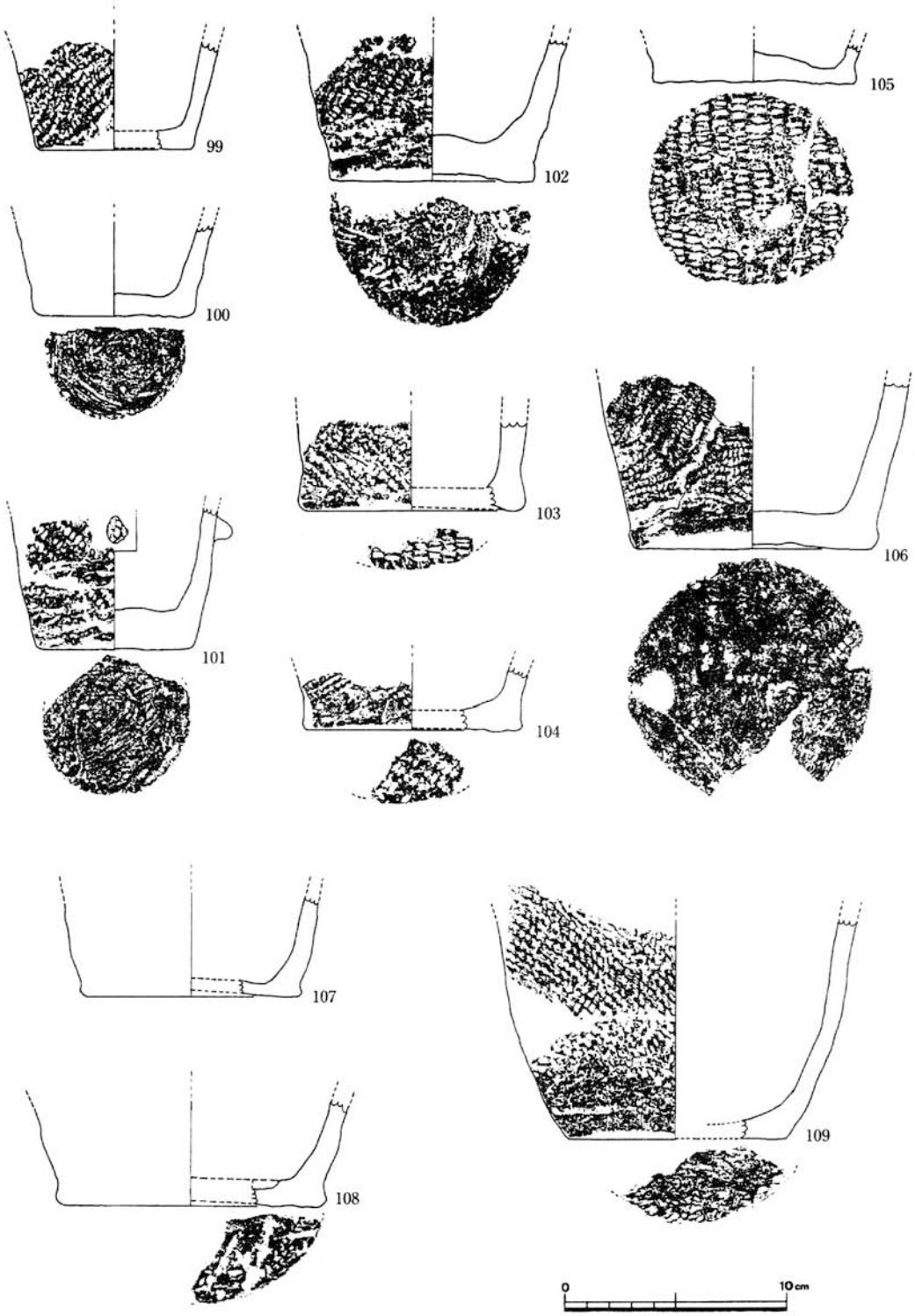
底径6.5cmの小型品で、１点のみの確認である。小片で、立ち上がりの復元に問題も残るため、１類の可能性もある。

２Ｂ類（112～116）

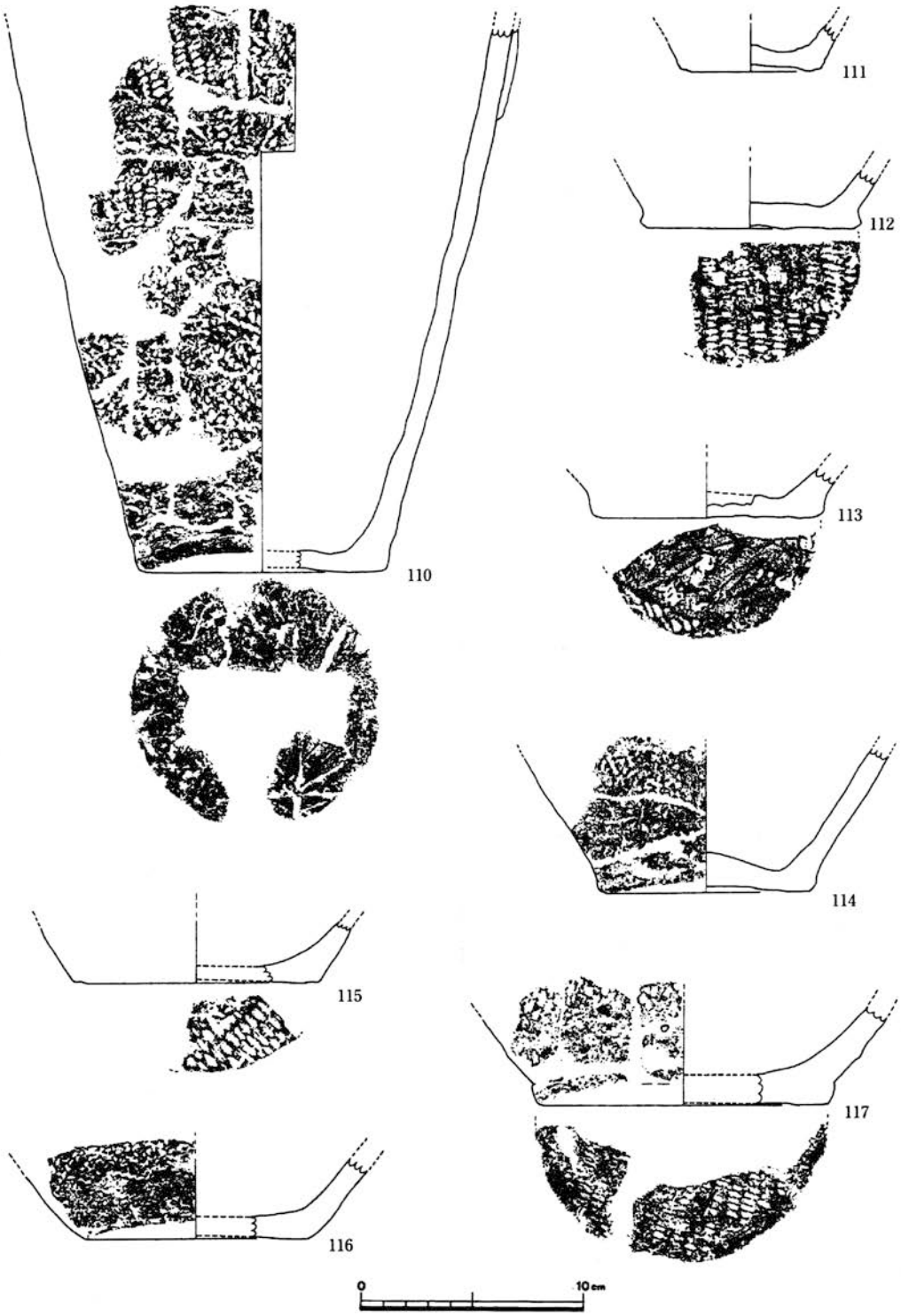
底径10～11cm程の中型品である。底面は網代圧痕を持つものが主体で、その処理は１Ｂ類と同様、全て残すもの（112，115）と荒いナデが施されて消失するもの、そして丁寧なミガキが施されるもの（113）の３種がある。

２Ｃ類（117）

底径13cmの大型品である。底部全面に網代圧痕を残す。



第21図　縄文土器拓影・実測図（底部）（S＝1/3）



第22図　縄文土器拓影・実測図（底部）（S＝1/3）

胎土含有物について

含有される岩石や鉱物については、知識の及ばない部分が多く、特定の名称を当てはめた含有物の標記には誤解を招くおそれも多いと思われたため、「どのようなもの」が含まれているかをまず列記する。

尚、以下に識別した含有物は、縄文・弥生・土師各観察表において胎土分類する場合に共通して利用するものとし、それぞれの胎土分類において、特に留意する点や変更点・追加点があれば、観察表毎に付記する。

Ⅰ．共通含有物としての微細粒子（φ0.5㎜以下）

Ａ．白色で光沢のない微細粒子（長石か）。

Ｂ．黒色で光沢のある微細粒子（自形の角閃石か黒雲母片）。

Ｃ．透明で光沢のある微細粒子（火山ガラスか白雲母）。

Ⅱ．含有に差が大きく、分類の主たる基準とした中～大型含有物

透明～白色系の岩石・鉱物で、角～亜角（φ0.5㎜以上）

① 乳白色～(灰)白色（チョーク質または粘土質）の塊（φ1～5㎜）。

② 白色で光沢無く、①よりやや硬質。

③ 白色不透明（～半透明）で鈍い光沢があり、劈開面？をもつ角型が多い。

④ ③に似るが、丸みがあり、高温石英かと思われる。

⑤ 白く曇った半透明で光沢があり、角～亜角の粒。石英と思われるもの、劈開面をもつ長石らしきもの、または双方がかむ花崗岩片と考えられるものがあるが、明確な区分はできなかった。

⑥ 透明の粒。自形の石英であろう。

その他の円礫及び亜角礫

ａ．白色・灰白色・黒灰色等があり、安山岩・流紋岩が主と思われる。

ｂ．赤～赤橙色硬質の流紋岩と思われるもの。

ｃ．灰色主体で若干鈍い光沢をもつチャートと思われる円礫。

その他特殊含有物

ア．海綿骨針

イ．赤橙色の焼土様軟質の塊

ウ．金雲母

縄文土器胎土分類

Ⅱを主体に次の胎土１～胎土８に分類した。ⅠのＡ～Ｃは、その量比から特に分類に加えたものの他は、すべてに共通して通有量含有されている。

胎土１：Ⅱに示したものの含有は比較的少なく、特に砂・円礫類は乏しい。①や④、イを時折含む。

胎土２：胎土１と同様、砂礫類の混入少なく、比較的緻密である。⑤⑥を少量含み、また、ⅠのＢ・Ｃ含有率が高く、器面が他のものより強くキラキラする。

胎土３：Ⅱ①を多量含むのが特徴で、⑤やａが少量含まれる。Ⅰが通有量のものを胎土３Ａ、ⅠのＡ粒子が極めて多いものを胎土３Ｂとする。

胎土４：特にａ・ｂの円礫粒を多量に含むが、④～⑥の石英類をあまり含まない胎土４Ａと、多く含む胎土４Ｂの２種に分けられる。

胎土５：ａの粒子が比較的多く、全体に砂っぽい。ⅠのＡ粒子が比較的多く、また、イの焼土様の塊を多く含むのが特徴。

胎土６：大粒（φ１～３㎜）②～⑥の類を極めて多く含有する一群がある。ごく微量のウの金雲母を含んでいる胎土６Ａ、イの焼土様の塊が目立つ胎土６Ｂ、その他を胎土６Ｃとする。

胎土７：胎土６中での細分でも良いが、花崗岩様の⑤が多く、さらに、多量の金雲母を含んでキラキラする特徴的なものとして別に設定した。

胎土８：海綿骨針を少量含む。胎土６を基調とする胎土８Ａと、胎土１を基調にイの含有が目立つ胎土８Ｂに分けられる。

表2 縄文土器出土地点一覧・胎土観察表

深鉢形土器

No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考
1	Ⅰ-1	C-11	8 A		32	Ⅰ-7C	A-7	2		63	Ⅱ-3	3住6	1	
2	Ⅰ-2	1住104	3 A		33	〃	3住41	8 A		64	Ⅱ-4	B-7	5	
3	〃	1住47	〃		34	Ⅰ-8	B-11	1		65	Ⅱ-5A	B-5	1	
4	〃	あ-2	〃		35	〃	10住覆土	〃		66	〃	10住	〃	
5	Ⅰ-3	3住29	1		36	Ⅰ-9	A-7	2		67	〃	10住覆土	〃	
6	Ⅰ-4	B-10	6 C		37	〃	B-6	5		68	〃	10住覆土	5	
7	〃	B-4	1		38	〃	1住63	1		69	〃	あ-2	〃	
8	〃	C-11	4 B		39	〃	B-12	4 A		70	〃	10住覆土	3 B	
9	〃	B-10	6 C		40	〃	3住159	5		71	〃	C-12	6 C	
10	Ⅰ-5A	A-7	3 A	同一個	41	〃	10住覆土	2		72	〃	10住覆土	1	
11	〃	3住覆土	〃	体か？	42	Ⅰ-10	A-10	1		73	〃	10住覆土	〃	
12	〃	A-8	〃		43	〃	C-12	3 A		74	〃	10住覆土	3 A	
13	〃	10住73	5		44	〃	A-8	8 B		75	〃	表採	5	
14	〃	A-8	1		45	〃	C-11	6 C		76	〃	B-12	1	
15	〃	10住	1		46	〃	あ-2	1		77	〃	10住12	5	
16	〃	A-6	3 A		47	〃	10住-86	〃		78	〃	10住103	1	
17	Ⅰ-5B	B-6	5		48	Ⅰ-11	B-12	〃		79	〃	A地区	〃	
18	〃	あ-2	1		49	〃	C-6	〃		80	〃	3住75	〃	
19	〃	〃	〃		50	〃	C-11	〃		81	Ⅱ-5B	10住覆土	〃	
20	〃	〃	〃		51	〃	あ-3	〃		82	〃	C-11	〃	
21	Ⅰ-6	B-10	〃	同一個	52	〃	あ-2	〃		83	Ⅱ-6	B-6	6 A	
22	〃	〃	〃	体か？	53	〃	B-4	〃		84	Ⅲ-1	10住覆土	6 B	同一個
23	〃	A-10	〃		54	〃	B-3	〃		85	〃	〃	〃	体か？
24	Ⅰ-7A	10住74	〃		55	Ⅱ-1	3住72	〃		86	〃	〃	〃	
25	〃	B-11	4 A		56	〃	B-11	〃		87	Ⅲ-2	〃	6 C	
26	〃	あ-3	1		57	〃	C-10	〃		88	Ⅲ-3	〃	6 C	
27	〃	B-11	6 C		58	Ⅱ-2A	あ-2	3 A		89	Ⅲ-4	〃	7	
28	Ⅰ-7B	A-6	6 A		59	Ⅱ-2D	10住覆土	1		90	Ⅲ-5	〃	6 B	同一個
29	〃	B-12	2		60	Ⅱ-2B	C-10	3 A		91	〃	〃	6 B	体か？
30	Ⅰ-7C	C-10	6 C		61	Ⅱ-2C	10住35	3 A		92	Ⅲ-6	A-5	6 C	
31	〃	A-10	5		62	Ⅱ-3	B-11	5		93	〃	10住72	6 C	

浅鉢形土器

No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考
94	Ⅰ-1	3住28,30	1		96	Ⅰ-2	1住	4 A		98	Ⅱ-2	A-7, B-7, 8住P-6	1	
95	〃	3住37,39,55,126	1		97	Ⅱ-1	1住3,49,65,107,109,110	1						

底　部

No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考	No	分類	出土地点	胎土	備考
99	1 A	表採	1		106	1 B	10住92	1		111	2 A	C-9	3 B	
100	〃	A-10	3 A		107	〃	3住119	5		112	2 B	B-11	1	
101	〃	A-6	5		108	〃	B-11	1		113	〃	10住覆土	5	
102	1 B	い-1	5		109	〃	10住34,35,38,70	2		114	〃	3住157	3 A	
103	〃	3住110	5							115	〃	B-11	1	
104	〃	10住覆土	1		110	〃	10住13,17,24,27,30,31,32	3 A		116	〃	3住48,51	5	
105	〃	3住37,39,43	1							117	2 C	10住59,60	4 A	

3．出土石器

出土した石器類の総数は588点で、内、昭和59年度調査区出土のものは40点と少なく、主として市道区域に集中している。内訳は、石鏃等剥片素材石器（未製品含む）43点、剥片427点、石核41点、打製石斧２点、磨製石斧３点、凹石・磨石・敲石類47点、石錘25点である。以上の他に、市道調査では、磨石や石錘等礫石器類の素材となりうる自然礫（搬入礫）を69点抽出している。

器種別点数・構成比率は以下のとおりである。（石鏃・石錐は未製品含む）

器　種	石鏃	石錐	スクレイパー	打製石斧	磨製石斧	石錘	凹石	磨石	敲石
点　数	24	4	15	2	2	25	9	31	7
比率％	20.2	3.4	12.6	1.7	1.7	21	7.6	26	5.9

（1）石　鏃（第24図１～22）

製品で11点、未製品の可能性をもつもの13点を検出している。１～11が製品で、類型としては基部のえぐりが比較的深くやや幅広のもの（１，３，４）と、基部のえぐりの浅い細みのもの（２，５）、平基式のもの（９～11）の３様があり、それぞれに大～小のバラエティーが認められる。また、異質なものとしては、先端部が丸みをもった部厚な６があり、一応未製品に含めた18も、その類縁型として把握可能かもしれない。未製品（12～22）をみると、剥片の打面部側を基部に設定する傾向が指摘できる。尚、12は製品の欠損品の可能性がある。

（2）石　錐（第25図23～26）

製品は２点（23，24）で、23は念仏林遺跡で抽出された定型的なＡ類（注・小松市教委1988）に属する。未製品としたのは25・26の２点であるが、25は石鏃未製品の可能性もある。

（3）スクレイパー類他（第25・26図27～36）

スクレイパーについては、現在明解な分類定義を欠いており、旧石器用語の援用による齟齬や認識の違いが認められる。基本的には、剥片の縁辺をそのまま利用するのではなく、加工によって機能部を作出した小型利器を総称してスクレイパーと呼ぶ。そして、ことに縄文時代のスクレイパーに関しては、全体形状よりは刃部のあり方を優先して分類するべきである。刃部のあり方には、Ａ：急角度の調整で、刃縁の角度は60度以上90度に近いものと、Ｂ：面的調整で、刃縁の角度は60度以下となり、比較的鋭い縁辺を作出するものがあり、それぞれに両面からの加工によるもの、片面のみの加工によるものの２者の分類が付加される（Ａ刃部は基本的には片面加工とする）。そして、Ａ刃部をもつものを掻器系、Ｂ刃部をもつものを削器系と呼ぶことにしたい。当然、一つの石器で両刃部を具備するものもある。縦長剥片の側縁に急角度の掻器と同様の刃部をもちながら、加工部位からこれを「サイドスクレイパー」と認識し、それをさらに「削器」と読み替えて標記して分類してしまうようなことは避けるべきである。また、石匙として分類されている器種についても、スクレイパー類として、この刃部型の把握が必要と考えている。

29は縦形石匙の未製品あるいは簡略形態と思われる。横長剥片を素材とし、明らかなつまみ部の作出と入念な部分的加工の度合い考えると後者の可能性が強い。末端部左右に設定された弧状縁が機能部位で、右側は両面からの加工、左側は裏面のみの加工によるB刃部となっている。28も未製品の可能性があるが、右側縁裏面には小規模ながらも比較的入念な加工が連続しており、両面加工B刃部を持つ削器系の製品としても有効である。33は横形石匙の未製品と考えている。横長剥片の末端部にB刃部を作出しているもので、同様のものとして34・36があるが、後者2点は、A刃部となっており、掻器系と分類されるものである。31も同じく小型の掻器系。一方、32は整美な円形のスクレイパーで、打面部周辺を除いた側縁から末端部を、ほぼ両面からの加工によって、円形に連続する鋭角的なB刃部を作出しているが、右側縁刃部端の小範囲は、片面加工のA刃部で、掻器系機能も具備していたようである。左下刃部の表裏には擦痕がみられ、削器系刃部を持つ石匙類によく見られる傾向である。

35は剥片の鋭利な縁片に使用痕様の不均等な剥離痕が残されているもので、厳密には「使用痕を有する剥片」とすべきかもしれない。27・30は剥片の相対する縁片に面的加工を施した用途不明の石器で、なんらかの未製品の可能性もあるが、一応、スクレイパー類に含めておく。尚、加工痕は、いわゆる両極打法によるものではないので、楔形石器には属さない。27に関しては、念仏林遺跡で異形石器としたものに類似する。

（4）石　斧（第27図37～41）

① 打製石斧（37・38）

2点ともに撥形を呈する。石材は両者安山岩に分類されるが、質は全く異なり、風化面は37が灰色の緻密面で、38は緑灰色の粗面となっている。37の表裏には摩滅痕がみられる。

② 磨製石斧（39～41）

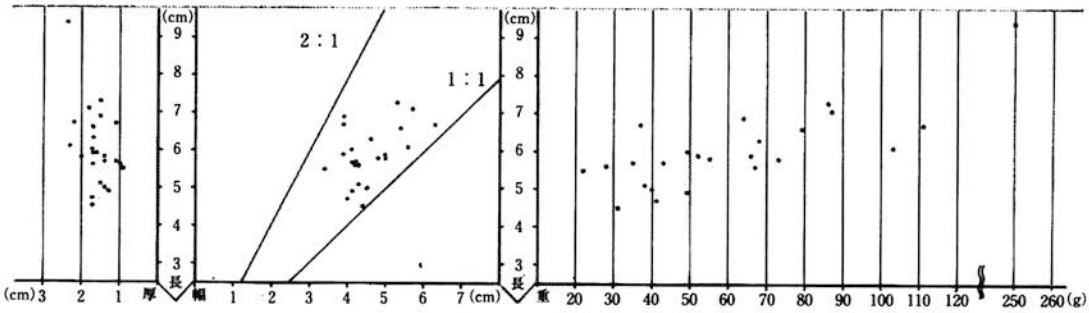
完存品は無い。全て定角式で、39は大型、41は小型の部類に属する。41は、刃部は衝撃による細かな剥離が連続していて本来の刃縁を留めていないが、その剥離痕自体は相当摩滅している。左角の大きな欠損を最後に廃棄されている。40の基部周囲にみられる敲打痕は、研摩整形以前の調整痕である。

（5）石　核（第28図42～46）

念仏林遺跡の報文の分類に従って類別した。A～Hの8分類中、A（42）、B（44）、G（43・45）の3種類のみ典型例が抽出された。46はBへの発展が予想される。総点数41点と比較的少なく、剥片生産のかなり進行した最終段階のものが主体となっているため、剥片生産進行途上の様態によって分類した類型には明確に合致しないI類としたものが多い。

（6）石　錘（第29図47～70）

打欠石錘のみの検出である。長幅比は1：1と2：1の間に収まる通有の傾向を示し、分布域は明解なまとまりを成す。重量は、40gと70g付近にやや集中するが、厚さの変異が重量分布を左右する傾向があり、素材選択は、特に主軸の長さへの統合意識があったように思われる。



第23図　石錘法量分布図

（7）凹石・磨石類（第29図71～第31図83）

① 凹石（71～77）

全９点の検出である。ただし、偏円礫の中央部小範囲に集中的な敲打痕を有するものの、凹みを成していないようなものも含めている。これを凹石Ｂ類とし、明確な凹みをもつものを凹石Ａ類とする。

凹石Ａ類（71～73）は、全周に敲打痕をもつＡ１類（71・72）と、もたないＡ２類（73）に細分される。Ａ１類は平面形が比較的整美な円形を呈し、敲打痕は整形を目的としたものと考えることができる。Ａ２類の73は、長軸両端が打欠されており、石錘に転用されたものと思われる。全て両面に磨痕を有する。

凹石Ｂ類（74～77）は、全周に敲打痕をもつＢ１類（75）と、もたないＢ２類（76）、周囲に磨面をもつＢ３類（74）の３種に細分される。Ｂ１類は平面円形でＡ１類と同様の特徴をもち、Ｂ３類は、直方体基調の形態である。Ｂ２類はさらに細分されるようで、明確な磨面を有するものとそうでないもの、側縁の一部に加撃痕を有するもの（76）などがある。

以上の分類に加えて、凹みの数や表裏の凹みの有無等の要素でも検討が必要であるが、数量的な点から、細分は避けた。

② 磨石（78～83）

全31点の検出である。全体として磨面の発達が乏しく、円礫の自然磨痕との区別が曖昧なものがあり、凹石のもつ明確な磨痕とは対象的である。自然礫の属性をそのまま利用するため、頻繁な新陳代謝が可能で、継続使用の必要性をもたないという性格を示している。

磨面のみのＡ類（78・82・83）と、部分的に敲打痕あるいは加撃痕を有するＢ類（79・80）に大別される。Ｃ類とした81は、特異な部類で、むしろ磨面をもつ敲石として器種区分すべきかもしれない。

（8）敲　石（第31図84～89）

全７点の検出である。Ａ類（84・86・87）は、長卵・長楕円形～棒状のものの両端あるいは一端を使用するもの、Ｂ類（85）は、扁平で不整形な礫の上下端や側縁等複数任意の箇所を使用するもの、Ｃ類（88）は、整った円形礫の周縁を使用するものである。

注：念仏林遺跡報告書（小松市教委　1988）引用の石器類型について

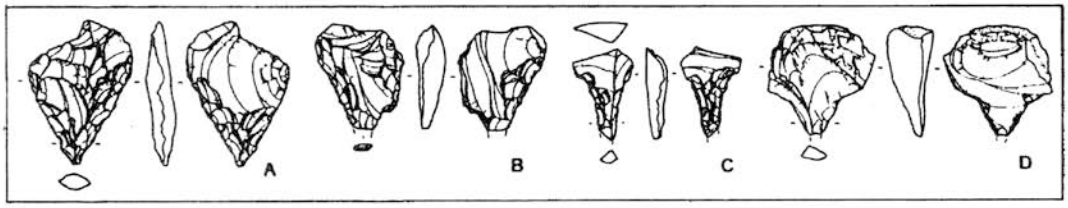
石錐の類型

A：つまみ部から連続する直線的な二側縁が鋭角に交わる逆三角形の刃部をもち、刃部の表裏は面的加工で覆われ、断面はレンズ状をなすもの。

B：つまみ部から刃部への変換部が一旦抉入し、刃部幅の変移はAより少ない。刃部の加工や断面はAと同様である。

C：棒状の刃部をもち、断面が四角形から不整な円形を呈するもの。

D：素材の形状をさほど修正することなく、一端に微細加工により突出した小規模な刃部を作出するもの。断面は三角形を呈する。



石核の類型

A：剥片素材の石核で、表裏両面にむけてほぼ全周から剥片剥離が行われる。

B：打点の直線的な左右移動による剥片剥離が上下から施される横長の作業面を持ち、さらに、打面と作業面が交互に入れ替わって剥離作業が進行するため、形状は三角柱状となる。

C：剥片を主とする板状素材の周囲から剥片剥離を行っていくもので、Aとの違いは、剥離角が90度に近いため、作業面の長さがそのまま剥片の長さに結び付くことである。

D：楕円亀甲形を呈し、作業面は全周からの剥離作業によって被覆され、面的となる。側縁はチョッピングトゥール状となるが、主要な作業面は一面に限られ、背面への剥離は石核調整程度のもので、おおくの場合自然面が残置される。

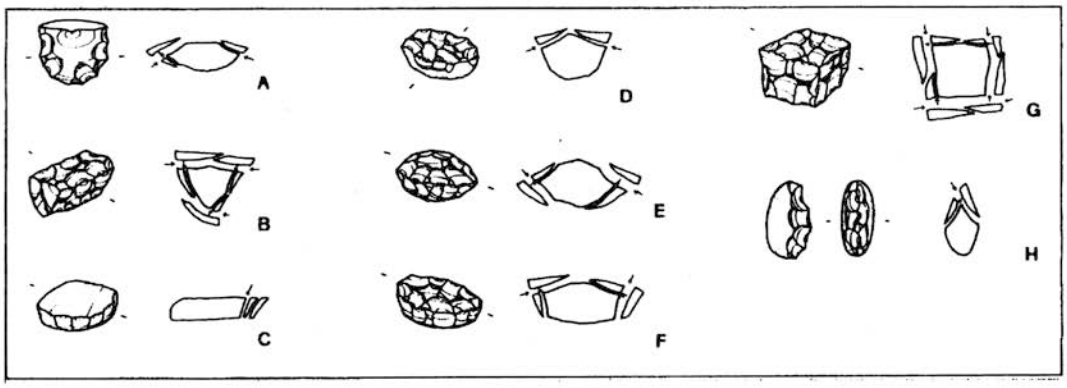
E：Dのような剥片剥離作業が表裏両面に向けて実施され、断面凸レンズの円盤形石核となるもの。

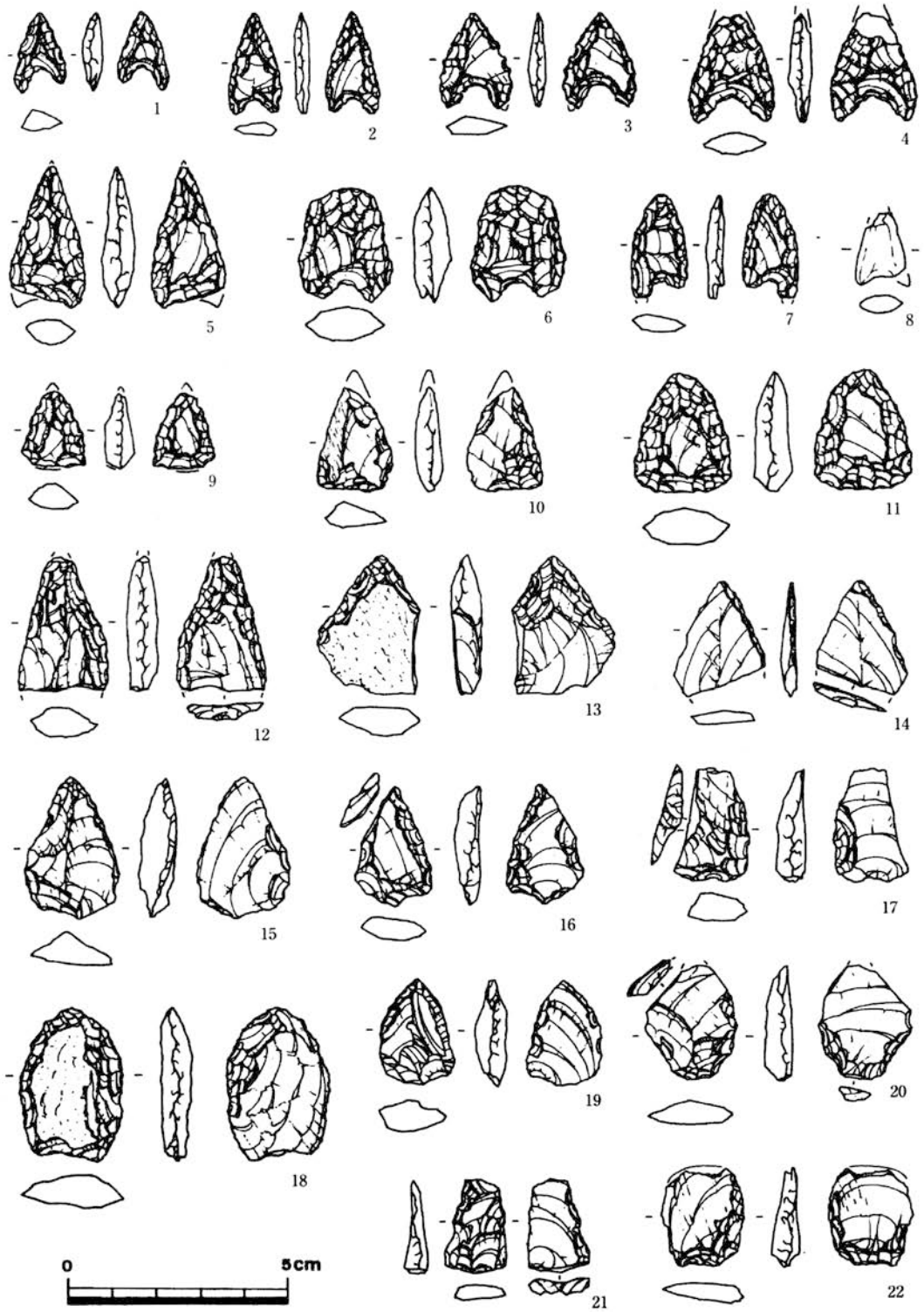
F：Eのような面的な作業面をもち、さらにそこを打面とした周縁での剥離作業が90度近い剥離角をもって進行するもの。

G：90度近い剥離角を維持しながら多方向の打面転位を繰り返すことで、ほぼ立方体の形状を留めるもの。

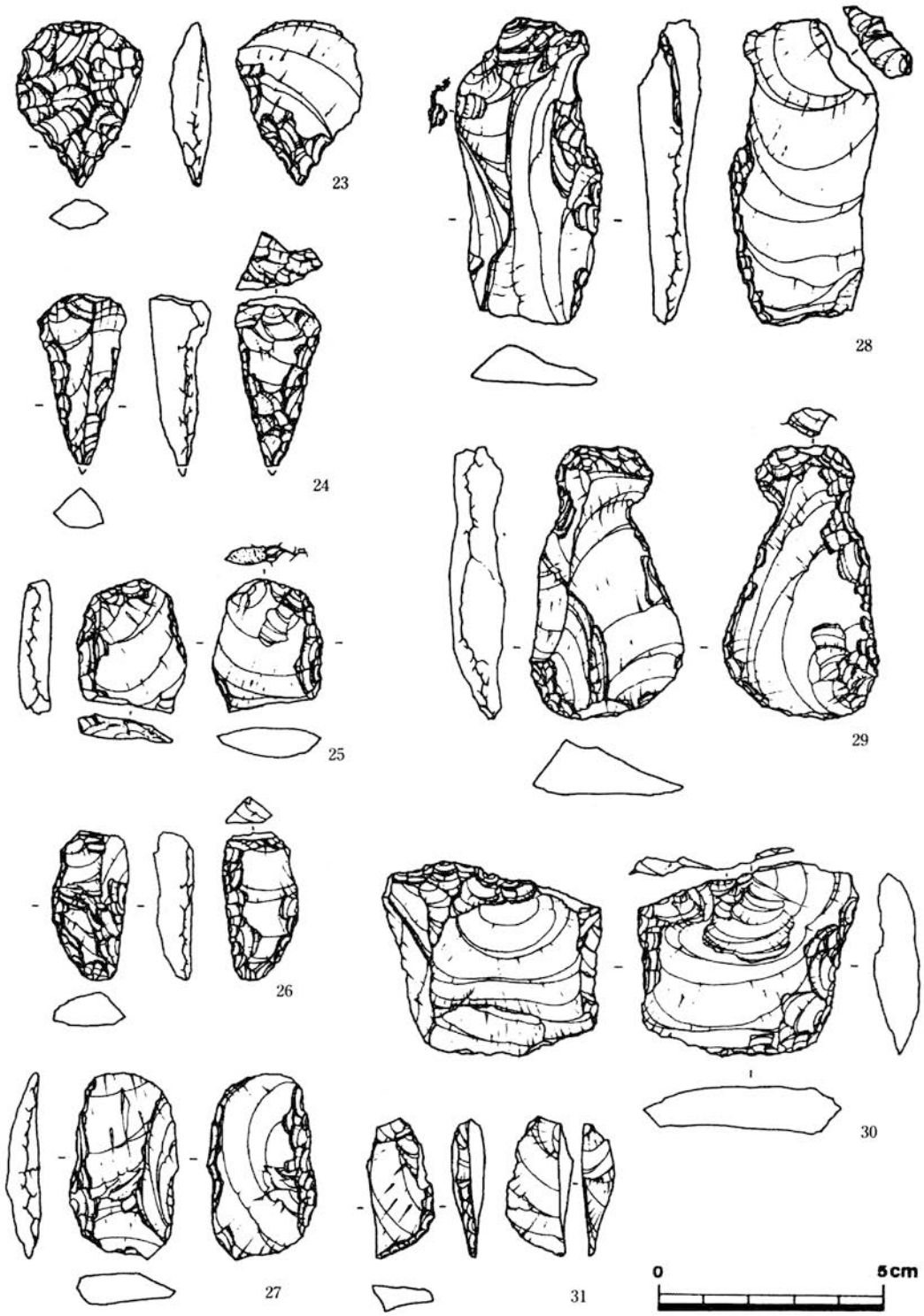
H：礫の一端から打面と作業面を交互に入れ換えながら後退して、チョッピングトゥール状となるもの。

I：その他の不定形石核

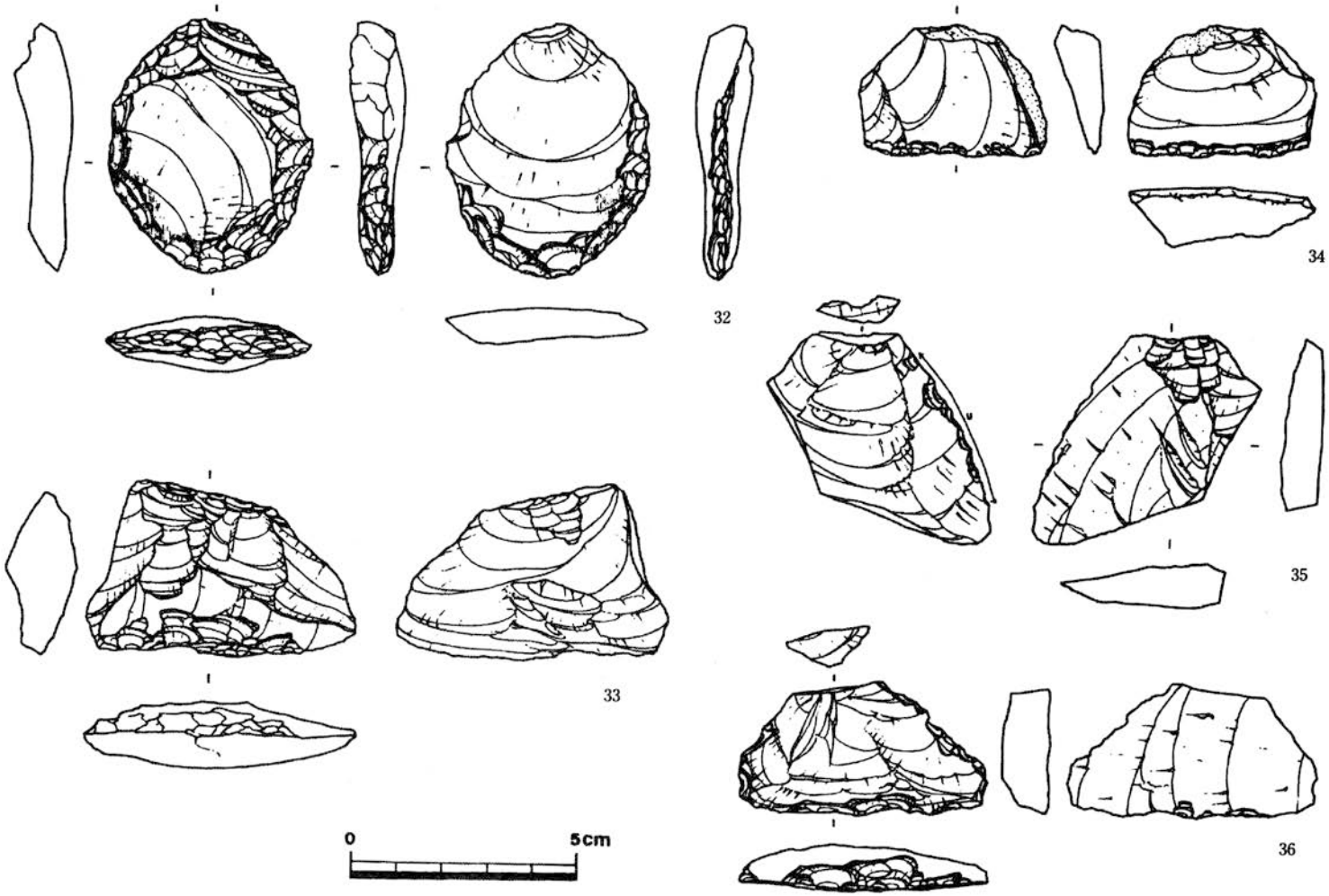




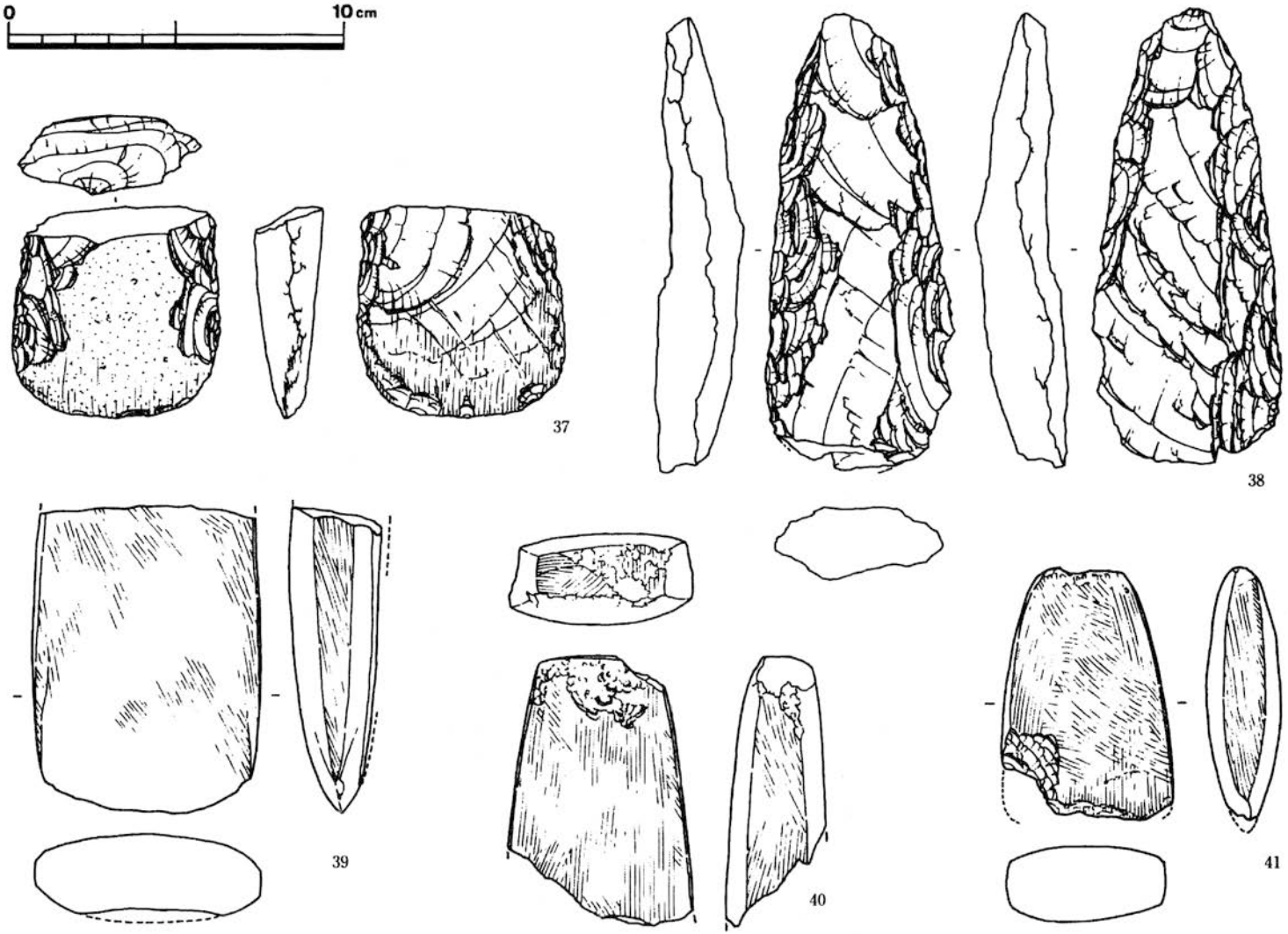
第24図　石鏃・石鏃未成品実測図（S＝2/3）



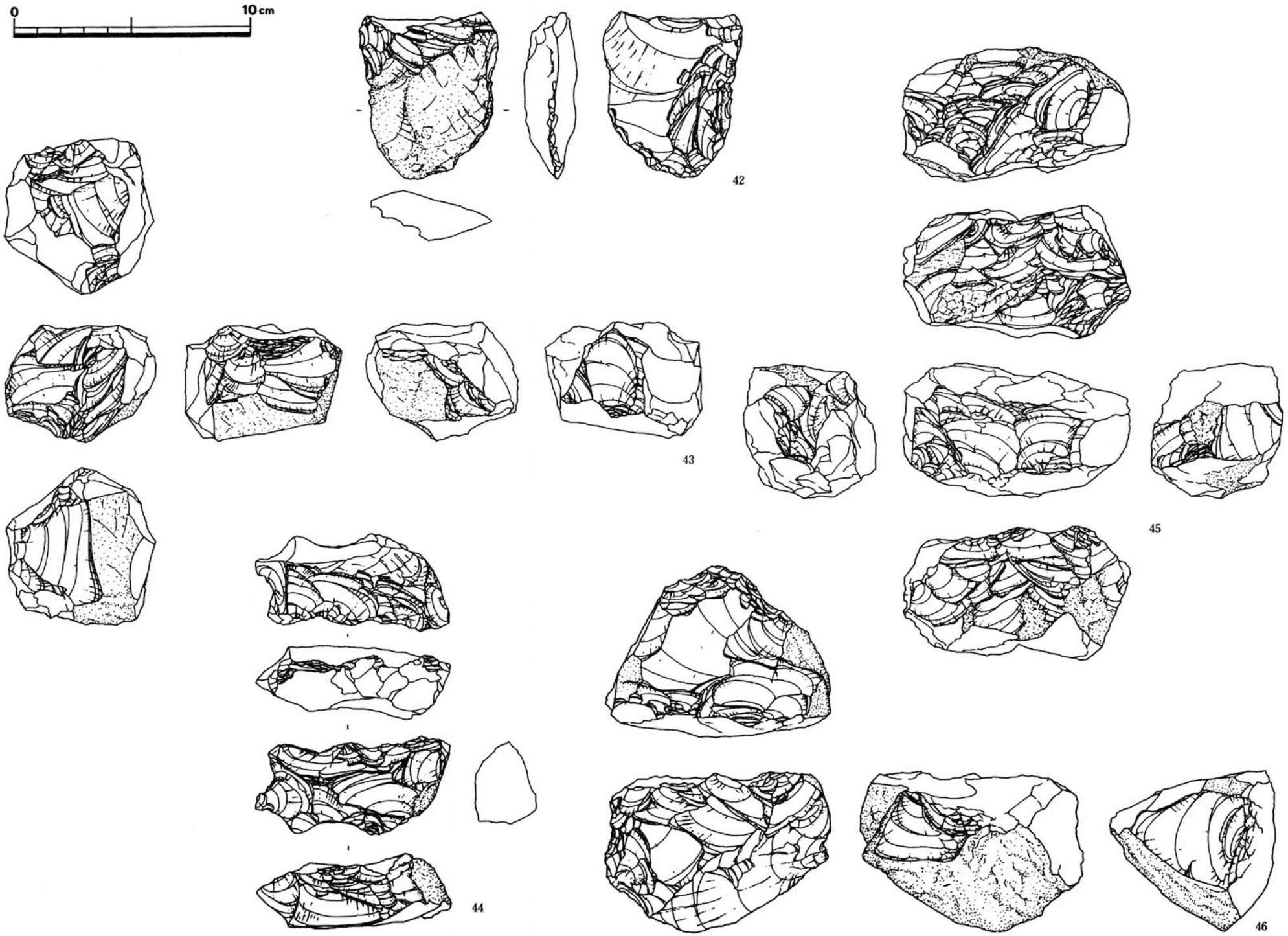
第25図　石錐・スクレイパー類実測図（S＝2/3）



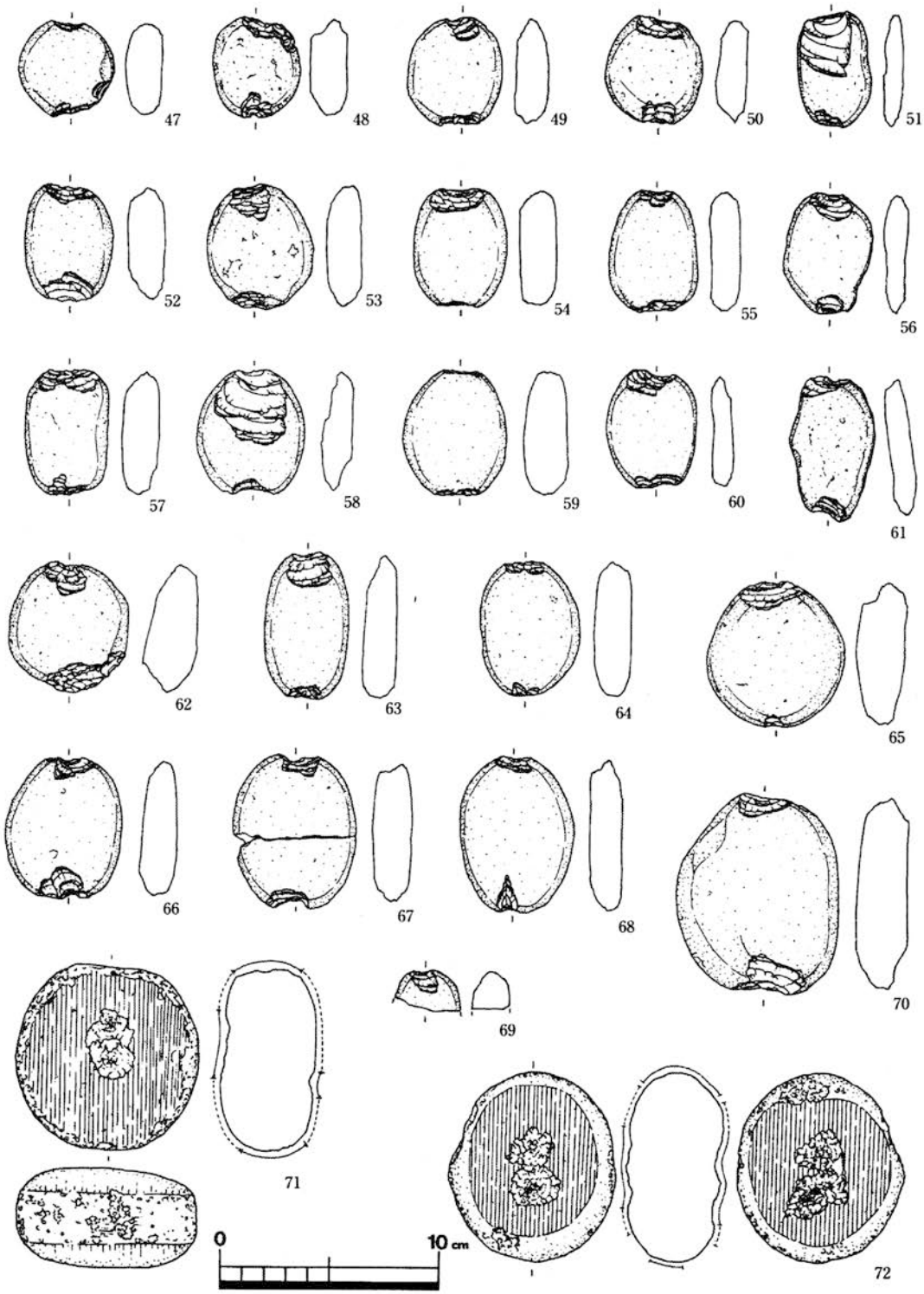
第26図　スクレイパー類実測図（S＝2/3）



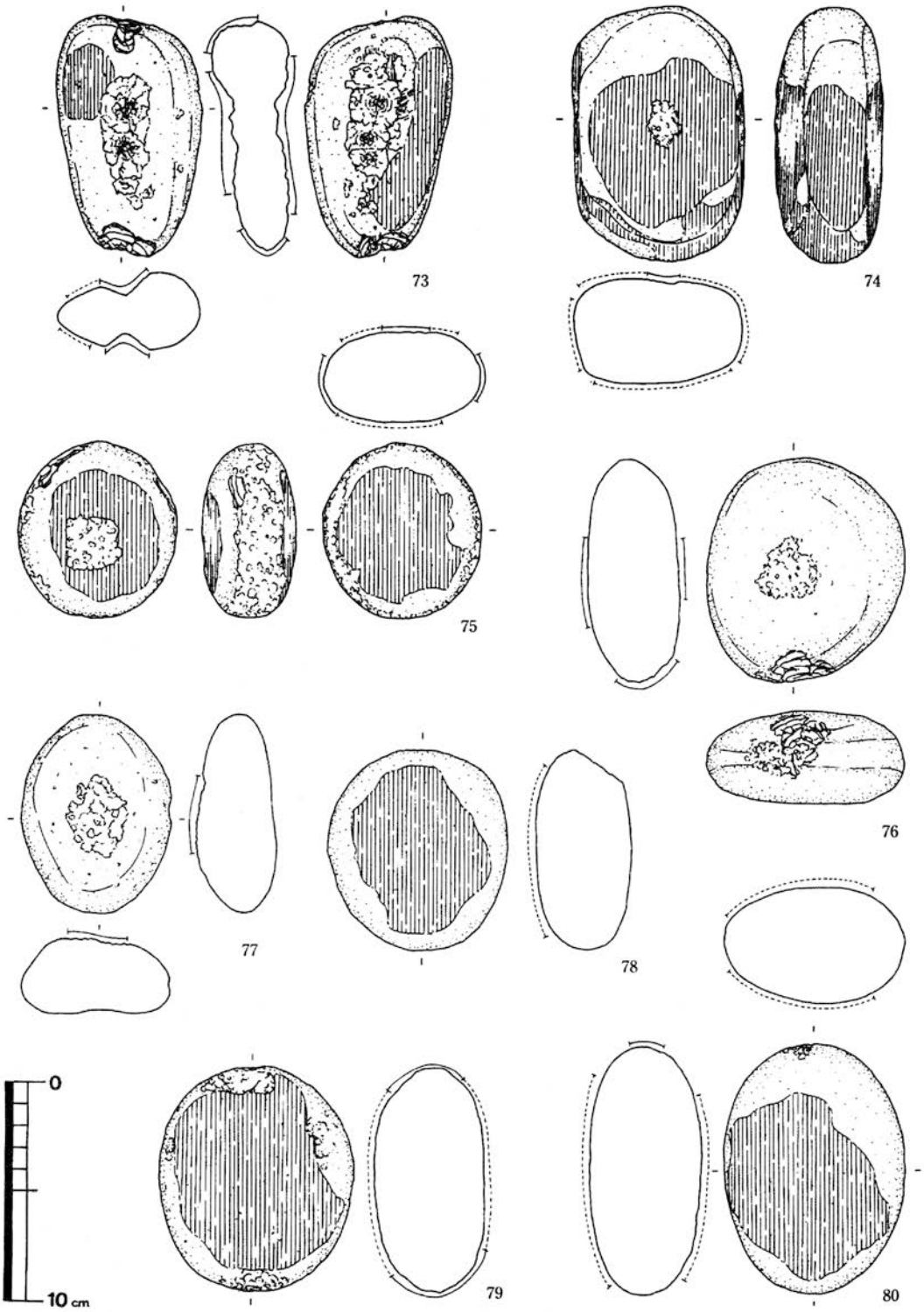
第27図　石斧実測図（S＝1/2）



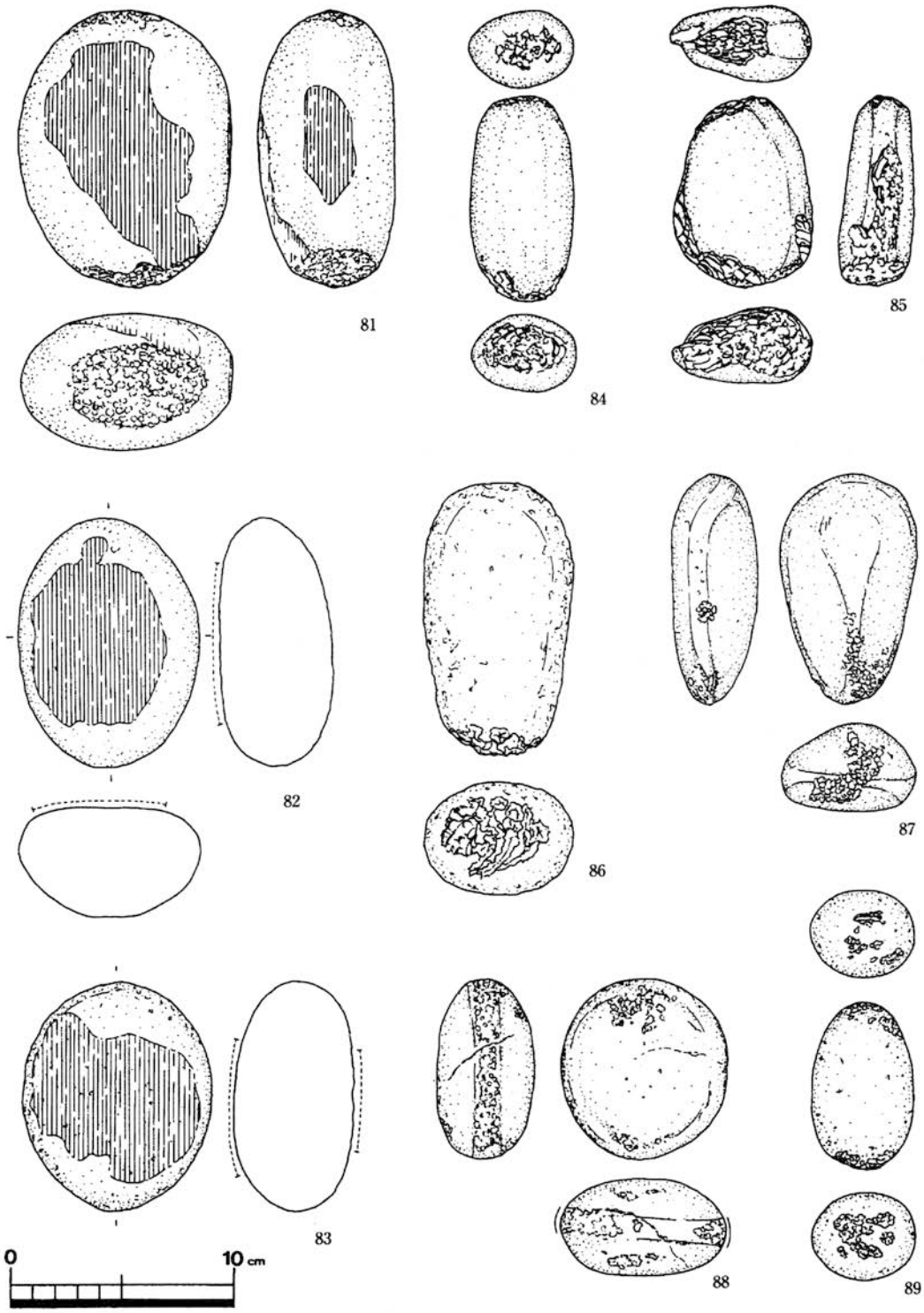
ー第28図　石核実測図(S=1/2)



第29図　石錐・凹石実測図（S＝1/3）



第30図　凹石・磨石類実測図（S＝1/3）



第31図　磨石・敲石実測図（S＝1/3）

表3　石器属性表

石　鏃

（計測値は0.05cm単位）

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	A－4	24－1	流紋岩	1.80	1.20	0.45	0.52		
2	4住覆土	24－2	〃	2.35	1.20	0.30	0.57		
3	3住139　床直	24－3	〃	2.20	1.70	0.40	0.82		
4	1住16	24－4	〃	(2.50)	1.90	0.50	(1.51)		先端部欠
5	1住91　床直	24－5	〃	3.25	1.70	0.70	2.82		先端部微欠、片方脚部欠
6	C－7	24－6	〃	2.65	2.20	0.80	4.24		
7	B－11	24－7	〃	(2.30)	1.30	0.35	(0.96)		片方脚部端微欠
8	3住P－5	24－8	安山岩	(1.70)	(1.10)	0.40	(0.49)		表面風化融解、先端部・片方脚部欠
9	3住136　床直	24－9	流紋岩	(1.80)	1.45	0.65	(1.22)		先端部・基部微欠
10	1住覆土	24－10	〃	(2.40)	1.75	0.60	(1.79)		先端部欠、未製品？
11	2住77	24－11	〃	2.75	2.20	0.85	5.10		
12	1住61	24－12	〃	(3.10)	2.10	0.70	(3.35)		先端部微欠、基部折面、未製品？
13	10住覆土	24－13	〃	3.20	2.40	0.70	4.16		未製品
14	1住覆土	24－14	〃	2.60	2.10	0.30	1.22		〃
15	2住覆土	24－15	〃	3.20	2.15	0.80	3.69		〃
16	A－11	24－16	〃	3.70	1.80	0.55	2.07		〃
17	3住137　床直	24－17	〃	2.60	1.70	0.70	2.44		〃
18	1住102　床直	24－18	〃	3.50	2.40	0.80	5.43		未製品？製品の可能性あり
19	59年度表採	24－19	〃	2.50	1.70	0.75	2.28		未製品
20	1住12	24－20	〃	2.70	2.10	0.60	2.75		〃
21	3住137　床直	24－21	〃	2.20	1.40	0.50	1.04		〃
22	1住102　床直	24－22	〃	2.30	1.90	0.60	2.08		〃
23	11住覆土		〃	3.00	2.40	1.00	5.82		〃
24	10住P－1		〃	1.90	1.80	0.45	0.87		〃

石　錐

（計測値は0.05cm単位）

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	2住167	25－23	流紋岩	3.80	2.90	0.85	7.05		
2	B－7	25－24	〃	(3.90)	2.00	1.35	(5.82)		先端部微欠
3	1住覆土	25－25	〃	3.05	2.50	0.70	5.96		未製品、石鏃未製品の可能性あり
4	1住11	25－26	〃	3.40	1.70	0.80	4.08		未製品、異器種の可能性あり

スクレイパー類

（計測値は0.05cm単位）

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	1住68	25－27	流紋岩	4.30	2.45	0.70	6.79		石鏃・石錐未製品？異形石器類？
2	3住52	25－28	〃	7.00	3.30	1.30	21.79	削器系	
3	3住61	25－29	〃	6.20	3.50	1.65	18.96	縦形石匙	未製品？
4	4住26	25－30	〃	4.45	5.00	1.05	22.94		機能部位下辺縁辺？異器種未製品？
5	3住覆土	25－31	〃	3.20	1.50	0.70	2.46	掻器系	
6	10住91	26－32	〃	5.60	4.60	1.20	23.19	削器系	左側下半刃部表裏磨滅痕
7	あ－2	26－33	〃	3.90	6.05	1.60	26.55	〃	横型石匙未製品？
8	C－11	26－34	〃	2.95	4.20	1.30	10.00	〃	
9	3住117	26－35	〃	4.70	5.10	1.00	18.00	〃	左側縁辺使用痕剥離？
10	3住77	26－36	〃	3.00	5.60	1.10	14.91	掻器系	

11	C－5		〃	6.40	7.70	1.35	61.96		縁辺使用痕剥離
12	1住55		〃	3.80	3.65	0.80	8.45		部分加工、未製品？
13	4住覆土		〃	3.70	2.00	0.70	3.75	削器系	半折、未製品？
14	10住覆土		〃	2.35	2.90	1.00	8.00		折損、部分加工、未製品？
15	4住482		〃	4.80	6.10	1.70	47.62		部分加工、未製品？

石　斧

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	あ－6	27－37	安山岩	(6.4)	6.3	(2.0)	(95.8)	打製撥形	基部側欠失
2	59年度表採	27－38	〃	(13.8)	5.7	2.4	(185.1)	〃	刃部損傷
3	あライン表採	27－39	〃	(9.2)	6.9	(2.6)	(270.8)	磨製定角	基部側欠、裏面剥離損傷
4	B－11	27－40	蛇紋岩	(8.1)	(5.5)	(2.8)	(162.8)	〃	刃部側欠
5	あ－3	27－41	蛇灰岩	7.6	(5.1)	2.2	(128.7)	〃	刃縁損傷後も使用継続

石　核

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	1住86	28－42	流紋岩	7.1	5.9	2.2	71.8	A	
2	C－10		〃	6.3	6.9	2.8	91.5	〃	
3	3住115		〃	6.0	5.0	2.4	51.4	〃	
4	C－5		〃	7.0	4.3	1.5	42.6	〃	
5	5住669		〃	5.8	3.2	1.8	29.8	〃	スクレイパーの可能性あり
6	A－10		〃	4.8	4.5	2.5	43.3	〃	
7	C－6	28－44	〃	8.3	4.1	3.0	97.8	B	
8	B－11		〃	7.5	5.6	4.3	162.5	〃	
9	4住覆土		〃	7.5	4.4	3.6	93.1	〃	
10	10住覆土		〃	8.7	4.2	3.5	110.9	〃	
11	A－10		〃	7.2	4.3	3.2	109.9	〃	
12	3住144　床直	28－46	〃	9.6	6.8	7.0	434.3	B？	G・Hの要素あり
13	3住154　床直	28－43	〃	6.6	6.5	5.0	221.2	G	
14	3住146　床直	28－45	〃	9.7	5.7	5.6	348.3	〃	
15	1住82		〃	10.5	8.0	6.6	595.5	〃	
16	4住覆土		〃	8.2	6.6	6.0	270.1	〃	
17	あ－2		〃	7.1	4.6	4.5	169.4	〃	
18	10住122		〃	7.8	6.3	6.3	348.0	〃	
19	10住覆土		〃	5.9	5.3	1.9	68.9	H？	剥離進行乏しい
20	あ－2		〃	5.3	4.2	2.5	58.9	D？	
21	A－6		〃	13.2	8.0	7.1	780.8	I	
22	B－7		〃	7.8	6.8	3.0	182.8	〃	
23	C－9		〃	7.0	7.0	3.0	119.4	〃	
24	B－7		〃	6.4	3.8	2.4	40.9	〃	
25	B－5		〃	5.8	4.2	2.0	54.3	〃	
26	B－7		〃	5.3	3.9	2.0	48.1	〃	
27	B－9		〃	4.0	2.6	2.4	18.6	〃	
28	B－7		〃	4.2	3.9	3.0	46.6	〃	
29	A－8		〃	4.5	3.2	2.0	30.3	〃	
30	あ－1		〃	5.8	4.6	3.1	78.9	〃	

31	あ－3		〃	4.9	4.4	2.6	44.3	〃	
32	1住98		〃	4.5	3.8	2.7	38.2	〃	
33	3住1		〃	2.9	2.2	2.2	11.5	〃	
34	3住4		〃	7.1	6.2	3.0	147.0	〃	
35	4住86		〃	5.2	5.0	3.1	66.8	〃	
36	4住125		〃	6.5	4.1	2.8	70.8	〃	
37	4住828		〃	5.2	3.6	3.3	44.5	〃	
38	5住289		〃	5.3	3.7	2.0	35.6	〃	
39	10住33		〃	5.9	4.2	4.2	90.2	〃	
40	10住105		〃	7.6	4.7	3.1	97.8	〃	
41	10住覆土		〃	5.3	3.8	2.1	36.9	〃	

石　錘

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	A－8	29－47	凝灰岩	4.5	4.4	1.7	31.0	打欠	
2	B－5	29－48	石英安山岩	4.7	4.0	1.7	41.3	〃	
3	B－11	29－49	細粒砂岩	5.1	4.3	1.5	37.9	〃	
4	B－9	29－50	石英安山岩	5.0	4.5	1.4	39.5	〃	
5	B－11	29－51	〃	5.5	3.4	0.9	21.5	〃	
6	10住覆土	29－52	〃	6.0	4.1	1.7	48.6	〃	
7	C－9	29－53	片麻岩	5.9	5.0	1.6	65.5	〃	被熱
8	B－3	29－54	細粒砂岩	5.6	4.3	1.7	67.1	〃	
9	1住5	29－55	片麻岩	5.7	4.1	1.4	42.7	〃	
10	3住81	29－56	安山岩	5.7	4.2	1.1	34.6	〃	
11	B－4	29－57	石英斑岩	5.9	3.9	1.7	52.4	〃	
12	10住17	29－58	安山岩	5.8	5.0	1.4	54.8	〃	
13	B－11	29－59	〃	5.8	4.8	2.0	73.1	〃	
14	B－6	29－60	〃	5.6	4.2	1.0	27.9	〃	
15	あ－3	29－61	石英安山岩	6.7	3.9	1.1	37.2	〃	
16	B－7	29－62	石英斑岩	6.1	5.6	2.3	103.1	〃	
17	C－8	29－63	細粒砂岩	6.9	3.9	1.5	63.5	〃	
18	3住150	29－64	石英安山岩	6.3	4.6	1.7	68.0	〃	
19	い－0	29－65	〃	6.7	6.3	2.2	110.9	〃	
20	B－7	29－66	〃	6.6	5.4	1.7	79.4	〃	
21	A－10・C－11	29－67	安山岩	7.1	5.7	1.8	87.1	〃	
22	B－4	29－68	〃	7.3	5.3	1.5	86.3	〃	
23	4住覆土	29－69	〃	(1.9)	(3.1)	(1.7)	(11.1)	〃	
24	5住658	29－70	石英斑岩	9.4	7.5	2.4	250.1	〃	
25	い－1		片麻岩	4.9	4.1	1.3	48.6	〃	

磨 石 類

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	B－10	29－71	粗粒砂岩	8.7	8.4	4.4	508.9	凹石A 1	両面凹、両面磨
2	10住49	29－72	〃	8.8	7.7	4.3	423.9	〃	〃 、 〃
3	B－5	29－73	石英安山岩	11.0	6.6	3.5	238.4	凹石A 2	石錘に転用か？両面凹
4	あ－2	30－74	安山岩	11.6	7.7	4.8	738.8	凹石B 3	片面浅凹、両面側面磨

5	B－11	30－75	石英安山岩	8.1	7.2	4.2	340.6	凹石B 1	〃　、両面磨
6	あ－2	30－76	〃	10.3	9.0	4.2	539.8	凹石B 2	両面浅凹
7	B－11	30－78	〃	9.2	6.9	3.6	294.3	〃	片面浅凹、片面磨
8	C－10	30－79	石英斑岩	11.6	9.5	5.0	813.1	〃	両面浅凹、　〃
9	B－3	30－80	石英安山岩	10.6	(7.9)	5.9	(564.9)	凹石A 1	被熱、破砕、両面凹
10	B－9	31－81	石英斑岩	9.2	8.2	4.4	474.3	磨石A	片面磨
11	C－9	31－82	石英安山岩	10.4	8.9	5.0	634.1	磨石B	両面磨
12	A－3	31－83	片麻岩	11.5	8.2	5.1	682.3	〃	〃
13	B－10		石英安山岩	12.7	9.6	6.2	1083.3	磨石C	両端強敲打（敲打器）、片・側面磨
14	B－5		石英斑岩	11.3	8.3	5.0	633.5	磨石A	被熱、片面磨
15	B－5		安山岩	10.6	8.5	5.5	642.5	〃	両面磨
16	B－11		石英安山岩	9.6	6.3	3.7	301.3	〃	片面磨
17	B－10		〃	9.1	8.6	5.1	515.7	〃	〃
18	A－6		〃	7.4	6.8	3.7	252.7	〃	〃
19	C－9		〃	9.6	(7.3)	4.4	(392.8)	〃	〃　、破損
20	B－12		〃	9.9	9.8	4.2	572.8	〃	両面磨
21	A地区		片麻岩	15.3	12.9	9.3	2553.0	〃	〃
22	C－9		〃	12.3	10.2	4.8	846.0	〃	〃　、被熱
23	A－10		〃	13.2	(9.7)	5.0	845.0	〃	〃　、破損
24	2住355		〃	7.8	6.3	2.3	159.4	〃	片面磨
25	C－10		安山岩	8.1	7.5	4.2	340.7	〃	〃
26	〃		〃	(7.7)	(7.9)	5.3	(388.9)	〃	〃　、破損
27	A地区		〃	(6.7)	(6.0)	(7.4)	(228.2)	〃	破砕片、被熱
28	10住114		〃	10.5	9.6	5.9	897.4	〃	片面磨
29	あ－6		〃	(6.1)	(7.9)	(4.4)	(285.0)	〃	〃　、破損
30	10住		〃	(7.6)	(7.1)	(3.6)	(219.5)	〃	〃　、〃
31	C－7		石英斑岩	14.0	7.2	6.2	914.1	〃	〃　、側面磨
32	A－8		〃	10.0	7.6	3.7	373.2	〃	〃
33	A－6		〃	9.1	8.0	4.7	450.0	〃	両面磨
34	A－6		〃	8.7	6.7	4.1	335.5	〃	片面磨
35	2住覆土		〃	10.7	(7.2)	4.5	(456.6)	〃	〃　、破損
36	C－11		〃	9.7	7.5	5.3	483.7	〃	〃
37	B－10		砂岩	7.9	7.4	3.8	303.0	〃	〃
38	C－9		〃	9.4	(6.4)	(6.0)	452.0	磨石B	被熱、破損
39	4住884・887		片麻岩	(10.6)	(9.0)	(6.4)	513.2	〃	〃　、〃
40	C－9		石英安山岩	10.6	7.8	5.1	608.4	〃	両面磨、被熱、剥落

敲　石

No	出土地点	図 No	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	形 態	備　　考
1	10住覆土	31－84	細粒砂岩	9.4	4.6	3.5	209	A	
2	A－6	31－85	石英安山岩	8.7	6.3	3.5	231	B	
3	3住覆土	31－86	石英斑岩	12.5	6.8	5.2	630	A	
4	B－5	31－87	片麻岩	10.5	6.2	4.0	312	A	
5	A地区	31－88	石英斑岩	8.3	7.5	4.4	294	C	
6	2住264	31－89	〃	7.7	4.6	4.0	199	A	
7	1住94		片麻岩	7.8	5.9	3.1	174	B	

4．小　結

（1）住居跡の様相

検出された4軒の住居跡は、それぞれ異なる様相を呈している。1号住居跡と10号住居跡は、不整なプランを呈し、それに符合するかのように明確な柱穴を備えていない。どちらも床面のほぼ中央部に炉跡相当の焼結面を有し、住居跡であることは確かと考えられる。一方、3号住居跡は、該期における最も典型的な、そして整美な小判形の住居プランを呈し、柱穴配置も整然としたものである。貯蔵穴風の土坑を備える点を含め、近接の念仏林遺跡で確認された住居跡との共通性は多く、定型的住居と称して良いと考えたい。この点を踏まえ、不整プランの住居と定型的住居の共存について今後検討してゆく必要があると思う。相互に有機的関連性をもっている可能性は高く、より具体的な集落の形成過程、たとえば、新集落用地選定後、伐採や定型住居建築までの仮居住形態はどのようなかたちであったのか、同様に老朽化や自然災害等に伴う住居建て替え時はどうであったか、または機能的な差があったのか等々についての究明が望まれる。これを解明する糸口のひとつは、住居跡覆土の投棄遺物のあり方の分析にある。もちろん集落全体の完掘が理想的であるが、3号住居跡のように覆土中の遺物が乏しいものと、10号住居跡のように小竪穴にもかかわらず著しい遺物集中がみられるものが集落内で対峙したあり方を示していれば、一つの予察は成立しよう。

次に、8号住居跡について若干触れておきたい。本住居跡は、3号住居跡と全く同じ柱穴・土坑配置をもつものであるが、竪穴プランは検出していない。これを、掘り込みが浅かったために住居壁が確認できなかっただけとみるか、本来平地式であったと見るかは判断に苦しむ。後者とした場合、その存在自体が問題視されるが、3号住居跡床面とのレベル差が30～40cmもあることに加えて、本遺跡では地山上の黒褐色土堆積層厚がそれほど厚くないので、竪穴構造ではなかった可能性が高いと考えている。これもまた、3号住居跡との有機的関連性についての検討余地を残している。2者はほぼ主軸を直行させており、重複はしないが極めて近接している。特殊な関係を有しているか、または連結でもしていない限り、常識的には同時併存は考えにくい。今後の類例を待ちたい。

（2）出土土器の編年的位置付け

本遺跡の出土土器は、遺構に伴う一括遺物が極めて乏しく、また、住居跡床面での検出土器であっても、小片あるいは、文様をもたない胴部片が主体となっている。このため、遺構単位での検討に先立ち、全体の概要について述べておきたい。

文様をもつ土器は、いずれも小破片であり、文様構成による類型の抽出を成し得なかったことについては、分類の項でも述べたとおりである。検討の基準となる特徴的文様について列挙すれば、Ⅰ-1類の斜格子目文、Ⅰ-2類の蓮華状文、Ⅰ-4類の縦位半隆起短線文、Ⅰ-5類のキャリパー器形の口辺部から頚部へ縦位半隆起線文あるいは縦位沈線文を狭い間隔で施すものなどとなろう。蓮華状文は、いわゆる新崎式に特徴的な文様であるが、その他はいずれも、やや先行する

新保式後半～終末期に対比される要素をもつと考えられる。新保式期に近いあり方を補強するものとしては、Ⅰ-5類の胴部に対応するⅠ-11類の木目状撚糸文を施した円筒形胴部片がある。こうしてみると、Ⅰ-2類の蓮華状文も古手の様相をもつものとの理解も可能である。一方、新しい段階の要素としては、Ⅰ-7C類の横位無文帯の上下に楔形刻目文を施すものが存在することも見逃せない。この文様の出現は、真脇遺跡9群Ⅱ期の指標とされており、また、粗製縄文深鉢形土器Ⅱ-4類(第17図64)が、胴部球形の真脇遺跡Bb形態に対応するものとすれば、同じく9群Ⅱ期の指標とされるものである。真脇遺跡の報文では、新保・新崎両型式をそれぞれ第8群と第9群とし(加藤・山田 1986)、その境界についての流動性が指摘されている。この点について言及するだけの準備も力量もないので、両型式の典型的個体との対比から、粗削りに、新保式末から新崎式前葉にまたがる土器群として位置付けるに留めておきたい。第Ⅲ群の船元様式の土器群も、これに並行するものと考えて矛盾は無いと思われる。

遺構との関係については、残念ながら、実測図掲載遺物の中には良好な床面遺物は殆ど含まれていない。3号住居跡出土の40(Ⅰ-9類)と114(底部2B類)の2点が確実なもので、その他は直接伴うものとは言えない。覆土中遺物は、1号住居跡で120片程度、3号住居跡で150片程度と非常に少なく、通常の流れ込みと判断される。一方10号住居跡では、プラン確認前にまず土器集中地点として把握されており、検出破片数は700片を超える。この異常なまでの集中は、本遺構に伴うか否かは別として、極めて一括性の高いものであると判断できる。10号住居跡出土土器は、殆ど縄文地の胴部片で占められるが、文様をもつものを取り上げても、第Ⅲ群船元様式の集中を除いては、特に全体土器群の主体的内容とは区別すべき傾向はない。従って、本集落は、型式的に分離可能な土器群を含むものとしても、実質的には、良好な一時期単一集落跡であり、検出土器は、その集落の存続時間幅を表すものと推定したい。

最後に、小谷を挟んだ対岸のA遺跡及び北方に近接する念仏林遺跡との関係について触れておきたい。A遺跡では、小型の土坑1基が検出されたが、住居跡は無く、遺構は落とし坑(8基)が中心である。小型土坑の出土土器は優良な土器で、本遺跡の土器群に並行するものと考えられる。このことから、A遺跡の落とし坑群は、本集落の住人が営んだものである公算が大きい。

次に念仏林遺跡との関係であるが、念仏林遺跡は、北半のA地区と南半のB地区とに分けられており、遺跡面積はA地区約6,000m²、B地区約15,000m²という広大なものである。昭和60～62年度の調査はA地区を対象としたものであったが、B地区の試掘調査も行われた。両地区出土土器群は、新崎式後葉から上山田式期にかけてを主体とするものである。その中で、A地区よりはB地区が若干古相を示すことが指摘されている。両地区ともに、本遺跡よりは明らかに後出の様相を示すものであるが、ただそれがほぼ連続する段階に設定される可能性をもっており、同一集団の移住を想定した検討も必要となる。ちなみに本遺跡の南方に近接する矢田地区では、もう一段階後出の土器が採集されているので、柴山潟から入り込む谷に面した台地上を領域とした一縄文集団が、移住を繰り返して集落を形成していった可能性があろう。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１．全体の概要

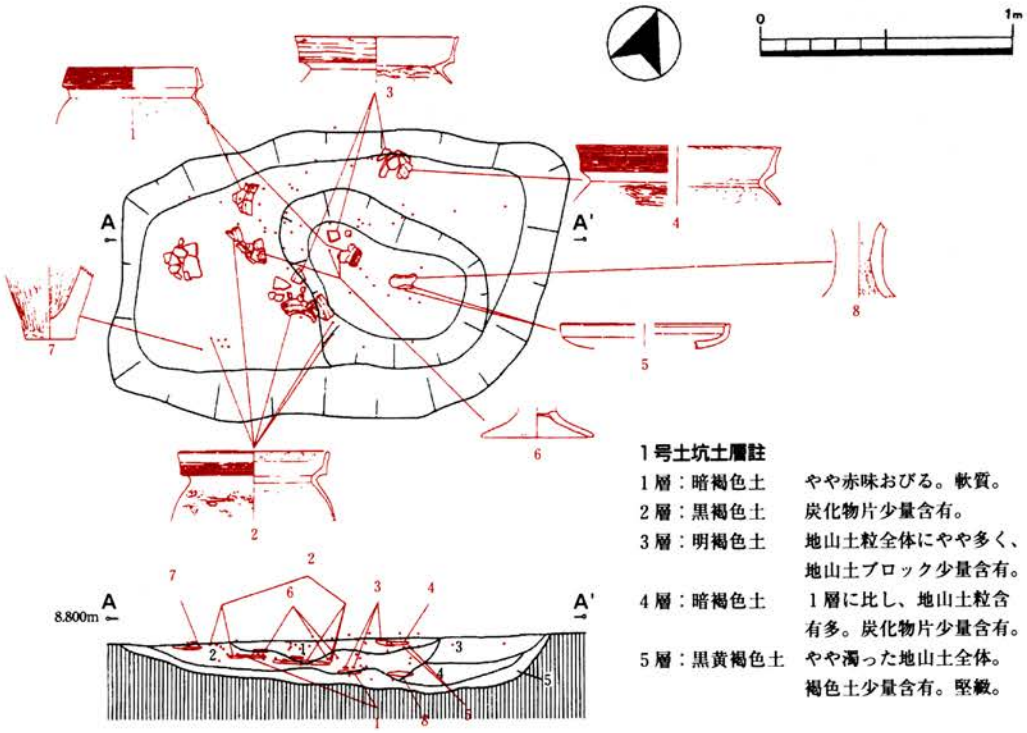
検出された遺構は、土坑１基（１号土坑）、竪穴住居跡１軒（11号住居跡）のみである。１号土坑は、市道調査区Ａ-１グリッドの東辺部で、11号住居跡は、昭和59年度調査区あ-５・６グリッドにまたがる部分で検出された。検出遺構は少ないが、包含層遺物としては、特に市道調査区のほぼ全域において一定量分布しており、未調査区に良好な集落が展開していると予想される。

２．１号土坑

(１)遺　構（第32図）

形　態　平面形は不整長方形～平行四辺形を呈し、長軸170cm、短軸115cmを測る。東半部に２段目となる不整形のごく浅い落ち込みを有するが、１段目の底面は、２段目の深まりへの緩傾斜面を成し、２段目落ち込みの上端境界線は極めて不明瞭である。深さは最大で約25cmを測る。

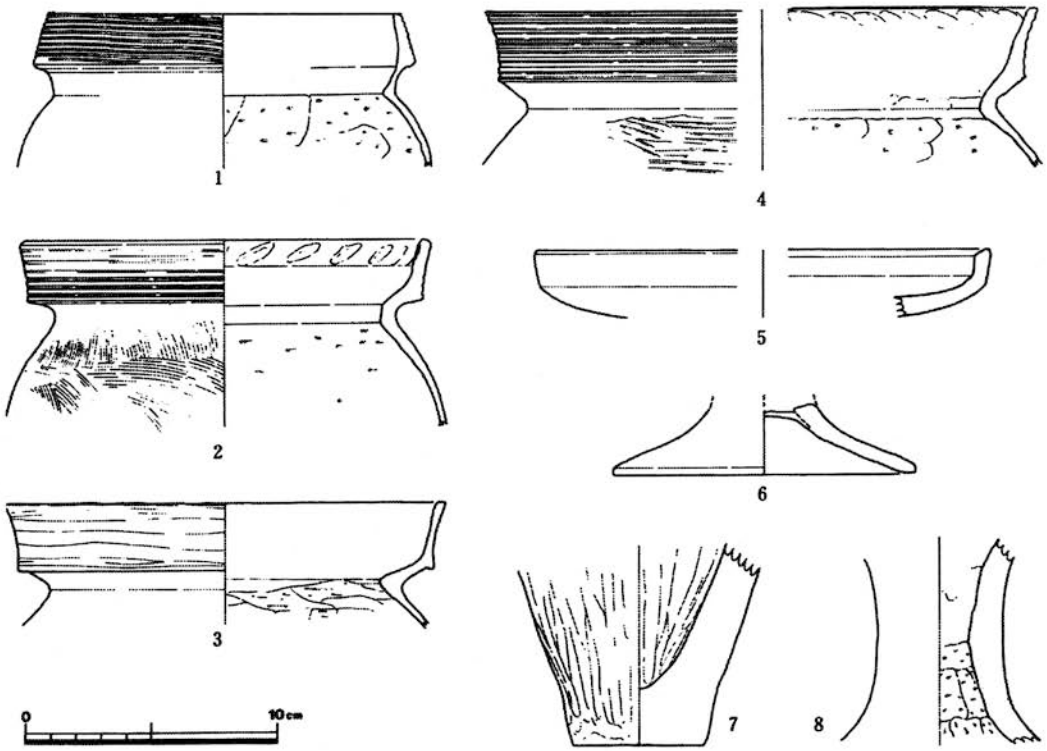
遺物出土状況　平面分布は、土坑のほぼ中央部を中心とした広がりをみせているが、大型破片の出土状況図が示すとおり、個体単位のまとまりが散在する。分布断面図では、底面直上遺物が無く、第２層を包含層としていることが指摘できる。ただし、下底層を成す５層は地山漸移層的な濁り土質であり、一定形状を維持した遺物の出土状況からすると、流れ込み等ではなく、本土坑に伴う一括廃棄遺物と考えてよいと思われる。



第32図　１号土坑平面・断面・遺物出土状況図（S=1/30）

(2)遺　物（第33図）

甕形土器（1～4）　すべて有段口縁の甕形土器である。1～3は口径14～17cmの中型品、4は小片のため復元推定率は高いが、口径20cm強のやや大型の部類に属する。1・2・4が口縁帯に擬凹線を有するもの、3が無文のものである。1は、内傾する口縁帯を成すもので、口縁端部はやや薄いが丸みをもつ。内面は、段があまりめだたず、内湾する曲面形態をとる一方、頸部の屈曲は鋭い。外面は、ごくわずかな内湾傾向をもつ口縁帯に、密度の高い擬凹線がややうねりをもって施される。2は、外傾する口縁帯を成すもので、弱い外反傾向がある。擬凹線は、上半部が摩滅と厚い煤付着により判然としないが、6～7条直線的に施されている。口縁帯内面は、上半部に連続する指頭圧痕を有し、その指頭圧痕の下端を結ぶラインで内側にやや肥厚する。口縁端部は厚みをもって丸く収まるか、あるいは部分的に狭い上端面を成している。頸部内面には、ナデによって垂直に面取りされた幅8mm程の帯（以下、頸部内面帯と称する）がめぐる。胴（肩）部外面は、縦方向に近い急角度のナナメハケ調整後、肩部を中心に傾斜の緩いナナメもしくはヨコハケ調整を加えている。4は、外傾・外反度の強い口縁帯をもち、凹凸の緩い擬凹線が施されている。内面の口唇部近くに連続する指頭圧痕様のものを有するが、通常のそれとはやや趣を異にし、口唇部を指で挟んでつまむように連続調整した痕跡のようにも見える。口縁端部は水平な狭い面を成して角張る。内面は、口縁帯との段が不明瞭で、頸部内面帯は存在するものの、丸み



第33図　1号土坑出土遺物実測図（S＝1/3）

のある仕上がりである。口縁基部の外面は、若干膨らみをもち、頸部で比較的強く屈曲する。頸部以下は横方向のハケ調整がみられ、ハケ目は粗く、擬凹線に類似する。無文帯をもつ3は、薄手で整美な仕上がりをみせる。口縁帯は外傾・外反の類で、内外面とも丁寧なナデ調整が施されているが、外面には、ごく細い針先をあてがったような数本の条線が巡っている。条線間の幅はところどころ変化しているので、ナデ調整時に伴った偶発的な痕跡と思われる。口縁帯中央部が最も薄手で、口縁端部にかけてやや肥厚する。端部は、部分的に狭い上端面を形成しおり、他は概して丸みをもつものの、上端面を成す角張った収め方を基調としている。口縁帯下端は僅かに下方へ突出する。内面の段は明瞭で、幅広の面的基部をもち、頸部では鋭い稜を成して強く屈曲する。胎土は精良で、胴部内面のケズリに伴う砂礫の動きも顕著には浮き出していない。

高坏形土器(5)　坏底部からやや丸みをもって垂直に短く立ち上がる口縁部をもち、端部は内傾する平坦面を成す。調整は不明瞭であるが、口縁部外面はヘラ状工具でヨコナデしたような形跡を認める。また不確実ながら、口縁部外面で僅かに赤彩の痕跡がみうけられる。本遺跡では唯一の器形で、なおかつ小破片であるが、塚崎遺跡21号竪穴出土の類似品に対比させたい。

器台形土器(8)　支柱部片で、外面は摩滅により調整不明瞭、内面は、下半部が横方向のヘラケズリである。対応する器受け部や脚部の破片はみられない。

蓋形土器(6)　高坏脚部のような形態で、上面は支柱の剥落痕のようにみえるが、中央部は塞がれている。坏部とは考えがたく、蓋形土器を想定した。台付き土器の台部の可能性もある。

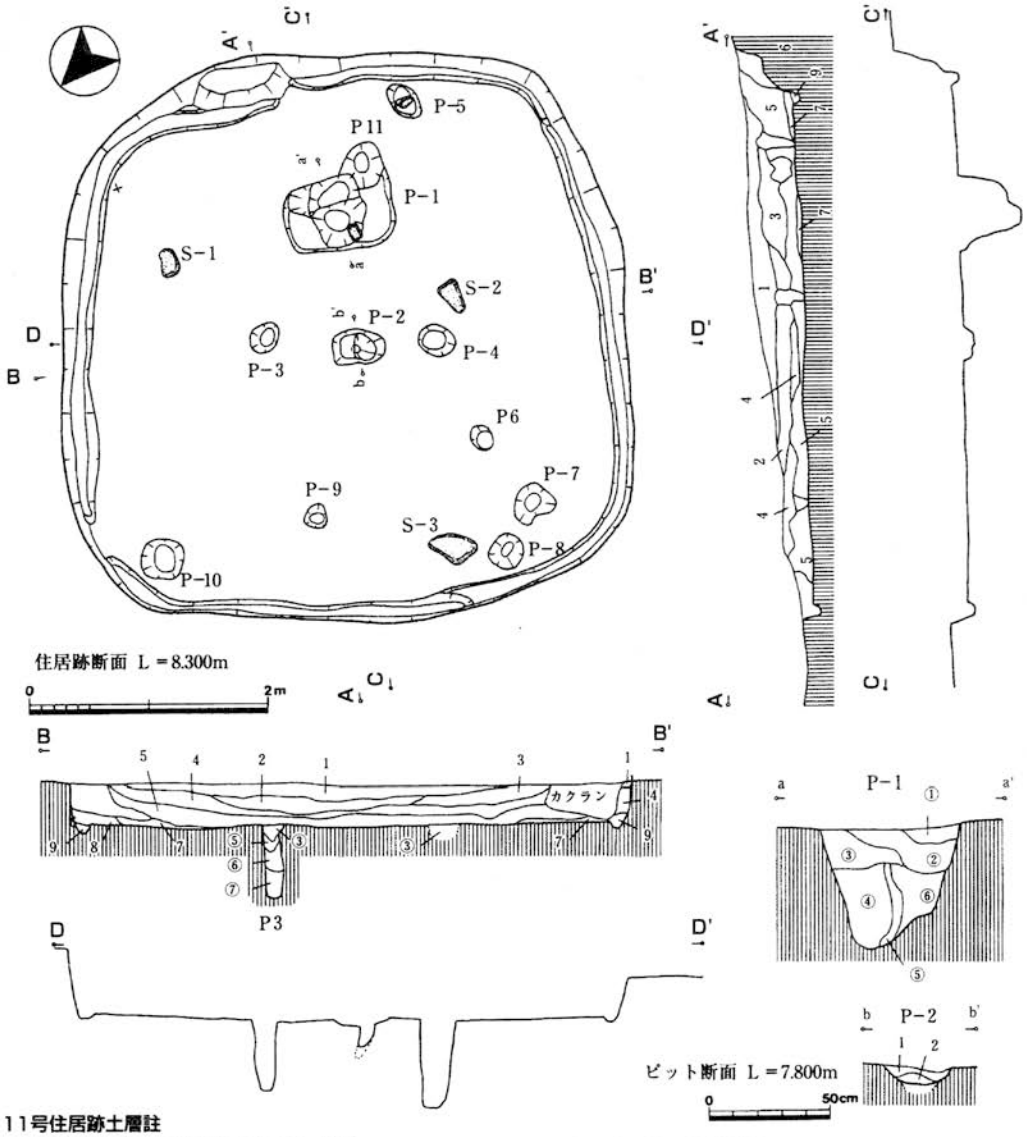
底部片(7)　甕または壷の底部片と思われるが、形態的には該期にあまり見受けられない。外面はハケ調整後に比較的丁寧なヘラミガキ、内面は細かい線条痕が浮き出るナデ調整である。

3．11号住居跡

(1)遺　構（第34・35図）

形　態　谷をはさんでA遺跡を望む緩斜面に立地し、傾斜方向に主軸を一致させて山側壁を高くするタイプのものである。平面形は隅円台形を呈し、主軸長4.72m、上辺(山側）約3.7m、下辺（谷側）約4.4mを測る。地山面を基準とした壁高は、山側では約50cm、谷側では約10cmを測る。壁周溝は、北隅の一部で途切れるほかは、ほぼ全周し、幅は概ね10～15cm、深さは5～10cmとなっている。この壁周溝内側線で捉えた床面規模は、主軸長約4.3m、上辺約3.4m、下辺約4mである。床面は谷側への緩い傾斜を成し、比高差は約10cmである。

主柱は2本で、P3とP4が該当する。主軸をちょうど二等分した位置に並置され、柱間寸法は約1.4mである。壁周溝内側からの距離も約1.4mで、主柱2本を通した横軸床面幅4.2mをちょうど3等分したかたちの柱配置である。横軸床面幅は床面主軸長にほぼ一致しているので、主柱配置が一定の企画に基づいたものであったことが予測される。柱穴は、直径約25cmで、深さは、P3が62cm、P4が75cmを測る。ともに下底は青灰色粘土質層面に達しており、著しい硬化がみられる。覆土は、下半部が極めて軟弱でしまりがなく、顆粒あるいはそぼろ状の地山土を主



11号住居跡土層註

1層：淡褐色土　黄色味やや強い。軟質。
2層：黒褐色土　炭化物片、地山土ブロック少量含有。やや硬質。
3層：黒褐色土　2層と同質層だが、やや褐色強い。
4層：暗褐色土　地山土粒・ブロック比較的多く含有。炭化物片の大（1.5cm）時折含有。やや軟質。
5層：暗褐色土　地山土粒多く4層より明るい。地山土・黒褐色土硬質ブロックをやや多く含有。やや硬質。
6層：暗(黄)褐色土　5層と同質、やや明るい。ブロック土混入多い。
7層：(暗)黄褐色土　地山土粒多量含有。地山土硬質ブロック混在。極めて堅緻。
8層：暗褐色土　黒色強い。極めて硬く、部分的に硬質ブロック化。
9層：(暗)黄褐色土　地山土粒・ブロック主体。やや硬質。

P－1・P－3土層註

①層：暗褐色土　地山土粒・炭化物少量含有。
②層：黒褐色土　地山土粒少量、炭化物片やや多量含有。
③層：暗褐色土　地山土粒多量・同ブロック少量含有。
④層：暗褐色土　地山土粒少量含有。軟弱。
⑤層：暗黄褐色土　地山土粒・ブロック多量含有。
⑥層：黄褐色土　顆粒状地山土全体で極めて軟弱。暗褐色土粒少量含有。
⑦層：黄褐色土　顆粒状地山土主体で極めて軟弱。

P－2土層註

1層：暗褐色土　地山土ブロック、焼土ブロック、炭化物片少量含有。
2層：暗褐色土　1層よりやや黒い。焼土は含まない。

第34図　11号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）

体とする。Ｐ４の土層断面は、Ｐ３とほぼ同様の堆積状況および土質であった。

施設等　床は、少量の暗褐色土をマトリックスとする地山土硬質ブロック主体の貼り床で、平均５cmの厚さをもつ。硬化の著しい床面は、ほぼ２本の主柱穴間の幅で、主軸に沿った帯状の範囲に認められる。

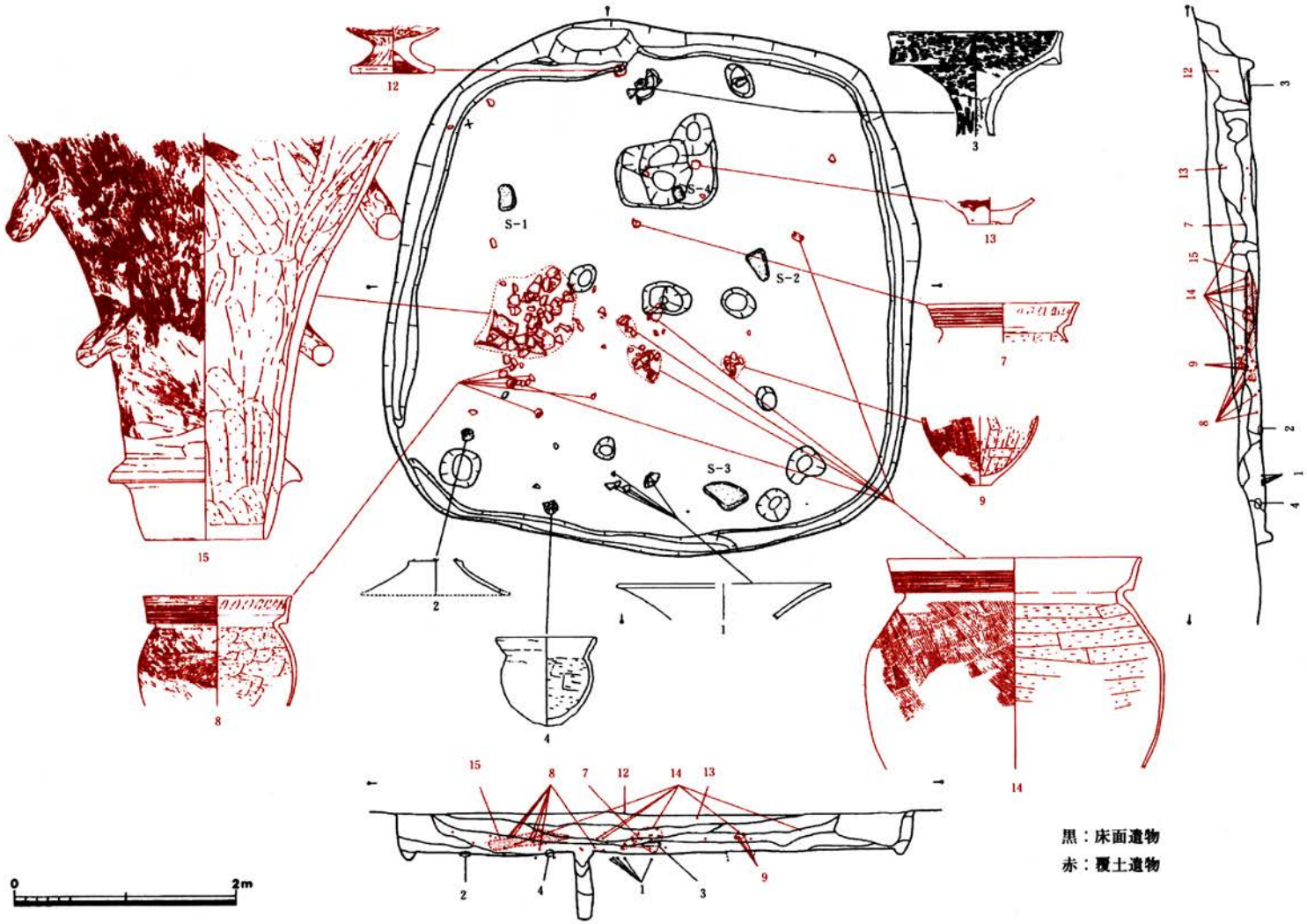
主柱２本にはさまれたＰ２は、覆土に焼土をもつことから、炉跡と考えて良いと思われるが、焼結面は認められず、恒常的使用は考えにくい。45×30cmの不整長方形を呈し、深さは約10cm程度と浅いが、片半部に漏斗状にすぼまって落ち込むピットを検出している。深さは30cm強で、形態的には木根痕様にも見える。下底の潜り込む部分は木根の影響を受けたものとしても、甕設置用ピットとしての認定は可能である。Ｐ２の上方には２段掘りのいわゆる「特殊ピット）（Ｐ１）が設けられている。住居跡の軸とほぼ一致させた長方形プランで、長軸82cm、短軸62cmを測る。１段目の掘り込みは３～５cmと浅く、２段目の掘り込みは、中央部において一段目を左右のテラスとして分かつかたちに大きく穿たれている。１段目からの深さは約45cmで、上端プランに比して下底は狭く、直径20cm弱の不整円形を呈す。土層断面は、短軸上の１面のみの観察であるが、薄い⑤層が縦位に嵌入して④層と⑥層を分かつという特異なあり方を示す。④・⑥層ともに軟弱土で、一方が掘り方埋土といったような関係は考えにくく、板材等の落ち込みに起因した堆積かもしれない。尚、南角部のＰ-11は深さ約20cmで、特殊ピットに付属するものかは不明。

その他のピットについて深さを示すと、Ｐ５約12cm、Ｐ６約15cm、Ｐ７約30cm、Ｐ８約40cm、Ｐ９約25cm、Ｐ10約15cmである。いずれかは構造上必要な副柱穴の可能性もあるが、認定は難しい。上屋構造の想定を保留した上で可能性を述べれば、Ｐ11を起点として、主柱Ｐ３を通るライン延長上にＰ10、主柱Ｐ４を通るライン延長上にＰ７あるいはＰ８がある。この５つの柱穴を結ぶと、ほぼ二等辺三角形の配置を示すことを指摘しておきたい。

ピット以外の施設としては、山側短辺壁のやや左寄りで検出された壇状の施設が注目される。壁から台形状に突出したテラス面で、壁際の長辺の幅約60cm、対する短辺の幅約40cm、奥行き約20cmで、床面からは約30cm高く、壁上端からは約15cm下がる。調査当時は入口の階段施設とも考えたが、住居内での祭祀的施設の可能性も有力である。

遺物出土状況　覆土遺物は、同時性をもつ可能性の高い一括遺物として捉えられる出土状況を示している。個体を異にする小破片が覆土中にまんべんなく累積するものではなく、少数個体が住居廃絶後、第１次堆積層（第５層）を形成している過程で投棄されたものと考えられる。したがって、自然流入の可能性のある12・13を除き、概ねこの住居跡より後出の一括遺物と考えている。注目される15の山陰系大型甑は、完形個体がその場で潰れたものではなく、小範囲ではあるが、若干破片の散乱がみられ、壊れたものを捨てたか、または投げ捨てにより壊れたようだ。また、８と９の甕が１個体分の破片としての可能性をもち、14の大型甕も、復元に至っていないものの、破片数は多く、１個体分に近いかたちで投棄されたようである。その他は部分片である。

次に、本住居跡に直接伴う床面遺物であるが、個体数は極めて乏しい。完器は４の小型甕形土



第35図　11号住居跡遺物出土状況図（S＝1/60）

器のみで、横転した状態での検出である。3の器台も、伏せられたものが潰れた状態で出土したが、脚部は当初から欠失していたと思われ、想定される破片は存在しない。1と2は同一個体の可能性をもつが、支柱部を欠く。組成としては当然不備と言え、住居廃絶時にかたずけ及び持ち出しがあり、不要なもののみを遺したのであろう。注目されるのは、床面上に設置された大型自然礫S-2・S-3である。床面にしっかりと貼り付いた台石状の礫で、それぞれに被熱痕が観察される。砥石のS-1もかなり大型の部類で、先の2点を含めて、床に設置された「施設」的役割を強調しておきたい。また、P1の1段目には中型の砥石S-4が置かれている。

(2)遺　物（第36～37図）

① 床面出土土器（1～4）

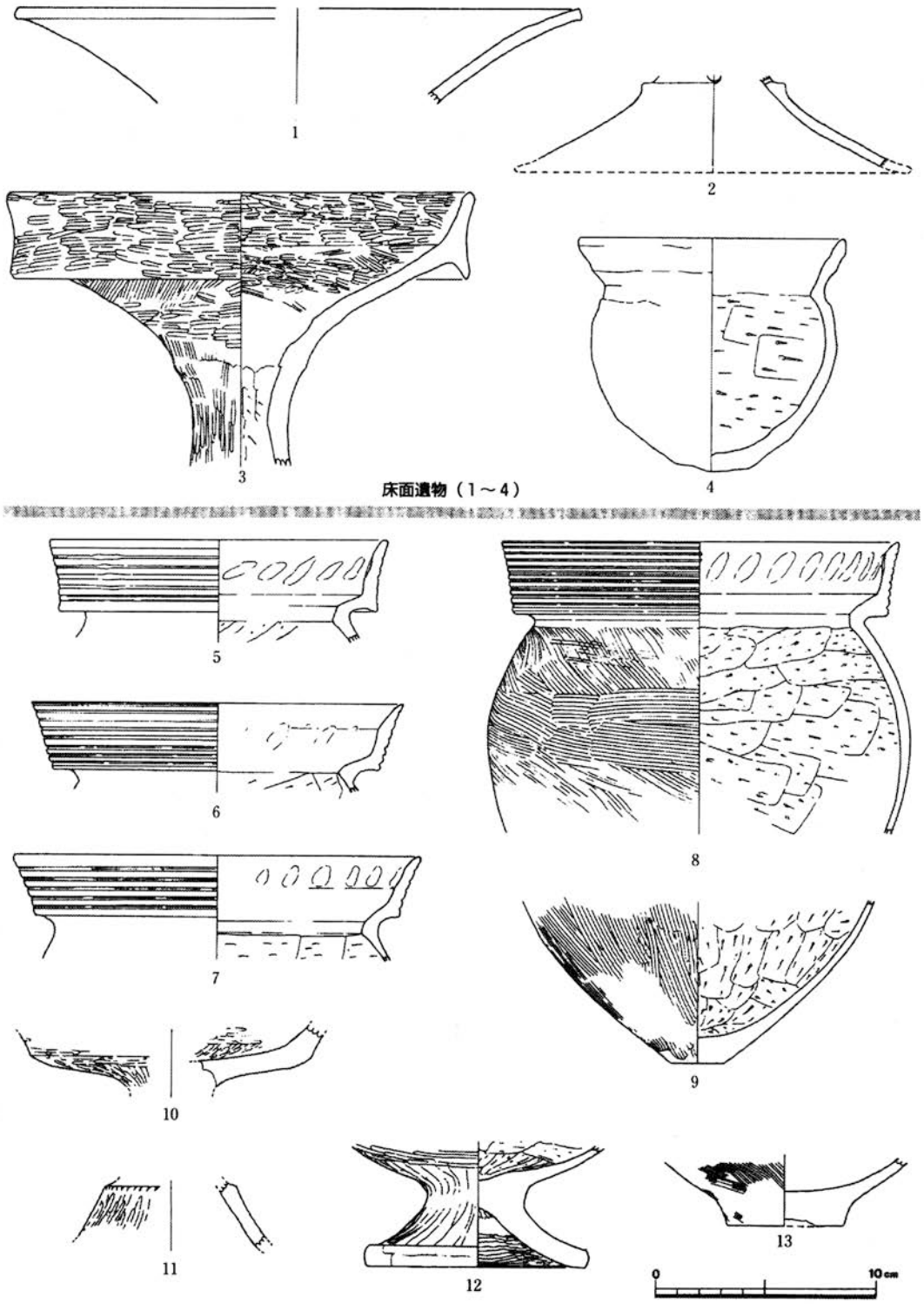
甕形土器(4)　小型甕形土器で、口径10.2cm、器高10.8cmを測るほぼ完形品。全体のつくりは非常にラフで、口縁・体部ともに凹凸が激しく、むしろ手捏ね土器といった感じである。口縁部は一応、外面に有段風の形跡を留めるが、極めて曖昧。内面は、段相当部で僅かな肥厚を認めるものの、ほぼ「く」の字である。但し頸部内面の屈曲は鋭く、体部内面ケズリとの明瞭な境界を成す。外面は、頸部がヨコナデ、それ以下は、ほぼタテナデであるが乱雑である。底部も、その範囲は直径3cm程を認めるものの、境界は不明瞭かつ無骨で、丸みをもち自立はできない。

高坏・器台形土器(1～3)　1・2は支柱部を欠く同一個体と考えられる。1の口縁部は口径約26cmとしたが、破片量に比し接合が乏しく数値や傾斜角度は不明確。薄手で、端部が四角く面を持ち、下端がごく僅かに突出する。2は有段脚で、段のくびれ部で四方に透かし孔を穿つ。脚端部を欠損するが、脚端とおもわれる小片をみると、丸く収めながらも、上方へ僅かに肥厚するようである。1と同じく薄手である。

3は、器台形土器の上半部である。外反して直立する幅広で無文の口縁帯を有する。口縁端部は、外縁を斜めに小さく面取りし、上方に尖った口唇としている。口縁帯下端は、やや長く垂下し、断面三角の下方に突き出た段部とする。この突出部に対応する内面の段は比較的明瞭に屈曲するが、その後支柱に向けて外面と同様、漏斗状に曲線を描いてすぼまる。調整は、口縁帯内外面は丁寧で細かいヘラミガキ、器受け部内外面は、ハケ調整後、その痕跡を処所残しつつナデ及びヘラミガキ、支柱部は、内面ヘラケズリで外面は縦のヘラミガキを施している。

② 覆土出土土器

甕形土器(5～9・14)　いずれも擬凹線をもつ有段口縁の甕形土器である。5は口径が15.4cmで、口縁帯は外傾・外反傾向、上端はやや丸みをもち、下端は下方へ僅かに拡張したあと強く屈曲し、くびれの深い頸部へつながる。口縁帯内面中央に斜位の指頭圧痕が連続する。頸部内面帯があり、下端は胴部ヘラケズリとの境界線で鋭く、上端は口縁基部から連続したナデ調整があって丸みをもつ。6は口径17cmで、口縁帯外面は直線的で外傾度が強い。内面は中央部で弱い稜を成したあと外傾度を増し、先細りで鋭い端部をつくる。浅い指頭圧痕が部分的に認められる。7は口径18.5cmで、外傾・外反度の強い口縁帯をもつ。口縁上端は先細りであるが、やや丸みをも



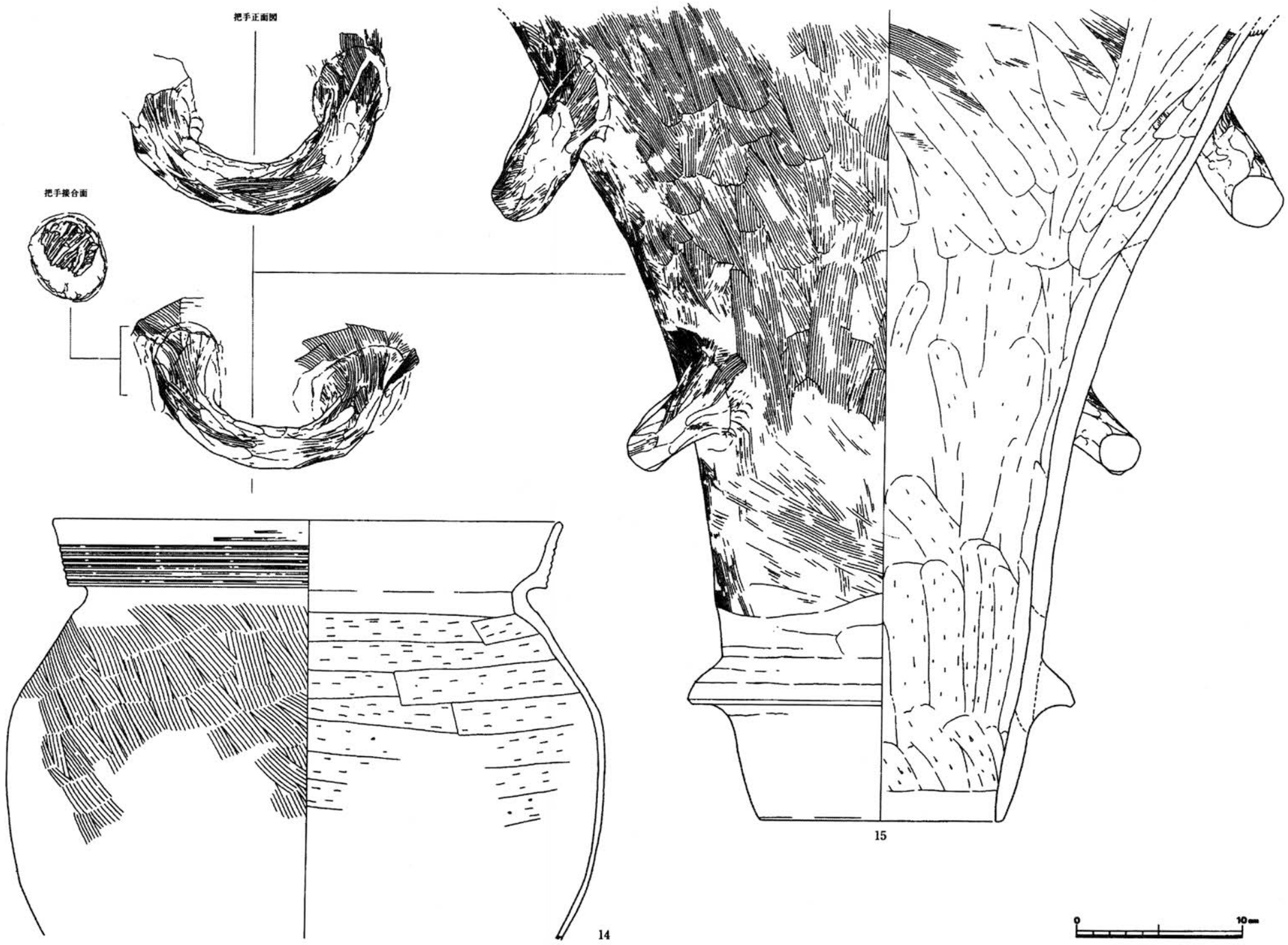
第36図　11号住居跡出土遺物実測図（S＝1/3）

つ。口縁帯内面には浅めの指頭圧痕、頸部内面帯は、やや幅狭だが5と同じく下端鋭いナデ調整である。8は口径18cmで、残存率は高く、9は復元の誤差からすぼまり方が強くなっているが、同一個体と考えられる。口縁帯は外傾・外反傾向、口縁帯内面上半部に弱い稜を成して外傾度を強め、先細りの鋭い上端をつくる。頸部内面帯は7と同様である。口縁帯下端から頸部まではほぼ水平な基部とする。胴部外面は斜めハケ調整を施した後、肩部から胴の張る部分にかけて横方向に近いハケ調整を重ねている。内面はヘラケズリである。底部は径2.5cm程で、荒いナデ調整がみられる。14は、口径30cmを測る特大の甕形土器である。口縁帯は厚さの変異が少なく上端は丸い。擬凹線は、上半部でナデ調整が重ねられてほとんど消えている。内面も、指頭圧痕があったであろう形跡を認めるが、丁寧なナデ調整によって消されたようである。頸部内面は、胴部ヘラケズリ部に重なるまでの範囲でナデ調整され、丸みをもって胴部にまわる。胴部外面はハケ調整で、内面は横方向のヘラケズリを主体とする。

高坏形土器(10・11)　色調や焼成具合から同一個体と考えられる。他に、長く伸びる口縁部小片が存在する。坏底部は小さく内湾ぎみで、段部外面は鋭い稜はつくらずそのまま屈曲して外反する口縁に至る。段部内面も境は不明瞭で丸みをもって口縁へ立ち上がる。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整である。脚は、段部の稜上に斜位の細かい刻みを巡らせる。外面はヘラミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。

台・底部片(12・13)　12は、台付装飾壺系統のものにつくものであろう。厚手でしっかりとした丁寧なつくりで、端部は垂直な面を持つが、複数単位のナデ調整が巡っていて弱い丸みをもって僅かに張り出す。外面はヘラミガキ、台部内面は円周に沿うハケ調整と弱いナデがみられる。体部内面はヘラケズリに部分的なナデが加えられる。

甑形土器(15)　いわゆる山陰型甑形土器である。口縁部を欠失するものの、80%近い復元ができた。底径14.7cm、凸帯下立ち上がり部径18.5cm、凸帯径23.4cm、口縁部側残存最大径約50cm、残存高約48cmを測る。上方へラッパ状に開く器形で、2個一対で対応する把手が2段、同方向で付されている。把手は、断面円形の重厚な円棒を半環状としたもので、これを横位に、そしてやや下向きに付す。接合部は、棒状具で何度も強く欠き取るようにして凹凸を付けて接着の準備としている。凸帯は、断面ほぼ三角であるが、上下面ともに下方へ湾曲して言わば嘴状断面を呈する。また、端部は狭く面取りされている。調整は、外面が凸帯周辺から底部までを丁寧で直線的な横ナデ調整、上部は把手を含めてハケ調整を主体として部分的にナデが加わる。内面は、底部付近のみヨコナデで、その他は縦方向のヘラケズリ、口縁部付近では、ヘラケズリに先行するハケ調整が多く残されている。尚、成形は倒立技法によっており、底部側半部を成形・調整し、乾燥段階を挟んでから倒立して口縁部側を積み上げている。従って、ケズリの方向も倒立位置を境に上下で逆転する。煤の付着等はみられず、用途を推測する手がかりはないが、内面の剥落はかなり激しい。ただし、剥落片の多くは、出土したところで生じており、これが、使用法の影響で剥落しやすくなったのか、土器本来がそうなりやすかったのかは判らない。



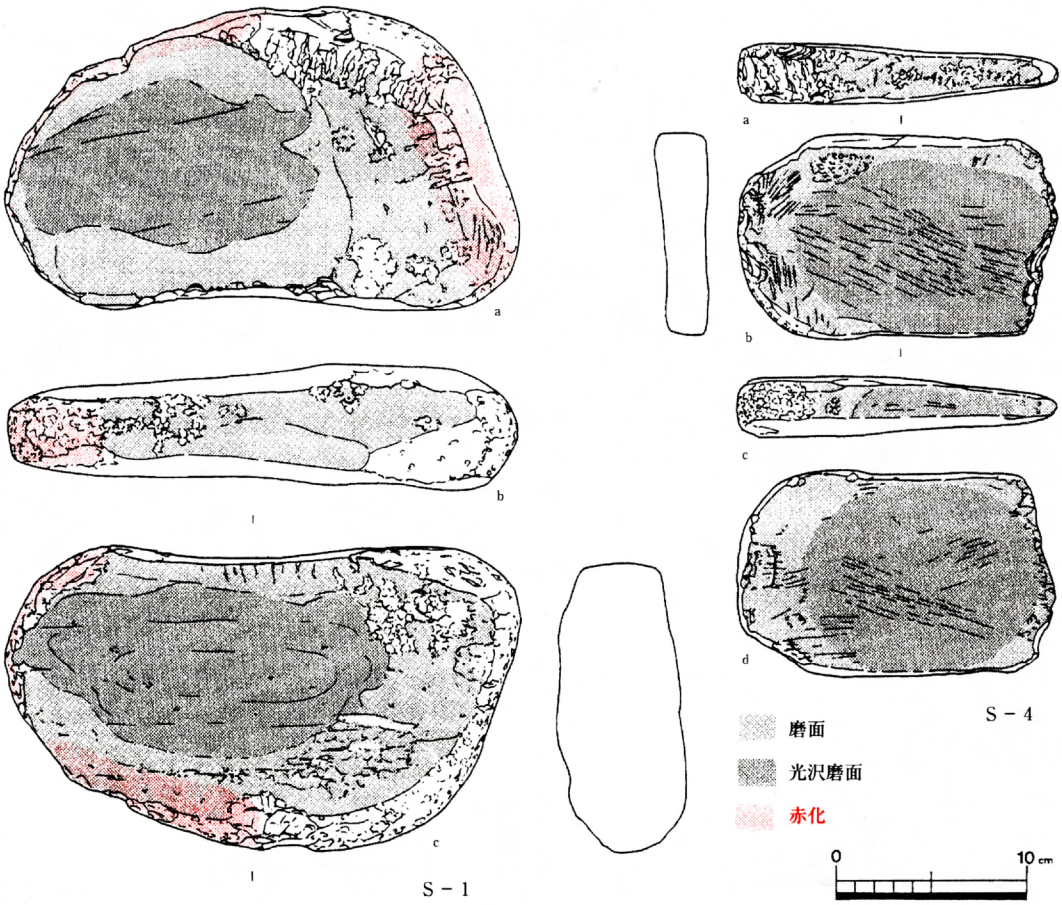
第37図　11号住居跡出土遺物実測図（S=1/3）

③ 床面出土石器・礫（第38・39図）

砥　石（S－1・S－4）

S－1は大型品で、長さ27cm、幅16cm、厚さ7cm、重さ4,090gを計る。石質は細粒砂岩と考えられる。両面が使用されており、両砥面はごく緩やかなカマボコ状の凸面を形成しているが、a面のみ長軸中央線に沿ってやや凹みを成している。濃い網点で示した範囲は、光沢を持つほどに磨かれている。凸面となる機能部を浮き出させる意図からか、砥面周囲には敲打整形痕がみられる。大型であることも含めて、床面設置タイプの砥石と言うことができる。内湾する側面bにも明瞭な砥面があり、それに相対する側縁部と、下縁部には、被熱による大きな斑状の赤化が認められる。火の近くで立ててこれを使うこともあったことを示している。

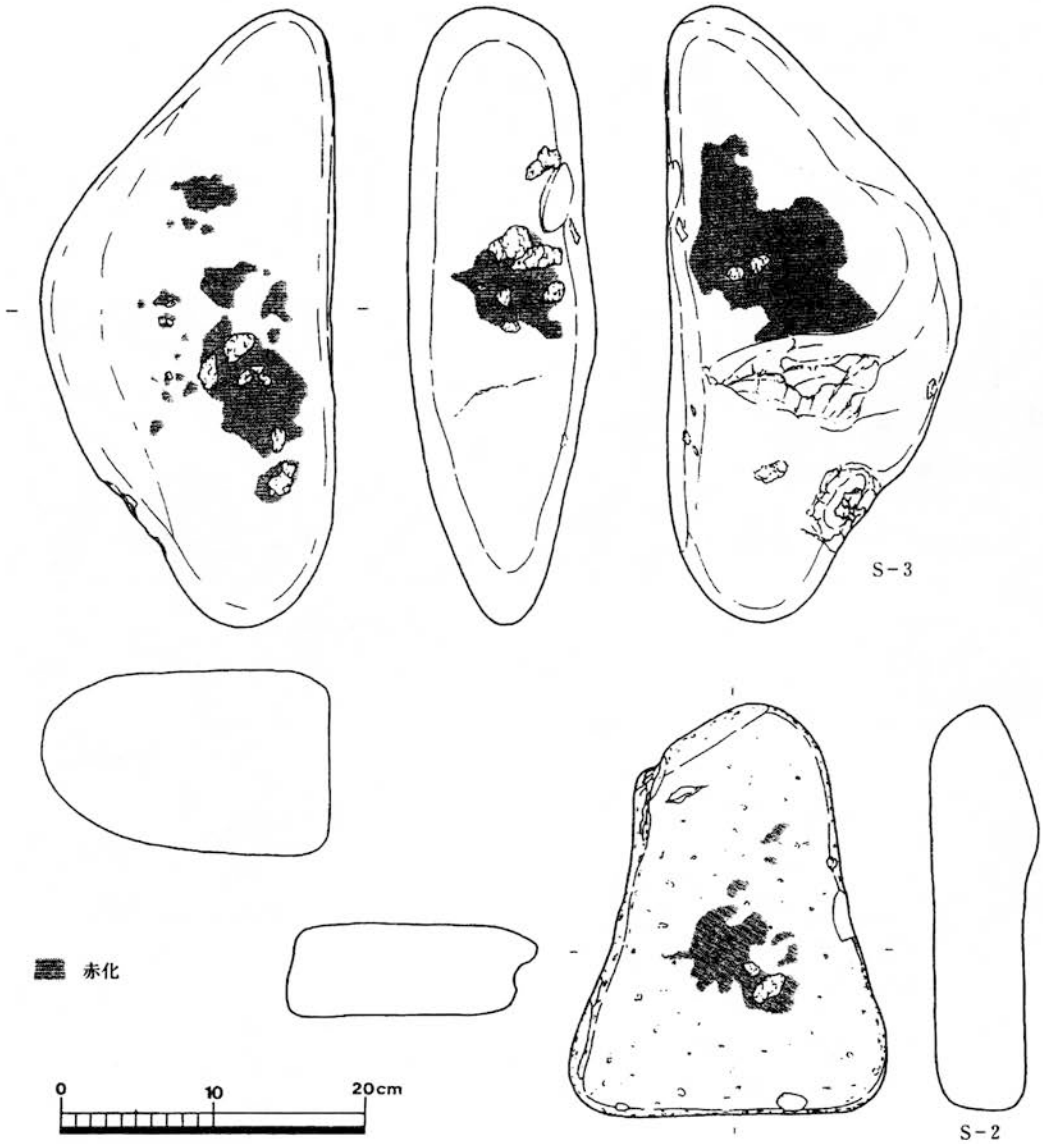
S－4は、扁平な中型品で、長さ17cm、幅11cm、厚さ3cm、重さ880gを計る。石質は細粒砂岩あるいは片麻岩類と考えられる。横断面は長方形、縦断面は片方へ薄くなる楔形を呈する。表裏ともに平滑で光沢を有し、また中央部にかけて微妙に凹んでいる。両側面も砥面を成すが、a面は敲打整形痕が多く残存する。厚い方の周縁は敲打痕で覆われ、平面円弧形に仕上げている。



第38図　11号住居跡床面出土砥石実測図（S=1/4）

床面設置礫（S－2・S－3）

S－2は、長さ27.5cm、幅21cm、厚さ7cm、重さ5.86kg、石質は安山岩であろう。「風」字形で、厚さの比較的均一な扁平礫であるが、目立った加工の痕跡はなく、片面中央部に小規模な被熱による赤化と剥落痕が認められる。S－3は、長さ41cm、幅19.3cm、厚さ12.5cm、重さ13.5kgを計る極めて大型の礫で、これも安山岩と思われる。表裏と平坦な側面部に被熱による部分的な赤化と剥落が認められる。各面には平滑な範囲があり、若干の摩滅を起こす使用があったのかもしれない。S－2・S－3の部分的被熱に想定される用法は不明である。



第39図　11号住居跡床面設置礫実測図（S＝1/5）

4．小　結

出土した土器の編年的位置付けについて若干触れて結びとしたい。まず、１号土坑であるが、土器片数が少ないため、個々の形態的特徴から推測するしかない。甕形土器では、指頭圧痕を有するものが確実に存在する一方、口縁帯の外反・伸長という点では、総じてさほど大きな発達はみられない。口縁帯無文の３では、口縁端部が若干肥厚して上端面をつくり、指頭圧痕を有する２でも、部分的に上端面をもつか、厚みを持って収めるようにしている。また、細く密な擬凹線を有し、内傾著しい１も特徴的な存在である。以上の諸点から考えて、月影Ⅰ式古相か、あるいは法仏式に近い可能性も指摘しておきたい。高坏の５は小さな口縁部片で、一応、塚崎遺跡第21号竪穴出土のものに対比したが、類例の乏しいものであるらしい。これが、塚崎遺跡第21号一括土器との対応関係を可能にする資料に成り得るかどうかはわからないが、そうとすれば、編年的位置付けの根拠に加えておきたい。

次に11号住居跡出土土器についてであるが、床面出土遺物は極めて乏しく、通有形態の甕形土器すら欠落している状態なので、まず、覆土一括土器について検討する。甕形土器は、口縁帯内面に指頭圧痕を有し、口縁帯は幅広でかつ外反・外傾の度合いが強い。また、口縁帯内面中央に弱い稜を持つ６を典型として、上端部に向けて先細りとなる傾向が看取される。これらは月影式期の成熟した段階における傾向に合致し、先の１号土坑出土土器との間に確実な差を認める。器面調整の点でも、８の甕胴部の張る部分に横方向のハケが加えられていること、14の大型甕の口縁帯上半部で、擬凹線がナデ消されていることなどが、新しい様相を示している。恐らく月影式の中でも新しい段階で、組成を示すための出土量的な不備を認めるものの、白江式段階にまで及ぶ可能性も考えられる。これらの覆土遺物の大半は、住居床面にごく近い第１次堆積土中で検出しており、従って、本住居跡床面遺物は、この編年的位置をさほど離れない直前の時期が想定される。月影Ⅱ式の範囲で考えておきたい。

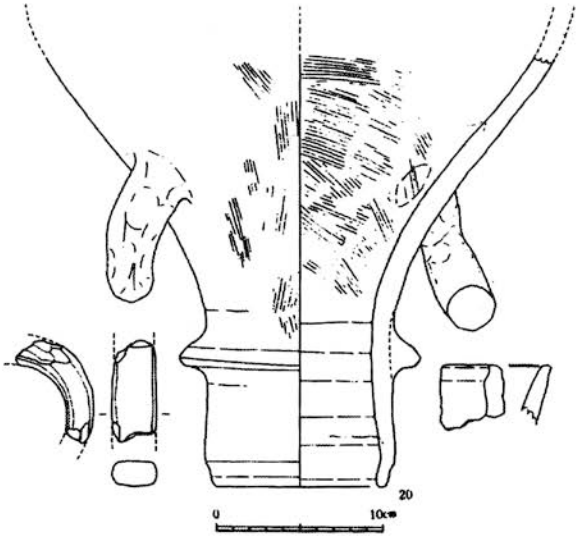
ところで、最も注目される遺物として、山陰型甑形土器があり、これの位置付けをからめて検討してみたい。山陰型甑形土器については、手元に米田氏（米田1984）と東森氏（東森1986）の検討論文があり、特に米田氏の論文では、資料の集成が成されている。掲載されている個々の資料の出典原本にあたることができなかったので、以下、米田氏の論攷と掲載図を参考とする。

この種の土器の出現は、青木編年（以下、同様）Ⅲ期古相（弥生時代後期中葉）といわれ、Ⅴ・Ⅵ期（庄内式新相期）からⅦ期（布留式期）にかけて盛行するようである。形態分類は、まず把手形態に着目し、上下二対装着するＡ型と、一対装着するＢ型に大別。さらに、Ａ型に関しては、上部把手が縦位置につくＡ１型と、横位置につくＡ２型に細分された。次いで、底部形態については突帯の有無を重視。突帯の付くａ型と、つかないｂ型に分け、さらに、ａ型は、突帯断面が台形のａ１型と、三角形のａ２型に細分、ｂ型は段の有無でｂ１型とｂ２型に分けられた。

これに本遺跡の資料を当てはめて考えると、時期に関しては、盛行期の前半であるⅤ・Ⅵ期に併行する点で大きな齟齬は生じない。ただし、形態を含めて考えると若干の問題が残る。まず、

本遺跡資料の形態は、先の分類に従えば、Ａ２ａ２型ということになる。実は、この形態は出土例が無く、氏の集成段階では、Ａ１ａ１・２、Ａ２ｂ１・２、Ｂａ１・２、Ｂｂ１・２の四種に限定されているのである。即ち、二対の把手が共に横向きであるもので突帯が付されるものは無い。集成一覧表をもとに形態と時期との関係を検討すると、島根・鳥取のいわば本拠地の例では突帯を持たないｂ型が古い傾向にあり、Ⅲ期の初源例を代表として、Ⅴ・Ⅵ期に多い。一方、他地域の出土例では、Ⅴ・Ⅵ期併行が多いが、ａ型が主体を占め、やや食い違いをみせる。ただ、全体をとおして個々の資料の編年的位置付けを見ていくと、突帯に関しては、変遷の傾向はあっても、確定的要素には成り得ていないようで、時間幅をもって両者は錯綜している。むしろ、実測図を見て感じることは、把手の断面形態が、円形の無骨なものから、長方形あるいは板状のものへと変化していることである。本遺跡資料も、こうした傾向では、やや古く位置付けられ、他地域での出土が増加するⅤ・Ⅵ期併行以前とみなすことができる。山陰地域での出土資料が圧倒的に多いとはいえ、その資料の大半は青木や長瀬高浜・福市遺跡などの大量出土遺跡の調査成果によるものであるから、時期毎の変遷を知る資料としてはまだ不足しているようである。石川県内出土の先例として、富来町鹿頭上の出遺跡（富来町教委1989）７号溝出土のもの（第40図）があり、特に後者の所属時期は法仏式後半期（青木ⅢまたはⅣ期併行？）に近い位置が妥当と思われる。とすれば、非常に古い段階のものであり、形態的には、把手の断面が円形を呈するものを古手とし、突帯はこの段階にも付されていることを示す好例となる。これの編年的位置付けを妥当と見るかぎり、山陰地域で、古墳時代前期に定型化し盛行するものと認識されている甑形土器は、予想よりやや古くに安定して成立している可能性がある。あるいは逆に、山陰地域における出土例の編年的位置付けを再考する必要が求められる可能性もあろう。これらのことより、本遺跡出土甑は、弥生時代末～古墳時代初頭という山陰型甑形土器の古相例として評価できるものと思われる。類例の増加を待って再検討したい。

尚、胎土については、流紋岩の円～亜角礫を多量に含むが、石英粒の混入が非常に乏しく、輝石が目立つこと、また、生地が緻密でチョーク質である点で、伴出土器とは差異が認められ、山陰であるかどうかは別として、搬入品と考えられる。



第40図　鹿頭上の出遺跡出土山陰型甑形土器

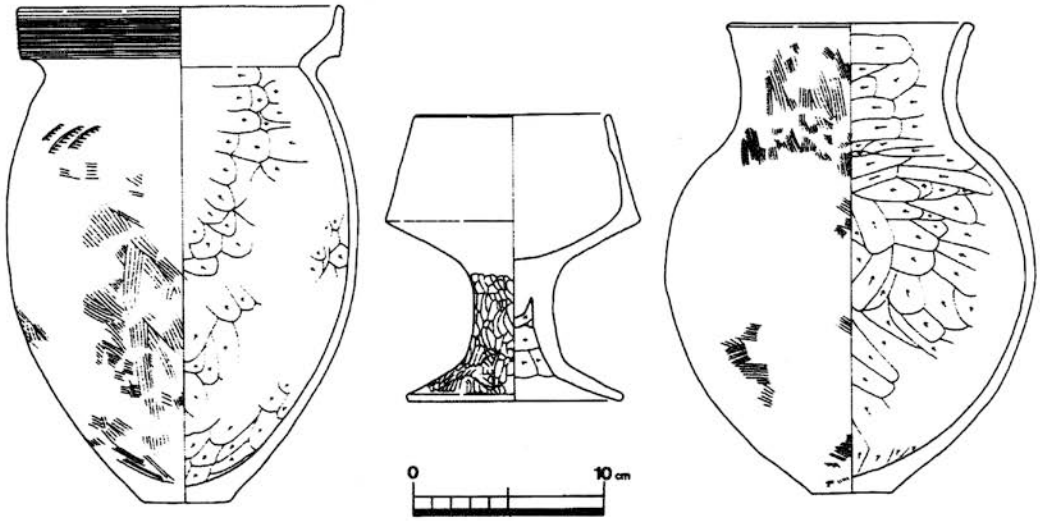
以上、検出された二つの遺構についての時間的位置付けを試みた。ところで、後に掲載する包含層遺物や古墳時代住居跡覆土遺物をみると、11号住居跡に対比可能な時期の遺物が概して乏しい傾向がある。単一時期一括の組成的把握は困難であるが、個々の器種の形態的特徴からみて、法仏式期の新しい段階が主体を成すものと考えている。市道調査区唯一の遺構である1号土坑と同じか、むしろやや先行するものが中心かもしれない。一方、対岸のA遺跡では、ほぼ単位台地を全掘したなかで、2軒の弥生時代住居跡が検出されている。その出土遺物は法仏式に対比可能と思われるが、本遺跡の覆土遺物の一群よりはやや先行する要素が多いように感じられる（第41図)。従って、A・B両遺跡の2つの台地を舞台として法仏式期後半～月影式期全期にわたる生活が営まれていた公算は大きく、さらに、単一集団あるいは極めて強い有機的関連性をもった集団が集落を営み続けていた可能性もある。本(B)遺跡の未掘部分の調査によっては、A遺跡台地を僅かに2軒の住居を営んで占有していた集団が、対岸のB遺跡台地で新たに集落を営むようになった過程にどのような変化があるのか。あるいは、両台地に同時期の集落が併存していたとしてどのような関係にあったのかなど、集落構造とその推移においても興味ある成果が得られるものと思われる。

参考・引用文献

東森市良　1986　「甑考 ---山陰における古墳時代大型甑形土器を中心として---」『山陰考古学の諸問題』　山本清先生喜寿記念論集刊行会

米田文孝　1984　「山陰型甑形土器の再検討」『関西大学考古学研究紀要4』　関西大学考古学研究室

富来町教育委員会　1986　『鹿頭上の出遺跡』　石川県富来町教育委員会



第41図　念仏林南A遺跡22号住居跡出土土器実測図（S＝1/4）

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１．全体の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡６軒（２，４～７，９号住居跡）である。市道調査区は、主軸をほぼ統一した竪穴住居跡５軒が、重複することなく配置されており、集落構造を端的に示している。昭和59年度調査区では、市道調査区に近い「あ－０」グリッドにおいて１軒（９号住居跡）のみ検出しており、谷側における集落の縁辺を示している。

遺構の時期は、古墳時代の中期に限られ、時間幅もさほど大きくなく、単一時期・集団の良好な集落跡と考えられる。包含層や遺構覆土の遺物では、前期そして後期の土器も少量ではあるが含まれており、前後の時期の遺構が調査区外に存在する可能性もある。

２．２号住居跡

（１）遺　構（第42・43図）

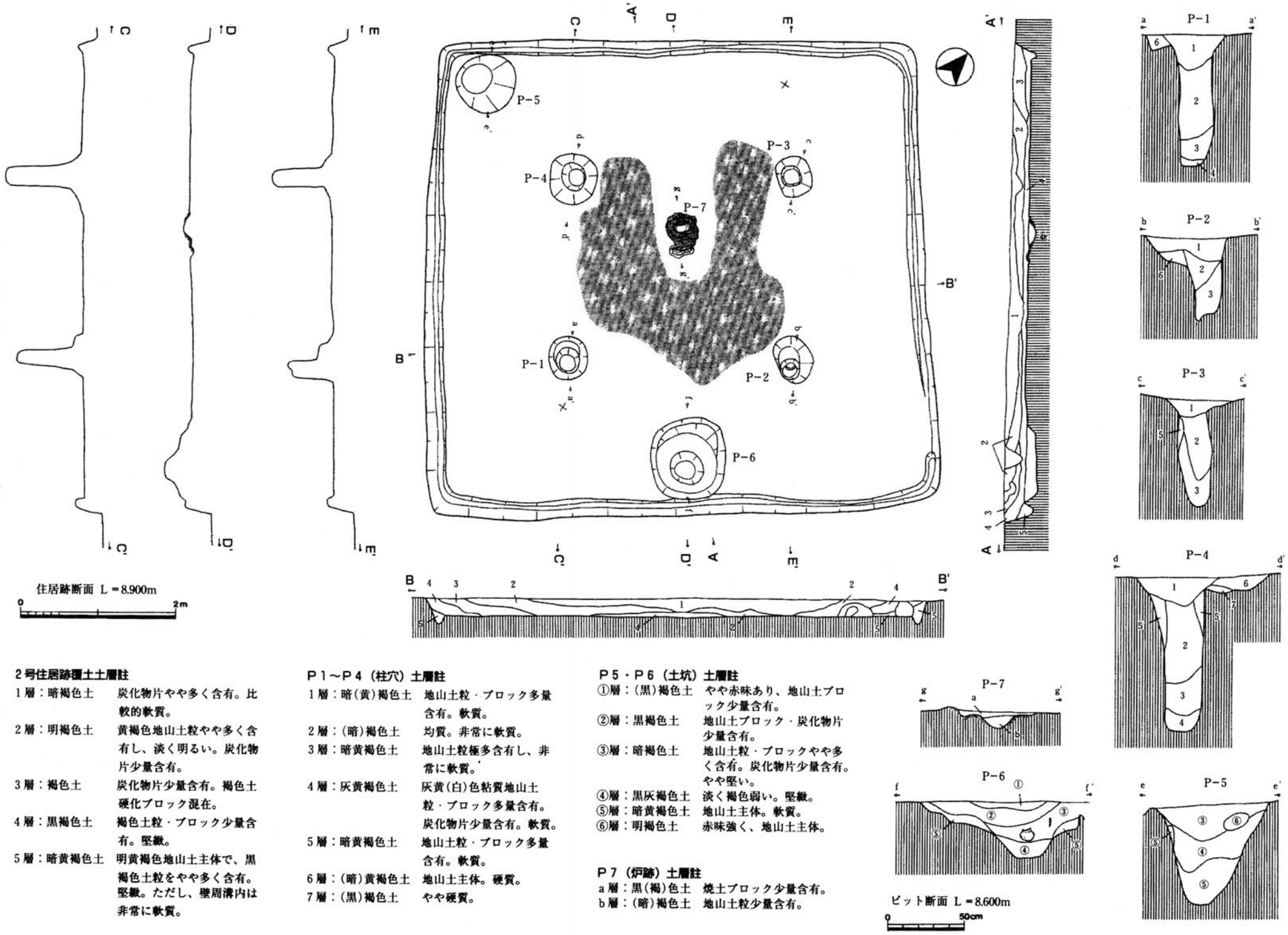
形　態　縄文時代の３号住居跡と北西部で重複していたが、プランは、３号住居跡の覆土を切るかたちで明瞭に把握できた。従って、この重複範囲では、３号住居跡覆土である黒褐色土を壁面としている。平面形は、一辺約６ｍのほぼ正方形を呈するが、南東辺のみが約６.５ｍとやや長い。プラン確認面からの床面の深さは、概ね25cm強である。壁周溝は、幅が約15cm、深さが約10cmで、北東辺の南東コーナー付近で途切れる他は全周する。壁周溝内側線で捉えた床面規模は、やや長い東南辺で約６ｍ、他は約５.６～５.７ｍを測り、床面積は約32㎡となる。

主柱は４本で、Ｐ－１～Ｐ－４が該当する。柱間距離は、Ｐ－１とＰ－２間、Ｐ－３とＰ－４間が約２.８ｍ、それに直行する柱間距離は約２.５ｍとやや狭まる。柱穴・壁間距離は、概ね１.６～１.８ｍである。柱穴の直径（二段目上端径）は25～30cm、深さは、Ｐ－２が最も浅く、約50cm、Ｐ－１が85cm、Ｐ－３が70cm、Ｐ－４が最も深く、約１ｍを測る。

施設等　床面は、黄褐色地山土硬質ブロック主体の貼床である。第42図の平面図中でＵ字形に網掛けしてある範囲が著しい硬化面で、周囲より一段（２～３cm）高い膨らみを成している。主柱に囲まれた空間に、炉跡をとり囲むかたちで、土間としての生活の場であったことがわかる。主柱と壁の間は、どちらかといえば軟弱であり、板敷きであった可能性がある。

炉跡（Ｐ－７）は、主軸上のやや北西寄りにある。約35×25cmの不整楕円形プランで、深さ約15cmの鉢形をしたピットがあり、それより約15cm離れたところに長さ約30cmにわたって低い土堤状の盛り上がりをみせる焼結硬化部が付随する。ピットとその周囲、そしてこの土堤までの間が赤化している。ただし、ピット下底の小範囲は軟弱で赤化はしていない。

炉跡を通る主軸上で、南東壁に接するところには貯蔵穴風の二段掘り土坑（Ｐ－６）がある。96×104cmの略方形を呈する。一段目の深さは約15cmで、二段目に向けての緩傾斜面を成し、中央部



2号住居跡覆土土層註

1層：暗褐色土	炭化物片やや多く含有。比較的軟質。
2層：明褐色土	黄褐色地山土粒やや多く含有し、淡く明るい。炭化物片少量含有。
3層：褐色土	炭化物片少量含有。褐色土硬化ブロック混在。
4層：黒褐色土	褐色土粒・ブロック少量含有。堅緻。
5層：暗黄褐色土	明黄褐色地山土主体で、黒褐色土粒をやや多く含有。堅緻。ただし、壁周溝内は非常に軟質。

P1～P4（柱穴）土層註

1層：暗(黄)褐色土	地山土粒・ブロック多量含有。軟質。
2層：(暗)褐色土	均質。非常に軟質。
3層：暗黄褐色土	地山土粒極多含有し、非常に軟質。
4層：灰黄褐色土	灰黄(白)色粘質地山土粒・ブロック多量含有。炭化物片少量含有。軟質。
5層：暗黄褐色土	地山土粒・ブロック多量含有。軟質。
6層：(暗)黄褐色土	地山土主体。硬質。
7層：(黒)褐色土	やや硬質。

P5・P6（土坑）土層註

①層：(黒)褐色土	やや赤味あり、地山土ブロック少量含有。
②層：黒褐色土	地山土ブロック・炭化物片少量含有。
③層：暗褐色土	地山土粒・ブロックやや多く含有。炭化物片少量含有。やや堅い。
④層：黒灰褐色土	淡く褐色弱い。堅緻。
⑤層：暗黄褐色土	地山土主体。軟質。
⑥層：明褐色土	赤味強く、地山土主体。

P7（炉跡）土層註

a層：黒(褐)色土	焼土ブロック少量含有。
b層：(暗)褐色土	地山土粒少量含有。

第42図　2号住居跡平面・断面図(S=1/60)、ピット断面図（S=1/30）

に穿たれた二段目の円形ピットは、直径約40cm、深さ約15cmを測る。この土坑から出土した坩形土器（第44図３）は、土層断面図では二段目ピットの覆土中に描かれているが、反対側はピット壁に接しており、一段目から転落したような出土状況であった。

西側コーナー部にも貯蔵穴風の土坑（P-5)がある。直径約40cmのほぼ円形のプランを呈し、底すぼまりの形態で深さが約65cmと深い。形態や深さから、P-6との用途の差が想定できる。

遺物出土状況　覆土遺物は、比較的散漫な出土状況を示しており、一括投棄遺物等は含まず、時期の異なる遺物が、覆土堆積過程で混在して流れ込んだあり方である。

第43図の黒で示した床面出土遺物は、断面投影で床面より浮いて見えても、現地所見を優先させた。床面遺物との接合が確かめられた覆土遺物については、小ドットで落としてある。遺棄されたことが明確なのは、１の甕形土器で、P-6に接して横倒しの状態で検出している。これとの接合関係を有する覆土中の数点の破片は、土圧による破損の過程で散らばったものであろう。ほぼ完形に復元された。北西壁近くの高坏坏部（５）も、脚部の欠失を除けば、その場で潰れたような状態での検出である。坩形土器の４は、ほぼ完形に近いかたちに復元されたが、破片の集中傾向がみられるものの、分布範囲は広い。接合する数片は、覆土遺物に含まれるが、破片集中部のものは確実に床面に貼りついており、住居廃絶直後に投棄されたものかもしれない。高坏の６や壷の２も、近い段階の廃棄遺物であろう。坩形土器の３は、P-6の説明で述べたとおり、掘り込み１段目からの転落と考えている。

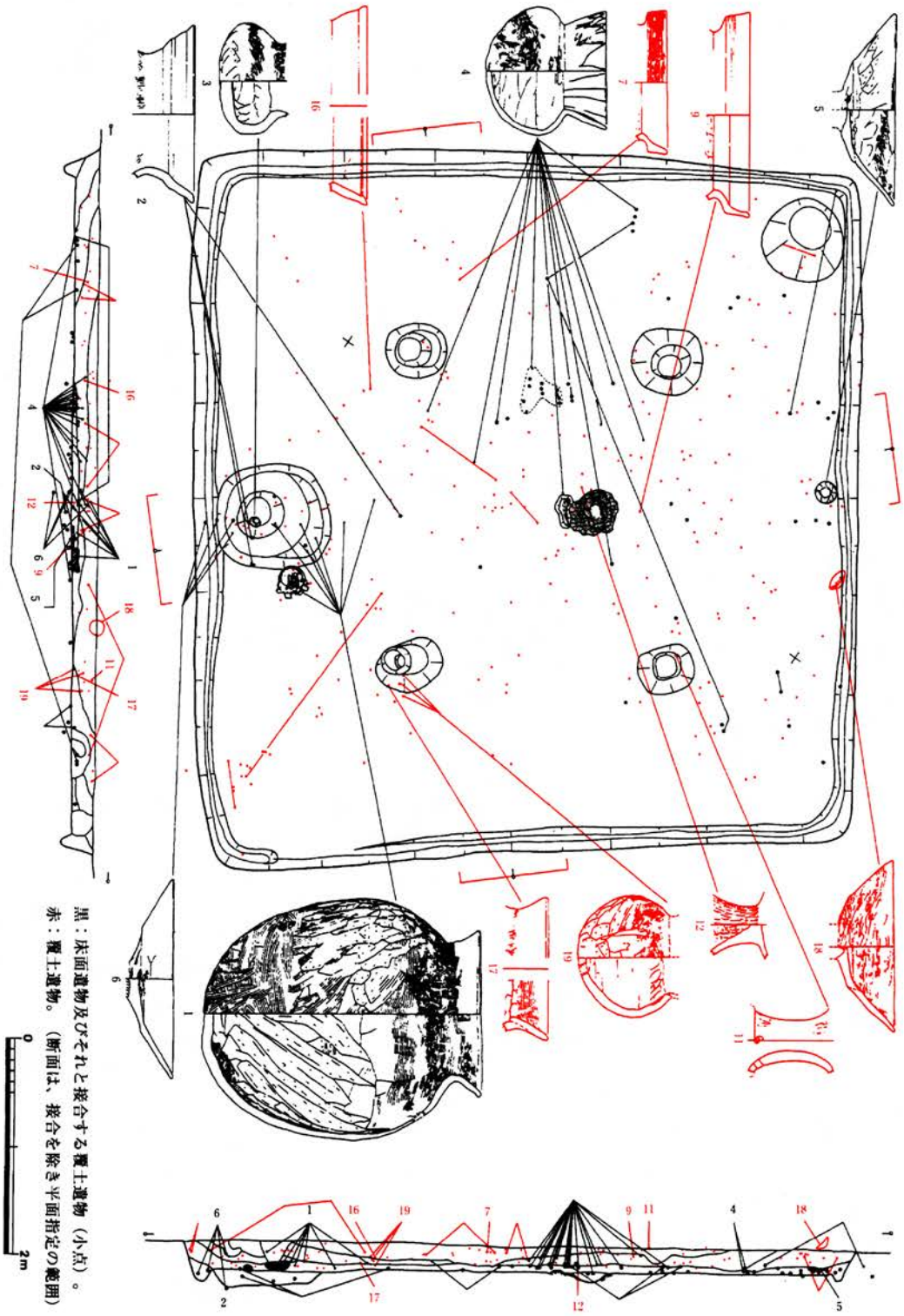
(２)遺　物（第44・45図）

①床面出土遺物（１～６）

甕形土器(１)　口径15.2cm、器高25.8cmを測るほぼ完形品で、体部形態は、最大径を上半部にもつ長胴タイプ。外面の調整は、タテないし斜め方向のハケ調整を施し、肩部および相対する下半の底部にかかる部分では斜行を強めて、間隔が短く荒いヨコ方向のハケ調整が加わる。また、胴中位には、一部にハケ調整後のヘラケズリ調整がみられるが、一貫性はなく、部分補正に用いられたのであろう。頚部には、最終的に屈曲を補正する強いタテハケ調整が施されている。体部内面の調整はヘラケズリが主体で、底部付近で部分的なハケ調整が加えられ、また上半部では、ナデ調整と、それに次いで横方向のハケ調整が加えられる。このハケ調整は、頚部から口縁部にかけての内面ハケ調整と連続するものである。口縁部は、頚部で比較的強く屈曲して開くが、内外面ともに鋭さはない。調整は、外面と口唇部をナデ調整とするが、やや丁寧さに欠け、口唇部の形態も、外方に狭い面をもつ部分や、やや細めに丸く収まる部分などがあり、一様ではない。

壷形土器(２)　口径16.2cmを測る。山陰系壷形土器の流れを汲むものと考えられるが、口縁下端の稜はルーズで、頸部との間にゆるやかな段を成す。口唇部端面は水平で、板状工具によるナデ調整がみられる。調整は、外面頸部下半にタテハケが、内面にも部分的なハケ調整痕がみえるが、ともにヨコナデ調整が被覆している。

坩形土器(３・４)　３は、口縁部を欠失するが、体部は完存している。上から押し潰したよう



第43図　2号住居跡遺物出土状況図（S＝1/60）

第43図　2号住居跡遺物出土状況図（S=1/60）

な万頭形の体部で、非常に厚手なうえに、やや歪みもあり、粗雑なつくりの印象を受ける。底部は、内面に絞り込み閉塞を思わせる放射渦状の稜線をもち、外面もそのせいか細かいあばたがみられて粗野である。胴部の所々に粘土紐接合の痕跡がみえ、最も張る部位に短い単位で斜めのハケ調整が連続して施される。また、頸部への屈曲部には、タテハケ調整を施す。

4は、口径10.8cm、器高11.0cmを測り、体部の一部を欠失するが、ほぼ完形に復元された。3とは大きく異なり、薄手で整美なつくりである。胴部上半部に最大径をおいてやや張る感じの肩部をつくり、それ以下は比較的整った半球形で丸底を成す。調整は、外面肩部周辺がヨコハケ主体、下部は多方向のハケ調整で、いずれも単位は狭く短い。外面肩部より上と口縁部内外面はナデ調整で、体部内面は強いナデ調整が施される。口縁部内外面にヘラ描きの装飾をもつ。外面のヘラ描きは、下向きの鋸歯文を乱雑に巡らせ、内面のものは、頸部から口唇部に向けて縦方向やや斜めに一本づつ乱雑に描き並べるものである。

高坏形土器(5・6)　いずれも坏部のみである。5は、口径17.6cmで、坏底部から屈曲し、境にごく浅い凹みを成した後、口縁部はやや外反ぎみに大きく広がる。外面の調整は、坏底部が、ハケ調整を脚接合部から斜め放射状に施した後にナデ調整、坏部は、同じく斜め放射状のハケ調整に加えて、同様のヘラケズリを交え、その後、上方へ向かうほど丁寧となるヨコナデを施す。内面はヨコナデ調整であるが、底部に斜め放射状のハケ調整痕を弱く留める。

6は、口径約18cmとするが、残存率が低く、口縁部の遺存はごく僅かである。5と同じく途中で屈曲して広がる坏部であるが、屈曲はややあまく、境を成す凹みもみられない。内外面の調整は5とほぼ同じであるが、口縁部外面下端の屈曲部付近の一部で横方向のヘラケズリがみえる。

②覆土出土遺物（7～19)

弥生時代及び古墳時代前期の遺物が混在し、包含層からの流れ込みを示す。

甕形土器(7～9、15～17)　7～9は有段口縁の甕形土器で、いずれも小片である。7は、口径が約13cmの小型品で、短く直立に近い口縁帯に細く密な擬凹線を施す。断面は三角形に近い。8は、口径が約16cm、幅広で外反ぎみの口縁帯に擬凹線を施す。口縁帯内面中央に弱い稜を成したあと外傾を強め、先細りの断面形を成す。9は、口径が約19cmで、口縁帯外面下半部の筋目は擬凹線ではなく、ごく浅い木目状のナデ工具痕である。口縁帯上端は微妙に肥厚して丸く、下端も丸みをもって頸部へ屈曲する。

15と16は、口唇部を肥厚させたいわゆる「布留系」甕形土器で、どちらも小片である。15は、口径が約13.6cmの小型品で、器肉は薄めで、口唇部端面は内傾する。内面にはヨコハケ調整が施される。16は口径が約18cm前後と推定される。器肉が厚く、肥厚度は小さいが、口唇部端面は比較的強く内傾する。外面はナデ調整で、口唇部直下に浅いナデ凹みがある。内面もナデ調整であるが、先行する斜めのハケ目の痕跡をわずかに留める。

17は、口径約13cm前後と推定されるが、小片で、やや雑なつくりであるため、誤差は大きい。頸部までの成形後、その端部内側に幅広の粘土帯を貼り付けて口縁部としたかたちの接合痕を明

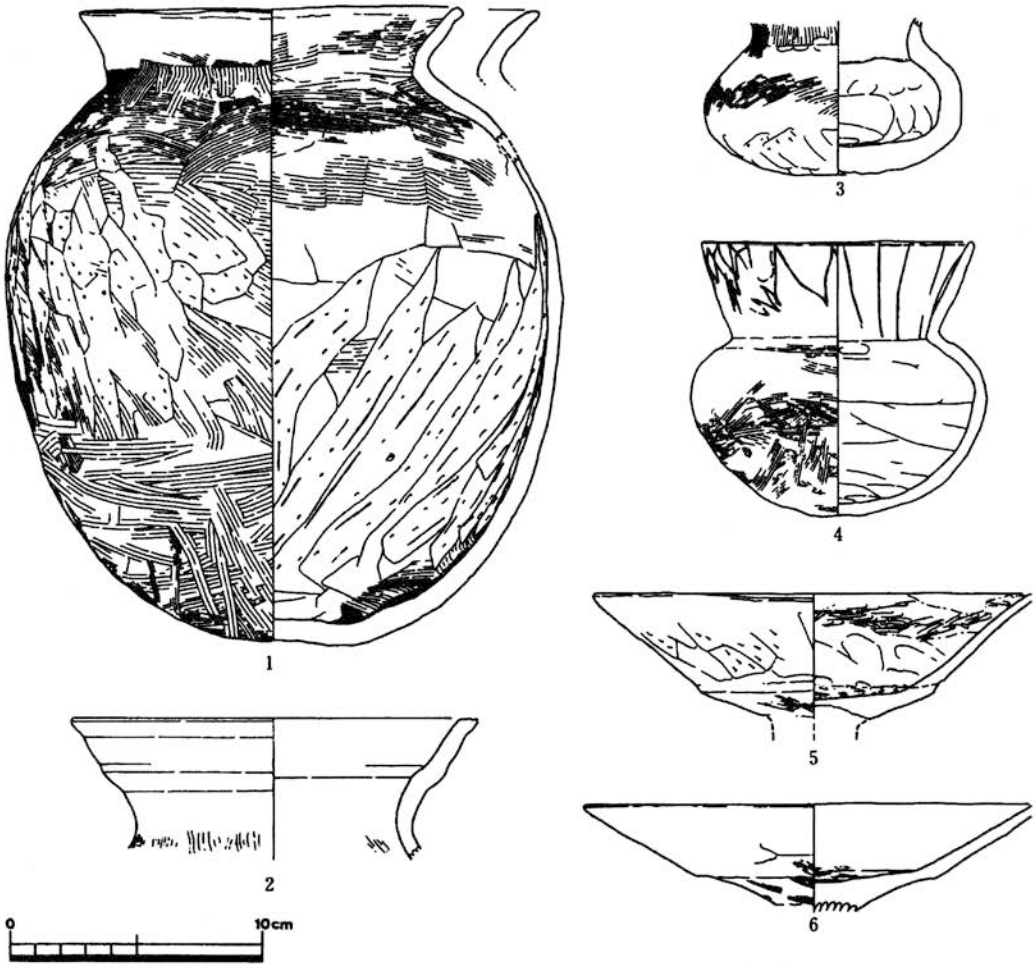
瞭に残す。外面頸部の屈曲はなだらかな弧状を成し、そこに縦方向のハケが強めに施される。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は、ヨコハケ後に上半部をヨコナデ調整している。

壷形土器(13)　有段口縁に擬凹線をもつもので、やや外反ぎみの短い口縁帯に、うねりのある斜傾した擬凹線が施される。口径は小さく、頸部はさほど長くない。

器台形土器(10、11)　10は、一応、器台形土器の口縁帯と考えたが、甕形土器や鉢形土器などの可能性もあり、確定は保留する。外傾する直線的な口縁帯に擬凹線をもち、端部はほぼ水平な面をもつ。厚さの変異が乏しく、大型である。11は支柱で、有段脚となる。支柱部は上下対称に開きをもつ形態で、有段脚部となる段のくびれ部に四方に円形透かし孔が穿たれている。

坩形土器(19)　上半部に最大径をもつが、ほぼ球形に近い体部で、厚手なつくりでぼってりしている。外面の調整は、下半部がヘラケズリ、上半部はハケ調整に部分的なナデが加えられる。内面はナデで、粘土紐接合痕が部分的に残される。

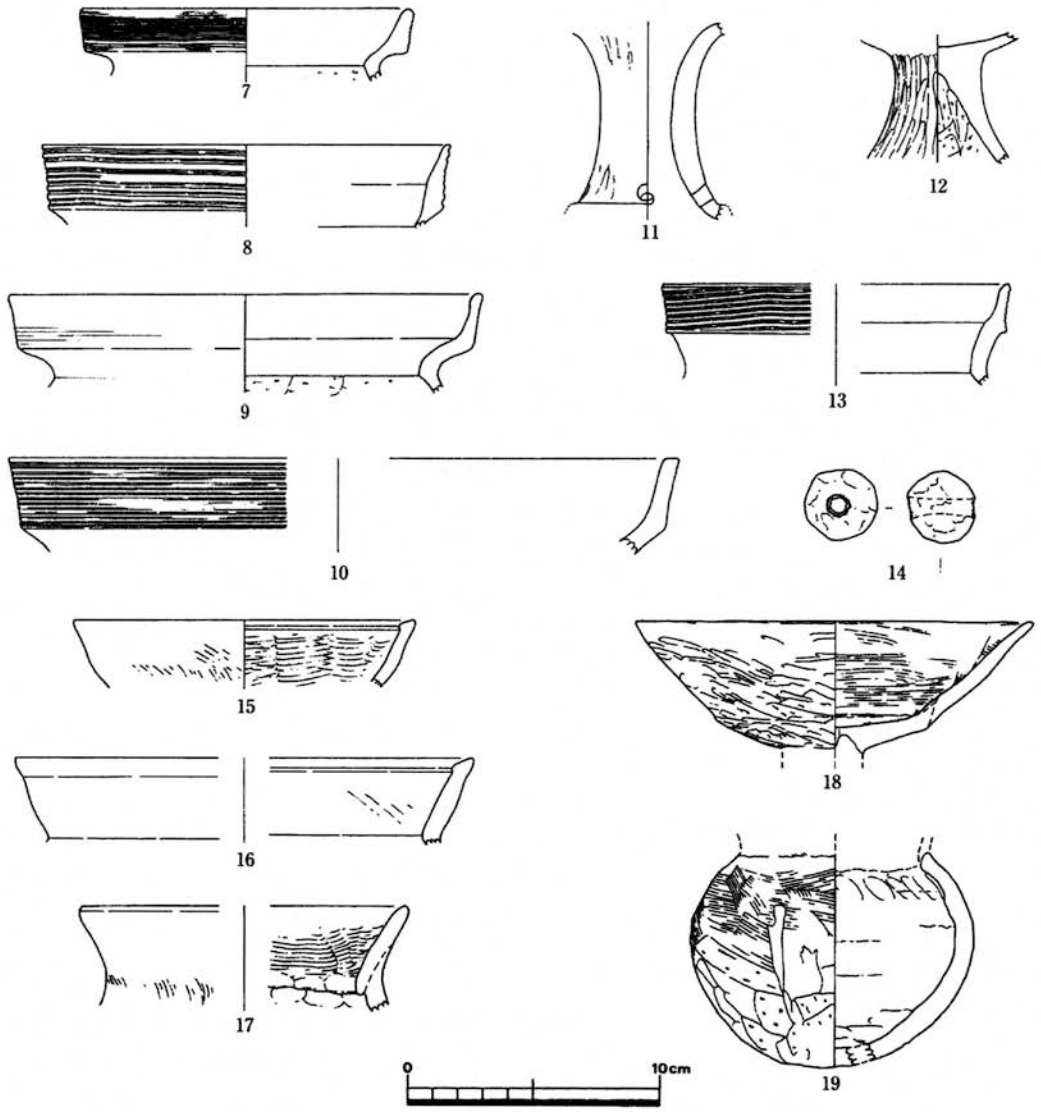
高坏形土器(12、18)　12は、脚が外反して大きく開いてゆく小型品と考えられる。外面は丁寧



第44図　2号住居跡床面出土遺物実測図（S＝1/3）

なミガキ、内面はヘラケズリ調整である。18は、口径15.8cmの坏部完形品である。床面検出の2点とは形態的にやや異なる。坏底部からの屈曲後、浅い凹みを成す点は5と同じであるが、その成形は粗雑で、幅広ぎみの凹みが明瞭に入る範囲と、消失してルーズな屈曲を成す範囲がある。また、口縁部も微妙な内湾傾向をもって深型となり、厚手で比較的重量感がある。調整は、外面が、放射状のヘラケズリ後にやや入念さを欠くヘラミガキ調整が加えられ、口縁部上半部はヨコナデが主体である。内面は、口縁部まで全体をヨコハケ調整後、ハケ調整の痕跡が全体に認められる程度にヨコナデ及び荒いヘラミガキが施される。

その他の遺物(14)　14は球形の土玉である。直径は約3cm、重量は18.6gを計る。



第45図　2号住居跡覆土出土遺物実測図（S＝1/3）

3．4号住居跡

(1)遺　構（第46～47図）

形　態　縄文時代の8号住居跡と東側で重複しているが、8号住居跡は竪穴を伴わないので、柱穴1本が床面に遺存していた以外、プラン確認上の影響は受けていない。

平面形は、4.9×4.2mの長方形であるが、若干平行四辺形に歪んでいる。プラン確認面からの床面の深さは、概ね30cm強で、垂直に近い整美な壁立ち上がりを示す。壁周溝は、幅が約15cm、深さが約5cmで、全周する。壁周溝内側線で捉えた床面規模は、長軸で約4.4m、端軸で約3.9mを測り、床面積は約17m²と小型となる。

主柱は2本で、長軸上に並ぶP1・P2が該当する。柱間距離は約2m、柱穴・壁間距離は、短辺とは約1.2m、長辺とは、ちょうど中心の2.2mを測る。柱穴の直径は約30cm、深さは約45～50cmと比較的浅い。P5はごく浅いピットで、柱穴とは考えがたい。

施設等　床面は、黄褐色地山土硬質ブロック主体の貼床であるが、硬化度は比較的弱い。

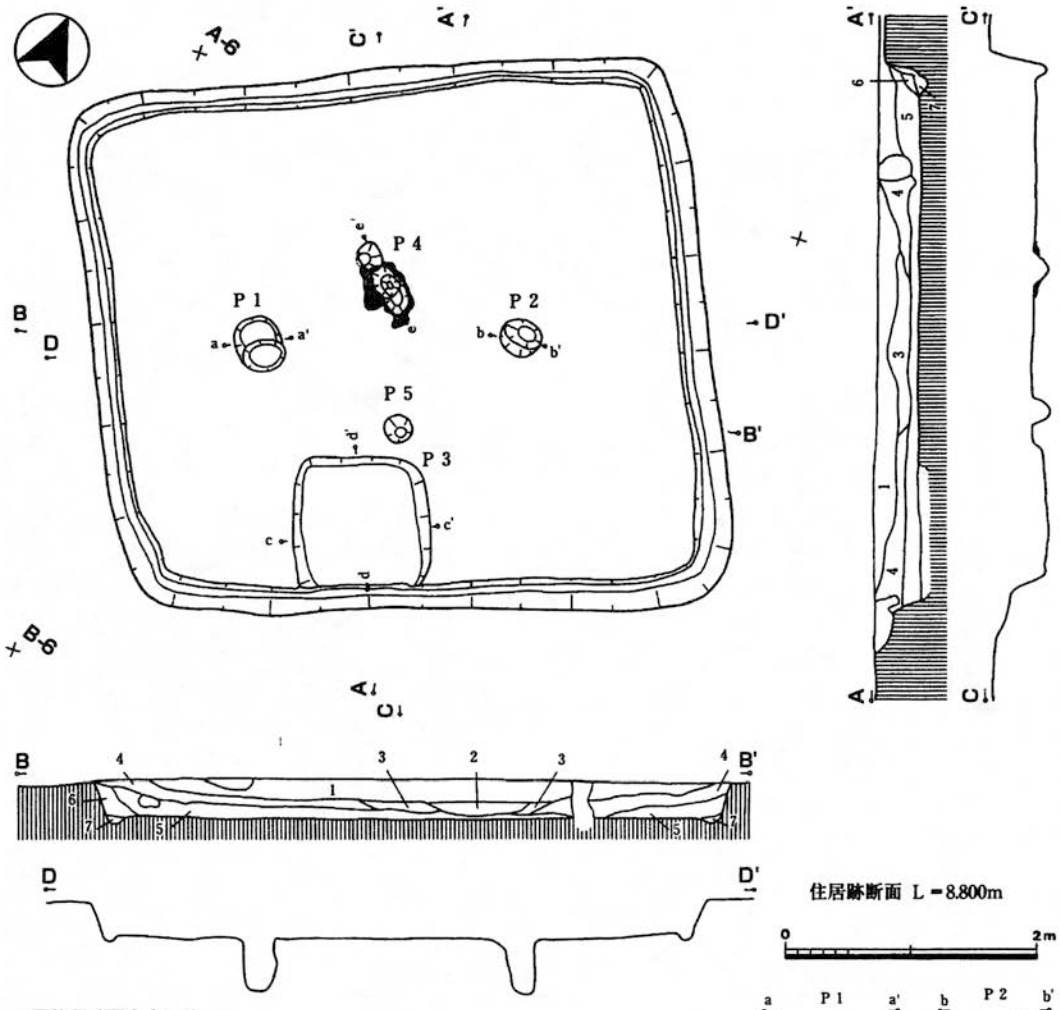
炉跡（P4）は、柱間中央のやや北西寄りにある。小ピット3つが、約30×60cmの規模で一列に連結したかたちである。各ピットの深さは北西にむかって増してゆく。ピット連結部が特に焼結硬化しており、周囲床面も不整形に赤化しているが、ピット内部は軟弱で赤化はしていない。

南東壁中央に接するところには、一辺約1mの方形土坑（P3）がある。深さは約10～15cmと浅く、中心部にむかってやや深まるが、概ねフラットな底面を成す。

以上の施設配置は、基本的には2号住居跡のあり方を踏襲している。

遺物出土状況　床面出土遺物は非常に乏しい。壁周溝にかかる位置での検出が多く、また、いずれも破損品である。北西壁中央の1はほぼ半欠品で、その周囲のものは図化不能な別個体の甕胴部片、南東壁際には、口縁部を欠いた坩形土器の2と、甕の胴部片がある。調査段階では床面直上層遺物として把握した一群の土器があり、床面遺物との区別は微妙である。これらは整理時の断面投影でもほぼ床面に近いレベルに置かれた。ただ、この中には弥生・縄文遺物が混在し、調査時にも床面遺物とは区別しているため、それに従って分離し、覆土遺物の扱いとした。このため、現実には床面遺物が混在する可能性もあるが、すべては小破片であるので、一括性に異同を及ぼすものではないと判断している。

覆土遺物は、2号住居跡に比べれば濃密な出土状況を示しているが、同様に、一括投棄遺物等は含まず、時期の異なる遺物が、覆土堆積過程で混在して流れ込んだようなあり方である。ただし、微視的には、1～4層とそれ以下という2段階の集中傾向が看取される。弥生と縄文時代遺物（縄文時代遺物は出土状況図から削除してある）は、上下層にわたって分布しており、それは床面直上層にまで認めることができる。これらの遺物は、先行する包含層遺物の混在としてよいが、注意したいのは、焼土塊を多量に含んだ2層が覆土中央で検出されていることである。これは、この場で火の使用が為された結果として捉えられる層で、本住居に後続する活動段階が設定できることを暗示している。この2層に連続する層の出土遺物としては、坩形土器の14と、高坏



4号住居跡覆土土層註

1層：褐色土　炭化物片少量含有。
2層：灰褐～明赤褐色土　焼土粒・焼灰を主体とする。中央部に焼土粒濃密で色調が明赤色化。軟質。
3層：暗褐色土　やや赤味を帯び、焼土粒時折含む。やや軟質。
4層：(明)褐色土　灰黄褐色細粒を多く含み、淡く明るい。堅緻。
5層：黒(灰)褐色土　ややくすむが、黒色最も強い。非常に堅緻。
6層：にぶい褐色土　黄褐色地山土粒やや多く含有して明るい。軟質。
7層：灰(黄)褐色土　地山土粒・ブロックやや多く含有。軟弱。

P1・P2（柱穴）、P3（土坑）土層註

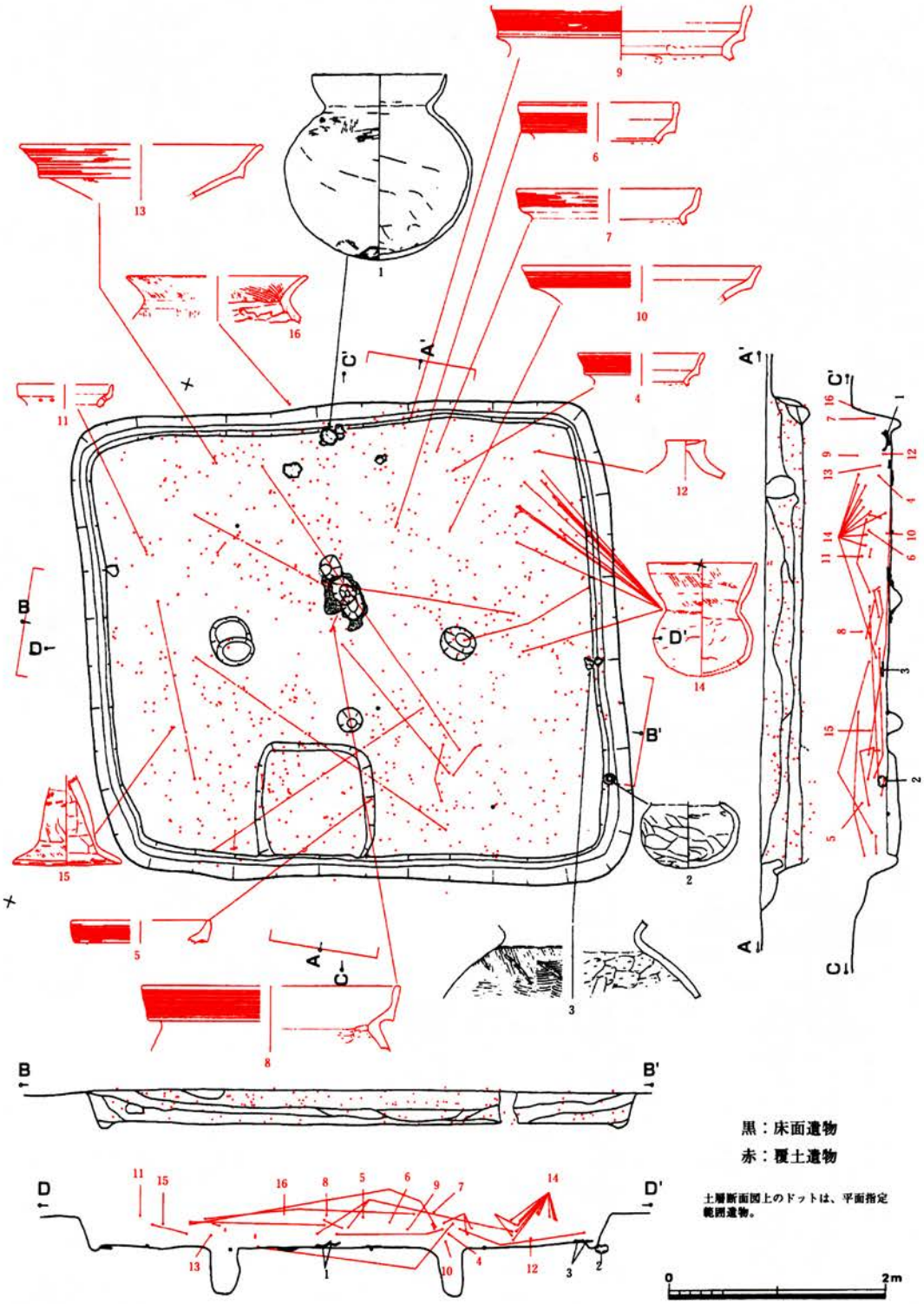
1層：にぶい褐色土　弱く赤みを帯びる。軟質。
2層：黒褐色土　黄褐色土ブロック・炭化物片少量含有。堅緻。
3層：灰褐色土　黄褐色土粒全体に中量含有。堅緻。
4層：(暗)黄褐色土　黄褐色土主体に、褐色土混在。やや軟弱。
5層：暗(黄)褐色土　黄褐色土粒・ブロック中量含有。やや軟質。
6層：(暗)黄褐色土　黄褐色硬質ブロックやや多く含有。堅緻。

P4（炉跡）土層註

①層：暗褐色土　焼土ブロック多量、炭化物片少量含有。軟質。
②層：にぶい褐色土　やや赤み帯びる。堅緻。
③層：暗褐色土　淡くくすみ、比較的均質。堅緻。

ピット断面
L＝8.500m
0　50cm

第46図　4号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）



第47図　4号住居跡遺物出土状況図（S=1/3）

脚の15があり、両者ともに上層遺物としては良好な残存率を示している。そして床面遺物との大きな時期差は存在しないようであり、覆土の焼土層は、本住居と有機的に関連したものかもしれない。この活動段階は、住居廃絶直後であっても良いわけで、先述した、覆土遺物が堆積過程での流れ込み分布を示すという判断は、分布のあり方がそうであっても、その原因を規定するものではないことになる。覆土形成の検討が必要であり、今後注目してゆきたい事例である。

(2)遺　物（第48図）

①床面出土遺物（1～3）

甕形土器(1)　やや小振りで、口径約12.5cm、器高は17.0cmとする。体部は、最大径を上半部にもつものの球胴タイプ。全体に摩耗が激しく、調整は不明瞭であるが、外面調整は、肩部付近で、やや粗いヨコ方向のハケ調整が見え、頸部近くでヨコナデとなる。内面はケズリとナデがみられる。口縁部は、頸部で強く屈曲して開いた後、内湾気味に上方へ向かう特徴的な形態で、口唇部にかけて薄くなって鋭くおさめる。頸部から肩部にかけてタール状煤の付着が顕著である。

壷形土器(3)　肩部から頸部にかけての破片。口縁部側欠損部端に、上方に屈曲するような兆候が僅かに伺え、頸部のすぼまりも考慮して、一応壷形土器とした。外面調整は、頸部がヨコナデ、直下の継ぎ目状の明瞭なラインを境としてナナメハケ調整を下ろし、肩部近くに至ってヨコハケ調整を重ねる。肩部には斜めの太い沈線文が間隔を置いて巡る。内面調整は、頸部が丁寧なナデ、胴部はケズリ調整後に部分的な指ナデがみられる。

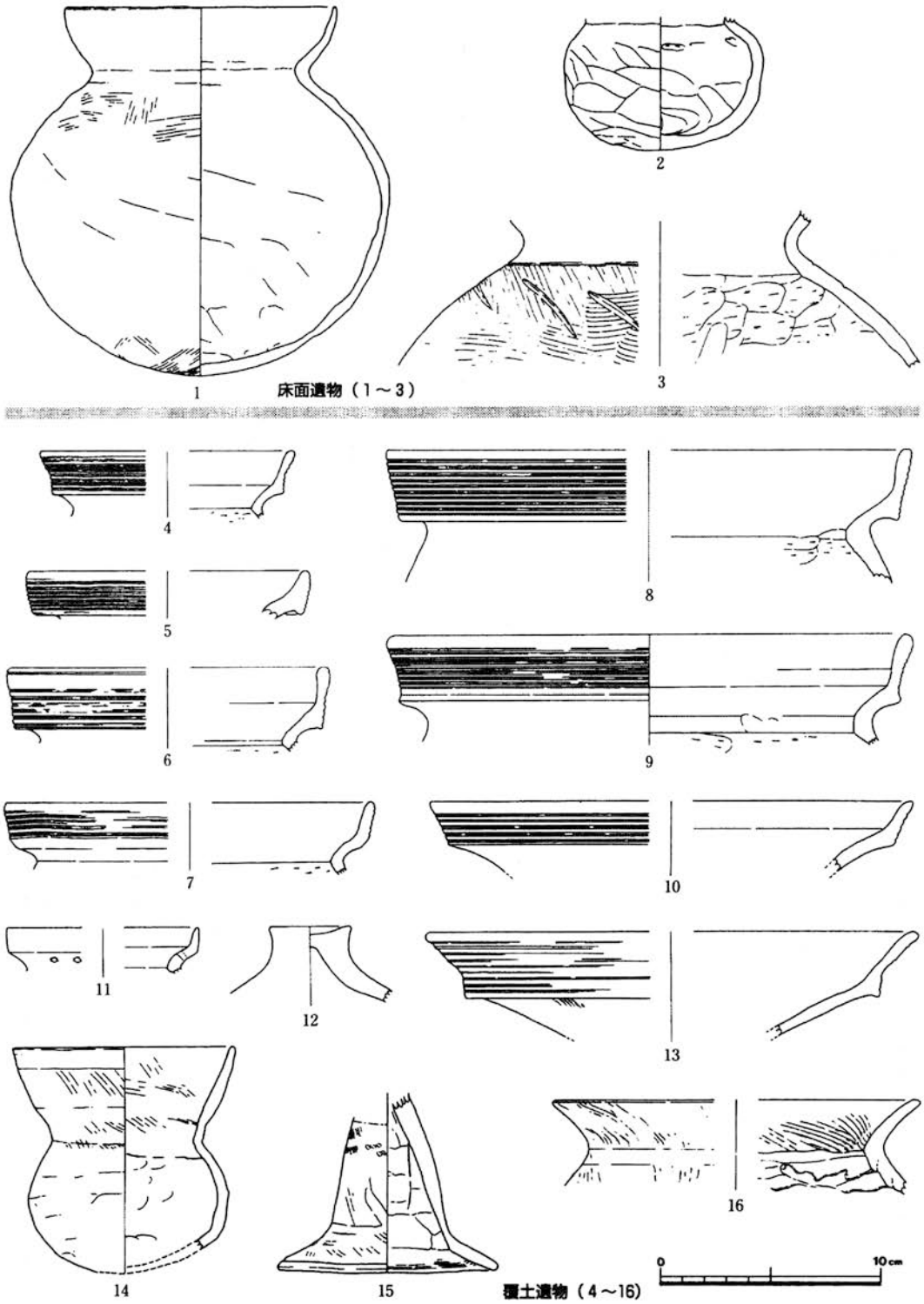
坩形土器(2)　口縁部を欠失するが、体部は完存し、頸径7cm、体部高6cmを測る。潰れた球形の体部で、厚手なつくりである。調整は内外面ともにナデ調整である。頸部近くを除いて全面が煤で被われ、外面の約3分の1は2次被熱によって深く剥落、ヒビ割れもみられる。

②覆土出土遺物（4～20）

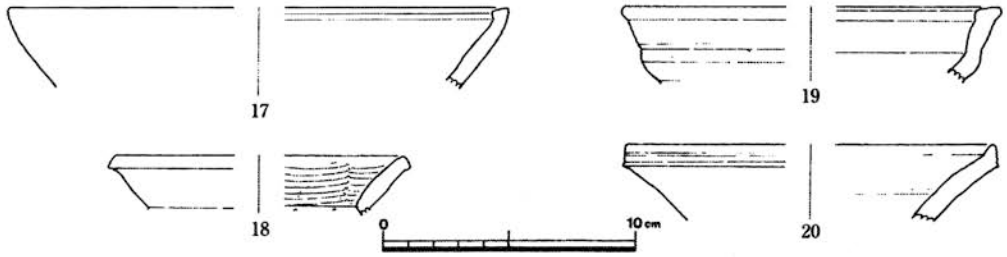
弥生時代末の遺物が混在し、包含層からの流れ込みを示す。古墳時代中期に属するものは14～16・18・19あたりと思われる。17～20は、版組後に新たに小片類の中から抽出したので、器種掲載順が前後することを御容赦願いたい。

甕形土器(4～9・16～19)　4～9は有段口縁に擬凹線をもつ弥生時代後期の甕形土器で、いずれも小片である。4は口径が推定11.6cmの小型品で、やや強く外反して外傾する口縁帯は、中央が薄く先端を丸く収める。頸部内面の屈曲は鋭い稜を成す。5は、口縁端部を上下に厚く拡張して断面三角形状としており、ぼってりとした印象。6は、直立する口縁帯をもち、外反傾向であるが、外反はむしろ、口縁帯中央が薄く、上方へ涙滴状に膨らむ断面形態に起因するものといえる。上半肥厚部外面の擬凹線はナデ消されている。6と同様の断面形態は、先述の4や、8・9にも共通するものである。9は、比較的大型で、推定口径24cmを測る。口縁帯下端が外方にやや突出する形態で、幅7mmの頸部内面帯を有する。7は比較的短く外傾する口縁帯を持つ。上端は丸く、下端も境が不明瞭で、丸く頸部に至る。擬凹線もやや粗く浅い。

17は、口唇部を肥厚させた、いわゆる「布留系」甕形土器の口縁部片である。存続時期はけっ



第48図　4号住居跡床面・覆土出土遺物実測図（S＝1/3）



第49図　4号住居跡覆土出土遺物実測図（S＝1/3）

こう長いので、この破片からだけでは、所属時期は明確にはできない。

16は、「く」の字口縁をもつもので、微妙な外反傾向をもってやや強く開く。胴部外面は斜めのハケ調整で、口縁部内外面にも同様の調整痕を残すが、ほぼナデ消されている。頸部内面の屈曲は比較的鋭く明瞭であるが、それ以下の体部には粘土紐接合痕を顕著に残す。18はやや小振りの甕形土器口縁部片。端部は、比較的シャープな外傾する端面をもつ。内面はハケ調整である。

壷形土器(10・11・19・20)　10は、弥生時代後期で、有段口縁に長めの頸がつく広口壷と考えられるが、器台形土器の可能性もある。薄手で、短く外反する口縁帯に擬凹線が施される。

19は、「山陰系」壷形土器の口縁部片で、やや小振りである。口唇部にほぼ水平な面を持ち、特徴となる口縁部下端の突出は丸く張り出す程度である。本住居にほぼ伴う時期に属そう。

20は、器台片のようにも見えるが、口径や傾きから、一応壷形土器とした。全体形状や所属時期の対比は、理解不足のため保留したい。

11は、有段口縁をもつ小型の壷ないし甕形土器の小片で、弥生時代後期のもの。薄手の短い口縁帯で、摩耗が激しいが、擬凹線が施されていた可能性がある。頸部には、2個1対の紐孔が内面側から穿たれている。

坩形土器(14)　口縁部の約4分の1と体部の一部を欠失するが、覆土遺物としては良好な残存率である。比較的薄手で、潰れた球胴の体部に、若干内湾気味の長い口縁部が付く。口径は約10cm、器高は10.4cm、頸径は6.9cmを測る。調整は、体部外面がヘラケズリ後に多方向のナデを施し、上半部を特に丁寧に仕上げるが、粘土紐接合痕は各所に残存する。内面は指押さえと荒いナデで上半部に接合痕を残す。口縁部は内外面ともに、ハケ調整後にナデ仕上げされている。

蓋形土器（12）　つまみ部片で、頂部は凹み、先端部の張り出しは弱いが角はやや鋭い。

器台形土器(13)　有段の器受け部片で、口縁帯に擬凹線を持つ。口縁帯下端は、外方を短い垂直面とする断面三角形で、下方にやや突出気味とする。垂直面から強く屈折して直線的に口縁部が伸び、先端は丸くおさめる。調整は、外面（下面）はナデで、一部に先行するハケ調整痕がみられ、内面は判然としないが、ミガキ調整が施されていたようである。

高坏形土器(15)　ほぼ完形の支柱から脚部で、下方へ緩やかに膨らみながら拡がる重厚な支柱に、強く屈曲して大きく拡がる脚部が付く。調整は、支柱部外面及び脚部内外面がハケ調整後にナデ、支柱部内面は幅の広いヘラケズリを丁寧に施して脚部との境に明瞭な稜をつくる。

4．5号住居跡

(1)遺　構（第50・51図）

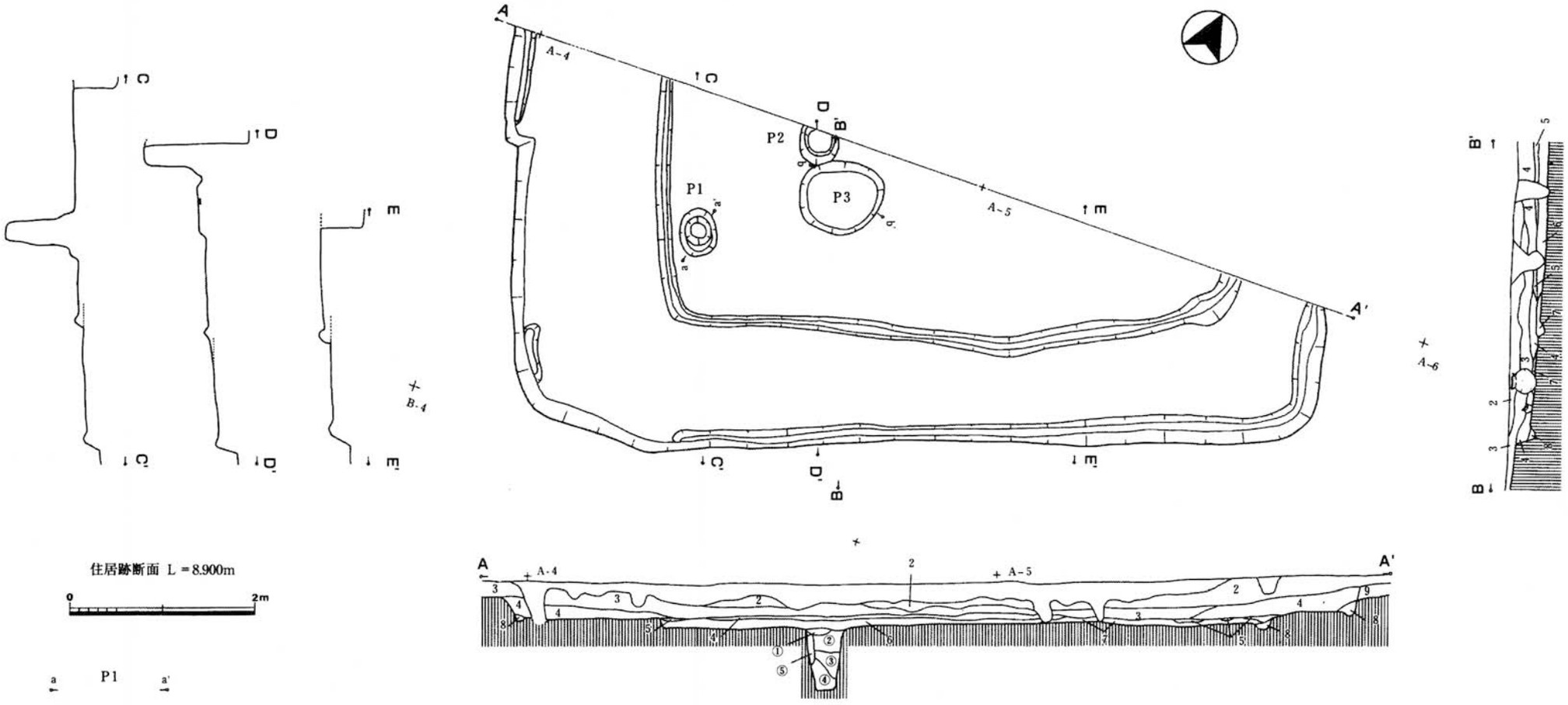
形　態　4号住居跡の北西に隣接し、全体の約3分の2が調査区外にある。一辺が約8.6mを測り、正方形プランとすれば、床面積70m²を超える本遺跡最大規模のものと言える。プラン確認面からの床面の深さは約20～30cm、壁周溝は、幅約15cm、深さ5～10cmで廻り、南西コーナー付近で途切れる。この周溝の途切れる範囲は、南東壁がコーナー近くで僅かに膨らむ部分から、南西壁がカギ型に屈折する位置までで、何らかの施設の存在を要因とすることが考えられる。

尚、本住居跡は増築を経ており、中央部に一辺約6mを測る増築前の竪穴住居プランが検出されている。検出順序により、増築後のものを5号A住居跡、増築前のものを5号B住居跡と呼称した。B住居跡床面は、A住居跡床面より約10cm程下がり、壁周溝が調査区内では全周する。実際の調査では、B住居跡床面までを一度に掘り下げており、B住居跡の壁周溝検出に至って初めて増築を認識、次いで、調査区北壁土層断面で5層をA住居跡の貼床土層と判断した。この経過からわかるように、担当者の注意不足もあったが、B住居跡被覆の床面は比較的軟弱で、地山土ブロックを多く含む5層も断続的、明瞭な面として捉えることはできなかった。

主柱は、両住居とも4本配置であるが、調査区に顔を見せるのは、南西コーナー側の各々1本づつで、内、B住居跡に伴うもの（P2）は、一部調査区外となっている。

施設等　約90×80cmの不整円形を呈する土坑（P3）一基がB住居跡の柱穴に隣接して検出されている。断面皿形で、中心部で深さ約30cm測る。どちらの住居に伴うものかは判断できない。

遺物出土状況　覆土遺物は、断面分布で見るように、西側では3層下部、東側では4層上部のそれぞれ層理面付近に集中している傾向があり、その流れは、中央部では床面直上層に連なる。住居廃絶後まもなくして人為的に形成された遺物分布の可能性もある。この一群の中には、遺存状態の良い個体も含まれており、それを裏づける。尚、本住居跡は拡張受け、それ以前のB住居を床下に内包しているが、B住居を被覆するA住居の床面を面的に把握できなかったため、その部分では、A住居床下遺物も覆土遺物扱いとして一括している。調査中にこのことを認識し、いくつかの遺物をB住居跡覆土遺物として急遽取り上げており、図中に白抜き丸で表示しているが、断面投影の結果を見ると、A住居の覆土として取り上げた遺物中にも、B住居に含まれるものがあるようである。床面遺物では、5の壷形土器が直立した状態で検出され、その脇には、坩形土器6が置かれていた。そのすぐ東側には、甕4と坩形土器7が出土している。坩形土器2は、B住居の周溝上部にあり、床下遺物と判断した。覆土遺物で、23や25は、床面より数cm浮いた程度で、先に述べた覆土遺物分布の人為性の可能性から、少なくとも遺存状態の良い個体は、廃絶後という時間差こそあれ、本住居に基本的には伴うものと考えたい。分布の上下幅は、廃絶時の廃材の上に投げ込まれた影響とも考えられる。



P１（５号A住居跡柱穴）土層註

１層：暗褐色土	黄褐色土粒少量含有し、やや淡い。炭化物片微量含有。比較的堅緻。
２層：暗褐色土	１層より黒み強い。軟弱。
３層：黒褐色土	やや灰色を帯びてにぶい色調。黄褐色地山土粒やや多、灰黄白色地山下層土粒・ブロック多量含有。極めて軟弱。
４層：明褐色土	黄褐色地山土粒主体。比較的堅緻。
５層：暗黄褐色土	黄褐色地山土粒・ブロック主体。軟弱。

P２（５号B住居跡柱穴）土層註

①層：灰褐色土	黄褐色土硬質ブロック多量含有。堅緻。
②層：褐色土	黄褐色土粒多量、同硬質ブロック微量含有。比較的軟弱。
③層：褐色土	②層よりややにぶい色調で暗い。非常に軟弱。
④層：褐灰色土	黄褐色土粒少量含有。非常に軟弱。
⑤層：暗黄褐色土	やや灰色にくすむ。黄褐色土粒多量含有。やや軟弱。

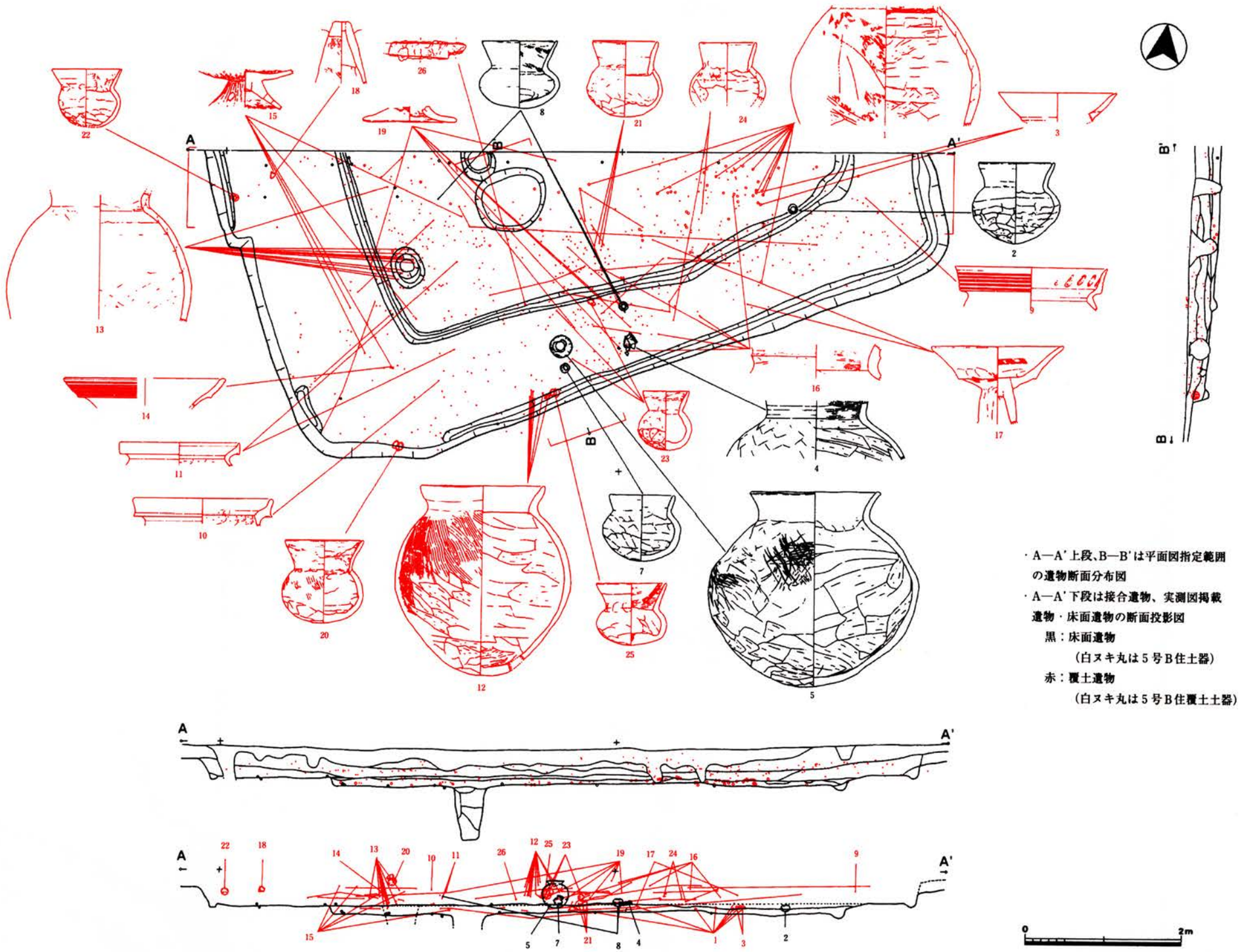
P３（土坑）土層註

１層：(灰)褐色土	淡くにぶい色調。炭化物片少量含有。堅緻。
２層：淡(灰)褐色土	黄褐色地山土粒多量、同ブロック少量含有。堅緻。
３層：暗褐色土	黒み強い。黄褐色土硬質ブロック少量含有。堅緻。

５号住居跡覆土土層註

１層：黒褐色土	木根を多く含む表土層。やや柔らかく、しまり劣る。
２層：暗褐色土	黄橙色粘土硬質ブロックやや多量含有。比較的堅緻。
３層：褐色土	弱い赤み帯びる。黄褐色地山土粒やや多量含有。炭化物片少量含有。
４層：(灰)褐色土	やや暗く、にぶい色調で比較的均質。堅緻。
５層：暗黄褐色土	黄褐色地山土粒・ブロック主体で、マトリックスに暗褐色土含有。堅緻。５号A住居跡床面土。
６層：(灰)褐色土	上層に比して黒味の強い黒褐色土粒を主体としているが、斑状の黄褐色地山土粒濃密部散在、及び同ブロックを多量含有により全体に淡く、やや明るい。非常に堅緻。
７層：明褐色土	褐色土粒をマトリックスとして、黄褐色土硬質ブロック多量含有。堅緻。５～７層が、拡張の際に５号B住居跡を埋めたA住居跡の貼床土層。
８層：(暗黄)褐色土	にぶい褐色土を主体とし、黄褐色地山土粒・ブロック多量含有。やや堅くしまり良い。
９層：黒褐色土	堅く均質な黒褐色土。縄文遺構や風倒木痕にみられる覆土。

第50図　５号住居跡平面図・断面図(S=1/60)、ピット断面図（S=1/30）



・A—A' 上段、B—B' は平面図指定範囲の遺物断面分布図
・A—A' 下段は接合遺物、実測図掲載遺物・床面遺物の断面投影図
黒：床面遺物
（白ヌキ丸は５号B住土器）
赤：覆土遺物
（白ヌキ丸は５号B住覆土土器）

第51図　５号住居跡遺物出土状況図（S=1/60）

（2）遺　物（第52～54図）

①B住居床面・覆土出土遺物（1～3）

甕（壷）形土器（1）　口縁部を欠く胴部片で、肩の張らない長胴タイプになると考えられる。外面ハケ調整で、部分的にナデが加えられる。いわゆる矢印形あるいは三叉形と呼ばれるヘラ記号が肩部に描かれている。ハケ目を消すナデ調整は、記号の描かれている部分とその周囲において明瞭で、記号を描く前提として施された調整と考えられる。内面調整は、粗いヘラケズリを主とし、接合痕を顕著に残す。頸部のみハケ調整がみられる。

坩形土器（2）　口縁部の約4分の3を欠失するが、体部は完存している。頸径8.1cm、最大胴径11.2cmを上半部で測り、逆宝珠形の比較的整った形態で底部にすぼまる。底部はやや尖りぎみとなるため、正置できない。調整は、体部外面では、最大径部以下をヘラケズリ調整とし、上部はナデ調整とするが、接合痕が見える。内面は、ほとんど指押さえのみで、頸部以下底部に至るまで接合痕を明瞭に残す。口縁部は内外面ともにナデ調整である。

高坏形土器（3）　坏部片である。復元口径15cmで、小型の部類に属す。坏底部から一旦屈曲して広がる口縁部を持つタイプであるが、口縁部はさほど伸びず短い。調整は不明瞭である。

②A住居床面出土遺物（4～8）

壷(甕)形土器（4・5）　4は、口縁部と胴部を欠失し、形態に不明な点が多い。頸部径が比較的小さく、やや厚手で、内外面の調整が丁寧であることから、壷形土器の可能性もあるが、同一個体と考えられる底部片（4b）に被熱痕及び内面の焦げ付き痕が顕著であるため、一応甕形土器とする。体部外面はナデ調整、口頸部内外面は非常に丁寧なヨコナデ、体部内面は、ケズリというよりも、ヘラ状具を強く押し付けて撫でた感じの丁寧な調整で、平滑な仕上がりである。

5は、床面に直立していた完形土器で、器形的には珍しいものである。器高24.5cm、最大胴径は26.6cmと、胴部径が器高を上回る。色調も、灰白色地に大きな黒斑を数ケ所持つ例外的なものである。やや押し潰したような球胴体部に、弱く外反する「く」の字口縁が付き、口縁端部はやや外傾する面をつくる。外面調整はヘラケズリで、下3分の1を残してナデ調整が加えられる。内面もヘラケズリで、頸部近くから口縁部にかけてナデ調整される。上半部の器面には、特異な線条痕が多数みられる。多くは、串先を用いたような細く弱い線で、一本づつ、不規則に多数描き重ねられている。一ケ所のみ、ヘラ先を使ったような断面V字の深い「線刻」となっている範囲がある。これらの意味は不明。器形としては、須恵器の模倣という可能性も考えておきたい。

坩形土器（6～8）　6は破片のため傾きの把握が難しいが、頸のあまりすぼまらない甕あるいは鉢形に近い器形とした。調整は、外面がナデ調整を受けるが接合痕を弱く残し、内面はヘラケズリ主体。口縁部内面にはハケ調整痕がみえる。甕形器形に加え、調整の点でも、他の坩形土器とは区別される。7は、口径8.1cm、器高8.3cmで、最大胴径を上半部に持つやや潰れた球体に、短くボッてりとした口縁部が付く。外面調整は、最大径部を明瞭な境として、下をヘラケズリ後弱いナデ、上を比較的丁寧なナデ調整としている。8は、強く潰れた万頭形の体部に長めの口縁

部がつく。口径9.5cm、器高は8.5cmを測る。外面は全面ナデ調整されており、底部まで平滑である。内面は、底部に放射渦状の強いナデ稜線を持つ。口縁部内面に、ハケ調整痕を残す。

③覆土出土土器（9～25）

甕形土器(9～12)　9～11は弥生時代に属する有段口縁の甕形土器片である。9は口縁帯に非常に粗い擬凹線を持つ。口縁帯は幅広・外傾・外反・先細りで、内面には指頭圧痕が並ぶ。10は口径15.2cm、口縁部断面が三角形状で、上端をいわゆる「はねあげ」状に短く薄く摘み上げ、下端は下方へ突出させて狭い口縁帯をつくる。11は口径約18cm、断面三角形の端部を拡張したような有段風で無文の口縁帯をもつ。非常に分厚い口縁基部から、上方へは外傾して伸びて先端を丸くおさめ、下端は、斜め外方へ鋭く突出して稜を成す。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、胴部内面はヘラケズリ調整で、境を成す頸部に明瞭な稜線をつくる。

12は、全体の約3分の2を欠失する。長胴タイプで、器高は23.8cm、最大径を胴中位かやや上方にもつ。口縁は、短くぼってりとしており、中程で外側にやや肥厚し、先端は丸くおさめる。体部外面の調整は、上半部が目の粗いナナメハケ調整、下半部がヘラケズリ調整で、底部付近に至ると、板状具で乱雑に撫でたり押さえ付けたりする調整がみられる。体部内面は、上約5分の3が、工具を用いたヨコナデ調整で、それ以下は、ハケ調整後に粗いナデ調整、下底部は、ハケ目を被覆する荒い粘土撫で付けが見られる。

壺形土器(13・16)　13は、破片が、覆土からＰ１の上層へ流れ込むようなかたちで分布していた。口縁部を欠き、底部とも明確な接点を持たないが、同一個体と考えられる破片数は比較的多く残存する。体部最大径を中位にもつ長胴タイプで、甕形土器との区別は曖昧であるが、頸部の締まり具合いや口縁部への立ち上がり方の予測等から壺形土器とした。内外の器面は荒れており調整は判然としないが、内外面ともに、中位以下がヘラケズリ調整、上がナデ調整を主体としていると考えられる。

16は、頸部片で、口縁部下端を突出させる山陰系の流れを汲むものと思われるが、そうとすれば、かなり新しい段階のものとなろう。口縁部側内面調整にハケ調整痕がみられる。

坩形土器(20～25)　覆土で6個体を数え、床面遺物を含めると、鉢形状のものを除き、本住居跡より合計9個体出土したことになる。20は、口径10.0cm、器高10.4cmを測る。体部最大径と口径がほぼ等しく、比較的均整のとれた形態である。体部外面調整は、下半がヘラケズリ後ナデ調整、上半がナデ調整で、先行する浅い木目状のハケ調整痕が薄くみえる。体部内面は、下半が指押さえと粗いナデ、上半は比較的丁寧なナデ調整を受ける。口縁部内外面もナデ調整で、体部上半同様の先行するハケ調整痕を部分的に残す。21は、口径8.3cm、器高9.6cmを測る。口縁部の開きは比較的弱く、立ち上がりの屈曲も明瞭さを欠く。体部外面の調整はナデ調整で、下半はヘラケズリの形跡を残す。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面は、粗いナデ調整で、頸部には口縁部粘土接合のはみ出し部が突出、底部は、放射渦状のナデ調整の稜が顕著で、極めて分厚い。22は、全体の中ではかなり薄手のつくりである。口縁の開き具合いや体部形態などが左右非対称

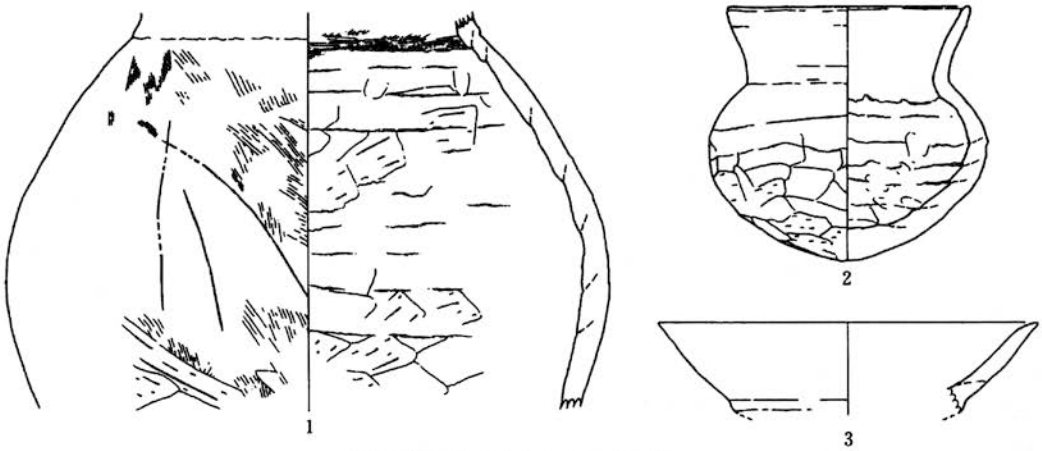
となる若干の歪みがあるうえ、口縁上半部の殆どと底部を欠失するため、口径や器高はやや不明確である。外面調整は、底部がヘラケズリ調整、胴部と口縁部はナデ調整で、口縁部においても粘土接合痕を断続的に残す。内面調整は、体部が指ナデ調整で、口縁部は、板ナデ状の調整痕を残す。23はほぼ完形の小型品である。口径5.9cm、器高7.4cmを測る。厚手の体部で、頸のすぼまりは比較的強く、口縁はやや内湾ぎみに立ち上がる。調整は、外面の体部下位から底部をヘラケズリ調整するほかは、ナデ調整である。24は、残存率約1／8程度の破片で、傾き等は不明確である。外面調整は、口縁部がヨコナデ調整、体部残存部はナデ調整で、頸部下の体部にナナメハケ調整痕を残す。内面調整は、体部が接合痕をほぼそのまま残す指押さえ程度のナデ調整で、口縁部はヨコナデ調整である。25は、ほぼ完形で、口径9.0cm、器高7.8cmを測る。万頭形の体部に、比較的長い口縁部がつく。外面調整は、底部にヘラケズリ調整の形跡を認めるが、概ね全体がナデ調整を受けている。内面調整は、口縁部がヨコハケ調整後のヨコナデ調整、体部が指によるナデ調整である。底部は、中央に粘土を寄せて閉塞したようなシワが顕著で、中心部は隙間となって陥没している。

器台形土器(14)　弥生時代の混入品で、小片である。有段の器受け部に擬凹線を持つもので、口縁帯は僅かに内湾し、端部を丸くおさめる。外面赤彩の可能性がある。

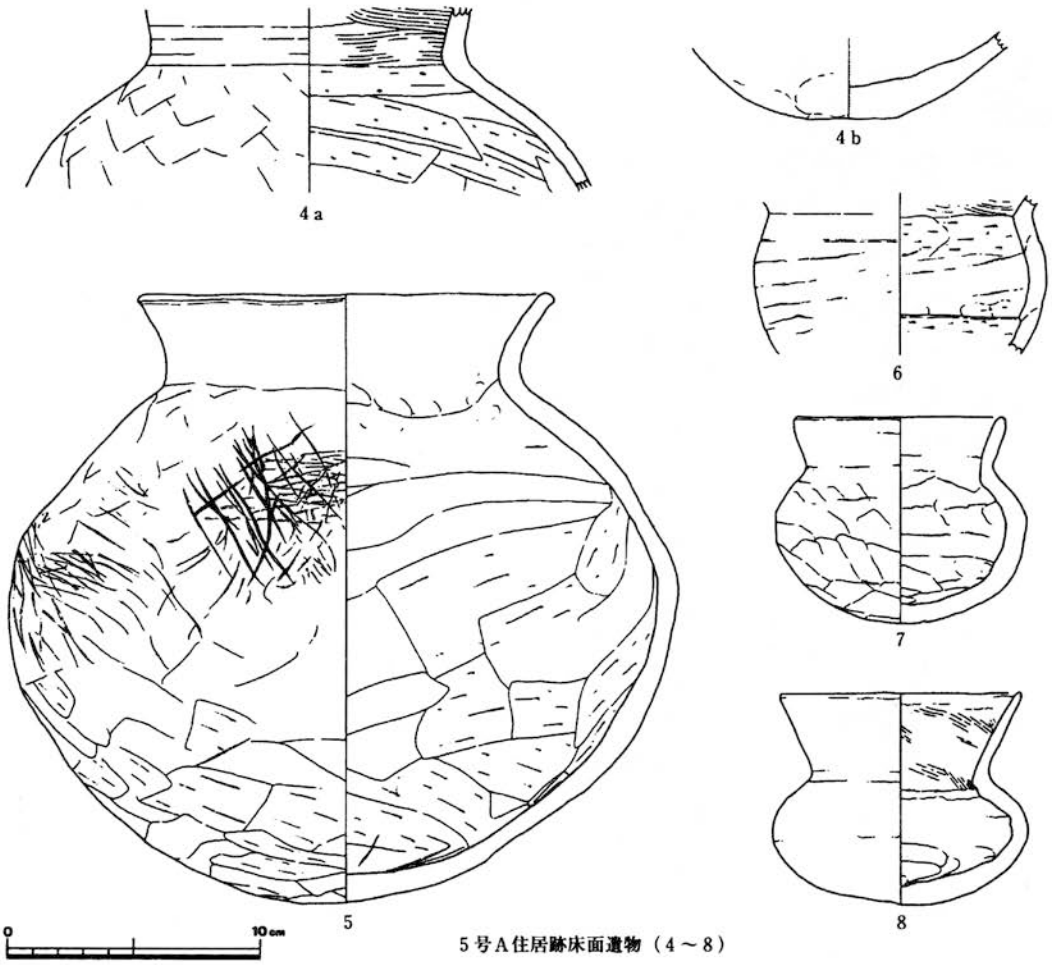
高坏形土器(15・17～19)　15は、古墳時代前期に属する混入品で、本遺跡では出土量の乏しい時期のものである。いわゆる東海系の高坏で、脚部が坏部との接合面からただちに極めて大きく外反して開く点や、坏部の屈曲が緩く、大きく開いて浅くなると考えられる点などから、この種の高坏としては比較的新しい段階のものと考えられる。三方に円形透かし孔が穿たれている。調整は、坏部内外面と脚部外面がヘラミガキ調整、脚部内面は、ハケ調整である。

17～19は、ほぼ本住居に伴うものと考えている。17は、途中で屈曲し、外反して伸びる坏部をもつ。全体に厚手で、屈曲部も、断面図では下方にやや突出するかたちをみせるが、実際には、粘土を塗り付けたままで粘土ダレを起こしたような粗野なつくりである。内外面ナデ調整で、先行するハケ目が所々に残存する。尚、坏底部外面のハケ調整は、屈曲部の被覆粘土に先行する。18は、下方に膨らみながら広がる支柱部である。19は、脚部片で、ほぼ一周する。17と同一個体かもしれない。17や18のような支柱から強く屈曲して、接地面の広いベタッとした脚となる。脚端は丸くおさめ、内外面の調整は、ハケ後にナデ調整である。

鉄器 (26)　覆土より出土した鉄製刀子である。現存長6.5cmで、切先側を欠失する。報告書作成段階まで存在を忘れていたため、錆落とし等が間に合わず、形態観察・計測ともに不明確なものとなってしまった。関は片関直角で、茎胴は先細タイプと思われる。茎尻は完存かどうかは判然としないが、現状で茎長1.5cmを測る。身部最大幅は推定1.2cm、背厚は推定0.5cmである。関近くの身部に革(？)紐状のものを斜めに巻き付けたような痕跡を認めるが、錆により詳細は不明である。痕跡はやや浮いた状態で、身部に直接巻かれたものではないようなので、鞘痕かもしれない。

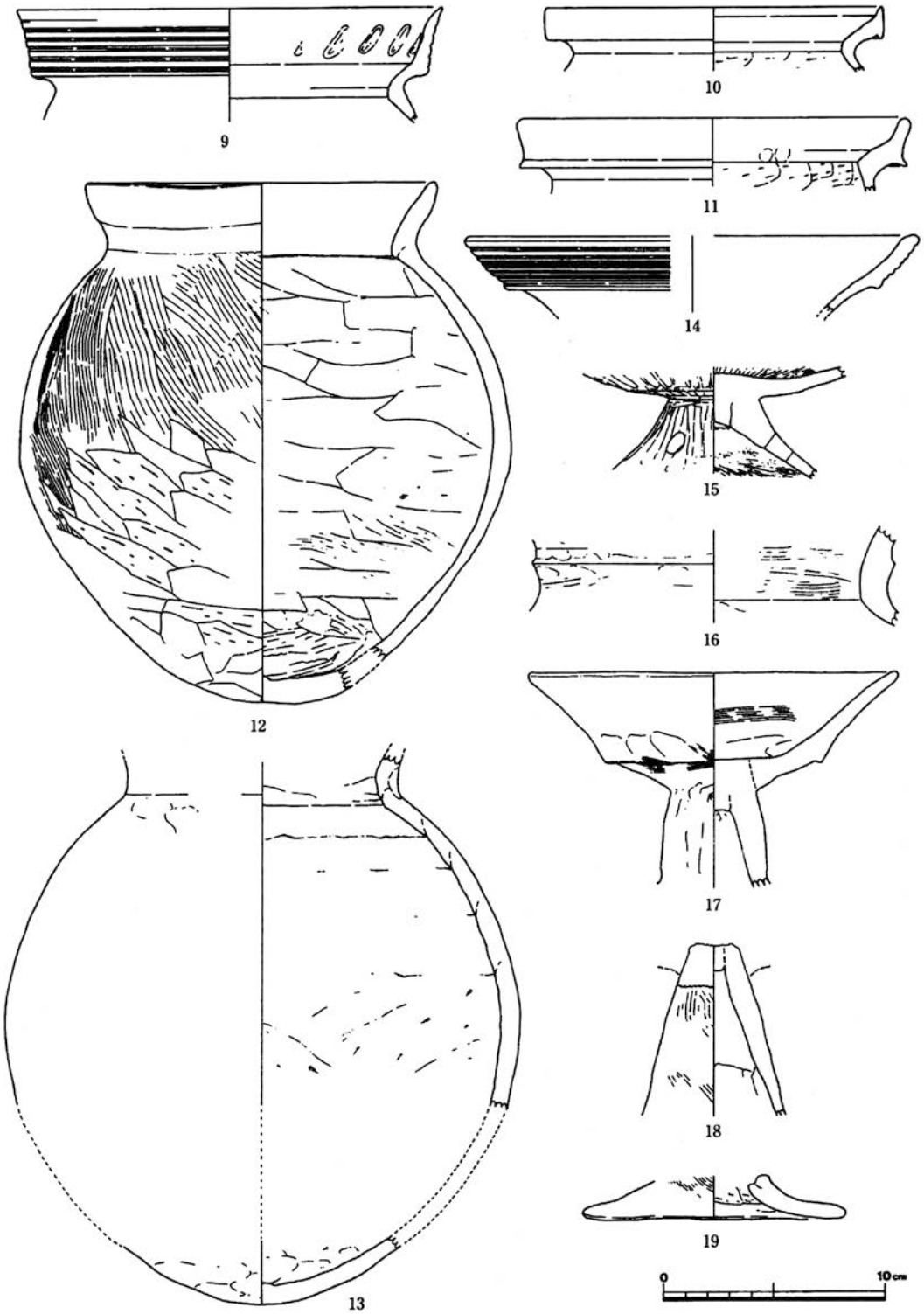


5号 B住居跡覆土(1,3)、床面(2)遺物

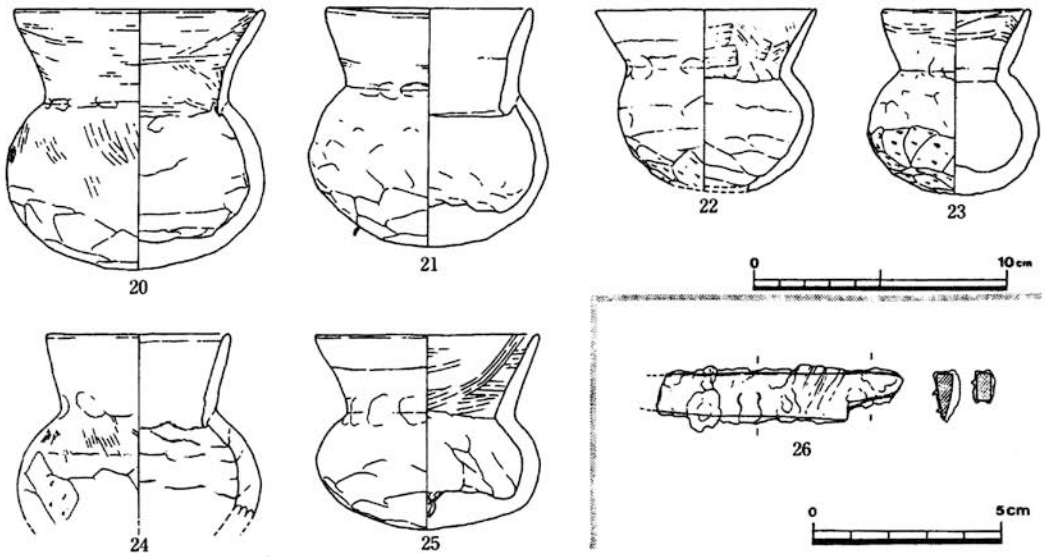


5号A住居跡床面遺物（4～8）

第52図　5号住居跡出土遺物実測図（S＝1/30）　＊6は、遺物取上げNo.が7と重複していた。覆土遺物の可能性がある。



第53図　5号A住居跡覆土出土遺物実測図（S＝1/3）



第54図　5号A住居跡覆土出土遺物実測図（S＝1/3、鉄器：S＝1/2）

5．6号住居跡

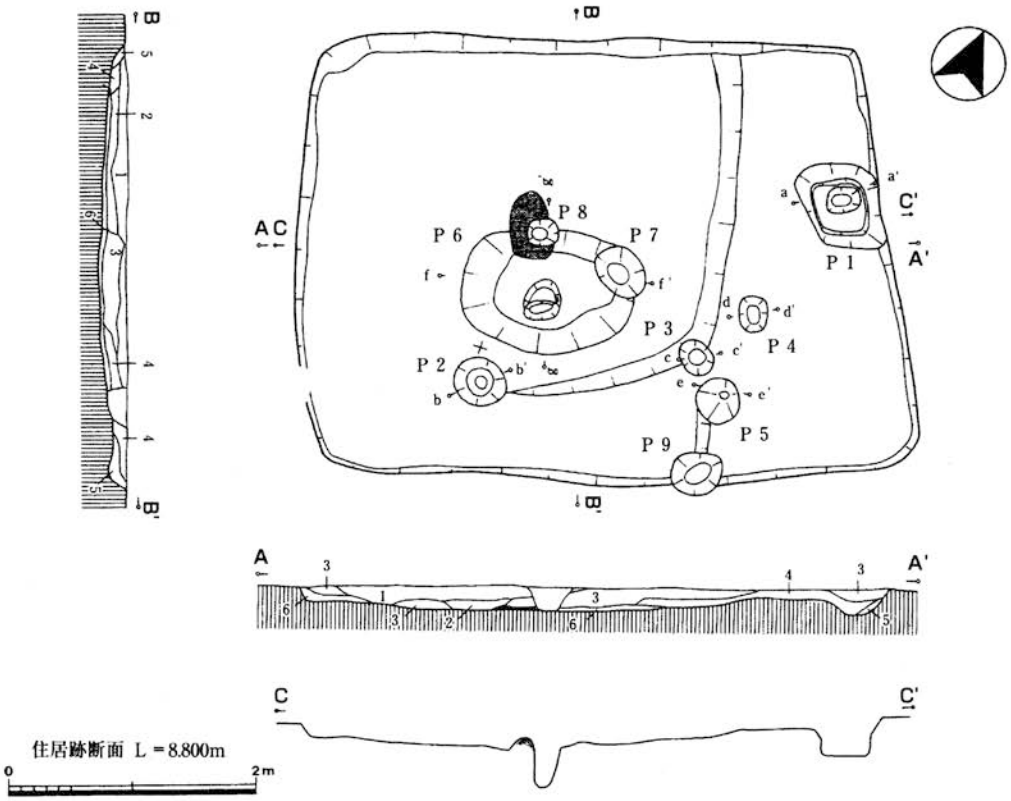
(1)遺　構（第55～57図）

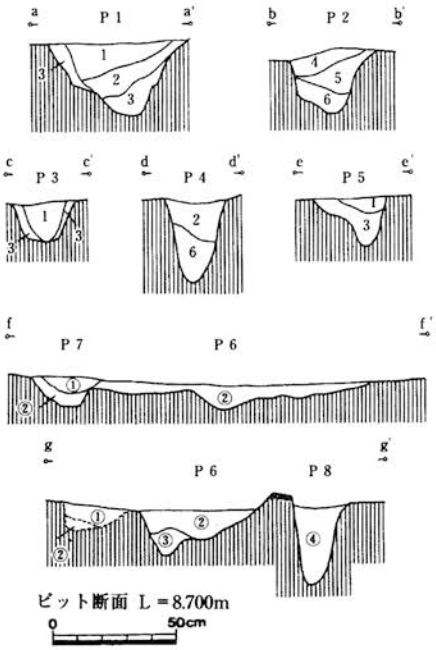
形　態　5号住居跡の南西壁から約2.5m隔てて隣接する。約4.8×3.6mの小型長方形を呈し、北東短辺が斜行してやや歪む。掘り込みは浅く、壁高は10～15cm程度で、立ち上がりもルーズである。壁周溝は持たない。明確な主柱穴はみあたらず、また、検出されたいくつかのピットも、底面形態や、深さ等の関係で、柱穴とは認めがたいものが多い。しかし、平面プランや、掘り込みが、他と比較して整美さを欠く点から、柱穴もまた、簡易なものであったのかもしれない。

施設等　床面は不明瞭で、硬化が少ないうえ、安定した平坦面としては把握できず、皿状に凹む断面となる。床面の北東部約1／3程が、テラス状に1段高くなっている。これは、事実高くはなっているのだが、段差の上下端線の把握は感覚的であり、図で示したよりは、かなりルーズなプランを呈している。いわゆる「ベッド状遺構」に類するとも言えるが、判断は避けたい。

炉跡は、主軸上の中央のやや南西寄りにある。約55×35cmの不整楕円形の焼結面で、深さ約35cmの小型ピット（P8）を伴う。覆土は、黒色の灰を主体とすると考えられる単層である。この炉跡との一部重複をみせる土坑（P6）は、約1×1.4m の楕円形プランとしているが、実際のプランは単純ではなく、凹凸が入り乱れた掘り形状の浅い凹み範囲といった程度のラインを感覚的に認定した程度のものである。

北東壁中央に接するところには貯蔵穴風の二段掘り土坑(P1)がある。約60×70cmの不整方形を呈し、一段目の深さが約15～20cmで、底面は、二段目の片側に寄ったピットへの緩傾斜面となるが、テラスとしての安定はしていない。二段目は、深さ10cm程の浅い小ピットとなる。





6号住居跡覆土土層註

1層：褐色土	明るくやや赤い。炭化物片少量含有。軟質。
2層：黒(褐)色土	炭化物片多量含有。黒色土（灰？）主体。
3層：暗褐色土	炭化物片・焼土粒少量含有。比較的堅緻。
4層：暗褐色土	地山土粒やや多く明るい。やや堅緻。
5層：暗黄褐色土	地山土粒多量含有。軟弱。
6層：暗黄褐色土	地山土粒・硬化ブロック多量含有。堅緻。

P1～P5土層註

1層：暗褐色土	地山土粒少量含有。軟弱。
2層：黒褐色土	淡く、地山土粒微量含有。比較的堅緻。
3層：褐色土	地山土粒やや多量、地山土軟質ブロック少量含有。
4層：黒(褐)色土	炭化物片多量含有。軟質。
5層：灰褐色土	地山土粒・硬化ブロック多量含有。焼土粒・炭化物片時折含有。堅緻。
6層：(黒)褐灰色土	地山土粒少量含有。堅緻。

P6～P8（炉跡・土坑）土層註

①層：暗褐色土	やや赤い。炭化物片時折含有。軟質。
②層：灰褐色土	地山土粒・硬化ブロック多量含有。堅緻。
③層：黒褐色土	炭化物片少量含有。軟弱。
④層：黒色土	真黒色の灰層的層。軟質。

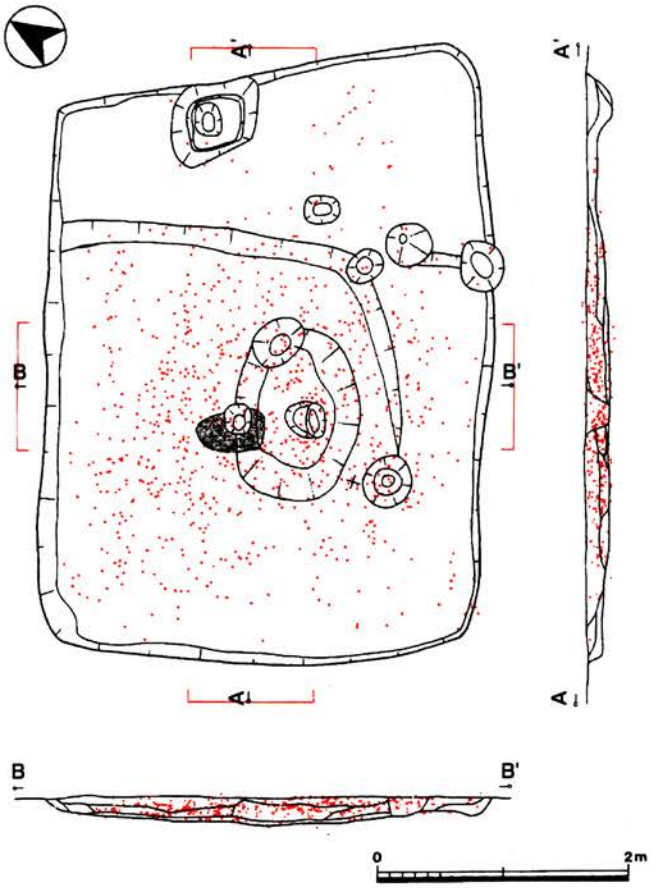
（地山土＝黄褐色土）

第55図　6号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）

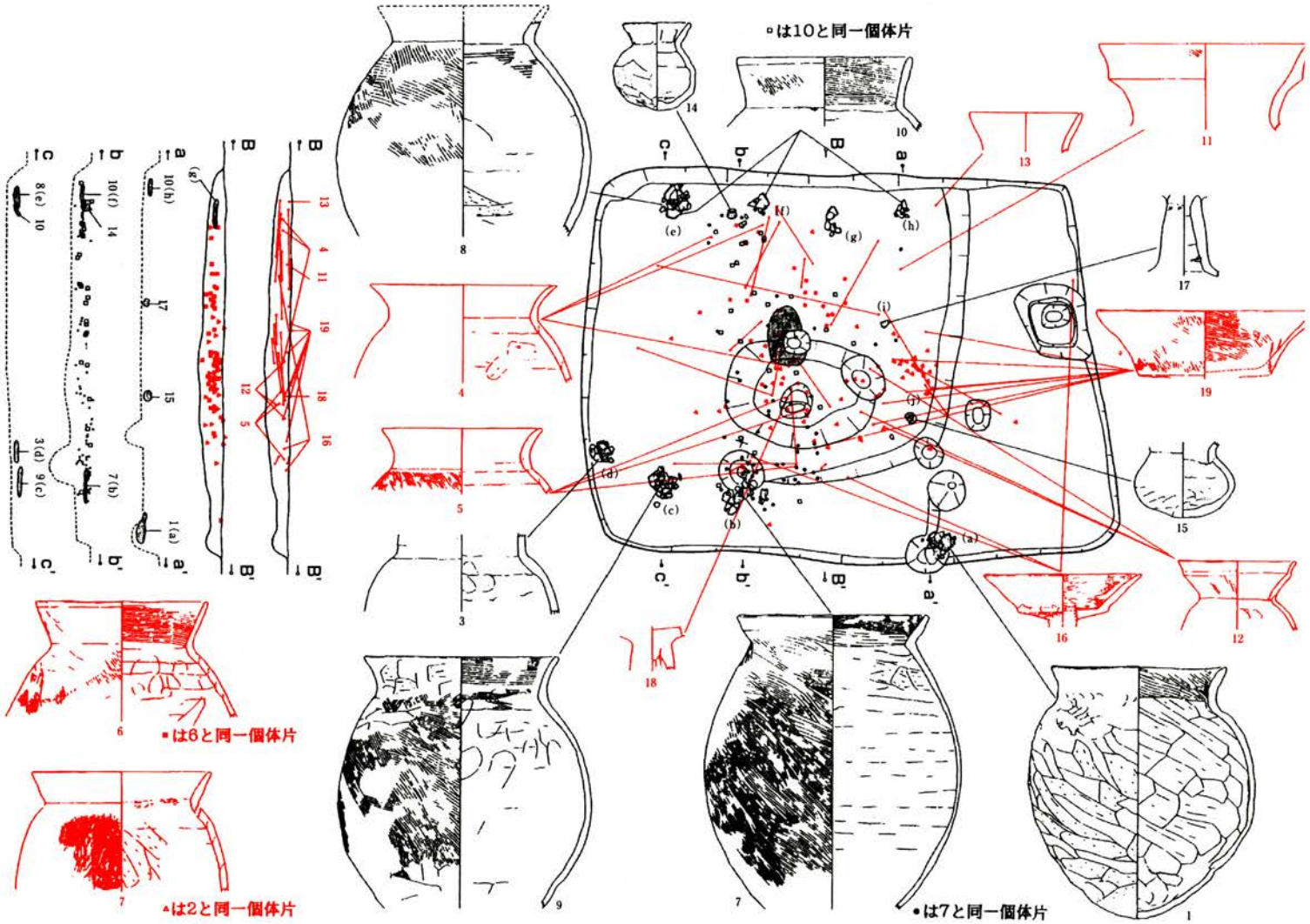
遺物出土状況　覆土遺物は極めて多量に出土しており、プラン等のしっかりとした他の住居跡に比べれば対称的である。第56図は、ドット取り上げ遺物の平面及び断面分布図であるが、平面的には、床面が一段低くなった範囲を中心に濃密分布を示す。断面分布では、中・上層に集中する傾向があり、そして、かなり上下幅ももっている。一方、第57図は、接合状況図と実測図掲載遺物分布図、そして、調査時に作成した出土状態実測図とを合成したものである。覆土遺物が多量であることから、変則的な図示方法をとっている。本住居跡に関しては、床面の把握が曖昧であったこともあり、床面遺物としての認定作業は行えなかった。出土状態実測図は、ある程度の形状を残す遺物と、個体単位で一括廃棄された状況を示すものについて行っている。図中の(a)～(j)の10ブロックがあり、両長辺に沿って列状に分布する。甕形土器が主体で、(a)～(d)の列は、各ブロックともにほぼ一個体分づつがまとまって廃棄されている。ただし、(b)のブロックの土器である甕形土器（7）は、同一個体と考えられる破片が、ブロックから住居中央部へ拡散するようにやや広範な分布を示す。一方、対する(e)～(h)の列では、甕形土器10の個体が、(e)・(f)・(h)の各ブロックにまたがり分布しており、それと同一個体と考えられる破片が、(f)から拡散するかたちで比較的広範に分布する。

いずれのブロックも、床面からは浮いており、覆土遺物の下位集中とあまり差は無い。住居廃絶後の一括廃棄遺物と考えられ、廃棄行動の差によって、分布状態に差が生じている。

覆土のドット遺物でも、甕形土器の2と6の個体について、個体別分布を把握した（図の繁雑さを避けるため、接合線は省略している)。これをみても、一定の集中傾向を示しており、覆土遺物の形成過程が、廃棄行為によるものという判断が可能と思われる。即ち、明確な床面の一括遺物も欠いていることから、住居廃絶後、別の住居の居住者が廃棄の場として活用していた可能性を考えたい。



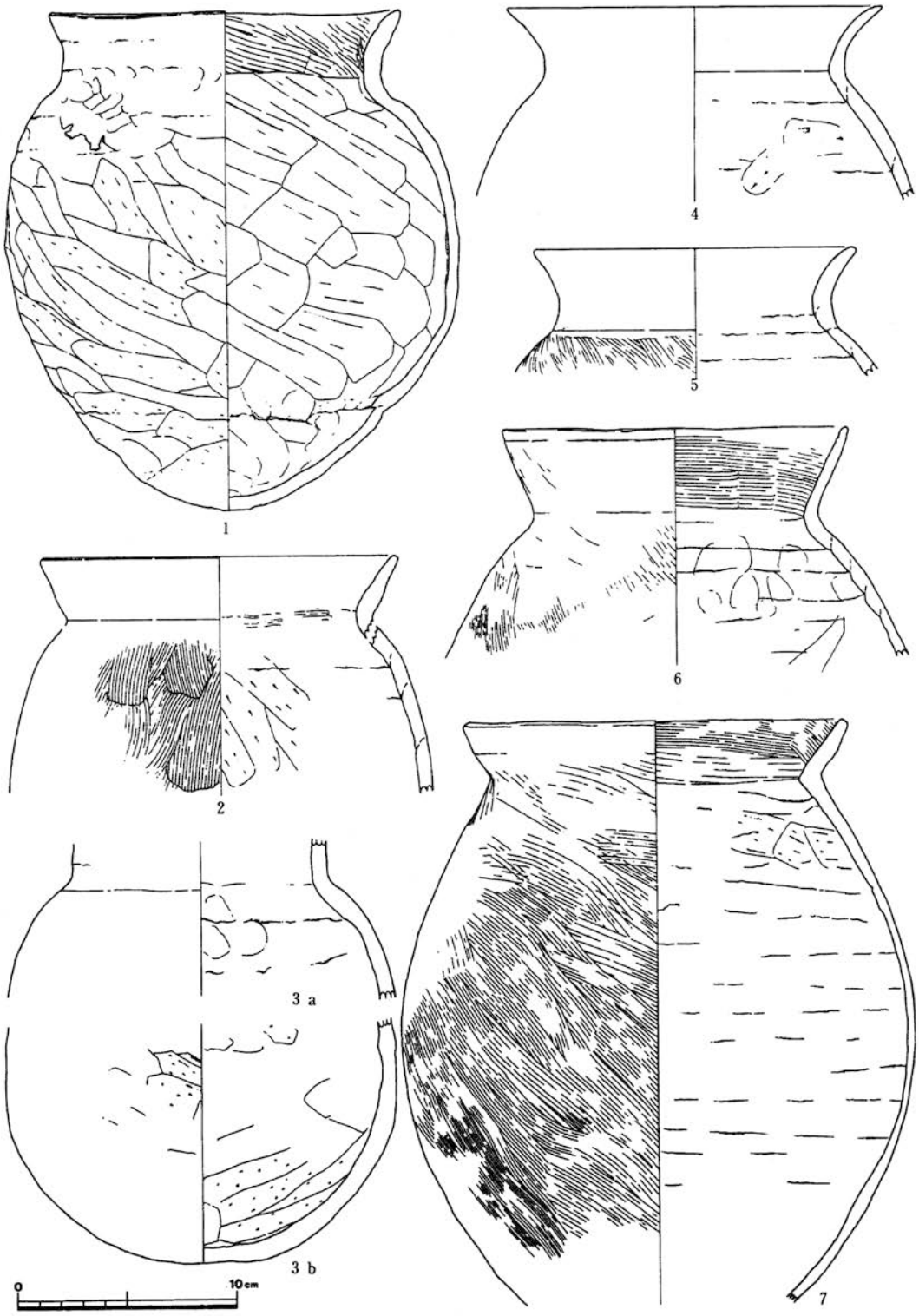
第56図　6号住居跡遺物出土状況図（1）(S=1/60)－－＋



第57図　6号住居跡遺物出土状況図（2）（S=1/60）

(2)遺　物（第58・59図）

甕形土器(1～10)　1は、口径16cm、器高23cmを測るほぼ完形品で、体部形態は、最大径を上半部にもつ長胴タイプ。体部外面の調整は、肩部以下がヘラケズリ調整で、肩部より上は、粗いナデ調整で粘土紐の接合痕を処所に残す。肩部以下のヘラケズリは、斜め方向から、底部へ行くにしたがって横方向に近くなる。斜め方向のものは、砂礫の動きが下方に向いていることや、底部に向かってのケズリ単位の切り合い関係等から、体部成形後、倒立した状態で調整を施したと考えられる。内面は、ほぼ全体がヘラ状工具によるナデ調整であるが、底部は異質である。全周する顕著な接合痕を残し、横瓶等の被蓋部内面にも似る。接合部以下の底部には体部と連続する工具ナデ調整はみられず、指ナデ調整である。接合部に相当する外面も凹みが周る。口縁部は、やや緩く外反して先細りとなる。内面はハケ調整を受けて比較的丁寧な仕上げとなっているが、外面は、一転して無骨で、粗雑な指押さえによる歪みや凹凸、粘土紐接合痕がみられる。2は、内面全体が黒色の特徴ある個体であるため、器体の2／3相当分の破片を同一個体片として抽出できたが、部位を確定できるような接合は無く、掲載図のとおりの図化しかできなかった。直線的に外傾する口縁部で、先細りであるが、端部は狭い面をもつ。内外面ナデ調整で、頸部内面にのみ先行するハケ調整痕を残している。胴部は、同一個体片からすると、外面は、底部を含めて全面が目の細かいハケ調整で、内面は全面ヘラケズリであったと考えられる。3は、体部の約1／3と頸部近くの小部分を認めるが、両者の接合はなく、半球形の残存体部は中心軸を決めがたい。想定したとおりの傾きとして頸部とつなげれば、体部高が15cm程度、小型でほぼ球形の体部形態となる。頸部は直立ぎみの立ち上がりとなる。調整は、外面はヘラケズリ主体と考えられるが、器面の被熱による剥落や荒れが顕著で判然としない。内面は、ヘラケズリ調整で、頸部付近で、接合痕を留める程度の指ナデや指押さえがみられる。4は、比較的強く外反・外傾して伸びる口縁部をもつもので、薄手で、先端は先細りに鋭く収める。摩耗が激しく、内外面の調整は判然としない。5は、4と同じく外反する先細りの口縁であるが、4に比して厚手で、外傾度も弱い。内外面ナデ調整で、胴部外面はナナメハケ調整がみられる。6は、直線的に外傾して長く伸びる口縁をもつ特徴的な形態。口縁上端部は薄くなり、ごく小さな端面をもつか、一部鋭く収める。調整は、口縁部外面がナデ調整で、内面がハケ調整である。体部は、肩部までの破片しか見いだせない。調整は、肩部付近以下の外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整とし、頸部近くでは、外面をハケ調整後ナデ調整し、内面は、軽いナデ調整で、接合痕をはっきり残す。7は、体部中央に最大径をもつ長胴タイプの器形に、外傾する短い口縁部が付く。口縁部はやや厚手で、中央で外側にわずかに肥厚して心持ち内湾ぎみの外面を成す。端部は、丸みをもつが、外傾する面をつくっている。頸部は、内面が比較的鋭い稜を成して屈曲する。調整は、体部外面と口縁部内面がハケ調整で、体部内面は、摩滅で判然としないが、頸部に近い位置で部分的にヘラケズリがみられるものの、体部の下位にいたるまで粘土接合痕がかなり残されており、弱いナデ調整が主体と考えられる。8は、頸部から胴部にかけての残存で、体部中位に最大径をもつ長胴タイプと考



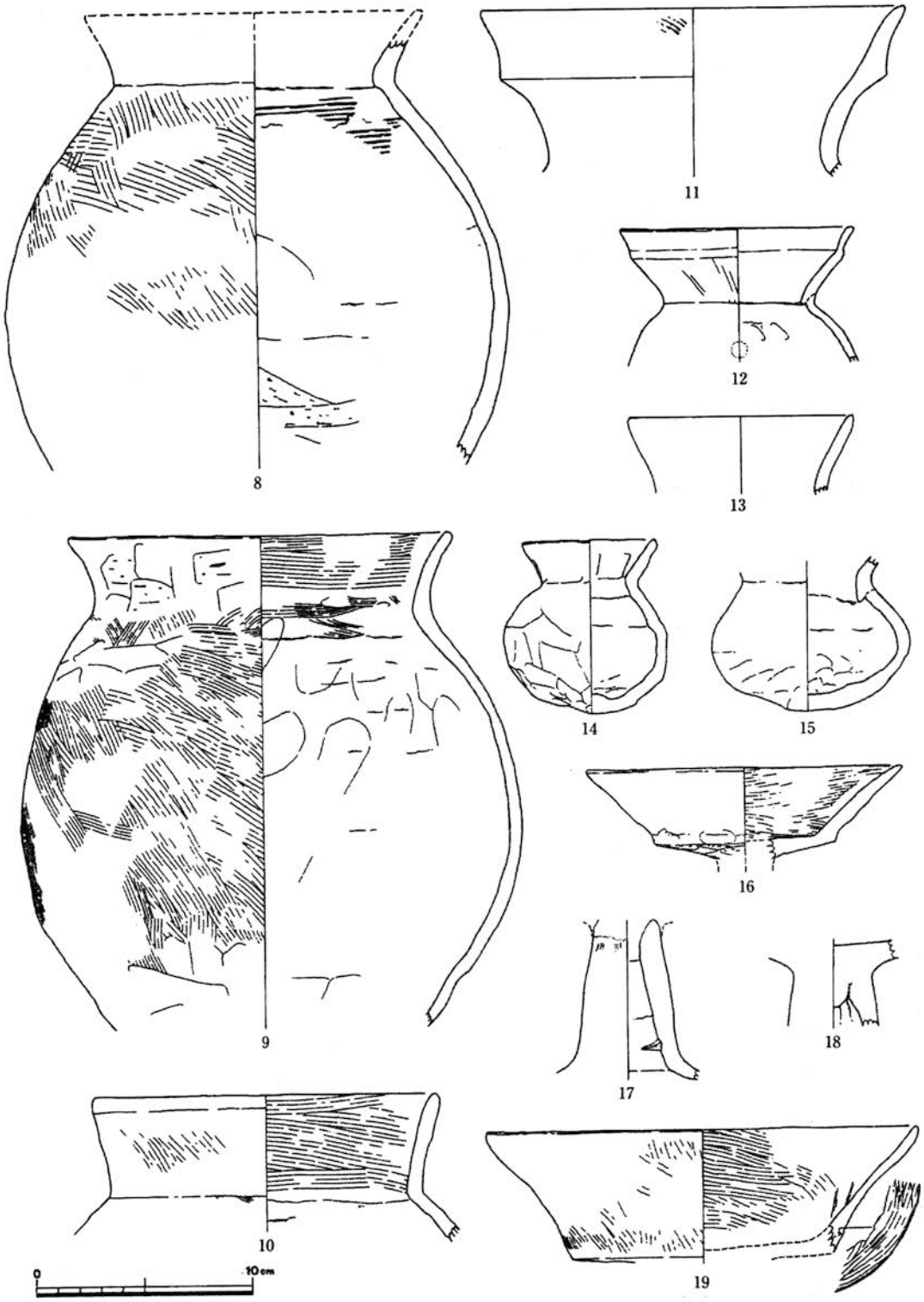
第58図　6号住居跡出土遺物実測図（S＝1/3）

えられる。調整は、外面下部は剥落して不明だが、残存部には全て、目の非常に粗いハケ調整が認められる。内面は、残存部下端にヘラケズリ調整が僅かに見え、底部にかけての調整がケズリであるとわかる。それより上は、珍しく丁寧なナデ調整がみられ、革などを用いたのか、調整の単位すら分からない平滑な仕上げである。頸部近くで部分的にハケ工具痕がみえる。9は、底部側を欠失するが、接合はしないものの、ほぼ全周する破片を得ている。緩く外反・外傾するやや長めの口縁部で、厚手のつくりであるが、比較的整美な形態である。端部は、やや薄くするが、丸みをもって収める。頸部はスムーズな曲線で胴部と口縁部をつなぐ。体部は、上半部に最大径をもつようであるが、張りは緩い。調整は、胴部外面と口縁部内面がハケ調整で、口縁部内面はその後ナデ調整を受けている。胴部内面は、8と同じく極めて丁寧なナデ調整で、平滑である。10は、体部上半部にあたると考えられる同一個体片を多数有するが、接合できず、口頸部のみの図化となった。6と同一個体かと思えるほどに、色調や形態、調整は酷似している。6よりは厚手で、ハケ目原体の違いや、残存範囲の点からも別個体である。

壷形土器(11)　復元口径19.6cmを測る。有段口縁大型壷形土器で、外反しながら伸びる長い頸部に、同じく外反する長めの口縁帯がつき、上端は先細りにやや鋭く収める。内面には段はつくらない。内外面の調整は摩耗により不明瞭であるが、口縁部外面の一部に、ハケ目が残存する。

坩形土器(12～15)　12は、いわゆる須恵器模倣の甕形土器である。同一個体と考えられる破片のなかに、体部に穿たれた孔のごく一部分を残すものがある。強く開く口頸部から、丸みのある稜状の段を成したあと、やや外反する短い口縁部となり、端部は比較的鋭く収める。全体は非常に薄手の仕上がりで、調整は摩滅により判然とはしないが、口縁部の内外面にナデ調整と、それに先行するハケ調整の形跡を留める。体部内面の頸部近くでは、粘土紐接合痕を残す。13は口縁部小片で、やや大型の部類に属そうか。14は、器高 8.1cmのほぼ完形品で、無骨で歪んだ球形の体部をもつ。頸部は強くすぼまり、短めの口縁部が開く。調整は、底部が指押さえや荒いヘラケズリで凹凸激しく、体部上半はナデ調整である。口縁部は、外面ナデ調整で、内面は板ナデとなる。15は、口縁部を欠くが、体部はほぼ完存する。上下に潰れた体部で、左右非対称の歪みがある。調整は比較的丁寧で、内外面ともにナデ調整である。

高坏形土器(16～19)　16は、坏部の半欠品で、復元口径は14.6cmと小型である。坏底部から一旦屈曲して広がる口縁部をもつ。外面の調整は、坏底部がヘラケズリ調整で、口縁部は丁寧なヨコナデ調整を施す。内面はナデ調整であるが、口縁部には、先行する簾状のハケ調整痕を弱く留める。17は、下方に緩く膨らみながら広がる支柱部。18は、支柱上部から坏底部にかけての破片である。いずれも摩滅が激しく、調整は不明である。19は、全体のなかでは非常に異質な形態の坏部片である。ほぼ均質な厚さで表裏水平な面を成す円盤状の大型坏底部に、外反しながら大きく開いて伸びる口縁部がつく。調整は、内外面ともにハケ調整後にナデをほどこす。坏底部内面と口縁部との接合部剥落面には、明瞭なハケ調整痕を残すので、坏底部内面のナデに先行するハケ調整は、口縁部積み上げ以前のものであることがわかる。

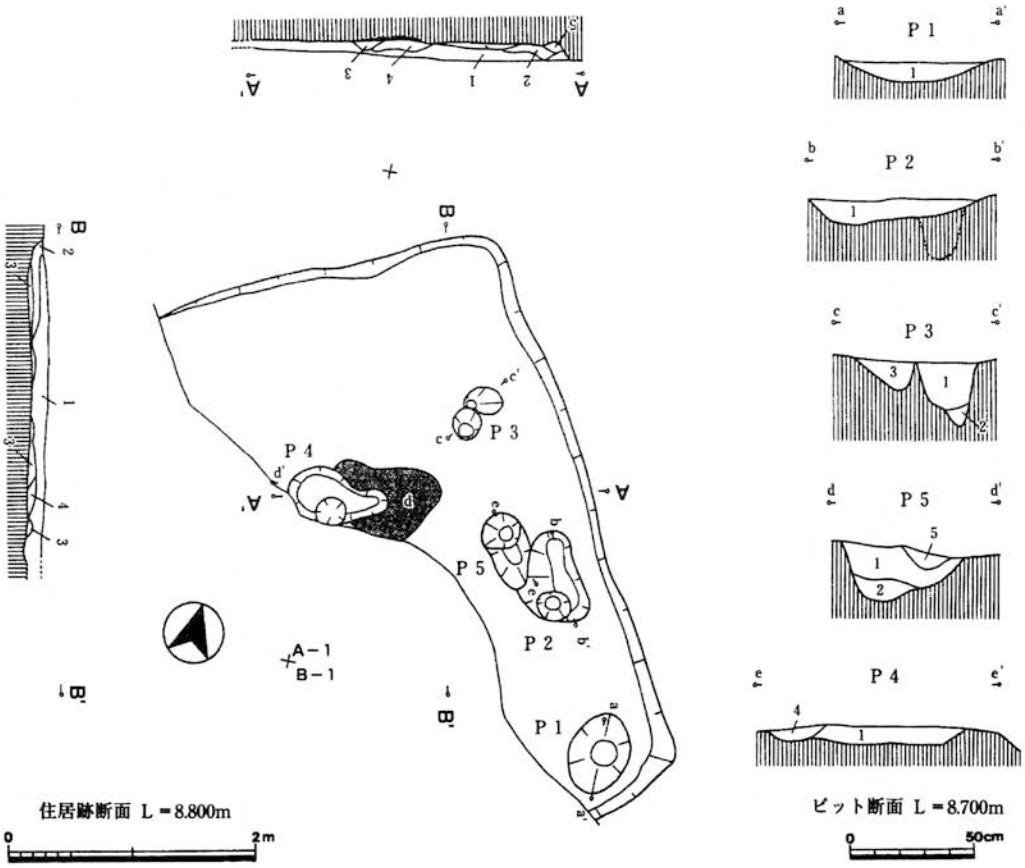


第59図　6号住居跡出土遺物実測図（S＝1/3）

6．7号住居跡

(1)遺　構（第60・61図）

形　態　6号住居跡の南西壁から約5m隔ててあり、主軸をほぼ同じくする。南西側は斜めに削平を受けており、全体規模は不明であるが、残存する北東壁が長さ約4.5mを測り、炉が中央に設けられていたとすれば、これを長辺とする長方形プランを呈していた可能性が考えられる。掘り込みは浅く、壁高は10～15cm程度で、立ち上がりもルーズである。壁周溝は持たない。明確な主柱穴はみあたらず、また、検出されたいくつかのピットも、底面形態や、深さ等の関係で、



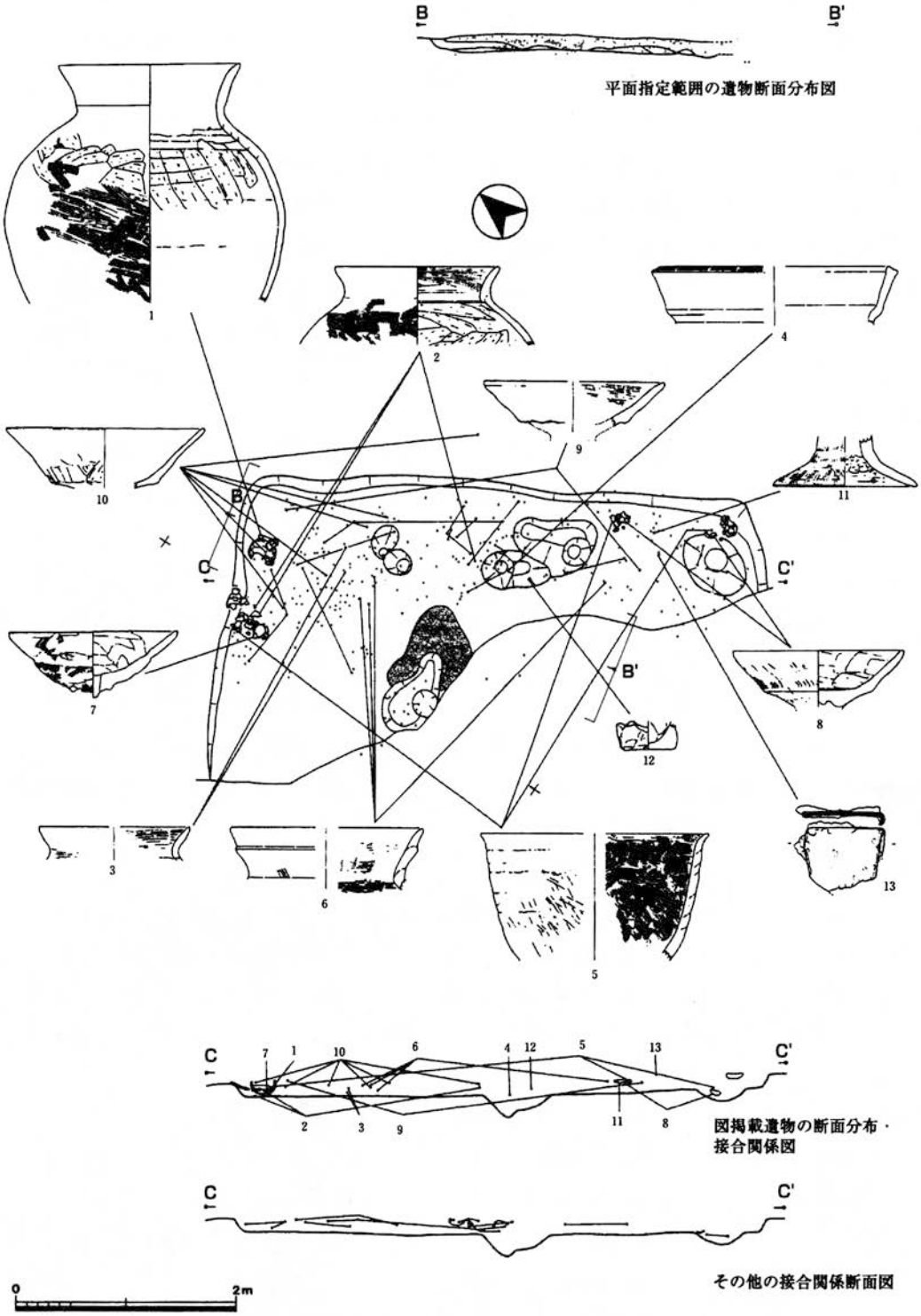
7号住居跡覆土土層註

1層：黒褐色土　炭化物片・焼土粒少量含有。
2層：暗褐色土　地山土粒多量含有。やや赤み帯びる。
3層：黄褐色土　地山土粒・ブロック主体。炭化物片時折含有。
4層：赤褐色土　暗褐色土をマトリックスとし、焼土粒・ブロック極多量含有。やや軟弱。
5層：黒褐色土　地山土粒・ブロック少量含有。
（地山土＝黄褐色土）

P1～P5土層註

1層：暗(灰)褐色土　淡くくすむ。地山土ブロック・炭化物片少量含有。堅緻。
2層：(灰)黄褐色土　灰褐色土をマトリックスとし、地山土粒・ブロック多量含有。堅緻。
3層：黒(褐)色土　木根痕層か？黒色強く軟弱。
4層：(黄)褐色土　地山土ブロック多量含有。焼土粒混在。
5層：黄(褐)色土　地山土粒・ブロック主体。堅緻。

第60図　7号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）



第61図　7号住居跡遺物出土状況図（S=1/60）

柱穴とは認めがたいものが多い。これらの傾向は、6号住居跡と共通する。

施設等　床面は不明瞭で、硬化が少ない。炉跡は、深さ10～15cmで80×44cmの不整楕円形ピット（P4）と、その東半部周囲を取り囲む焼結面からなる。ピットは、焼結面に囲まれたプランの細くなっている部分において焼土を覆土にもつ。また、焼結面は、図上で広い範囲を示しているが、実際には硬化面は乏しく、焼土粒・ブロックの分布範囲という程度である。

遺物出土状況　覆土遺物は比較的多量に出土しており、6号住居跡に似た傾向をもつ。出土状況図も同様に、ドット遺物・出土状況実測遺物ともに、明確に床面遺物として抽出する現地作業は行えなかった。まとまった出土状態を示す土器が、壁際に多という傾向や、それらが床面からやや浮いた状態にある点でも、6号住居跡と共通する。このなかで、1の甕形土器が、形状のわかる土器として唯一、床面直上と考えられる出土状態を示している。

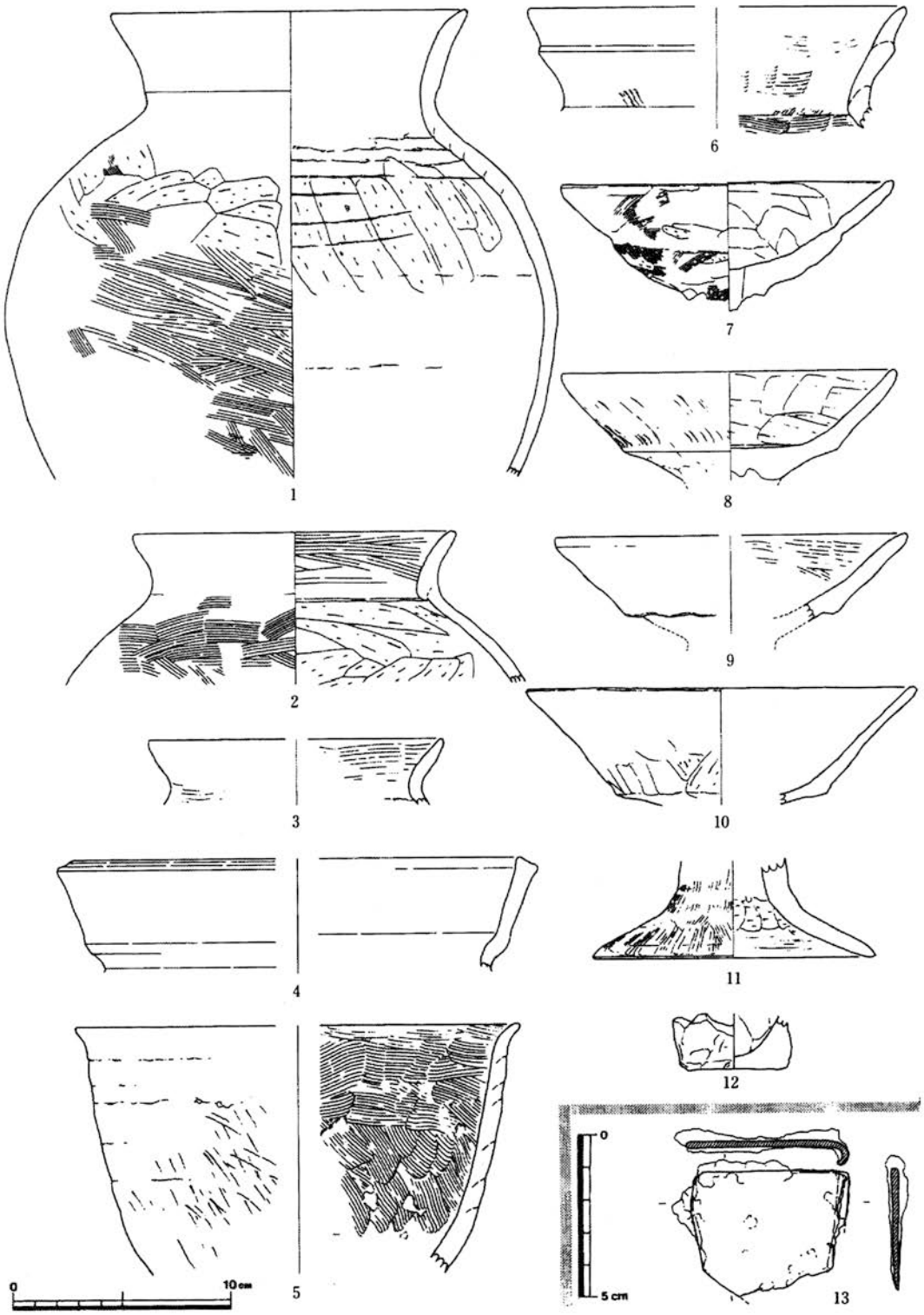
(2)遺　物（第62図）

甕形土器(1～4)　1は、口径16.3cmを測る。体部形態は、最大径を上半部にもつが、球胴のタイプに近い膨らみがみられる。体部外面の調整は、肩部以下がハケ調整で、肩部より上は、粗く強いナデ調整あるいは荒いヘラケズリ調整がみられる。ハケ目の範囲に合致して、厚いススの付着がみられる。体部内面は、頸部近くで顕著な粘土紐接合痕を残し、それ以下は、比較的丁寧なヘラケズリ調整が施される。頸部から緩く屈曲する口縁部は、弱く外反しながら比較的長く伸びて先細りとなるが、分厚でボテッとしている。口縁部内外面ともに調整はナデである。2は、緩く外反・外傾する短い口縁部をもつ。口径約15cmのやや小型の部類で、肩部に向かう膨らみは強く、球胴タイプになるものと思われる。調整は、体部外面がハケ調整、内面はヘラケズリ調整、口縁部内外面は、ナデ調整を受けるが、頸部内面には口縁部接合痕をそのまま残す。3は小型甕口縁部の小片である。推定口径は13.5cmで、ごく弱い内湾傾向をもって短く外傾する。4は、口縁部の小片。下端の段屈曲部は丸みをもち、全体としてボッテリとしている。

鉢形土器（5）　口唇部の残りが悪く、体部の傾きの認定はかなり難しい。一応、外面に見える粘土紐接合痕をほぼ水平にすることで傾きを求めた。体部は、ごく緩く開きながら内湾ぎみに立ち上がり、上端で小さく外方に屈曲させて先細りの極めて短い口縁部とする。器形的には、甑形土器の一部の形態に似る。内面は底部側を除いて全面ハケ調整。外面は、ナデ調整で、粘土紐接合痕あるいはその凹みが随所に残る。外面には被熱痕とススが付着している。

壺形土器(6)　山陰系の延長で捉えられるものと考えられる。厚手で、口縁部は短く外反し、下端は丸く外方へ小規模に突出する。口縁部に比して頸部は長めに緩く外反する。外面調整はナデ、内面はハケ調整後にナデを施すが、頸部下端を境に、胴部側はハケ調整を残している。

高坏形土器(7～11)　7は、極めて厚手で、無骨で粗野な印象を受ける。坏底部から一旦屈曲して広がる口縁部をもつタイプではあるが、その屈曲部の段は、ほとんど形骸化している。坏底部外側は椀形、内面は、口縁と底部の境の無い浅鉢形をなす。調整は、外面が全体ハケ調整後に荒く部分的なナデを加えており、内面はナデ調整である。8も外面屈曲部はルーズであるが、一



第62図　7号住居跡出土遺物実測図（S＝1/3、鉄器：S＝1/2）

応ここを境に、口縁部側へは屈曲を造り出す掻き上げるようなハケ調整を施している。内面は、ヘラ状具による強いナデ調整を施している。9も外面に屈曲部をもつが、タイプは異なり、口縁部下端が粘土ダレ状に不整に垂れて段をつくる。10は、坏底部から角張るかたちで屈曲し、直線的に長く伸びる口縁部がつく。薄手で他の2点とは異なる。口縁部外面はヨコナデ調整で、最終調整として、屈曲部を直線的に仕上げるためのケズリ及び強めのナデ上げが下端をめぐる。11は脚部片で、比較的分厚く、外面はタテハケ調整後に軽いナデ調整、内面は粗いヨコナデ調整で、支柱部にかかる内面屈曲部のヨコケズリを最終調整としている。

手づくね土器（12）　口縁部を欠くが、平底でコップ状の形態をとる。底径は4.7cm、外面調整は指押さえとナデ、内面は、指単位の明瞭な、底部中心からはじめる強いナデ上げである。

鉄製品（13）　折り曲げ部のあるところから、鉄鎌と考えられるが、欠損部と残存部の状態が不明瞭なため、形態が判然としない。図上の上縁を背として、直角着柄としたとき、左下に斜行して鋭利な縁辺が1cm程残存することになる。折り曲げ部の対辺（左側縁）を折損部と理解すれば、曲刃鎌あるいは、鈍角着柄等の可能性も考えられるが、この部分の縁辺は現状では丸みをもっていて折損部としての判断ができない。横4.8cm、縦4.1cm、鉄板厚1.5mmを測る。

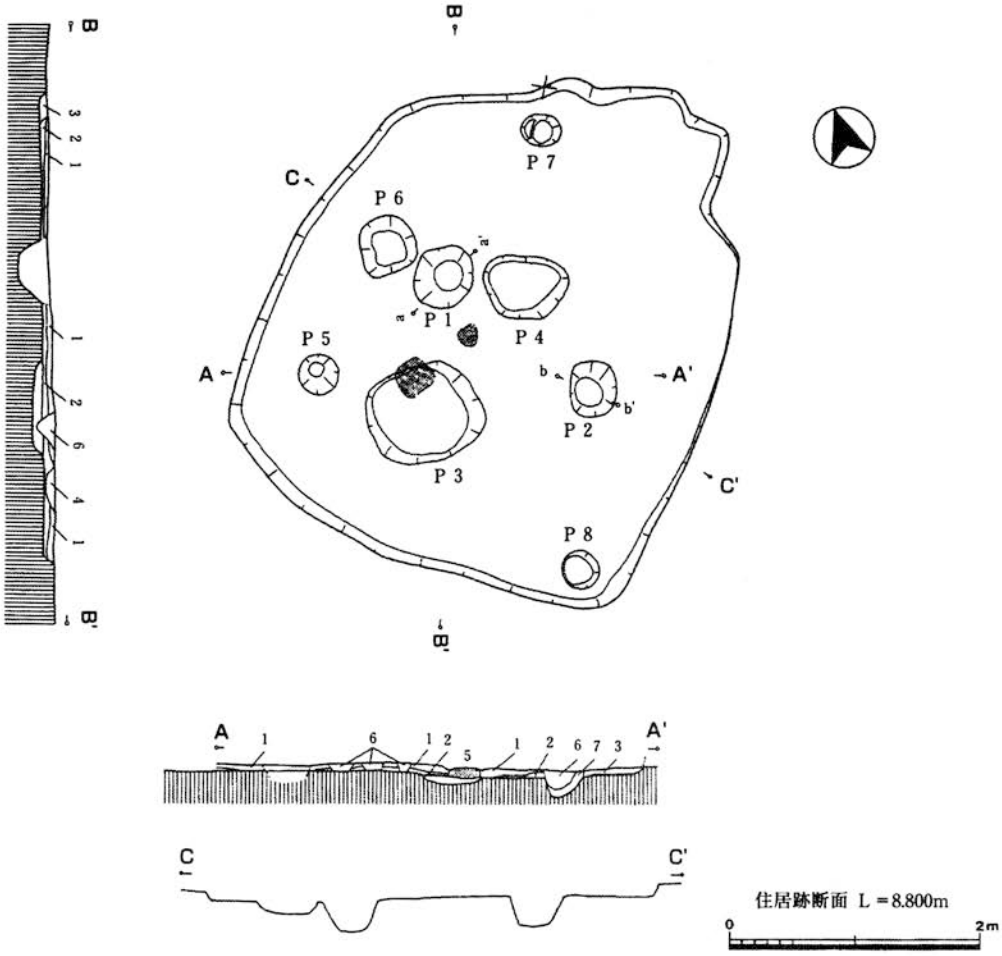
7．9号住居跡

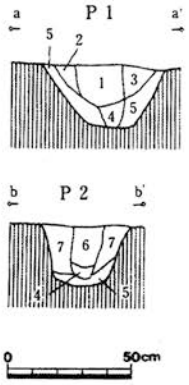
（1）遺　構（第63図）

形　態　昭和59年度調査区の南西隅に位置し、市道調査区東端の7号住居跡とは、約6mの距離を置く。本住居跡に関しては不明確な点が多い。竪穴の掘り込みが極めて浅かったことに加えて、調査区の隅ギリギリに位置していたことや、地形的に斜面部にかかっていたこと、さらに調査期間の終了間際の検出であったことなどが相まって、充分な調査が行えたとは言いがたい。結局竪穴プランの確認ができず、精査中に床面に到達し、炉跡と考えられる焼結面が検出された。提示した平面図は、床を剥がすことによって検出された竪穴プランである。従って、土層断面図も、上面を床面とした、掘り方断面図となっている。調査当時の記録に不足の部分が多々有り、ピットの掘り込み面との整合性などにおいて、矛盾点やあいまいな点が指摘されるが、ご容赦願いたい。

掘り方プランは、4.3×3.6mの不整方形で、北西辺の不明瞭プラン部分を除くと、一辺3.6mのほぼ正方形プランとなる。深さは最大で10cm程度を測る。壁周溝は不明。主柱穴はＰ1とＰ2の2本主柱を想定している。径が40～50cm、深さは約50cmを測り、柱痕状の土層断面も示す。

施設等　床面は不明瞭で、硬化が少ない。炉跡は、27×28cmの隅丸方形を呈する焼結面として確認したが、掘り方断面では、厚さ約8cm程の焼土層として把握されている。その下位で、80×88cmの浅い方形土坑（Ｐ3）を検出しているが、記録上は、炉穴としての落ち込みにはなっていない。その他のピットでは、Ｐ5とＰ7が17～20cmの深さを測るものの、それ以外は10cm程度と浅い。実際の確認面についても、不詳である。





ピット断面 L＝8.700m

9号住居跡覆土（堀り方）土層註

1層	暗褐色土	黄褐色粘土ブロック少量含有。やや軟質の貼床土。
2層	暗黄褐色土	炭化物片・焼土粒子少量含有。
3層	暗褐色土	1層よりやや赤みおびる。比較的均質。しまりやや劣る。
4層	暗褐色土	焼土粒・ブロック、炭化物片多量含有。赤み強い。
5層	赤褐色土	硬質焼土層。炉跡。
6層	暗褐色土	1層よりやや黒い。しまり無く、軟質。炭化物片含有。

P1・P2土層註

1層	暗褐色土	炭化物片・黄褐色土粒子含有。しまり・粘性有り。
2層	暗(黄)褐色土	黄褐色土粒多量含有。炭化物片含有。しまり・粘性有り。
3層	暗褐色土	やや赤みおびる。炭化物片・黄褐色土粒含有・しまり・粘性有り。
4層	暗黄褐色土	炭化物片少量含有。しまり有るが軟質。
5層	黄褐色土	やや濁った地山土。炭化物片微量含有。やや軟質。
6層	暗褐色土	赤みおびる。しまり強く堅緻。炭化物片少量含有。
7層	暗褐色土	6層より明るい。しまり有り、やや軟質。炭化物片少量含有。

第63図　9号住居跡平面・断面図（S＝1/60）、ピット断面図（S＝1/30）

遺物出土状況　プランの確認ができず、包含層掘り下げの状態で床面にまで達してしまったものの、遺物集中を認識した段階で、住居を想定し、住居番号も付していたので、遺物については一応、住居跡単位での取り上げが行われていた。しかし、すべて「覆土一括」扱いであり、出土状況図の作成や床面遺物の認定は行われていない。量は、パンケース１箱程度と比較的少ない。

（２）遺　物（第64図）

弥生時代後期に属するもの（１・11～13）が混在する。

甕形土器（１～４）　１は弥生時代後期の擬凹線をもつ有段口縁の小片。口縁帯はやや内湾ぎみに直立し、断面は先細り、擬凹線は浅く不明瞭である。

２は、残存率約二分の一の比較的残りの良い甕形土器である。内屈する短い有段口縁をもつもので、甕としては本遺跡で唯一の形態である。丸みを持って退化著しいが、山陰系の流れを汲むものであろうか。口径は14.2cmで、体部は最大径をやや上部にもつが、球胴形に近い。外面調整は、口縁帯以下の頸部から体部全体に目の粗いタテハケ調整を施し、体部下半部は非常に荒いヘラケズリとナデ調整が加えられ、頸部は横ナデが加えられる。内面は、ハケ調整後にヘラケズリと部分ナデ調整で、頸部に近い方ほどハケ目や一部粘土紐接合痕を良く残す。３は、復元口径約15cmで、「く」の字に屈曲する直線的で短い口縁部をもつ。口唇部は、丸く納める部分と、丸みを持ちながらも、外傾する狭い端面を持つ部分が混在し、また、小さな圧痕状のたわみも多いなど、不定である。調整は、体部外面から口縁部内外面に細かいハケ調整が施され、口縁部内外面にはナデ調整が加えられる。体部内面は、粘土接合痕をよく残す。４は、口縁部の小片。直線的でやや長く、また、厚さの変異も少なく、先端は丸みをもって納める。

小型（鉢形）土器（７）　鉢形と壷形の折衷的形態である。外面の頸部屈曲は緩いウエーブを描く程度で、内面は、口縁部下端が体部にかぶさる接合痕を成して境界とする。体部内面が指おさえで、その他はナデ調整。口縁部外面には、先行するヨコハケ調整痕が僅かに認められる。

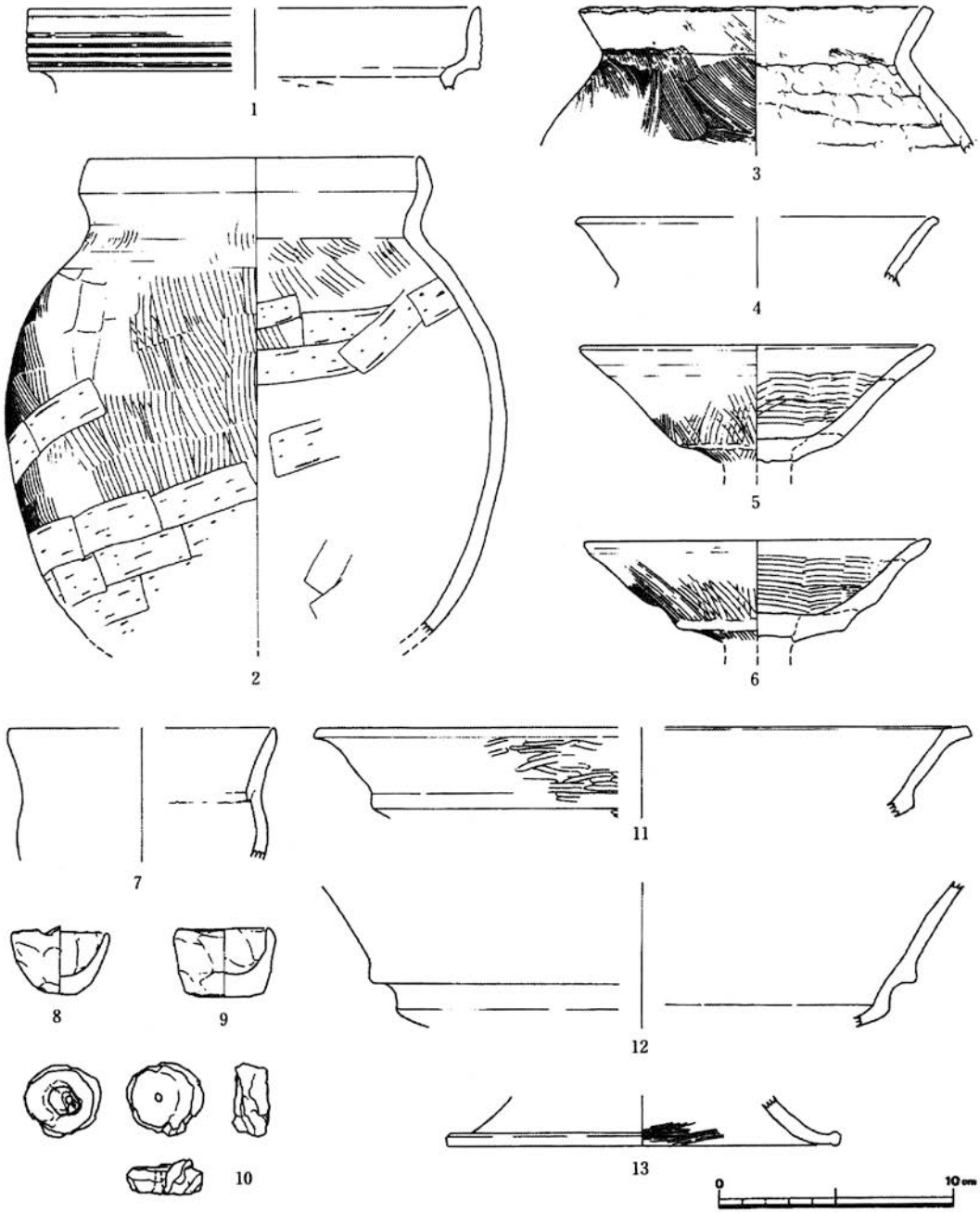
高坏形土器（５・６・11～13）　５・６ともに、形態・法量・調整および作風に至る全てにおいて酷似する。６はほぼ口縁部が全周して口径14.8cmを測り、５は、残存率は低いが、ほぼ15cm程度に復元される。坏底部から一旦屈曲して広がる口縁部をもつもので、６の坏底部からの屈折後に抉るように凹ませて立ち上がりを持たせる造作は、５の図では表されていないが、同様にみられる。外面調整は、斜め放射状のハケ調整で、口縁部上半はナデ消されている。坏底部の屈曲部近くは口縁部からの粘土が所々被ったままである。内面調整は、底部がハケ後ナデ調整。口縁部は、ナデに先行して円周に沿うハケ調整が施されており、下半部でより多く調整痕が残される。

11～13は、弥生時代後期に属するもので、いずれもかなりの小片である。11は、坏底部から屈曲して短く立ち上げた後、大きく開く短い口縁部を成し、端部は、ほぼ水平に折り曲げて上端面をつくる。12は、有段鉢形に近い器形をとる。段部を深く抉り、口縁下端に明瞭な稜をつくる。13は、脚部片で、端部がやや肥厚して上方に小さく跳ねる。外方・上方に狭い端面をもつ。

手づくね土器（８・９）　８は、丸底に近く、内面も、６単位の指頭による中心からのナデ上

げのみで丸底となっている。9は、平底のコップ形で、底部はかなり分厚いので、内部は浅い。

その他（10）　不明の土製品。表裏や周囲面はあばた状で、剥落したような雰囲気もあるが、明確にはしがたい。中心に穿孔があり、片面から漏斗状にすぼんで、出口は竹串程度の径となっている。



第64図　9号住居跡覆土出土遺物実測図（S＝1/3）

8．小　結

遺構は、６軒の竪穴住居跡を検出したことになり、調査範囲が狭長な割には、良好な遺構検出を成し得たと言える。特徴としては、掘立柱建物が検出されていないこと、住居跡の重複関係が無く、整然とした配置をみせていることがあげられる。調査区が、台地の縁辺近くであったことから考えて、倉庫の類の掘立柱建物を台地中央部に持つ集落構造も想起される。さらに、建物重複がみられないことから、全掘すれば、一定期間における集落の景観を明解に示す良好な遺跡となる可能性も強い。ただ、重複関係が無いことを理由に、検出された住居跡が全て同時併存であったとは断定できない。しかしながら、最後のまとめでも触れるが、各住居跡には個性があり、これが単純に「どれが先でどれが後」ということだけでは処理できない問題を示唆しいるように思う。例えば、覆土遺物が非常に乏しい２・４号住居跡と多量に含む６・７号住居跡の違い。それに呼応するかのような住居形態の整美さや規模の違い。これらのことは、先後関係に加えて、各々が有機的にからみあった機能上の違いという点でも一考すべき問題と考えている。

次に、編年的位置付けに関することであるが、基本的な状況をまとめておきたい。住居跡はすべて古墳時代中期に属するが、遺物からは、次のような傾向を整理できる。

①古式須恵器の伴出は認められていない。

②須恵器模倣の甕形土器が１点のみ認められる。

③布留系の甕形土器は極めて乏しく、やや退化した形態が主体である。

④甕は「く」の字口縁であるが、形状はやや不定。内面体部上半に粘土接合痕をよく残す。

⑤坩形土器が定量存在する。

⑥高坏で、坏底部と口縁部の境の屈曲部に突出した凸帯をもつものは主体的には伴っていない。

⑦住居跡に伴う器台形土器は無い。

⑧土師器の埦は、明確には伴っていない。

⑨手づくね土器は一部の住居跡に少量認められる。

それぞれの住居跡出土土器について、相互の時間軸上での相違を指摘することはできないが、以上の気付いた点で、田島明人氏の漆町編年（田島1986）にあてはめて考えたい。まず上限についてであるが、⑤の坩形土器は、田島氏の整理した「小型壷形土器Ｆ類」であり、定型化した所謂「小型丸底壷」とは異なる「丸底坩形土器」と呼べるものである。これに、⑦を加えて考えると、ほぼ漆・11群以降ということになろう。下限については、須恵器が伴っていない点に関しては、集落個々の様相の違いからという場合もあろうが、⑧の埦の欠落、⑥の高坏形土器の状況などから考えて、漆・13群よりは古く位置付けられることになる。④の甕形土器は、田島氏の分類でいう「甕形土器Ｊ類」であり、漆・12群で出現・盛行する。以上のことから、本遺跡の住居跡出土土器は、漆・12群にかなり限定される様相を示していると考えたい。そして、時間幅についても、前後の時期を若干含むという程度で評価して差し支えないものと思う。

第４節　包含層出土遺物と土器観察表

本節では、縄文時代遺物を除く包含層出土遺物と、第２節・第３節を合わせた掲載土器の観察表を載せる。第３節の古墳時代の各住居跡出土遺物では、混入品である弥生時代遺物を特に抽出することなく掲載していた。形態的に明らかなもの以外でも、胎土観察等によって、ある程度の区別は成し得るものであろうが、甕胴部片などの分別に関して筆者が自信を持てなかったことと、分別・抽出に伴って生じる出土状況ドット図の修正作業に費やす時間がなかったことによる。ただし、縄文時代遺物に関しては、古墳時代住居出土遺物から抽出し、ドット図からも除外している。そして、縄文時代住居跡覆土出土遺物で、弥生・古墳時代に属するものについては、これを包含層出土遺物として除外し、本節で掲載することになっている。包含層出土遺物を弥生・古墳の各節毎にではなく、両時代混在するかたちで一節を設けることになったのも、抽出・整理できなかった筆者の力量不足によるものである。これに関連して、土器観察表についても、縄文時代遺物を除いた、第２節と第３節掲載遺物及び包含層遺物を一括して本節で提示すことにした。最初に述べるべきであったが、整理・報告作業の不徹底をお詫びしたい。

１．包含層出土遺物（第65～70図）

包含層遺物の調整等については、観察表において簡単に記載しているので、ここでは概略説明程度とする。形態的な特徴の把握や分類については、ここでの説明と重複する点も多くなるが、次章において再度全体を通した形でまとめることにしたい。

(1) 甕形土器（１～46・61）

１～18は、擬凹線文の施された有段口縁甕形土器である。内面にミガキを施した精製品的なもの（１・８）、端部の上下拡張的なもの（４など）、断面三角形状のもの（６・７）が、通有品に加えて存在する。また、内面に指頭圧痕が残されている14～17は、総じて外反・先細りの共通形態を維持している。

19～26は、無文の有段口縁甕形土器である。19～21あたりは、擬凹線文を有するものと共通形態を維持しているが、22～26は、むしろ端部拡張によって有段風の口縁形態としたものである。そういった意味では、「く」の字口縁とすべき形態かもしれない27と28も、意識的には有段口縁に通じるものと考えられる。

29は小型甕形土器の口縁だが、鉢形の体部がつくかもしれない。61も同様で、体部径に比し口径が大きく、鉢器形に近い。内外面赤彩が施されている。

30・33～44は、「く」の字口縁甕形土器である。30は、小型で、口縁部内面ハケ調整後、口唇部内面に強いナデを加えて面をつくっている。弥生時代後期に属するものであろう。33は、口唇部肥厚のいわゆる「布留系」甕形土器。34～44は、古墳時代中期に属する甕形土器の口縁部で、

多様な形態を持ち、一貫性に欠ける。

45・46は、形態的に「受け口状」と称される口縁に近いものであるが、いわゆる「近江系」とされる部類に比べ、口縁上端に面がなく、丸みを帯びて弛緩したような形態である。46は内外面に赤彩がみられるが、45と同一個体の可能性もある。外面には煤の付着がみられる。体部のハケ目は粗い。

(2)壺形土器 (47～58・64～66)

47・48は、有段状口縁を有するものである。前者は、短い口縁帯の下端が外方に突出するもの、後者は受け口状に近い。ともに、長胴の体部に、強く屈曲する短い頸部がつく似たプロポーションであるが、前者は底径がやや大きく、外面調整にミガキを用い、後者は外面をハケ調整とする。

49は、水平に長く伸びる口縁基部に、擬凹線を有する直立した短い口縁帯がつく。50は、口縁端部に垂直な面を持つものともいえるが、一応、有段状の口縁として理解しておく。51は、広口壺系を考えたが、頸部の状況及び内面のケズリ調整などから、分類には自信がない。口唇部が上方に丸く突出して、内傾する外端面をつくる。52は、短頸の直口壺である。

53～58は、細頸壺の類と考えられる。ただし、53は、頸部に斜行刻みの入った突帯がめぐる二重口縁壺の可能性も大きい。54は、扁球胴で頸部に突帯がつく。台付とすれば、56のようなものが付くのであろう。ただし、56は、内面にヘラケズリ後のミガキ調整ともとれる形跡をやや曖昧ではあるが認めることができるので、台付鉢となるかもしれない。55は、扁球胴の中央最大径部に二本の突帯がめぐり、その突帯間には、半裁竹管状工具による連続刺突（押し引き）文が施される。突帯上方には渦状スタンプ文、下方には、斜行沈線文がみえる。また、赤彩の痕跡がある。57は、擬凹線文をもつ有段の台部。58は、著しく扁平な算盤玉状の胴部から、細長く直立する口頸部へ境界無く移行する。外面と口縁部内面が赤彩されている。

以上の47～58が弥生時代後期あるいは古墳時代初頭に属するものと考えられる。

64は、やや長めの頸部に外反する長めの口縁帯が付く有段口縁系のものだが、胎土及び焼成具合などから、古墳時代に属すると考えた。65・66は、頸部が強く屈曲して大きく開く口縁部で、端部は下方にやや肥厚し、狭くやや丸みをもった、垂直な外端面をなす。非常に厚手で、あまり類例をみないもののように思う。

(3) 坩形土器 (62・63)

62は球形の体部に短めの口縁が付く。63は厚手の口縁部片である。

(4) 蓋形土器 (59・60)

59は、紐頂部が開口しているもので、体部から「く」の字に強く屈曲して紐先端部で面を持つ。60は、紐頂部が凹み、先端部が外方向に張り出すもの。紐先端部は丸い。

(5) 椀形土器 (67)

推定口径は約10cmと小さい。椀形土器として分類したが、古墳時代中期以降のそれであるかはわからない。口縁端部は外方に小さく屈折し、体部中位に、ごく弱い段が形成されている。胎土

及び焼成は、弥生時代後期のものに近似する。

（6）器台形土器・高坏形土器（68～87）

68～79は弥生時代後期に属するものである。口縁部では、69～71を高坏形土器とし、他を器台形土器とした。69・70は端部が肥厚するタイプ、71は体部が有段鉢形を呈するもので、やや新しい段階のものと考える。68は大口径のもので、甕あるいは鉢類の可能性もある。72は器台形土器と考えられ、長く伸びて外反する口縁帯に多条沈線が施される。74は、器受部が72とよく似た形態で、口縁帯が長く伸びて外反し、下端は下に強く突出する。やや厚手であるが、丁寧なミガキ仕上げである。同一個体と考えられる脚部は、柱状支柱部から屈曲して開き、端部は器肉に直交する面取りで四角く収める。73・75～80は脚部片である。73は端部を折り返して方形に拡張するもの、75・76は、ラッパ状に開脚する高坏形土器の脚、77～80は有段の脚である。重厚なつくりの77は、支柱に丁寧なミガキを施し、段部下方にしっかりとした擬凹線をめぐらす。78は、段部に細かい刻みを連続させ、その下に３条の沈線を間を置いて配した後、渦状スタンプ文をめぐらせる。そのスタンプ文は、単体のものを上下逆転させて連結し、Ｓ字状のごとく見せたものである。79は無段の可能性も強い。光沢すら帯びる精良品で、文様は上から、単体の渦状スタンプ文、沈線、タマキガイの貝殻腹縁を用いたのではないかと考えられる連続斜行刻みを上下交互方向の矢羽状とした文様帯、沈線帯、斜行刻み（ハマグリの類の貝殻腹縁か？）、そして沈線という構成である。80は、細い擬凹線に、櫛状具による縦の連続刻みを重ね、その下にＳ字の渦状スタンプ文がめぐる。

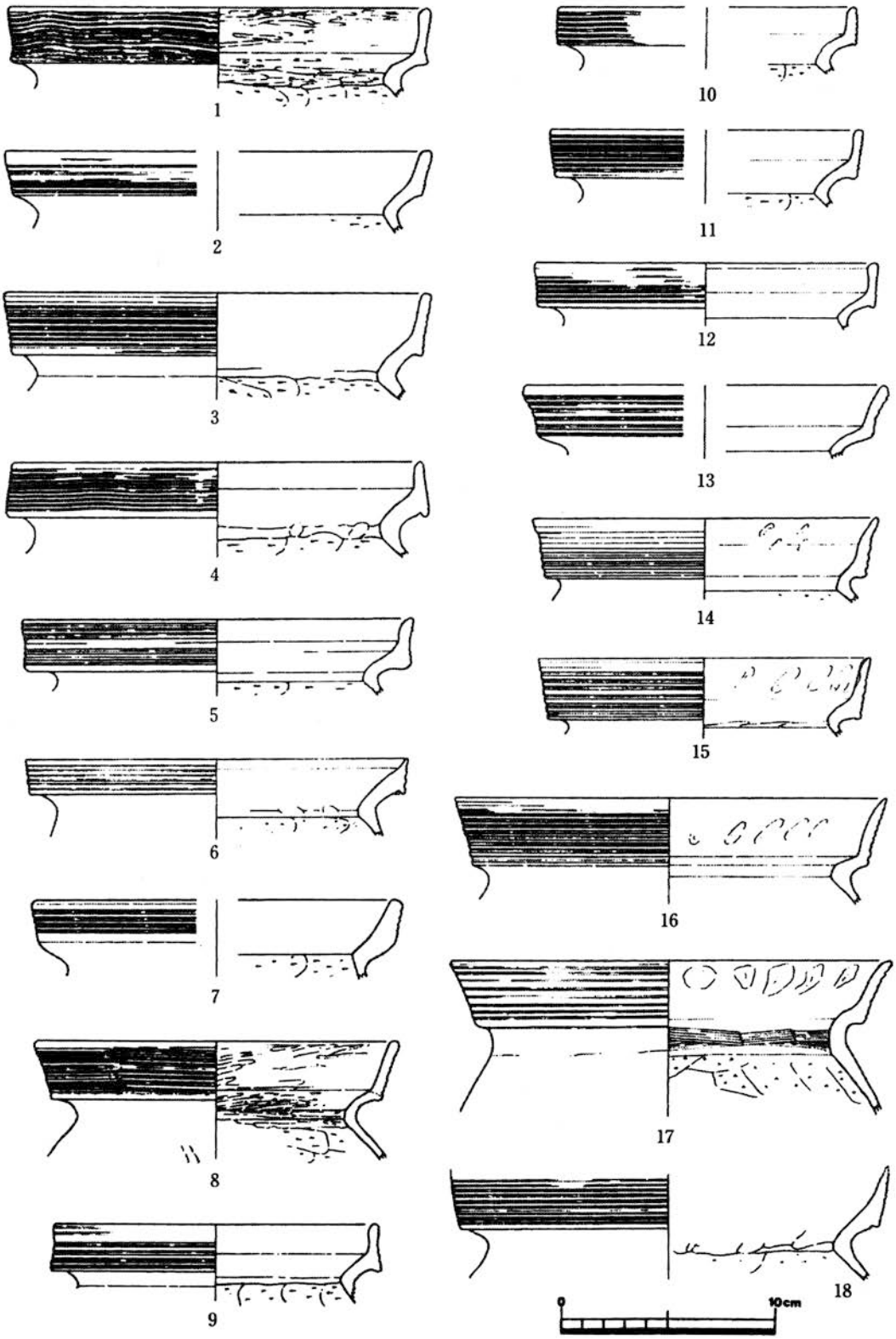
81・82は、古墳時代前期のいわゆる小型器台形土器と小型高坏形土器の類である。

83は、口縁部と坏底部との境に凸帯を持つもので、凸帯は、貼付けの形跡を明瞭にとどめ、無骨なつくりである。この手の高坏形土器は、中期後半の漆13群併行に特徴的にみられる形態で、本遺跡では唯一の出土である。84は坏底部から一旦屈曲して短く外反する厚手の口縁部がつくもの、85は、坏底部から口縁部へ明瞭な境を持たず、薄手の椀形となる。ともに古墳時代中期のものと考えるが、ほかに同類を見ない。86・87も中期の高坏脚である。

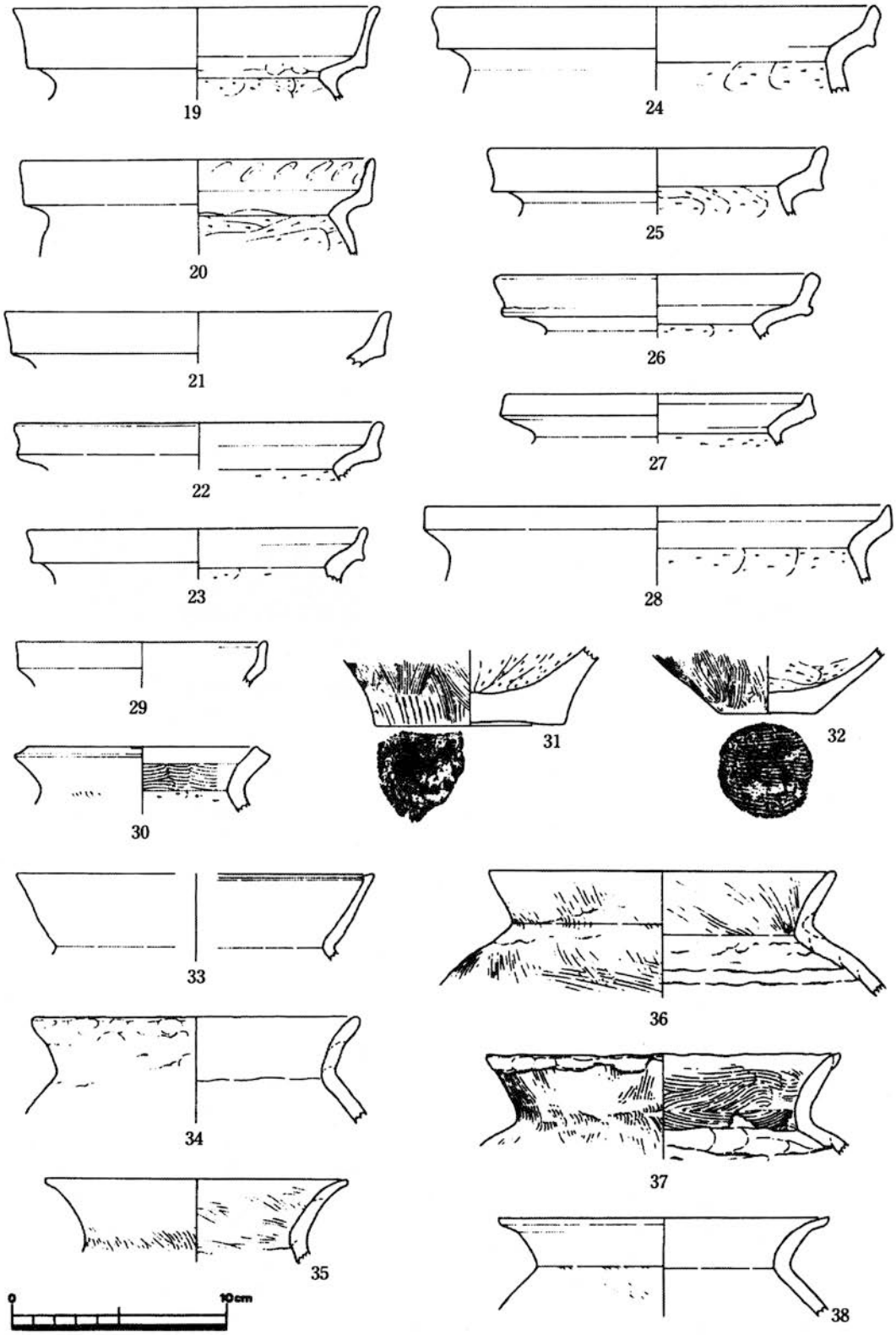
（7）その他

88は、甕あるいは甑形土器の把手部で、Ａ遺跡の主体時期併行、あるいは以下に述べる須恵器に伴うものと考える。89は土師質の土玉（錘）である。

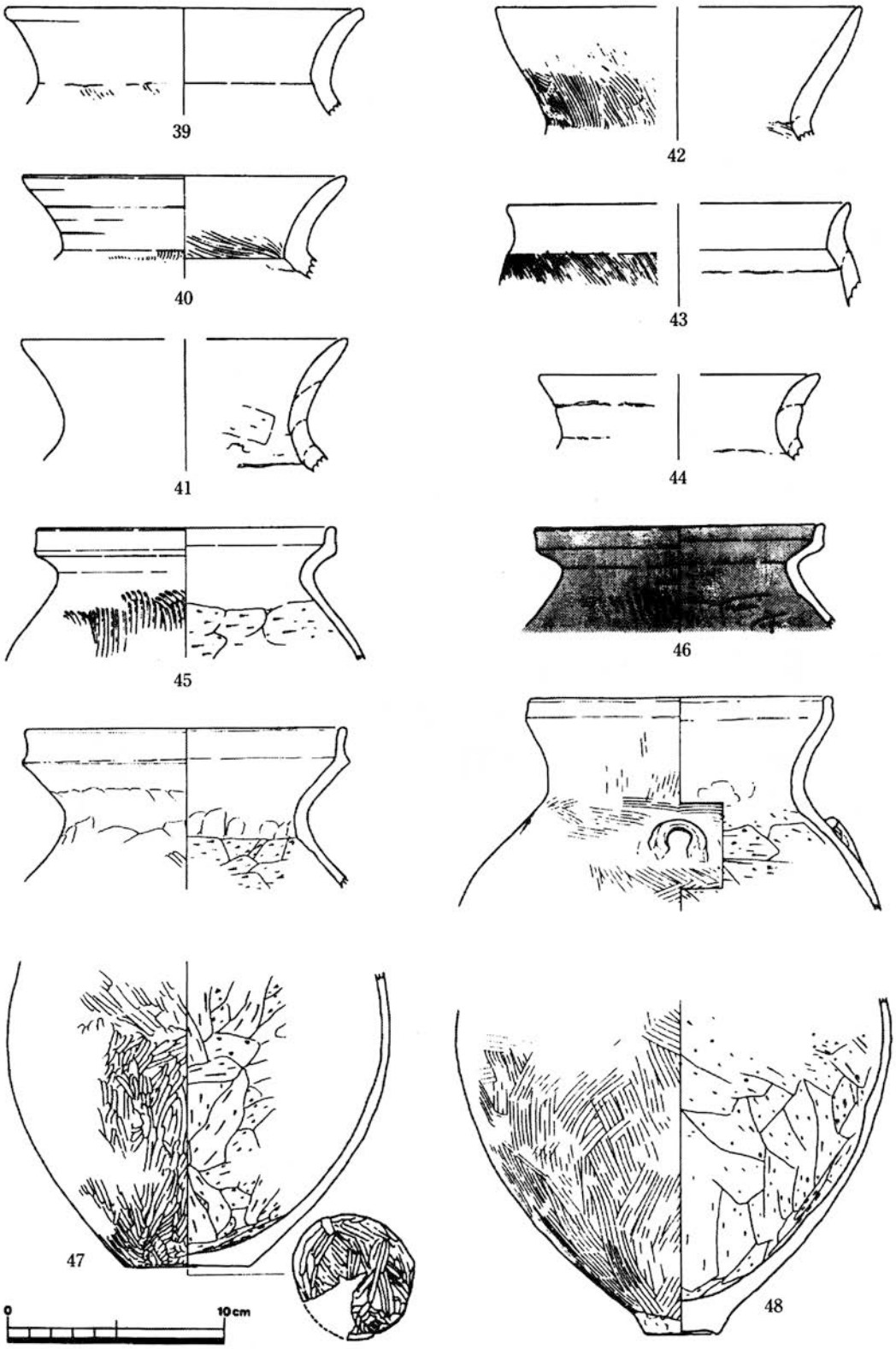
90～95は須恵器である。平城分類でいう坏Ｇの蓋片（90）と坏Ｈの蓋と身（91～93）があり、小片のため口径に修正余地を残すが、共存するものとすれば、Ａ遺跡主体時期末ないし、やや後出のものといえる。94は台付きの壺であろうか。他に、甕胴部片（95・96）がある。



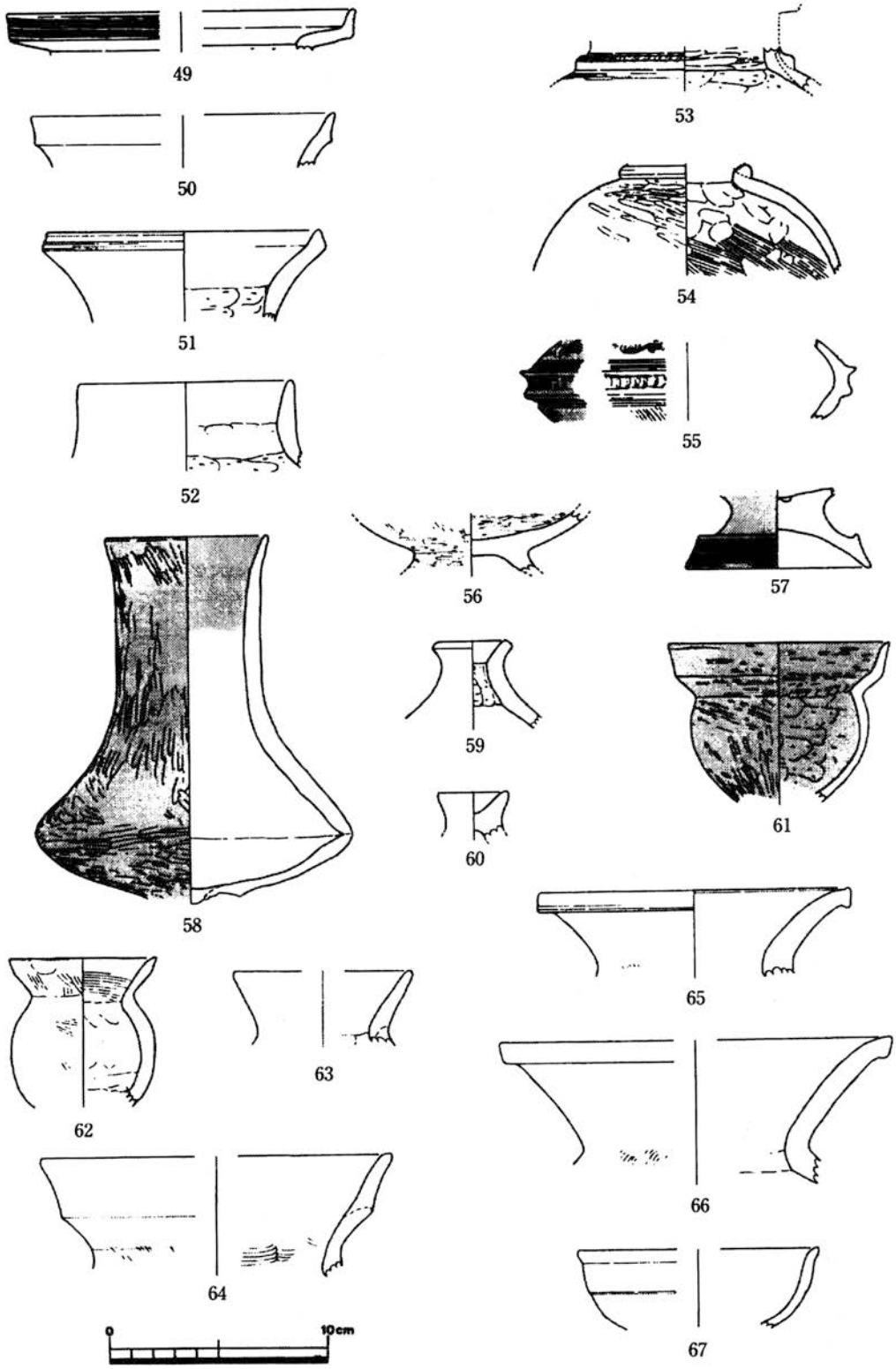
第65図　包含層出土遺物実測図(1)(S=1/3)



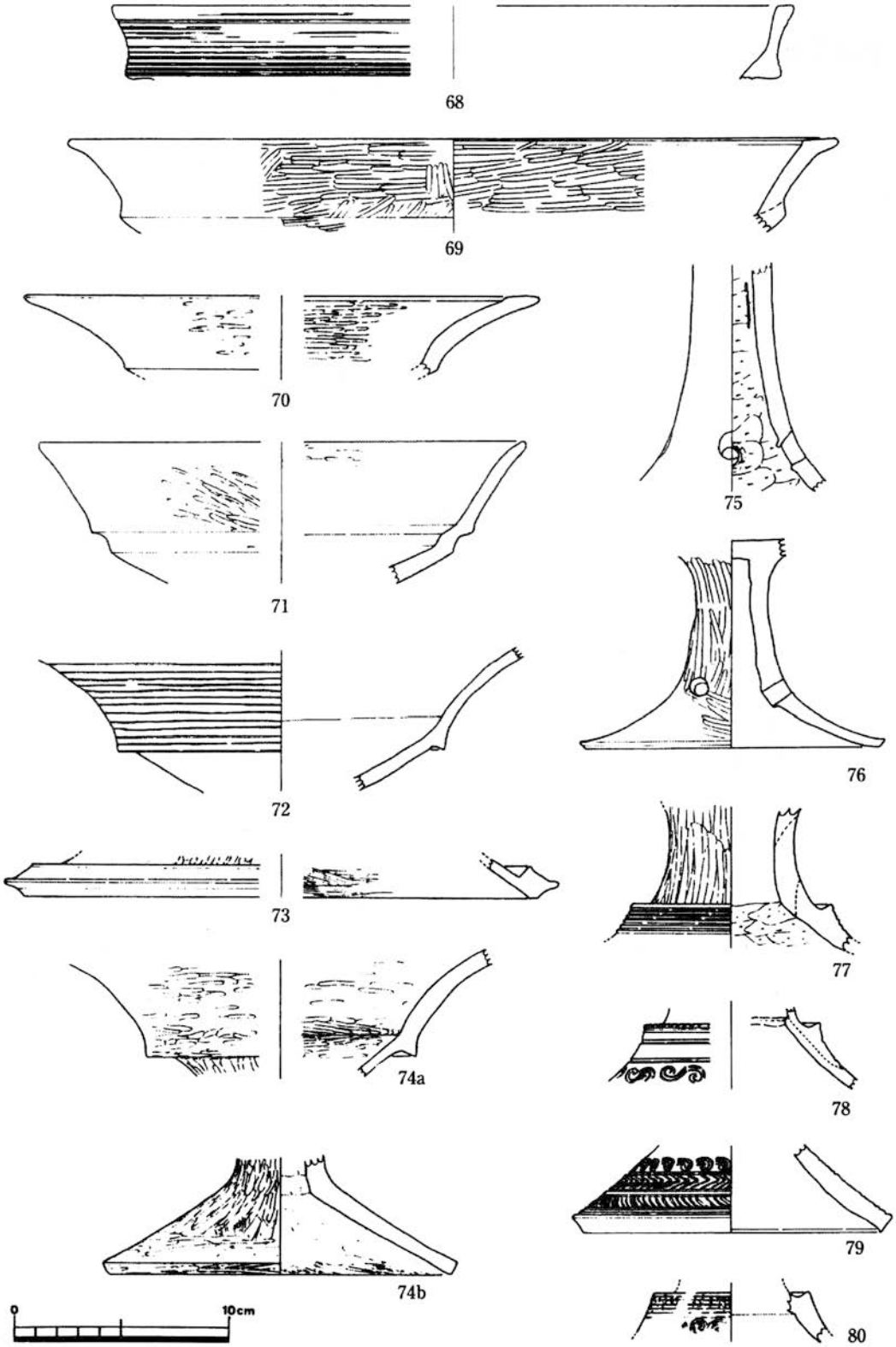
第66図　包含層出土遺物実測図(2)(S=1/3)



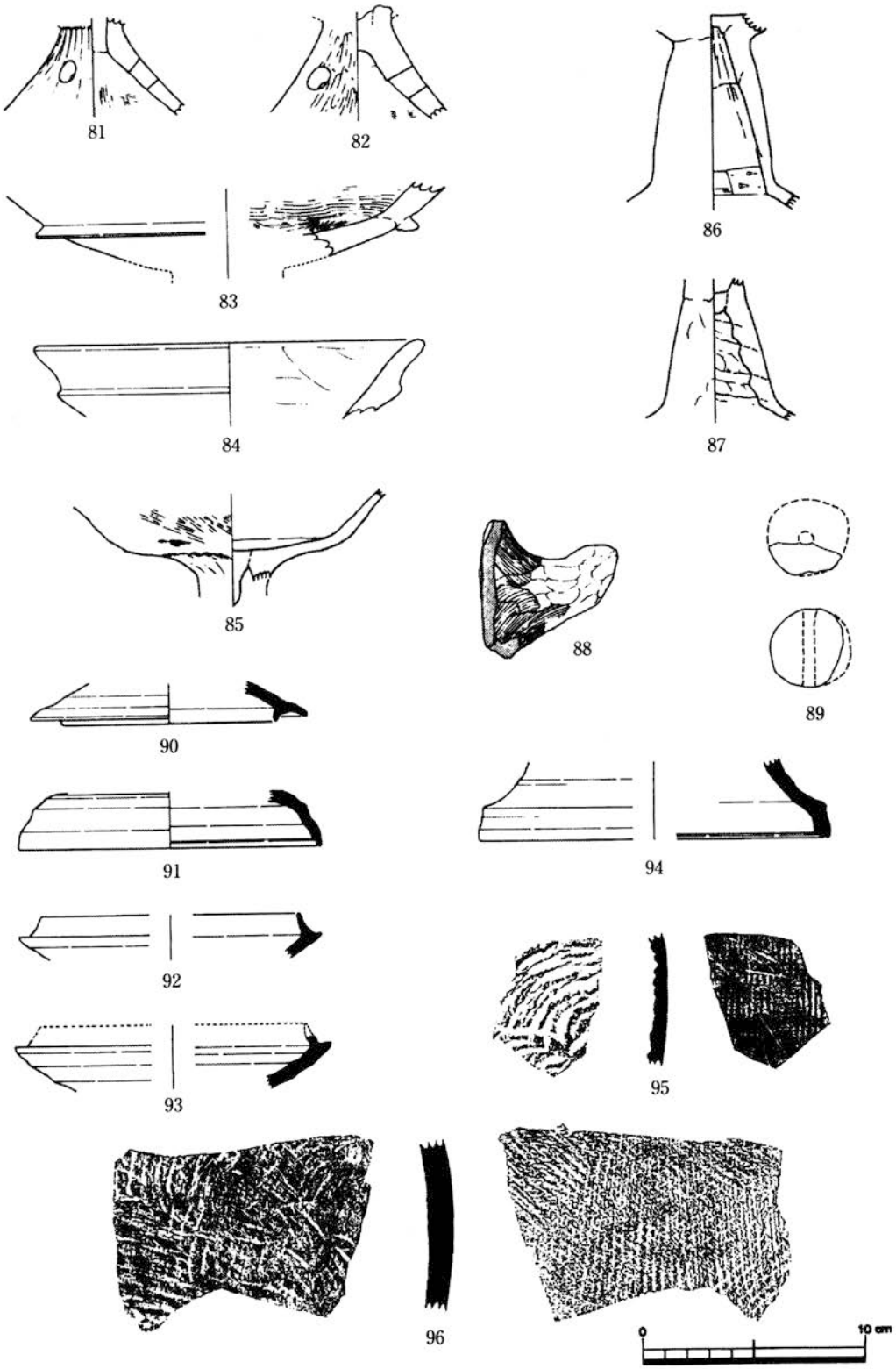
第67図　包含層出土遺物実測図(3)(S=1/3)



第68図　包含層出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第69図　包含層出土遺物実測図(5)(S=1/3)



第70図　包含層出土遺物実測図(6)(S=1/3)

2．出土土器観察表

遺構別出土土器・包含層出土土器の順に掲載するが、その前に、色調及び胎土の分類基準と所見について述べておきたい。

（1）色調について

須恵器を除いて、以下の２系統の大分類とし、都合12色に小分類した。複数色共存もあるが、厳密に網羅することは避け、主体色をしぼるようにした。また、付加属性として、赤化（火色）・黒斑・煤にも着目している。ただし、赤彩は器面色調とはしていない。

Ⅰ　黄褐色系（弱い赤みをおびる）

Ⅰ１：灰白色（10ＹＲ～2.5Ｙ 8/1･2）

Ⅰ２：浅黄橙色（10ＹＲ 8/3～4）

Ⅰ３：にぶい黄橙色（10ＹＲ 7/1～4）

Ⅰ４：明黄褐色（10ＹＲ 7/6～6/6、8/6）

Ⅰ５：灰黄褐～にぶい黄橙色（10ＹＲ6/2～4）

Ⅰ６：褐灰色（7.5ＹＲ～10ＹＲ 6/1～4/1）

Ⅰ７：黒褐色

Ⅱ 赤色系

Ⅱ１：浅黄橙～淡橙色（５ＹＲ～7.5ＹＲ 8/3～6）

Ⅱ２：橙色（５ＹＲ～7.5ＹＲ　7/6、6/6）

Ⅱ３：にぶい橙色（５ＹＲ～7.5ＹＲ）

Ⅱ４：明褐灰色（５ＹＲ～7.5ＹＲ 7/1・2）

Ⅱ５：(赤)橙色（10Ｒ～2.5ＹＲ6/6・8）

付加属性

Ｒｒ：赤化（Ｒは全体的薄膜赤化。ｒは局所的赤化で、いわゆる火色。）

細分　R1：ほぼⅠ４対比で、赤化とは言い難いが、一応R2より薄い色の薄膜という点で設定

R2：ほぼⅡ２～Ⅱ５の2.5ＹＲ対比で、濃い橙色の赤化

R3：赤が強く、Ⅱ５の10Ｒか、より赤いいわばピンク系に近い赤化

Ｂｂ：黒斑（Ｂは全体的または大型。ｂは部分的。ただし、残存器面に対する相対的な区分。）

Ｓｓ：煤（Ｓは全体的または大型。ｓは部分的。ただし、残存器面に対する相対的な区分。）

色調分類については、厳密に取り組もうとすれば、種々の難点が生じ、結局あいまいさを含むものとなってしまう。また、そういった状況で分類した成果が、どれほどの意味をもつものになるのかも、疑問がないわけではない。たとえば、ⅠとⅡの区分は、あいまいな部分があり、特にⅠ２とⅡ１は漸移的なものが多く、またⅠ３とⅡ３は区別が難しい。周囲の色調から、ⅠとⅡの振り分けるという主観も混ざるのである。

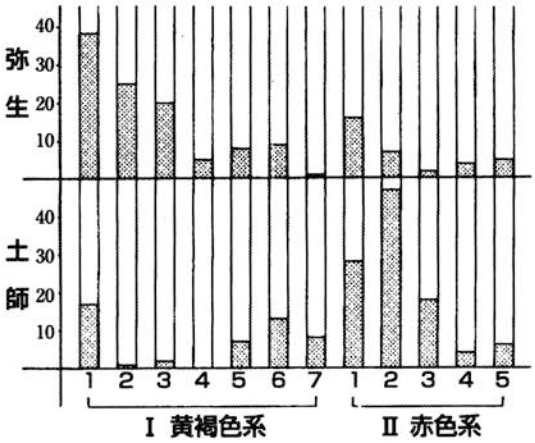
赤化のＲは、器面を薄く被う赤化で、Ⅱ２・３・５あたりに分類されるが、多くの場合、摩滅していて、本体はⅠ１やⅡ１に分類されることが多い。この食い違いを避けるため、残りが良くても、薄膜赤化と思われる場合は、擦り消えた部分の器面色調を基本とし、付加属性として、Ｒを用いた。従って、Ⅱ２・３・５に分類されているものは、断面である程度厚い部分まで赤化しているものに対して用いている（しかし実際には、区別が困難なものも多い）。また、甕形土器の底部など、２次被熱による赤化については、分類に付加することはできなかった。

黒斑や煤についても、位置を示さない以上、さほど意味をもたないものかもしれない。黒斑は、

全体を被うような場合、Ｉ６やＩ７にも分類されるので、ほぼ同義に見てよい場合もあるが、摩滅により、内部の黒色が浮き出していることも想定される。

煤は、内面においては、いわゆる「コゲ」と考えて良いものである。

ここで、厳密さを欠くものの、一応、多岐の分類を行った成果として、把握した傾向を示しておきたい。第65図は、各分類色調の表面における記載数を弥生土器と土師器に分けてグラフ化したものである。記載数とはすなわち、一個体の表面に２種類の色調が与えられている場合に、その二つの色調それぞれにカウントしたということである。この結果、黒斑の存在に左右される色調Ｉ６やＩ７を除外すれば、集中度に明瞭な山形のラインを描くことがわかる。弥生土器は、Ｉ１を頂点とし、土師器はⅡ２を頂点とするのであるが、それぞれの色調は、先述したように、薄い漸移的色調の範囲に属し、区分に苦慮したものでもある。しかし、赤系統のⅡと白から黄褐色系統のＩという二つの大きな分類に符合して、異なる山形が描かれた事は、若干の補正を加えれば、明瞭な違いを示す妥当な分類が成し得たといえるのではないだろうか。このグラフによって、いわゆる「土師器の色調」や「弥生土器の色調」として我々が直感的に認識している状況が客観的に示されているように思う。



第71図　器面色調分類別量比

（2）胎土について

胎土は、38ページの胎土含有物をもとに、別表のように、Ｘ・Ｙ・Ｚの３つに大別し、さらに各々細分類を行った。Ｘは、石英とともに安山岩や流紋岩粒を確実に含もの。Ｙは、石英の含有量に大きな差をもちながら、安山岩や流紋岩粒を殆ど含まず、ほぼ長石主体ということができる。Ｘの場合、Ｘ２・３のその他の項で挙げた赤橙色の粒を多少の差はあれ含むことが多い。この粒については、焼土粒なのか、風化した赤色系流紋岩なのか判別しがたいものもあったが、概ね両者はＸにおいて特徴的に認められた。また、共通含有物Ｂでは、淡緑色透明の輝石が全体的に確実に含まれるが、同等に、劈開線の発達した黒色鉱物（縁辺ではやや褐色で弱く光を通す。角閃石か輝石）も含む。裸眼では区別が困難で、個体毎や分類胎土毎の厳密な両鉱物の量比は検討できていない。もうひとつ、共通含有物Ｃも、裸眼では、キラキラした微細光沢物として目につくが、火山ガラスと思っても、鏡下で石英⑥の結晶面の一部やその破片と判明したり、あるいは針状透明の輝石であったりと、結局、含有に関する厳密な検討は断念した。傾向としては、砂粒含有の少ないＸ６やＹの器面でキラキラすることが多く、その大半は、輝石である場合が多かった。

器面が平滑であるがゆえに目についたものもあるかもしれない。

弥生土器と土師器の比較という点では、特に分類分布図を示すまでもなく、Ｘ１～６の円礫を

分類	砂礫量	砂礫粒形・各密度	安山岩・流紋岩類	石英類	その他
Ｘ１	極多量	角～亜角～円の中粒～細粒主体で密に含有。	中粒ａ多量含有、中粒ｂ少量含有。	細粒の③～⑤極めて多量。	
Ｘ２	多量	同じ構成だが、細粒の密度が胎土１より低い 。	同上	③～⑤通有量、⑥は少量。	赤橙色の大粒を含む（イ？）。
Ｘ３	中量	角～亜角～円の大粒が目立つのが特徴。中～細粒細粒は通有量。	ａ・ｂは通有量だが大粒目立つ。	大粒③～⑤まれに⑥の大型粒がａ・ｂと同等目立つ。	同上
Ｘ４	中量	同上	ａ・ｂの大粒が多量でかなり目立つ。	Ｉ３に比して乏しい。	
Ｘ５	やや少量	角～亜角～円の大粒をまれに含む。中～細粒も比較的少量。平均的胎土。	通有量含む。	通有量含む。	
Ｘ６	少量	細粒を主とし、ごくまれに大粒を含む。	少量だが確実に含む	少量含む	
Ｙ１	多量	細粒を主とする。	極めて乏しく、まれに含むのは細粒。	③～⑤の細粒が高密。まれに③～⑥の中大粒含む。	輝石比較的多量。長石Ａやや多く、①大粒時折含有。
Ｙ２	中量	細粒を主とする。	同上	③～⑤の細粒はやや希薄。中粒はとともに散在。	同上
Ｙ３	多～中量	①の中～大粒が主体となって多量含有。	同上	希薄。まれに中粒含む。	同上
Ｙ４	少量	細粒ないし微細粒を主とする。	同上	ごくまれに中粒含む。	同上
Ｚ	微量	砂粒を殆ど含まない緻密な素地。	殆ど含まない。	殆ど含まない。	Ａ・①が少量含まれる。

確実に含むグループが弥生土器にほぼ対応し、Ｙ１～４の長石主体で細粒を主とする一群が土師器に対応する。加えて、破断面の素地のあり方で、前者は、器壁に沿ったクラックが発達しているのに対し、後者は、微細粒子が抜け落ちたように多孔質であるという傾向がある。整理すると、

弥生土器：安山岩・流紋岩の円～亜円礫を含む。粒径の変異が大きい。破断面は筋クラック。

土 師 器：長石や石英を主とし、流紋岩等は僅少。輝石は総じて多量。粒径は概ね均質。破断面は多孔質。

というようになり、色調とあわせて両者の区別を基本的には可能としている。

表4　遺構別出土土器観察表

1号土坑出土土器（第33図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕形土器	覆土	口径(14.0)	口頸4/9	X 3	Ⅱ 1・5＋s／Ⅰ 1＋R2	
2	〃	〃	口径16.4	口頸8/9	X 5	Ⅰ 1＋S／Ⅱ 1	
3	〃	〃	口径17.6	口頸1/2	X 6	Ⅰ 1＋s／Ⅰ 1＋b r	
4	〃	〃	(推定口径22.0)	口縁1/12	X 6	Ⅱ 5／Ⅱ 5	
5	高坏形土器	〃	(推定口径18.1)	口縁1/18～坏体片	X 3	Ⅰ 1＋b r(赤彩？)／Ⅰ 2	
6	蓋形土器？	〃	裾径(12.0)	体2/3（鈕欠）	X 6	Ⅰ 2＋R2／Ⅱ 1・4	
7	底部	〃	底径5.2	底1/2	X 5	Ⅰ 6＋s／Ⅰ 5	
8	器台形土器	〃	－	支柱片	X 5	Ⅱ 1／Ⅱ 1	

11号住居跡出土土器（第36・37図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	高坏形土器？	床面	(推定口径25.8)	口縁1/18他破片多	Y 1	Ⅰ 1＋R2／Ⅰ 1＋R2	
2	〃	〃	－	脚、裾縁欠	Y 1	Ⅰ 1＋R2／Ⅰ 1＋R2	
3	器台形土器	〃	口径21.3	器受～支柱完存	X 5	Ⅱ 3・5＋b／Ⅱ 3・5＋B	
4	甕形土器	〃	口径12.2、器高11.8	ほぼ完形	X 5	Ⅰ1・2＋r s／Ⅰ 2＋R1 s	
5	甕形土器	覆土	口径(15.4)	口頸1/5	X 5	Ⅱ1・2＋R2 s／Ⅱ1＋R	
6	〃	〃	口径(17.0)	口頸1/5	X 2	Ⅰ 7＋S／Ⅰ 2＋R2	
7	〃	〃	口径(18.5)	口頸1/6	X 5	Ⅱ 2・3＋S／Ⅱ 1・　2	
8	〃	〃	口径18.1	口縁～体上半	X 3	Ⅰ 3＋S／Ⅰ 3・5＋s	
9	〃　底部	〃	底径2.6	底～体下半	X 3	Ⅰ 3＋s／Ⅰ 3＋s	
10	高坏形土器	〃	－	坏体片	Z	Ⅰ 5＋b／Ⅰ 5	
11	〃	〃	－	有段脚片	Z	Ⅰ 5／Ⅰ 5	
12	台部	〃	台裾径10	体底～台完存	X 5	Ⅰ 2／Ⅰ 2	
13	底部	〃	底径5.3	底部	X 2	Ⅱ 2＋b／Ⅱ 3	
14	甕形土器	〃	口径30.9	口頸完～肩1/2	X 2	Ⅰ 1＋R2／Ⅰ 1＋R1	
15	甑形土器	〃	本文参照	口縁欠	X 4	Ⅰ 1＋b／Ⅰ 1	

2号住居跡出土土器（第44・45図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調（外／内）	備考
1	甕形土器	床面	口径15.2、器高25.8	ほぼ完形	Y 2	Ⅱ 1・2＋R2 s／Ⅰ 5	
2	壷形土器	〃	口径16.2	口頸1/3	X 6	Ⅱ 1／Ⅱ 1	
3	坩形土器	〃		体部完存	Y 4	Ⅰ 5・6＋B／Ⅰ 5・6	
4	〃	〃	口径10.8、器高11.0	ほぼ完形	X 6	Ⅱ 1＋R／Ⅱ 1・2	
5	高坏形土器	〃	口径17.6	坏ほぼ完存	Y 2	Ⅱ 1・2＋R2／Ⅱ 1＋b	
6	〃	〃	口径(18.3)	坏のみ1/3	Y 1	Ⅱ 2／Ⅱ 1＋R2b	
7	甕形土器	覆土	口径(13.2)	口頸1/9	X 5	Ⅰ 3・6／Ⅰ 2	弥生

8	〃	〃	口径(16.2)	口縁1/9	X 5	I 5・6＋s／I 2	〃
9	〃	〃	口径(18.8)	口頸1/9	X 5	I 2／I 2	〃
10	器台形土器	〃	(推定口径26.6)	口頸1/12	X 1	I 2／I 2	〃
11	〃	〃		支柱	X 5	I 2＋R1／I 1	〃
12	高坏形土器	〃		支柱	X 3	I 3・4・6／I 5	〃
13	壷形土器	〃	(推定口径13.8)	口頸1/12	X 4	I 1＋R2／I 2	〃
14	土玉	〃	直径3、重量18.6g	完形	Y 2	I 6・7	
15	甕形土器	〃	口径(13.6)	口縁1/8	Y 2	2＋S／II 2	
16	〃	〃	(推定口径18.2)	口頸1/9	Y 2	II 2／II 2	
17	〃	〃	(推定口径13.0)	口頸1/6	Y 2	I 7／II 2	
18	高坏形土器	〃	口径15.8	坏ほぼ完存	Y 2	II 2／II 2	
19	坩形土器	〃		体1/2	Y 4	I 1＋B s／II 2	

4号住居跡出土土器（第48・49図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕形土器	床面	口径(12.5)、器高17.0	体1/2、口頸1/6	X 4	II 1＋s／II 1	
2	坩形土器	〃		体部のみ完存	Y 2	II 2＋S／II 2・I 6	
3	壷形土器	〃		体片	X 5	I 1＋R1／I 6＋s	
4	甕形土器	覆土	(推定口径11.6)	口頸1/12	X 5	I 2＋R2／I 1＋R2	弥生
5	〃	〃	(推定口径13.0)	口縁1/9	X 5	I 2＋r b／I 2＋R2	〃
6	〃	〃	(推定口径14.7)	口頸1/8	X 2	II 1／I 1＋R1b	〃
7	〃	〃	(推定口径16.9)	口頸1/9	X 3	I 2・6／II 1＋R1	〃
8	〃	〃	(推定口径24.0)	口頸1/36	X 5	II 1／I 2＋R1	〃
9	〃	〃	口径(24.0)	口頸1/9	X 3	II 1＋R2／I 5・II 1	〃
10	壷形土器	〃	(推定口径22.0)	口頸1/8	X 3	I 4／I 2	〃
11	〃	〃	(推定口径8.8)	口頸1/9	X 2	I 1／I 1	〃
12	蓋形土器	〃	鈕径3.6		X 3	I 3／I 6	〃
13	器台形土器	〃	(推定口径22.5)	口縁～器受部1/18	X 3	I 1＋b／I 2	〃
14	坩形土器	〃	口径10.2	口頸5/18、体部2/3	X 6	II 3＋R2b／II 3	
15	高坏形土器	〃	脚端径10.2	支柱・脚ほぼ完存	Y 4	II 1・2＋R2／II 2	
16	甕形土器	〃	(推定口径16.8)	口頸1/9	Y 1	I 1／I 1＋b	
17	甕形土器	〃	(推定口径20.0)	口縁1/12	X 6	II 1／II 1	
18	〃	〃	(推定口径12.0)	口縁1/7	X 6	I 1＋R1／II 7＋R1	弥生？
19	壷形土器	〃	(推定口径15.2)	口縁1/7	X 3	I 1／1	
20	〃	〃	(推定口径14.8)	口縁1/9	X 5	II 2／II 2	

5号住居跡出土土器（第52～54図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕(壷)形土器	B床・覆土		頸・体1/8	Y 2	II 3＋b r／I 5・6	ヘラ記
2	坩形土器	〃	口径(9.6)	口縁2/9、体完存	Y 4	II 3・4＋b s／II 4＋b	

3	高坏形土器	〃	口径(15.0)	口縁2/7	Y 1	Ⅱ 1＋R2／Ⅱ 1＋R2	
4 a	壷(甕)形土器	A床面		頸～胴肩片	Y 1	Ⅰ Ⅱ 1＋b／Ⅱ 1＋R2	
4 b	〃	〃		底片	Y 1	Ⅰ 5・6＋s／Ⅰ 5＋S	
5	〃	〃	口径16.6	ほぼ完形	X 3	Ⅰ 1＋b／Ⅰ 1＋b	
6	坩形土器	〃		頸～体片	Y 2	Ⅱ 3＋r s／Ⅱ 1＋r B	
7	〃	〃	口径(8.1)、器高8.3	口縁4/7、体完存	Y 4	Ⅱ 2・4＋b／Ⅱ 2・Ⅰ 5	
8	〃	〃	口径(9.5)、器高8.5	口縁2/7、体完存	Y 4	Ⅱ 1・2＋b／Ⅱ 1・2＋b	
9	甕形土器	A覆土	口径(19.3)	口頸1/10	X 2	Ⅰ 1・Ⅱ 3＋s／Ⅰ 2	弥生
10	〃	〃	口径(15.3)	口頸2/7	X 5	Ⅱ 3＋s／Ⅱ 3	〃
11	〃	〃	口径(17.8)	口頸1/5	X 6	Ⅰ 5＋R2s／Ⅰ 5＋B	〃
12	〃	〃	口径(16.0)、器高23.8	口頸3/10、体1/3	Y 4	Ⅱ 3・Ⅰ 5＋b r／Ⅰ 6	
13	壷形土器	〃		口頸～体1/2以上	Y 2	Ⅱ 1・2＋b／Ⅱ 1・2	
14	器台形土器	〃	(推定口径20.6)	口縁1/16	X 5	Ⅱ 1・R2／Ⅱ 1	弥生
15	高坏形土器	〃		坏底～脚上半	Y 2	Ⅱ 2／Ⅱ 2	古墳前
16	壷形土器	〃		口辺下～頸片	Y 4	Ⅱ 2＋b／Ⅱ 2＋b	
17	高坏形土器	〃	口径(16.8)	坏1/6、支柱1/2	Y 4	Ⅱ 3＋b／Ⅱ 4・Ⅰ 6	
18	〃	〃		支柱	Y 4	Ⅱ 2・3／Ⅰ 6	
19	〃	〃	脚端径(12.0)	脚裾ほぼ全周	Y 4	Ⅰ 1＋R2b／Ⅱ 1＋b	
20	坩形土器	〃	口径(10.0)、器高10.4	口縁1/2、体小欠	Y 4	Ⅱ 2＋b／Ⅰ 6・7	
21	〃	〃	口径(8.3)、器高9.6	口縁3/4、体小欠	Y 4	Ⅱ 1＋r b／Ⅱ 1・2	
22	〃	〃	口径(8.8)、器高(7.4)	口縁1/2、底欠	Y 4	Ⅰ 6・7／Ⅰ 6・7	
23	〃	〃	口径5.9、器高7.4	ほぼ完形	Y 4	Ⅱ 2・3＋b／Ⅰ 6・7	
24	〃	〃	口径(7.4)	口縁1/10、体1/8	Y 4	Ⅱ 3・Ⅰ 5・6／Ⅰ 6・7	
25	〃	〃	口径9.0、器高7.8	ほぼ完形	Y 2	Ⅱ 1・2＋b／Ⅱ 1・2	

6号住居跡出土土器（第58・59図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕形土器	覆土	口径16.0、器高23.0	ほぼ完形	Y 2	Ⅱ 2＋s／Ⅱ 2＋s	
2	〃	〃	口径(16.4)	ほぼ1個体分	Y 2	Ⅱ 1・Ⅰ 7／Ⅰ 7	
3 a	〃	〃		頸～肩1/5	Y 2	Ⅰ 6＋s／Ⅰ 6・7	
3 b	〃	〃		体部1/3	Y 2	R3b s(被熱)／Ⅰ 6・7	
4	〃	〃	口径(17.1)	口縁～肩1/6	X 3	Ⅱ 3／Ⅱ 2・3	
5	〃	〃	口径(14.7)	口頸1/4	X 4	Ⅱ 4＋s／Ⅰ 3＋b	
6	〃	〃	口径(15.8)	口頸1/2	Y 3	Ⅰ2・6＋R2s／Ⅰ 2・6	
7	〃	〃	口径(17.6)	縦割1/2以上	X 3	Ⅰ1・3＋b s／Ⅰ 1＋s	
8	〃	〃		口縁欠、体2/3	Y 4	Ⅰ 3・6＋b s／Ⅰ 5＋s	
9	〃	〃	口径17.8	口縁5/6、体2/3	Y 4	Ⅱ 3＋b s／Ⅱ 3＋b	
10	〃	〃	口径(16.1)	口縁1/4、体1/4	Y 3	Ⅰ1・6＋bs／Ⅰ 6＋R1	
11	壷形土器	〃	口径(19.6)	口頸1/8	Y 2	Ⅱ 2＋R3／Ⅱ 2	
12	坩(　)形土器	〃	口径10.8	口縁1/2、体1/2	Y 2	Ⅰ 1＋R2／Ⅰ 1＋R2	
13	坩形土器	〃	口径(10.4)	口縁1/6	Z	Ⅱ 2／Ⅱ 2	

14	〃	〃	口径6.3、器高8.1	口縁小欠ほぼ完形	Y 4	Ⅱ 2・3＋b／Ⅱ 4・Ⅰ 6	
15	〃	〃		頸体ほぼ完存	Y 3	Ⅱ 4・Ⅰ 7／Ⅱ 4・Ⅰ 7	
16	高坏形土器	〃	口径(14.6)	坏1/2	Y 2	Ⅱ 1＋R3b／Ⅱ 1・5	
17	〃	〃		支柱	Y 4	Ⅰ 1＋R3／Ⅰ 1＋R3	
18	〃	〃		支柱～坏底片	Y 2	Ⅱ 3／Ⅱ 3	
19	〃	〃	口径(20.0)	坏1/3	Y 4	Ⅰ 6・7／Ⅰ 6・7	

7号住居跡出土土器（第62図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕形土器	覆土	口径16.3	口頸2/3、体1/3	Y 2	Ⅱ 2・3＋s／Ⅱ 2・4	
2	〃	〃	口径(14.8)	口頸～肩1/3	Y 2	Ⅱ 1＋b／Ⅱ 1・4	
3	〃	〃	(推定口径13.5)	口頸1/8	X 3	Ⅱ 5／Ⅱ 5	
4	〃	〃	(推定口径22.0)	口縁1/9	Y 2	Ⅰ 1／Ⅰ 1	
5	鉢(甑)形土器	〃	(推定口径20.4)	口縁～体片	Y 2	Ⅱ 2・5＋S／Ⅱ 2	
6	壺形土器	〃	(推定口径17.3)	口縁1/18、頸1/6	Y 4	Ⅰ 7／Ⅰ 5・6・7	
7	高坏形土器	〃	口径(15.2)	口縁1/8、坏底	Y 2	Ⅱ 1・2／Ⅱ 1＋R2b	
8	〃	〃	口径(15.3)	口縁1/3、坏底	Y 4	Ⅱ 2＋b／Ⅱ 2＋b	
9	〃	〃	(推定口径16.2)	口縁1/9	Y 2	Ⅱ 1・3／Ⅱ 3	
10	〃	〃	口径(17.9)	口縁1/3	Y 3	Ⅱ 1・2／Ⅱ 2	
11	〃	〃	脚端径(13.0)	脚裾1/5	Y 4	Ⅱ 3・b／Ⅰ 7	
12	手づくね土器	〃	底径4.7	口縁欠	Y 4	Ⅰ 7／Ⅰ 7	

9号住居跡出土土器（第64図）

番号	器　種	出土位置	法　量　(cm)	残存部位	胎土	色　調	備考
1	甕形土器	覆土	(推定口径14.4)	口頸1/8	X 5	Ⅰ 1＋s／Ⅰ 1・2	弥生
2	〃	〃	口径14.2	口頸2/3、体1/2	Y 4	Ⅱ 2＋b s／Ⅱ 2	
3	〃	〃	口径(15.1)	口頸1/3	Y 4	Ⅱ 2／Ⅱ 1	
4	〃	〃	(推定口径15.5)	口縁1/9	Y 4	Ⅱ 1＋R3／Ⅱ 1	
5	高坏形土器	〃	口径(15.2)	口縁1/4、坏底	Y 4	Ⅱ 3＋S／Ⅱ 3・Ⅰ 5	
6	〃	〃	口径14.8	坏（口縁小欠）	Y 4	Ⅱ 2・5／Ⅱ 2・5	
7	小型(鉢)土器	〃	(推定口径11.4)	口縁1/8	Y 4	Ⅱ 2・5／Ⅱ 2・Ⅰ 5	
8	手づくね土器	〃	口径4.3、器高3.0	口縁一部欠	Y 4	Ⅱ 2／Ⅱ 1	
9	〃	〃	口径(4.1)、器高3.0	口縁5/6欠	Y 2	Ⅰ 5・6／Ⅰ 6	
10	不明土製品	〃	径3.3、厚1.5		Y 4	Ⅰ 6	
11	高坏形土器	〃	(推定口径28.2)	口縁1/12	X 5	Ⅰ 2／Ⅰ 2	弥生
12	〃	〃		坏片	X 5	Ⅰ 1・2／Ⅰ 1・2	〃
13	〃	〃	脚端径16.9	脚裾1/9	X 5	1＋R2／Ⅱ 2	〃

表5　包含層出土土器観察表

番号	器　種	出土位置	法　量	残存部位	調　整　等	胎土	色　調
1	弥生 甕形土器	B－8	口径(19.8)	口頸1/6	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口頸:ミガキ、体:ケズリ	X 6	Ⅰ Ⅱ 3＋b s Ⅰ 2＋b
2	〃	3 住覆土	口径(20.0)	口頸1/12	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 5	Ⅰ 5＋b Ⅰ 2
3	〃	B－7	口径(20.0)	口頸1/9	〃	X 2	Ⅰ 3 Ⅰ 3
4	〃	3 住覆土	口径(19.2)	口頸1/10	〃	X 3	Ⅰ 3＋s Ⅰ 3＋s
5	〃	C－7	口径(18.4)	口頸1/8	〃	X 1	Ⅰ 2 Ⅰ 2
6	〃	あ－2	口径(17.9)	口頸1/9	〃	X 5	Ⅰ 3 Ⅰ 2＋b r
7	〃	表採	(推定口径17.4)	口頸1/12	〃	X 5	Ⅰ 6＋b Ⅰ 5＋b
8	〃	3 住覆土	口径(17.1)	口頸1/5	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口頸:ミガキ、体:ケズリ	X 6	Ⅰ 3・4 Ⅰ 3
9	〃	〃	口径(15.2)	口頸1/6	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 2	Ⅰ 2 Ⅱ 1＋s Ⅰ 2 Ⅱ 1
10	〃	A－4	(推定口径13.9)	口頸1/12	〃	X 5	Ⅰ 5＋s Ⅰ 3＋s
11	〃	B－9	(推定口径14.6)	口頸1/10	〃	X 4	Ⅰ 5＋s Ⅰ 3
12	〃	A－6	口径(16.0)	口頸1/8	〃	X 5	Ⅱ 2・3＋s Ⅰ 3
13	〃	表採	(推定口径17.0)	口頸1/16	〃	X 5	Ⅰ 3 Ⅰ 3＋r
14	〃	A－1	口径(16.2)	口頸1/6	外／口:擬凹線、頸ナデ 内／口頸:ナデ･指頭痕、体:ケズリ	X 2	Ⅰ 1＋R2b Ⅰ 1＋R2
15	〃	表採	口径(15.6)	口頸1/9	〃	X 2	Ⅰ 1＋s Ⅰ 2＋(b)
16	〃	A－6	口径(20.2)	口頸1/9	〃	X 2	Ⅰ 1 Ⅰ 1
17	〃	A－10 B－10	口径20.6	口頸5/6	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口:ナデ･指頭圧痕、頸:ハケ 体:ケズリ	X 2	Ⅰ 1＋s Ⅰ 1
18	〃	A－2 B－3	－	口頸1/6	外／口:擬凹線、頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 3	Ⅱ 1・2＋s Ⅱ 1
19	〃	A－1	口径(17.3)	口頸1/6	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 6	Ⅰ 1～3＋s Ⅰ 1～3・5
20	〃	B－10	口径(16.7)	口頸1/8	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ・指圧、体:ケズリ	X 2	Ⅰ 1 Ⅰ 1＋b
21	〃	B－9	口径(18.2)	口頸1/8	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 4	Ⅰ 2＋R3s Ⅰ 1・6
22	〃	A－4	(推定口径17.4)	口頸1/16	〃	X 3	Ⅰ 2 Ⅰ 2
23	〃	A－3	口径(15.5)	口頸1/12	〃	X 4	Ⅰ 4＋b Ⅰ 3・Ⅱ 4
24	〃	A－3	口径(21.0)	口頸1/16	〃	X 4	Ⅰ 1＋s Ⅰ 1

番号	器　種	出土位置	法　量	残存部位	調　整	胎土	色　調
25	弥生 甕形土器	A－1	口径(16.0)	口頸1/9	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 4	I 1＋r I 1＋r
26	〃	A－1	口径(15.3)	口頸1/9	〃	X 4	I 1＋R3s I 1＋r b
27	〃	B－9	口径(14.5)	口頸1/9	〃	X 5	I 1＋R2b I 1＋R2
28	〃	A－6	口径(21.8)	口頸1/8	〃	X 4	II 5 II 5
29	〃	B－4	口径(11.8)	口頸1/9	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ	X 4	I 1＋b I 1
30	〃	A－6	口径(12.0)	口頸1/6	外／口唇面･口頸:ナデ、体:ハケ 内／口:上ナデ・下ハケ、体ケズリ	X 5	II 1＋R3s I 1＋R3
31	弥生 底部	3住覆土	底径(9.0)	底部1/6	外／体:ハケ、底:ハケ 内／ケズリ	X 3	I 1＋R2 I 7(内・底)
32	弥生 底部	〃	底径4.5	底部完存	〃	X 6	I 1・6＋B I 1＋b
33	土師 甕形土器	B－3	(推定口径16.8)	口頸1/18	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ	Y 4	II 2 I 1＋b
34	〃	B－4	口径(15.5)	口頸1/5	外／口頸体:ナデ 内／口頸体:ナデ	Y 2	II 1 II 1＋b
35	〃	A－1	口径(14.3)	口頸1/5	外／口:ナデ、頸:ハケ 内／口頸:ハケ後ナデ	Y 4	II 2＋S I 2＋R2
36	〃	A－6	口径(15.3)	口頸1/6	外／口頸:ハケ後ナデ、体:ハケ 内／口:ハケ後ナデ、体:弱ナデ	Y 1	I 1 II 2＋R II 2
37	〃	A－6	口径(16.7)	口頸1/6	〃	Y 1	I 1・5＋b I 1＋b
38	〃	B－4	口径(15.6)	口頸1/6	外／口頸:ナデ、体:ハケ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ・ナデ?	Y 2	II 2＋s I 2＋b
39	〃	B－3	口径(16.7)	口頸1/5	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ	Y 1	II 2＋s 1＋b
40	〃	B－9	口径(15.1)	口頸1/4	外／口:ナデ、体:ハケ 内／口:ハケ後ナデ、体:ナデ	Y 2	II 2 II 1＋R2
41	〃	A－1	(推定口径15.2)	口頸1/6	外／口頸:ナデ 内／口頸体:ナデ、頸:一部ケズリ	Y 1	II 1 II 1
42	〃	B－4	(推定口径17.0)	口頸1/6	外／口:ハケ後?ナデ、頸:ハケ 内／口:ナデ、頸:ハケ?	Y 2	II 2＋s II 2
43	〃	B－9	(推定口径16.0)	口頸1/12	外／口頸:ナデ、体:ハケ 内／口頸体:ナデ	X 2	II 5 II 2・3＋s
44	〃	B－2	(推定口径13.0)	口頸1/6	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ	Y 1	I 1＋s I 1＋b
45	弥生 甕形土器	A－3	口径(24.0)	口頸1/8	外／口頸:ナデ、体:ハケ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 5	II 2＋r s II 2＋b
46	〃	B－3	口径(23.5)	口頸1/4	外／口頸:ナデ、体:ハケ、赤彩 内／口頸:ナデ、体:ケズリ、赤彩	X 5	II 2 II 2
47	弥生 壷形土器	3住覆土	口径15.0 底径5.8	口頸5/9 体1/2	外／口頸:ナデ、体底:ミガキ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 5	I 2＋b I 1・2＋b
48	〃	B－3	口径14.1 底径3.4	口頸3/4 体1/2	外／口:ハケ後?ナデ、頸体:ハケ 内／口頸:ナデ、体:ケズリ	X 5	I 1＋R2 I 1・6＋R2

番号	器　種	出土位置	法　量	残存部位	調　整	胎土	色　調
49	弥生 壷形土器	A－5	(推定口径26.0)	口縁1/36	外／口:擬凹線、口基:ナデ 内／口・口基:ナデ	X 5	Ⅰ3 Ⅰ5
50	〃	A－2	(推定口径13.9)	口縁1/18	外／口頸:ナデ 内／口頸:ナデ	X 5	Ⅰ3＋B Ⅱ1＋r
51	不明	C－10	口径(12.6)	口頸1/6	外／口頸:ナデ 内／口:ナデ、頸？:ケズリ	X 5	Ⅰ1＋R1 Ⅰ1＋R1
52	弥生 壷形土器	A－8	口径(9.8)	口縁1/5	外／口:ナデ 内／口:ナデ、頸体:ケズリ	X 5	Ⅰ2 Ⅰ2＋b
53	弥生～土師 壷形土器	B－8	頸径(10.0)	頸部片	外／頸:ナデ・凸帯斜行キザミ 内／頸:ナデ、体:ケズリ	X 6	Ⅰ6＋b Ⅰ2・6＋b
54	弥生 壷形土器	A－3～ 5、5住	頸径(6.1)	頸体1/4	外／頸:凸帯ナデ、体:ミガキ 内／　頸近体:ナデ、体下:ハケ	X 5	Ⅰ2・3＋R1 Ⅰ2＋R1
55	〃	A－6・ 4住覆土	(推定胴径15.4)	体部片	外／ナデ・竹管・スタンプ・赤彩 内／ナデ	X 5	Ⅰ1・Ⅱ2 Ⅰ3＋b
56	〃	あ－7		体底部～ 台上部片	外／体:ミガキ 内／体:ケズリ、台:ナデ	X 5	Ⅱ3 Ⅱ2
57	弥生 壷形土器 (台)	A－6	裾径8.5	台体部 台裾3/4	外／ナデ・擬凹線・赤彩 内／ケズリ後ナデ	X 5	Ⅱ1 Ⅱ1＋r
58	弥生 壷形土器	A－6	口径7.5 体高16.6	口縁3/4 体部完存 台部欠	外／ミガキ・赤彩 内／ナデ・口:赤彩	X 5	ⅠⅡ1・底s Ⅰ7・Ⅱ1
59	弥生 蓋形土器	B－5	鈕径3.7	鈕片	外／ナデ 内／鈕:ナデ、体:ケズリ・ナデ	X 4	Ⅰ2 Ⅰ3・6
60	〃	A－11	鈕径3.3	鈕片	外／ナデ 内／ナデ	X 5	Ⅱ1＋R1
61	弥生 小型鉢形土器	B－3	口径10.1	口体1/6	外／ミガキ、内外／赤彩 内／口:ミガキ、体:ケズリ後ナデ	X 4	Ⅰ6 Ⅰ6
62	土師 坩形土器	B－9	口径(6.8)	口頸1/5 体1/3	外／ナデ 内／口:ハケ後ナデ、体:ナデ	Y 2	Ⅱ2＋R2 Ⅱ2
63	〃	10住覆土	(推定口径8.2)	口縁1/6	外／ナデ 内／ナデ	Y 2	Ⅰ6 Ⅰ6
64	土師 壷形土器	B－4	口径(16.1)	口頸1/6	外／口:ナデ、頸:ハケ後ナデ 内／ハケ後ナデ	Y 2	Ⅱ2 Ⅱ2
65	〃	B－3	口径(14.3)	口縁1/8	外／ナデ 内／ナデ	Y 2	Ⅱ1・2 Ⅱ1・2
66	〃	B－3	(推定口径17.9)	口頸1/8	外／口:ナデ、体:ハケ 内／ナデ	Y 2	Ⅱ2 ⅠⅡ2
67	土師？ 椀形土器	A－6	(推定口径11.0)	口縁1/9	外／口:ナデ、体:ケズリ後？ナデ 内／ナデ	X 1	Ⅰ1＋R2B Ⅰ1
68	弥生 甕形土器？	B－8	(推定口径31.8)	口縁1/18	外／擬凹線・ナデ 内／ナデ	X 4	Ⅰ1 Ⅰ1
69	弥生 高坏形土器	あ－2	口径(35.9)	口縁1/10	外／ミガキ 内／ミガキ	X 3	Ⅰ2 Ⅰ2＋r
70	〃	B－9	(推定口径24.0)	口縁1/36	外／ミガキ 内／ミガキ	X 6	Ⅰ2・Ⅱ1 Ⅰ2・Ⅱ1
71	弥生～土師 高坏形土器	あ－5	(推定口径22.7)	口縁1/8	外／ミガキ 内／ミガキ？	Z	Ⅱ5 Ⅱ5
72	弥生 器台形土器	A－3～ 4・5住	－	口辺1/2	外／口:多条沈線・ナデ、器受:ナデ 内／ナデ	X 5	Ⅰ2＋R2 Ⅰ1・2R2

番号	器　種	出土位置	法　量	残存部位	調　整	胎土	色　調
73	弥生 高坏・器台 脚	あ－2	(推定裾径25.8)	脚裾片	外／ナデ 内／ケズリ	X 6	I 2＋r I 3
74 a·b	弥生 器台形土器	a:A－3 b:B－3	裾径(16.5)	器受部片 脚片	外／器受:ミガキ、脚:ハケ後ミガキ 内／器受:ミガキ、脚:ハケ後ナデ	X 6	I 1 I 1・2
75	弥生 高坏形土器	B－3	－	支柱	外／不明 内／ケズリ	X 4	II 1 II 1
76	〃	あ－6	裾径(14.2)	支柱完存 脚裾1/6	外／ミガキ 内／ナデ	Z	I 2 I 2・II 1
77	弥生 高坏・器台 脚	B－4	－	支柱下～ 脚上1/4	外／支柱:ミガキ、脚上半:擬凹線 内／支柱:ナデ、脚:ケズリ	X 6	I 5・II 3 I 5＋b
78	〃	B－11	－	脚有段部 片	外／ミガキ？スタンプ・沈線・刻み 内／ナデ	X 6	II 5 II 5
79	〃	あ－2	裾径(14.9)	脚裾片	外／ミガキ・スタンプ・羽状・沈線 内／ナデ	X 6	I 4 I 3
80	〃	あ－2	－	脚有段部 片	外／沈線・列点・スタンプ・赤彩 内／ナデ	X 6	I 1＋R2b I 2
81	土師 器台形土器	C－5	－	脚部片	外／ミガキ 内／ハケ後ナデ	Y 4	II 2・5＋R3 I 2
82	土師 高坏形土器	あ－0	－	脚部片	外／ミガキ 内／ハケ後ナデ	Y 2	II 1・5 II 2・5＋R3
83	〃	B－3 B－4	－	坏部片	外／ナデ 内／ハケ後ナデ	Y 3	II 3＋R2 II 3＋R2
84	〃	B－4	口径(17.7)	口縁1/6	外／ナデ 内／ナデ	Y 1	II 2 II 2
85	〃	A－3	－	坏体1/3 ～坏底部	外／ハケ後ナデ？ 内／ナデ	Y 1	II 1＋R2 II 1＋R2
86	〃	い－1	－	支柱	外／ナデ 内／ケズリ	Y 2	II 1・2＋R2 II 3
87	〃	B－5	－	支柱	外／ナデ 内／巻き上げ	Y 4	II 2 II 2
88	土師 甕？把手	あ－6	－	把手片方	外／体～把手:ハケ、把手先:ナデ 内／ケズリ？	X 2	II 1・2 I 1・2
89	土師 土玉	B－3	(推定径3.7)	1/3	外／ナデ	Y 2	I 1
90	須恵器 坏蓋	A－10	口径(12.6) 返径(9.7)	口縁1/5	外／ロクロナデ 内／ロクロナデ	長石細 粒僅少	灰黄～黄灰色 灰黄色
91	須恵器 坏蓋	あ－5	口径(13.8)	口縁1/9	外／口:ロクロナデ、天:ヘラケズリ 内／ロクロナデ	長石中 粒少量	灰色 灰色
92	須恵器 坏身	C－11	(推定口径11.8) (推定受径13.8)	口縁1/12	外／ロクロナデ 内／ロクロナデ	砂粒や や多量	灰オリーブ色 灰オリーブ色
93	須恵器 坏身	あ－6	(推定受径14.4)	受部1/18	外／ロクロナデ 内／ロクロナデ	砂粒や や多量	黒色(釉) 灰色・黒色
94	須恵器 壷脚部	A－10	(推定台径15.9)	台部1/18	外／ロクロナデ 内／ロクロナデ	砂粒や や多量	灰白色 灰白色
95	須恵器 甕	B－9	－	胴部片	外／平行文タタキ 内／同心円文当具	長石細 粒少量	淡灰色 暗灰色
96	〃	B－6	－	胴部片	〃	長石細 粒中量	淡灰色 灰黄色

第Ⅳ章　補足検討

第１節　弥生～古墳時代出土土器の分類

１．はじめに

ここでは、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての実測図掲載土器全てを対象に分類し、再掲載をおこなう。分類は、器種→大分類（ローマ数字）→中分類（アルファベット大文字）→小分類（アラビア数字）→細分類（アルファベット小文字）の順を基本とし、必要に応じて、細分類のさらに細分として、アルファベット小文字にアラビア数字を付すものとした。

分類の認定レベル・視点については、器種毎に設定していてばらつきがあり、一貫していない。つまり、各分類記号の用い方は、その器種内部で設定した基準での細分序列を表している。資料の少なさもあり、器種によっては、１個体で１分類が成立するという分類の乱立を避けるために、細かな差異を無視する「分類レベルのかさ上げ」もおこなっている。意味のある一貫した分類姿勢の欠如は、筆者の理解・力量の不足が主因であるが、ここでの目的を、本文において遺構単位で散載している全資料の総覧と、バラエティーの提示という点に留めておきたい。各分類図では、記号とともに分類の基準も標記してあるので、ここでは、問題点や留意点の指摘のみとする。

２．甕形土器の分類

大分類として、Ⅰ有段口縁系・Ⅱ「く」の字口縁系の二つに区分した。「系」としたのは、両者の区別が曖昧なものを主観的に分別したものがあるため、便宜的に「系」という言葉を借りて括っただけで、特段「系統」といった意味は持たせていない。例えば、ⅠB3類の端部拡張・断面三角の類は、「く」の字口縁系に考えることもできるが、ⅠB1d類の漸移的類似の形としてⅠB3aを認定したことにより、さらにⅠB3bまでを口縁帯を意識したものに包括して考えた。ⅠB5類の受口状口縁の捉え方についても異論はあると思う。

おおまかな傾向をまとめておきたい。Ⅰ：有段口縁系のＡ：擬凹線文をもつものは、１：指頭圧痕無しと、２：指頭圧痕有りに区分される。一見して、前者には形態のバラエティーが豊富であるのに対し、後者は概ね画一的な形態で占められているのがわかる。Ｂ：無文のものは、ⅠA1と形態を共有するⅠＢ1a～ⅠＢ1cと、特徴的かつ安定した口縁形態といえるⅠＢ1dからなる。尚、指頭圧痕をもつⅠB2は、擬凹線摩滅の可能性がある。

Ⅱ：「く」の字口縁系は、Ａ～Ｋの多様なバラエティーで構成される。Ａは、小型のみであるが、端部を器肉に対して直角に面取りし、整美でシャープなつくりである。内面は整った横方向のハケ目が施されている。古手の「く」の字口縁甕と考えたい。Ｂは、いわゆる布留系である。Ｃ：口縁内湾は、１点のみで、薄手・小振り、球形の体部が特徴的である。Ｄは、まさに有段口

縁系に含めても良いものとも考えられるが、古墳中期に属し、本例１点のみということで、判断を留保した。E以下は、古墳時代中期の甕形土器における多様（不定形？）な口縁形態を反映している一群である。頸部に近い胴部内面に、粘土紐接合痕を顕著に残すものが多い。これらは、他地域の系統を考慮した包括の仕方があるのかもしれないが、口縁形の分類のみにとどめた。また、壺形土器の抽出が明確にできていないのは、筆者の整理・理解不足によるもので、「壺風」ないし「壺？」として曖昧なまま取り繕っている。「その他口縁欠」のいくつかや、Ｊなどは、壺形土器と思われるが、その一方で、壺風としたＩは、顕著な煤の付着がみられ、確実に煮炊きに使用したものもある。「その他口縁部」としたものの中で、５住－４ａと同13ａは、煤の付着が見られず、頸部のすぼまりから、壺の可能性があり、内面頸部近くが甕形土器に比し丁寧な仕上げが見られ、粘土紐接合痕が目立たないという傾向はある。

３．壺形土器の分類

大分類として、Ⅰ：有段口縁系、Ⅱ：短頸直口、Ⅲ：「く」の字系、Ⅳ：その他装飾・台付系の四つを設けた。ＩのＡ：擬凹線文とＢ：無文の２者については、前者が弥生期に限定できるが、後者では、Ｂ２が形態上弥生期のものとの区分が曖昧となるが、焼成・調整の点から、古墳時代に下るものが主と考えている。Ⅲでは、Ａ：端部つまみ上げ・垂直端面が器種認定上検討余地を含む。４住－20は細片であるので、傾き・口径などの修正によっては、古墳時代前期の小型器台とも考えられ、Ｇ－51は、不自然な内面ケズリ位置から、鉢状の器種も考えられる。Ｂは古墳時代前期広口壺の類であろうが、各部のつくりが甘く、後出的に思える。Ⅳは、個体毎にバラエティーがあり一括した。

４．坩形土器の分類

第Ⅲ章第３節の小結でも述べたように、本遺跡で検出された古墳時代住居跡の時期対比の要となる器種である。大分類としてⅡ：小型鉢形を加えたが、基本はＩで、全体のプロポーションを基準にＡ～Ｄの４分類とした。

５．高坏・器台形土器の分類

弥生時代に属するものについては、両器種の区分が曖昧なものが多い。有段有文口縁のものは、すべて器台形土器となっているが、この器台形土器の中で、大口径のＩＡが器種認定の点で検討余地を残す。古墳時代に属する器台形土器は、Ⅲ（脚部片）の１点のみである。

一方、高坏で古墳時代に属するものは、Ｃ・Ｅ～Ｈが該当し、Ｅは前期、Ｃは不明、Ｆ～Ｈは中期で、Ｈが本遺跡における主体的形態となっている。Ｈは、屈曲部下縁を調整するものとしないもので区別される。「下縁を調整しない」とは、坏底部製作時の調整は受けているが、口縁部付加後の再調整を伴っていないことを指す。下縁調整を受けたものは、Ｈ１のように、屈曲後に弱く凹み、体部有段となる鉢形の雰囲気を出すものが多い。未調整のものでも、Ｈ４のように、

屈曲部直後からタッチの強いハケ目調整を施し、凹部の作出を意図していると思われるものがあり、Ｈ１でみる屈曲部の造作が主要な形態的特徴であったようである。未調整で、屈曲後をほぼナデ調整ですますものは、粘土ダレ状の不整な下縁を呈し、先のものとは逆に口縁下端が下方に突出する有段タイプを思わせる。

６．その他の器種

少数出土器種を列挙したい。甕形土器は、本文中では坩形土器の中で記載したが、ここでは区別した。口縁形態は通有の濶形土器のものであるが、このように極めて薄手のものは少ない。

埦形土器については、胎土及び焼成の点から、古墳時代中期以降のものとは考えがたく、弥生時代後～末期の特殊器形のものかもしれない。

蓋形土器は紐片しか見いだせず、Ⅰ：紐頂凹みと、Ⅱ：紐頂開口の２分類とした。台付き土器の台の可能性があるものを含む。

手づくね土器はわずか３点であるが、Ⅰ：鉢形とⅡ：コップ形の２つに分類される。

以上の他に、遺構に伴うもので分類図に掲載しなかったものがある。ひとつは、11号住居跡出土の山陰型甑形土器。もう一つは、７号住居跡から出土した古墳時代中期の鉢形土器で、これも甑の可能性があるが、外面の煤と被熱痕から、煮炊き用の甕的な使い方が想定される。

７．まとめ

（１）弥生時代後期の土器群

当該期の遺構は１号土坑と、11号住居跡のみであり、掲載遺物の殆どがグリッド出土のものである。調査区が狭長なため、組成を把握するに十分な資料とは言い難く、また、小破片であることから、法量の点においても検討余地の残るものが主体を占める。２つの遺構出土の遺物については、第Ⅲ章第２節の小結において時間的な位置づけを試みている。ここでは、グリッド遺物を含めた分類をもとに、再度状況の説明を行っておきたい。

基準とするのは有段口縁甕形土器の分類である。擬凹線文を持つ有段口縁甕形土器は、甕ⅠA1の内面指頭圧痕がないものと、甕ⅠA2の指頭圧痕あるものに分けられた。そして、その結果現れた傾向が、前者では多様な細分類形態で構成されるのに対し、後者では、画一的な口縁形態を示していることであった。甕ⅠA2の主要形態は、端部先細りの甕ⅠA2bである。指頭圧痕を残す手法が、この口縁形態と不可分の関係にあると言えるが、同形態で指頭圧痕を持たない甕ⅠA1fの存在からすると、絶対条件ではないらしい。 端部先細りのこれらは、後期終末の月影式併行に主体となる一群である。一方、甕ⅠA1に分類されたものは、一部月影式併行のものを含んでいるが、端部先細りのものに対する、それ以外のものの量的比率の高さは、月影式に先行する時期の土器群が本遺跡に存することを示している。

先行すると思われる有段口縁甕形土器の主体的特徴をまとめると、口縁帯は、著しい外反は無

く直線的で、端部がやや肥厚して丸くおさまる傾向にある。そして、これに加わる形態として、いわゆる「有段風」と称するものが断面三角のものとの中間形として存在する。特に、無文の甕ＩＢ1dは松任市竹松遺跡群の報文（安 1992）で安氏の言う「有段風無文型」であり、本遺跡でも結構特徴的な存在感を示す。すなわち、後期後半の法仏式併行の土器群と考えられる。遺構出土土器で述べたように、１号土坑は、法仏式の新しい段階か月影式の古い段階、一方の11号住居跡は、月影式でも新しい段階を考えている。先述の包含層土器を含めた検討から明らかなように、この二つの遺構が本遺跡の弥生時代土器群の時期を集約しているわけではなく、法仏式期（後半か？）から終末の月影式期全般にわたる遺構が未調査区に存在する可能性を指摘しておきたい。

（２）古墳時代前期の土器群

古墳時代前期の土器群は、乏しいが確実に存在する。高坏Ｅの小型高坏や、器台Ⅲの小型器台などが目安となり、甕形土器では、布留系の甕ⅡＢが伴う。ただ、布留系の甕形土器は、新しい様相と考えられるものも含まれている。一応壺形土器とした壺ⅢＡも、該期の広口壺にもなりうる。遺構を伴わず、明確な土器抽出と時期対比までには力が及ばなかった。

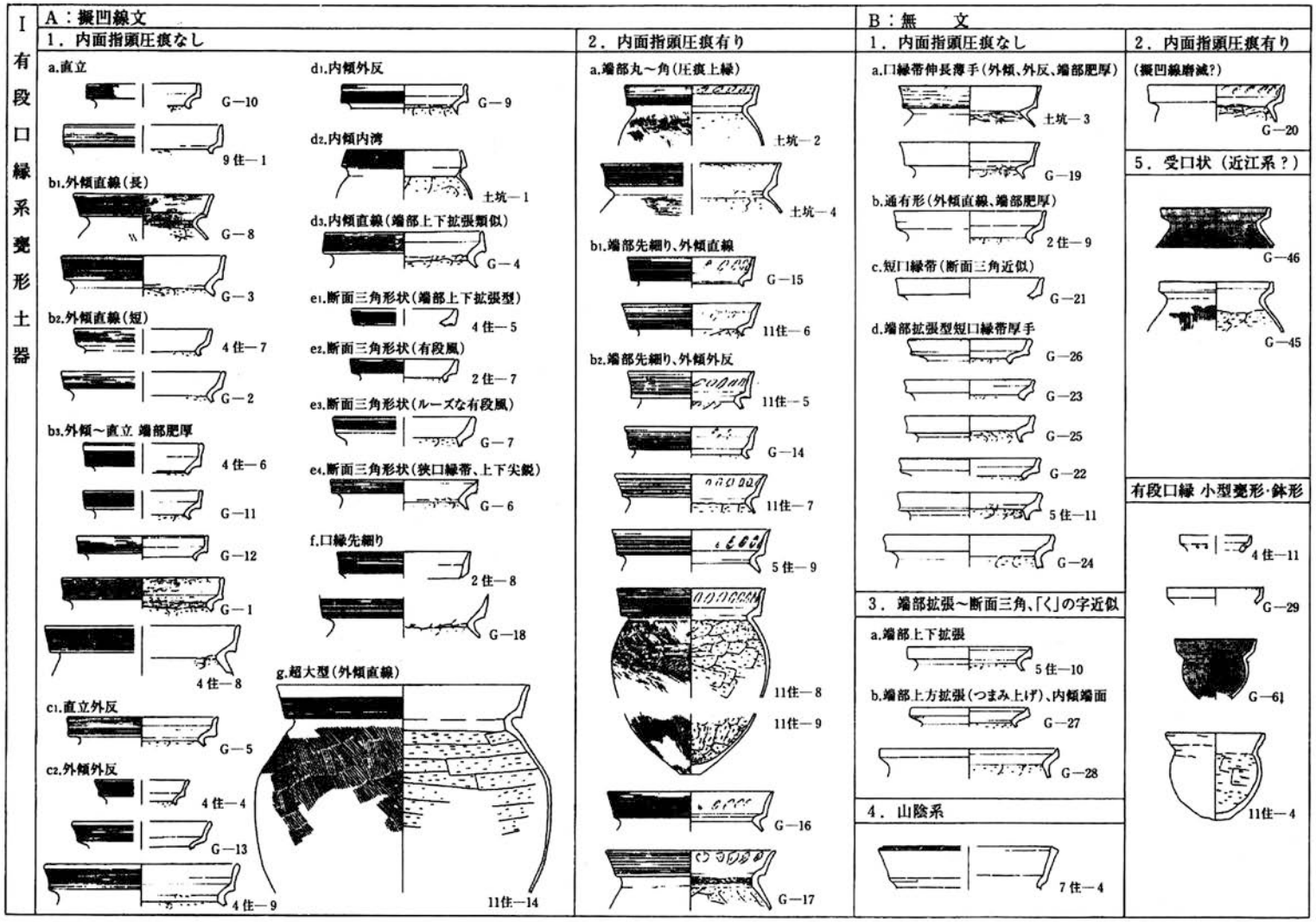
（３）古墳時代中期の土器群

中期の土器群は、その大半が遺構に付いたものであり、当遺跡の中心でもある。第Ⅲ章第３節の小結において、ほぼ漆・12群併行とした。全体の分類作業を通して再度指摘できる点であるが、中心構成は、甕形土器が「く」の字口縁系の甕ⅡＣ～ⅡＫ、高坏形土器が高坏Ｈ、それに坩形土器が加わる。壺形土器は、壺ⅢＣが唯一床面出土の確実資料で、ほかは、山陰系の壺ＩＣを認めるが、全形の解る資料が乏しい。まず、甕形土器と壺形土器の区分が曖昧となっている。多様な口縁部形態が何に起因しており、何を示しているのか解らないことが多い。先の区分の曖昧さも、この多様な口縁形態や、それにかかわる体部形態の未整理が原因かもしれない。分類では、甕形土器の口縁部を欠くものの中に壺形土器と思われるものの体部が含まれる。甕形土器は、特徴として、頸部近くの内面に粘土紐接合痕を顕著に残すことが一つの目安となるようである。

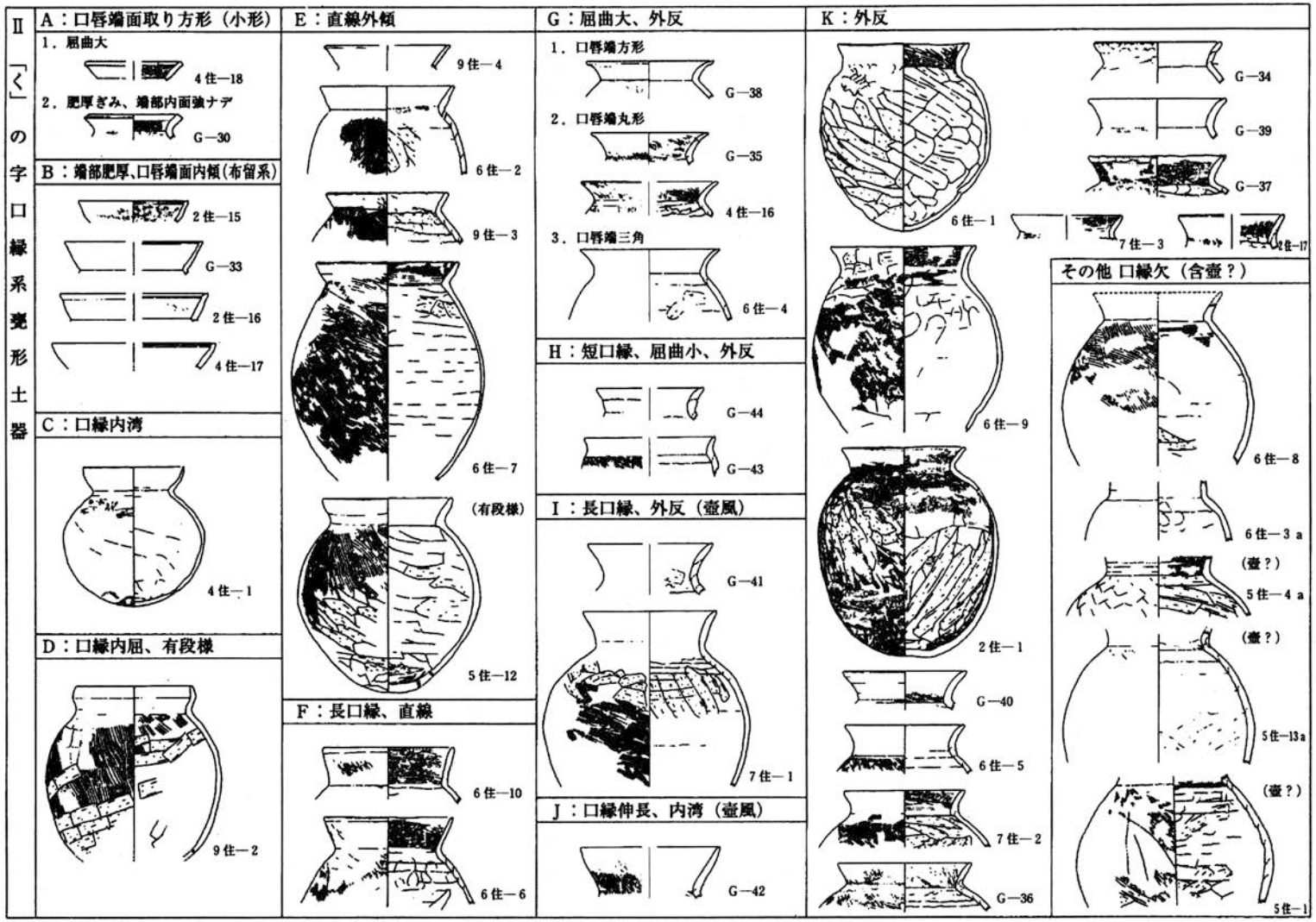
時期的なことについては、５号住居跡に拡張・建て替えが認められるので、理屈の上では２段階にわたる土器群の抽出はあり得るが、分類されたものを比較して新しいものと古いものを設定するのは難しく、もう少し遺構の重なり等の状況証拠を加える必要があろう。ただし、谷を挟んだＡ遺跡で、中期に属する竪穴住居跡がただ１棟（27号住居跡）のみ検出されており、良好な一括資料が得られている。本遺跡では伴わないことから土器群の下限を求める目安としたもの、つまり、甕形土器、屈曲部に突出した凸帯をもつ高坏形土器、椀形土器の各器種が、確実な組成を成している。まさしく本遺跡土器群の次の段階に位置づけられる漆・13群併行と考えられ、本遺跡未調査区内でも、検出される可能性は充分ある。

参考文献

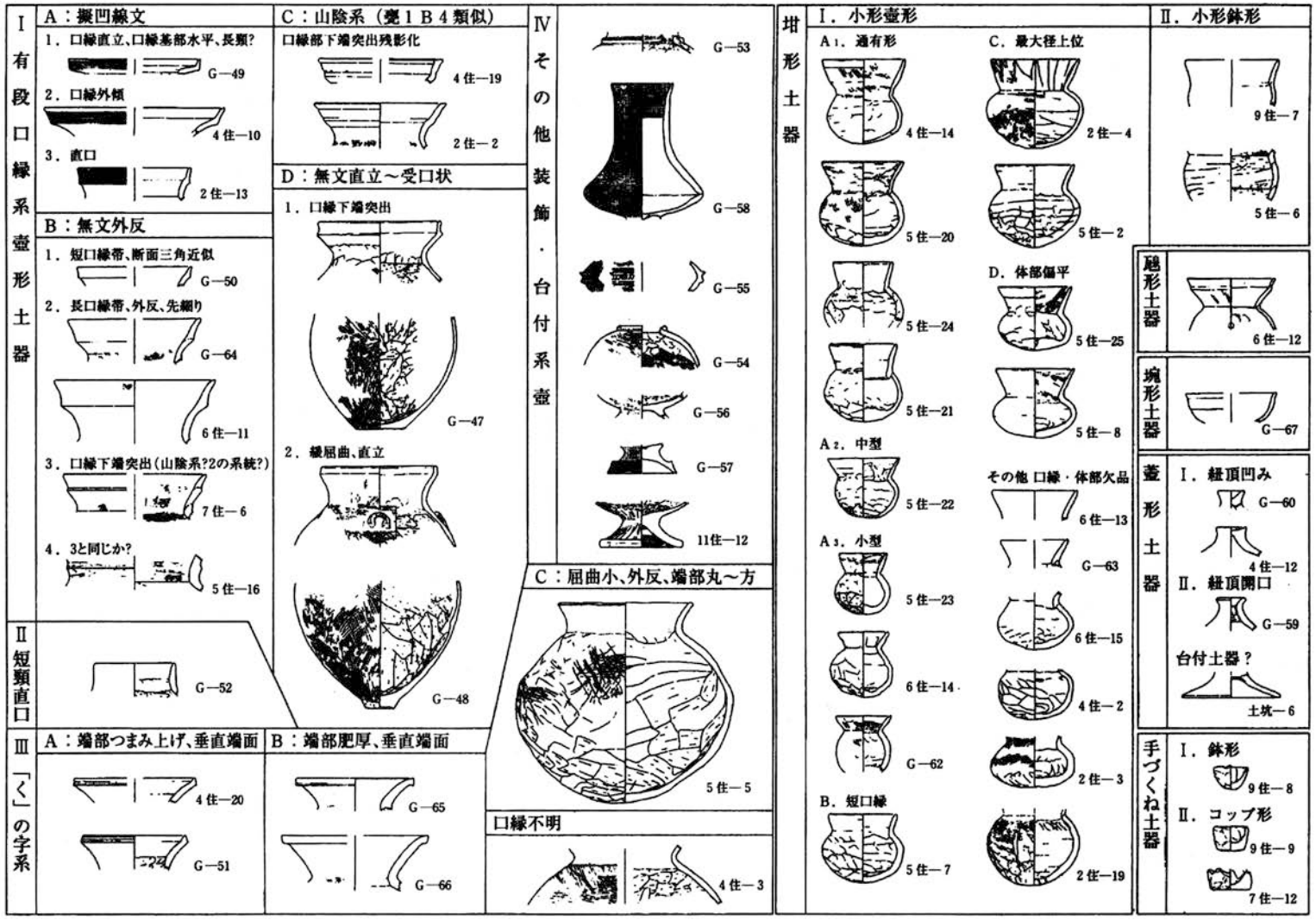
安　英樹　1992　「第９章　総括」　『竹松遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター



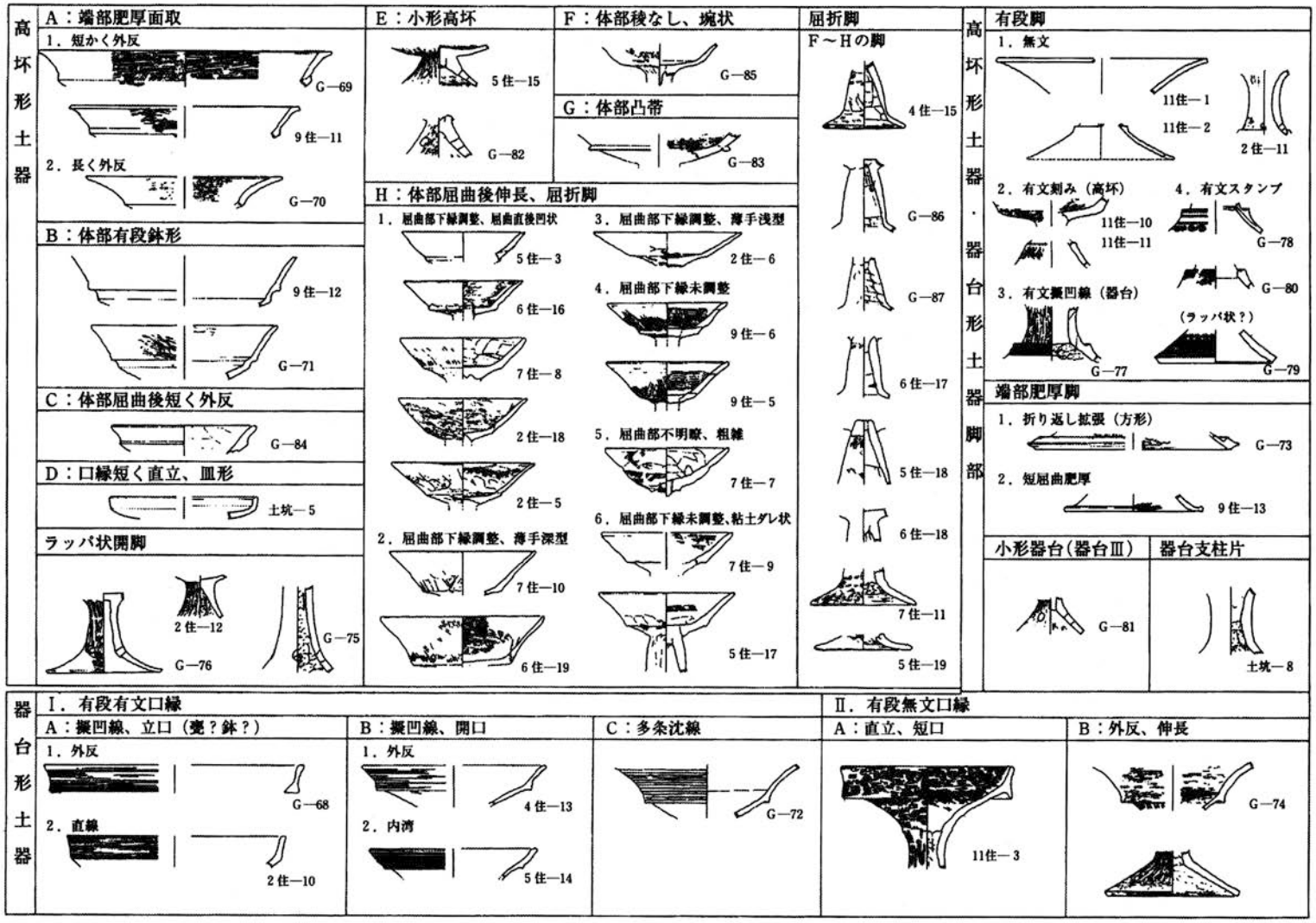
第72図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（甕形土器Ⅰ）（S=1／8）



第73図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（甕形土器Ⅱ）（S=1／8）



第74図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（壺形土器・その他）（S=1／8）



第75図　念仏林南B遺跡出土土器集成・分類（高坏形土器・器台形土器）（S=1／8）

第２節　弥生時代後期から古墳時代中期の住居

１．住居跡一覧

ここでは、対岸のＡ遺跡検出の住居跡を含めて検討材料としたい。

表６　弥生時代後期～古墳時代中期の住居跡一覧

遺跡－住居No	時期	平面形	規模（m）	壁高(m)	床(m²)	主柱	壁溝	炉	特殊ピット
Ａ－20号住	弥後	胴張隅円方形	5.2×5.0	0.55	27	4	有	不明	中央
Ａ－22号住	〃	〃　　（近円形）	6.2×6.0	0.20	35	4	有	不明	中央
Ｂ－11号住	弥末	弱胴張隅円方形（台形）	4.5×4.5	0.50	20	2	有	有？	壁寄中央
Ａ－24号住	古前	隅円長方形	5.1×6.0	0.25	37	4	有	有	壁際中央
Ｂ－２号住	古中	正方形	6.2×5.9	0.25	32	4	有	有	〃
Ｂ－４号住	〃	長方形（平行四辺形）	4.1×4.6	0.30	17	2	有	有	〃　１段
Ｂ－５a号住	〃	方形	(8.4)×－	0.25	(70)	(４)	有	－	－
Ｂ－５b号住	〃	方形	(6.0)×－	(0.35)	(36)	(４)	有	－	－
Ｂ－６号住	〃	長方形	4.5×3.1	0.15	15	－	無	有	壁際片寄
Ｂ－７号住	〃	(長)方形	(4.8)×－	0.15		－	無	有	－
Ｂ－９号住	〃	不整方形	(3.4)×3.5	－	(12)	(２)	無	有	無
Ａ－27号住	〃	方形	6.6×(6.9)	0.25	(42)	4	無	有？	柱穴か？

規模は、本文中の各住居記載計測値とは別に、本表用に、壁下端線をもって縦・横軸寸法で統一した。

壁溝を持つ場合の床面積は、壁溝内側上端線で囲まれた範囲。（ ）は、正方形プランとした 場合の推定値。

２．全体の推移

一覧表に列挙したとおり、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居跡が各期そろって検出されている。しかし、調査区が限定されていることから、各期における集落を構成する住居跡の組み合わせや、その景観が明確なわけではない。北陸の弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡に関しては、高本氏らによって、一度総括的な整理・検討がなされており（高本他 1983)、また、塚崎遺跡の報文においては、小嶋芳孝氏が、特殊ピットについて全国的な視野で検討がなされている（小嶋 1976)。本遺跡の調査状況では、同時期住居跡群における構成のバラエティーを把握することはできないが、概ね、従来の検討結果を追認することができる。すなわち、平面形は、円形に近いものから方形へと変化していおり、特殊ピットは、漸次壁際へ移動している。

３．今後の検討課題及び若干の仮説

本調査が限定された区域のものであり、積極的な再検討の題材は持ち合わせていないので、今後の検討課題あるいは、疑問点などを一部抽出し、若干の仮説を加えるにとどめておきたい。

①弥生から古墳へのプランの変化は何に起因しているのか。

笹森健一氏によると（笹森 1990)、隅丸方形から方形へのプランの変化は、竪穴掘削過程の検討と垂木の架構方法の変化によって説明できるという。詳細は氏の論功に譲るが、主旨は、「竪穴の荒掘り⇒主柱の配置⇒垂木の架構⇒竪穴周囲の整形（垂木の接地線までの掘削)」という工程を考えると、垂木の接地線の変化（架構法の変化）が、そのままプランの変化に反映されるというものである。本遺跡のＢ－４号住居跡のように、平行四辺形プランを呈するものの存在が、垂木接地線を基準としてプランが決定された表徴とした。氏が想定した方形プランの上屋架構法自体は検討余地も残るが、実に論理的な着眼のように思う。例えば台形プランの11号住居跡が、斜面の傾斜をそのまま利用したものとした場合、傾斜方向に平行な棟木に、両側から垂木を架けようとすると、垂木の接地線が末広がりに並ばなければ、一本線の棟木には先端が到達しない。11号住居の場合、主柱が変則的なため、復元は複雑となるが、今後の類例の検討を待ちたい。

②特殊ピットはなぜ移動するのか。

特殊ピットの移動は、住居跡プランの円形から方形への変化に連動しているのは確かである。とすれば、住居構造の変化に起因した機能位置の必然的変化として捉えるのが自然であるが、具体的要因はすぐには思いつかない。住居中心近くにある場合は、貯蔵穴との見方以外に、それを柱穴と考える場合や、灰穴炉と考える場合などが見受けられる。いずれも位置関係からみれば同じ様なものに対して、深さや形態、覆土の状況などにより、機能推定が異なっている。また、柱穴説については、確かに形態や深さの点で貯蔵穴らしくなく、柱穴らしいものがあり、Ａ遺跡27号住居跡の主柱間中央土坑も、そういった部類に属する。イメージとしては、中央屋内炉の設置が安定すると、特殊ピットは中央から退けられる様に思われ、このことから逆に言えば、中央の特殊ピットは炉としての機能があった可能性がやはり残される。また、排水溝が延びるものがあるので、水の使用と大きな関わりがあったものとも推測できる。溝で連結されるピットなども含めて、玉生産の作業用ピットと推測されたことも重要で、これを玉生産に限らず、住居内で日常的に行われる水を用いた作業（石や鉄製農工具の研磨など）で使用したものとも思われる。11号住居跡でも、砥石が出土している。使用形態としては、２段掘りであることから、縄文時代中期のものと同様、板蓋が備えられていたと考えられる。この点を重視して、「有蓋土坑」とでも統一して呼ぶべきかもしれない。即ち、これが常に開口していることのない用途に供するための定型化した施設であるとの認識を前提とし、各期・各住居跡の様相に即した用途の検討が必要となろう。こういった意味では、１段目の掘り込みの有無も重要な機能分類の要素となる。位置的変化が、用途の変化によるものという傾向がでた場合、用途の変化が位置の変化を誘引した要因、たとえば、方形居住空間に対する民俗学的見地を交えた屋内区分の変遷などを要因として念頭に置く必要があろうし、個別の家における屋内労働・作業の変化などとも関わってくると思う。

③２・４・５号住居跡のような整然としたプラン・構造の住居と、６・７・９号住居跡のような不整形小型住居とはどういう関係にあるのか。

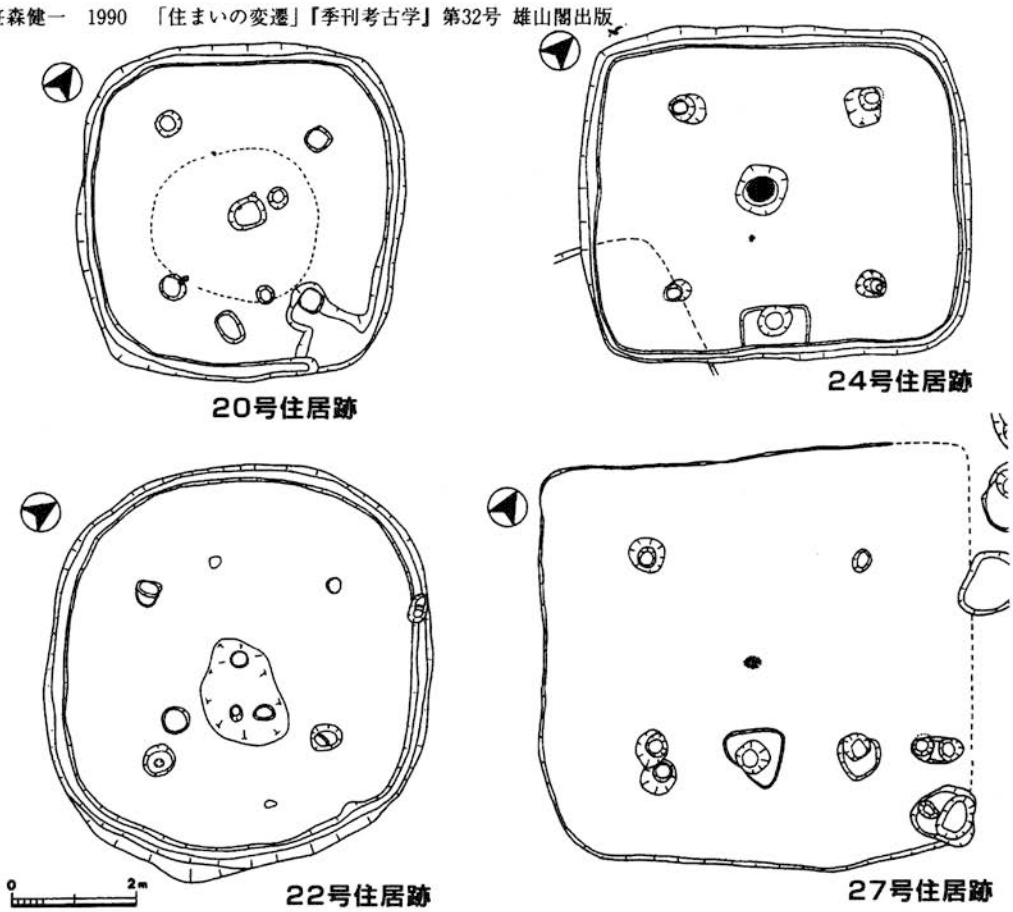
両者は対照的である。後者は、掘り込みが浅く小型で、床面は軟弱で安定していない。その反面、前者に比べて土器の出土量が極めて多い。6・7号住居跡に関しては、隣接の5号住居跡を含めて適度な距離を空けており、また、主軸も他の住居跡群とほぼ合致する。これらは、同時併存した可能性も考えられ、さらに、例えば5号住居跡と6号住居跡が機能的役割をもって有機的に結びついたものであったかもしれない。接合関係等による手がかりもなく、推測の域を出ないが、5号住居跡が特別な意味を持っていて、炊事を中心とした付属施設として別棟が設けられていた場合や、5号住居跡が一度建て替えられていることから、建て替えに伴う何らかの行為や行事に関連した施設の場合など、様々な解釈が成り立つ。類似例の検討を重ねなければならないが、同質の住居ではなく、性格の相違を推定しておきたい。

参考文献

高本　実他　1983　「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址」『北陸の考古学』石川考古学研究会

小嶋芳孝　1976　「塚崎遺跡　Ⅳ総括　2　建物の構造と集落構成」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ』石川県教育委員会　石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

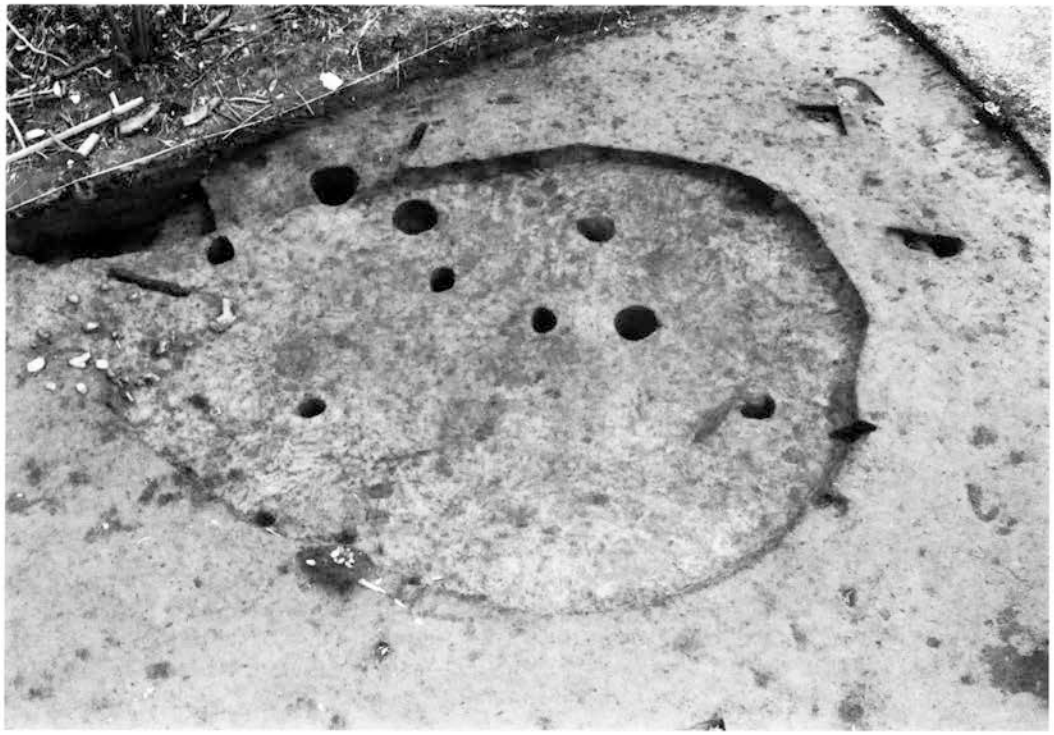
笹森健一　1990　「住まいの変遷」『季刊考古学』第32号　雄山閣出版



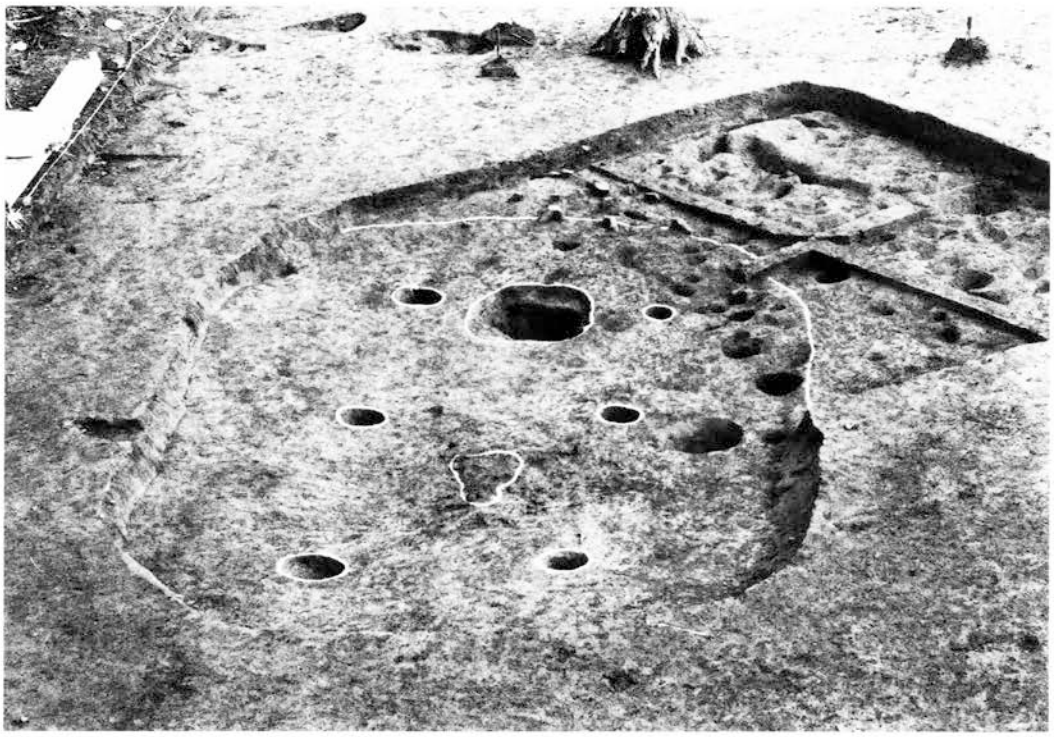
第76図　念仏林南A遺跡の弥生後期～古墳中期竪穴住居跡(S=1／120)

念仏林南遺跡周辺航空写真（西から）

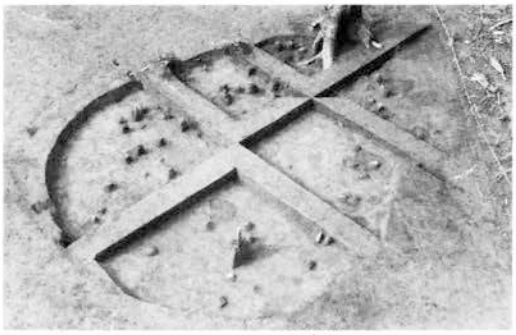
平成3年度調査区全景航空写真（西から）



1号住居跡完掘状況

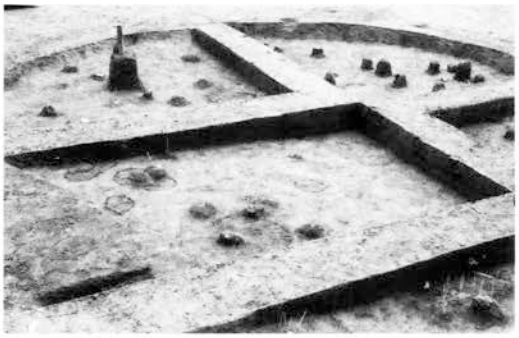


3号住居跡完掘状況


セクションベルト設定状況

床面石核出土状況

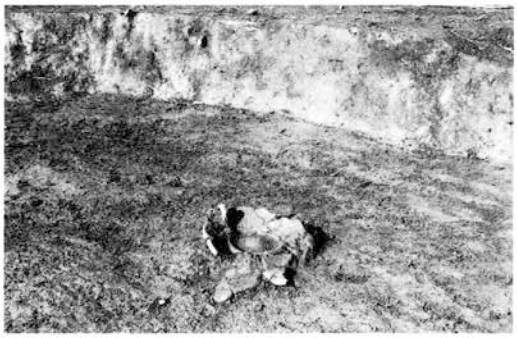
遺物出土状況及び土層断面（南から）


同　　左（北から）

1号住居跡の調査

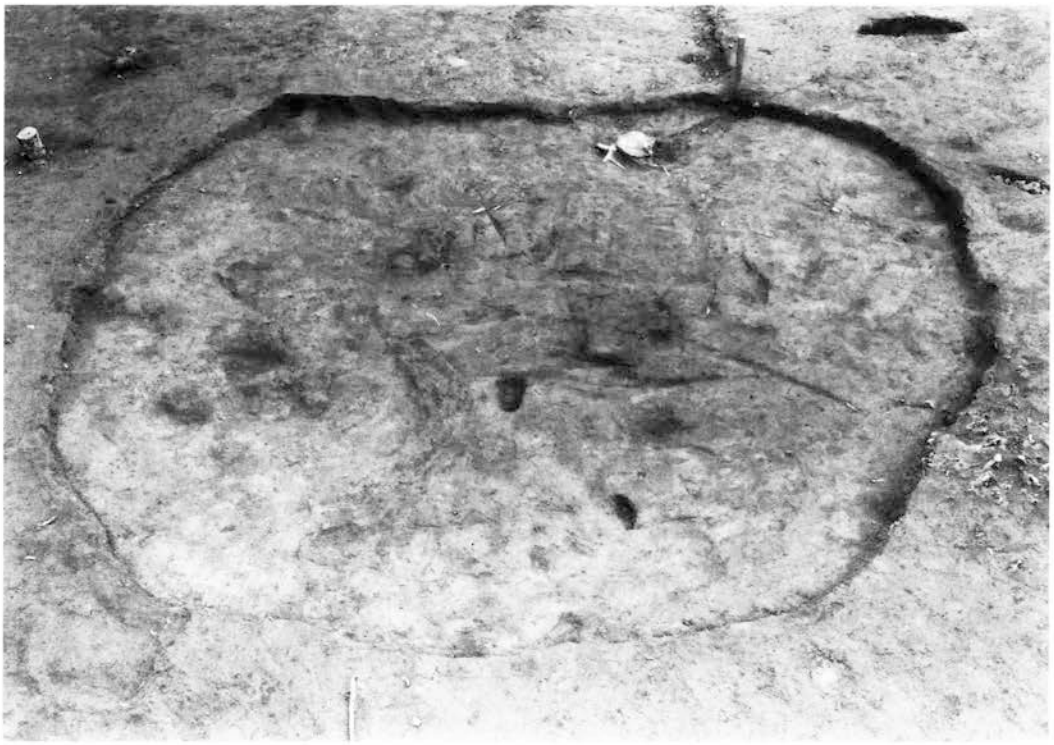
土層断面（A—A'）

土層断面（B—B'）

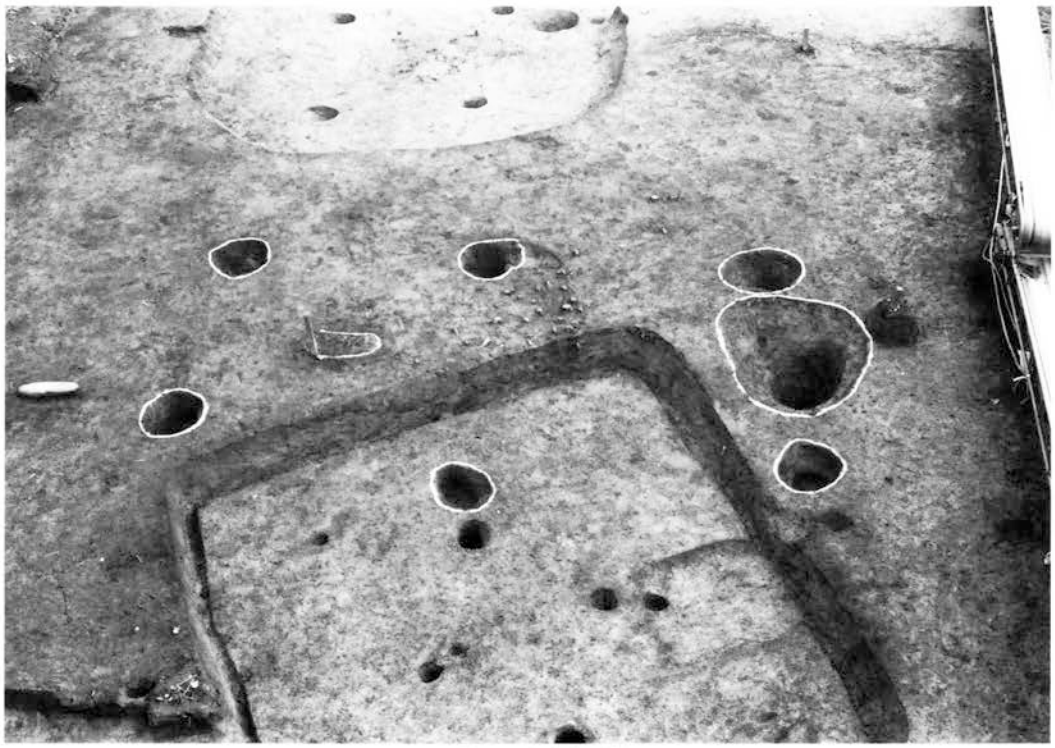

床面土器出土状況

貯蔵穴風の土坑

2号住居跡の調査



１０号住居跡完掘状況



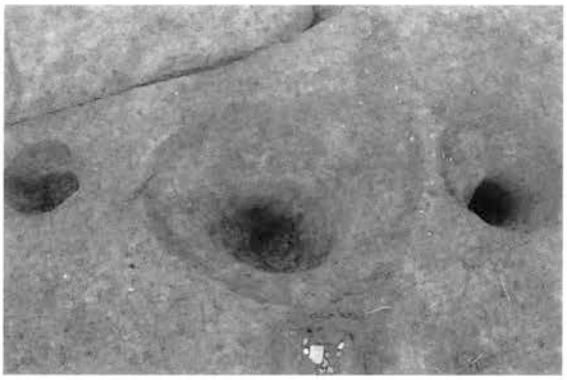
８号住居跡完掘状況

遺物出土状況及び調査風景

遺物出土状況

10号住居跡の調査

手前配石側からの全景



貯蔵穴風の土坑検出状況

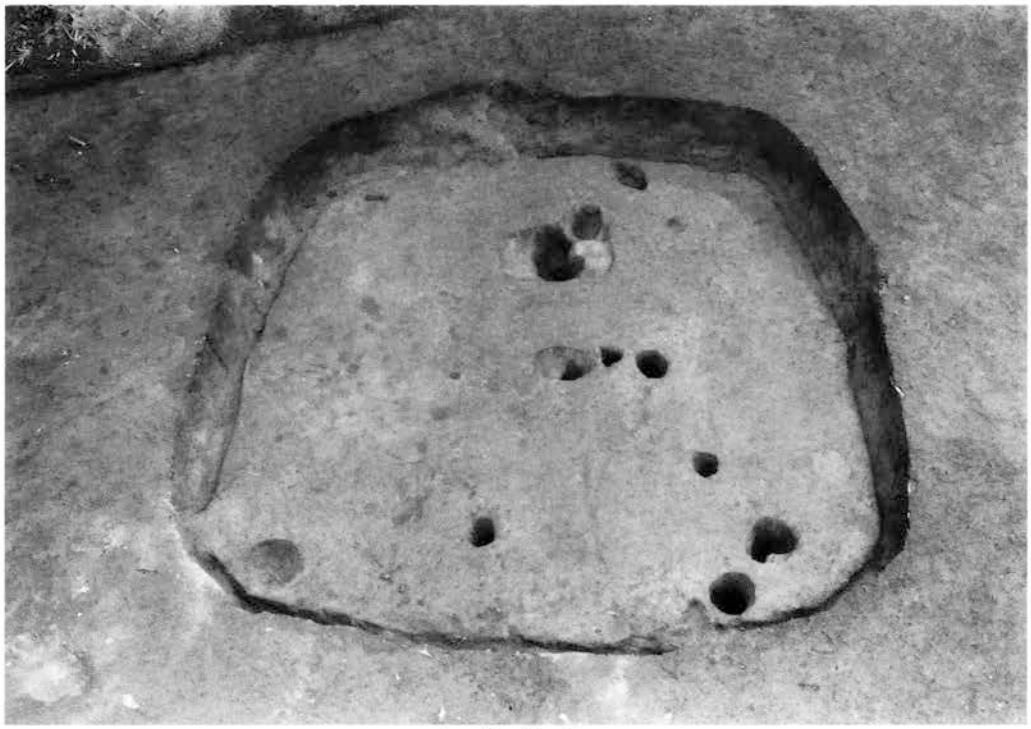
8号住居跡の調査

土坑全景及び遺物出土状況

遺物出土状況近景

土層断面

1号土坑の調査



完　掘　状　況

土層断面（北コーナーから）

土層断面（南コーナーから）

１１号住居跡の調査①

セクションベルト設定状況

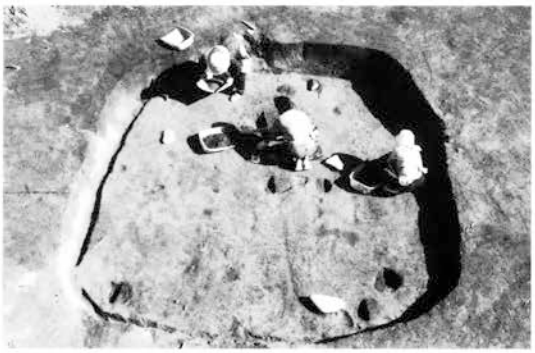
遺物出土状況

床面器台出土状況

山陰型甑出土状況

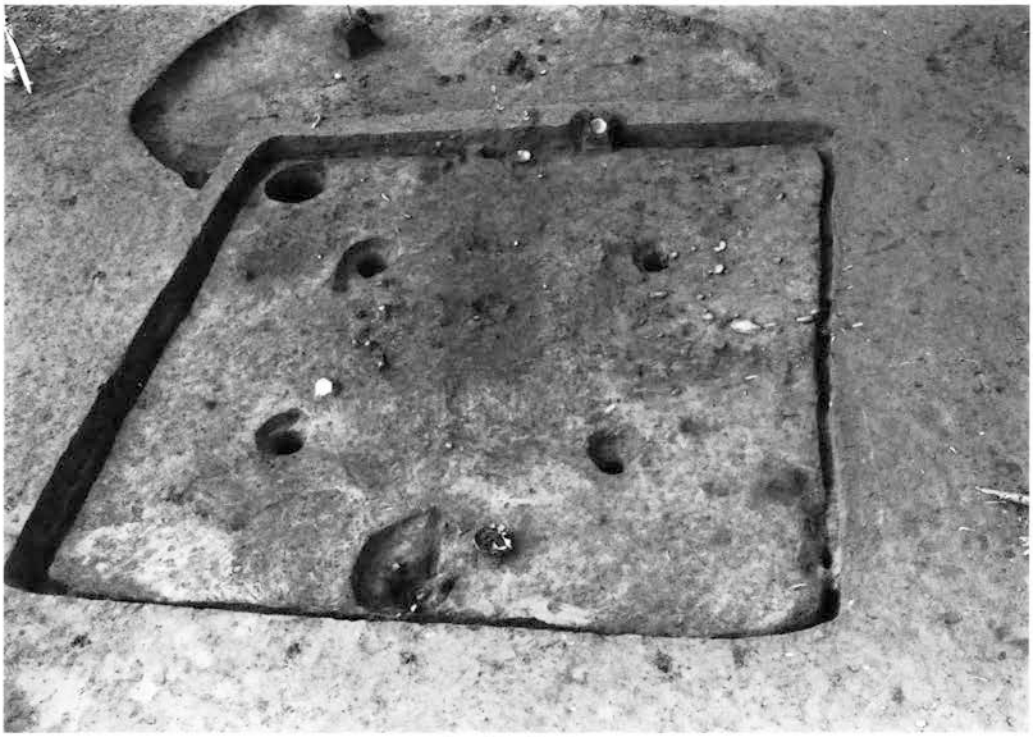
床面配石出土状況

同　　左


調査風景

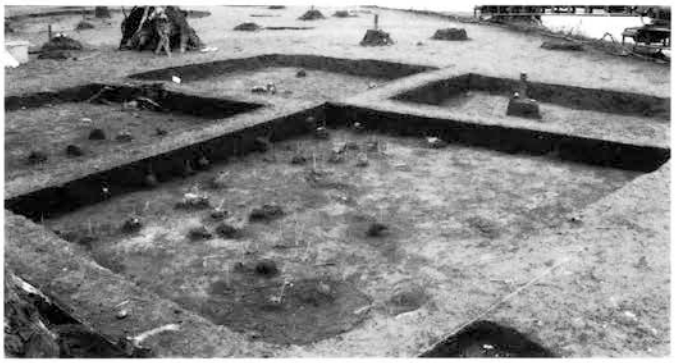
床面下の出土状況

11号住居跡の調査②



完　掘　状　況

土層断面（南コーナーから）



土層断面（北コーナーから）

2号住居跡の調査①

調査風景（奥が重複する3号住居跡）

床面・壁際の高坏出土状況

セクションベルト設定状況・覆土遺物出土状況

柱穴・土坑調査風景

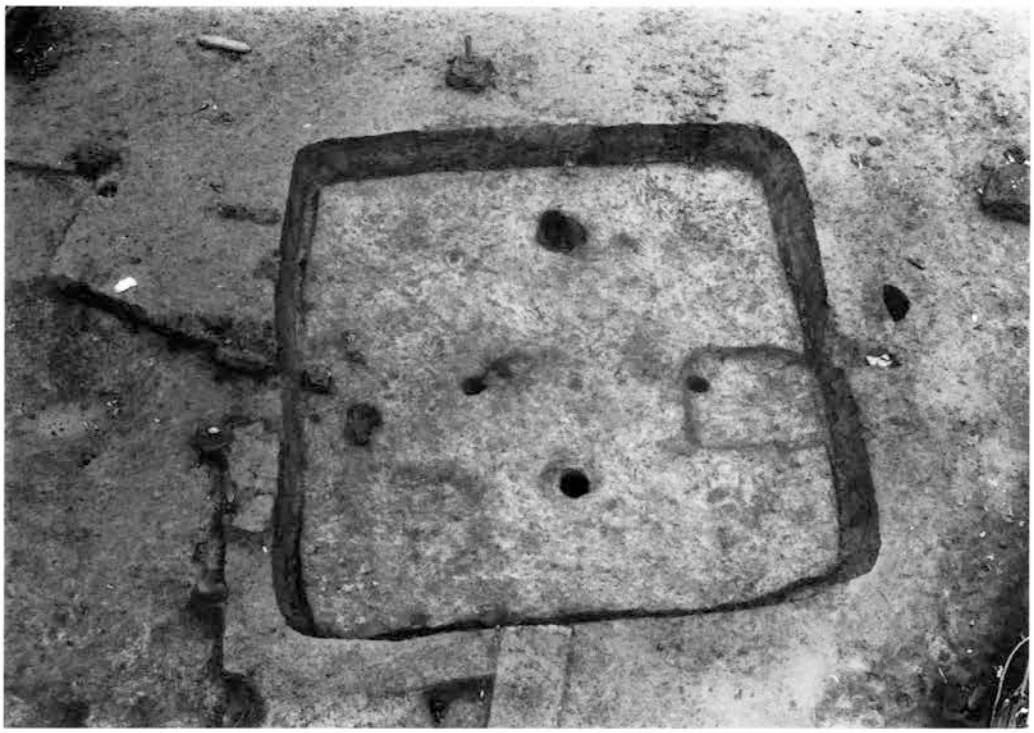
貯蔵穴風の土坑（P-5）土層断面

同　左　　完掘状況

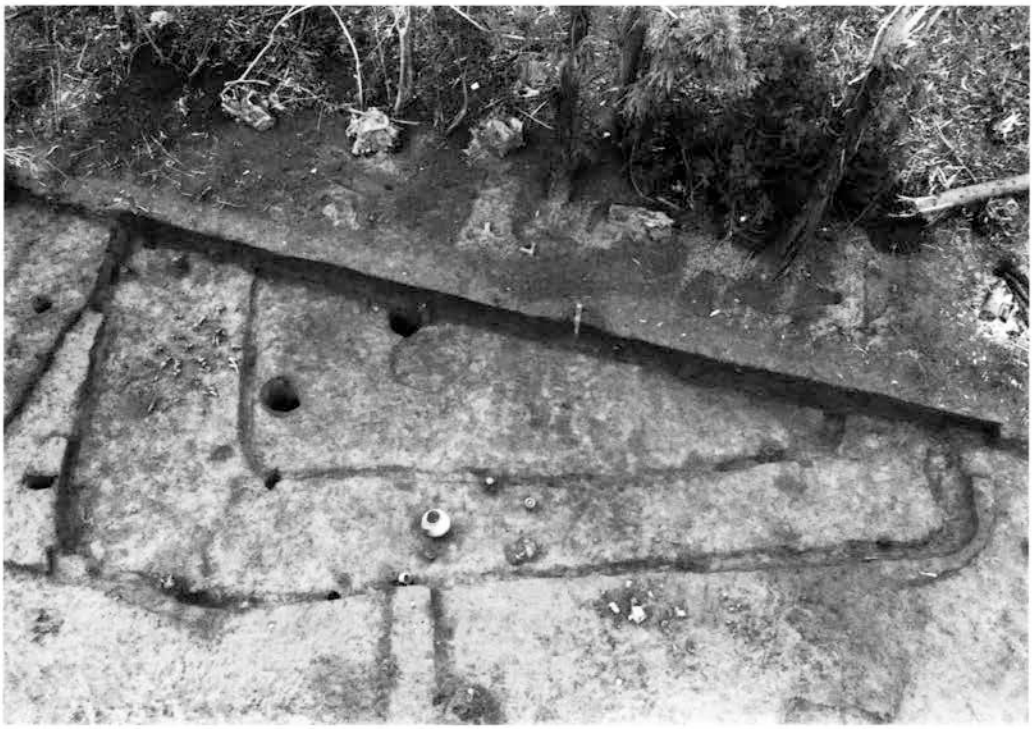
2段堀土坑（P-6）土層断面

同　左　　完掘及び遺物出土状況

2号住居跡の調査②



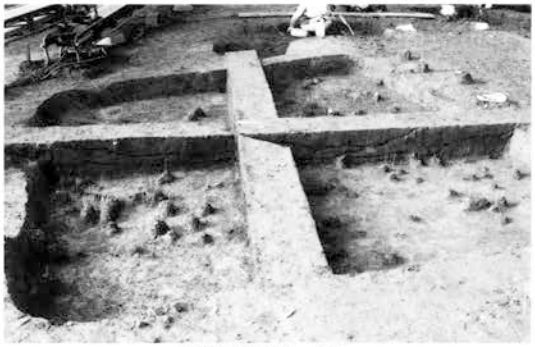
4号住居跡完掘状況



5号住居跡完掘状況

土層断面（B—B'）

床面遺物出土状況


土層断面（A—A'）

完掘状況（西コーナーから）

4号住居跡の調査

土層断面及び遺物出土状況

床面遺物出土状況

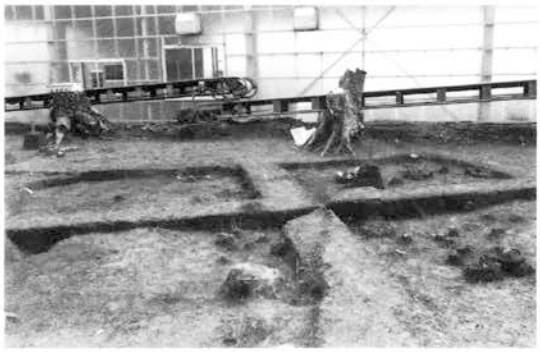
土層断面（A—A'西半）

同　左（A—A'東半）

5号住居跡の調査

6号住居跡完掘・遺物出土状況

7号住居跡完掘・遺物出土状況



土層断面（A—A'）

同　左（B—B'）

遺物出土状況（b）

同　左（14・f）

同　左（d）

6号住居跡の調査

土層断面（B—B'）

土層断面（A—A'）

遺物出土状況

遺物出土状況（7住1・2・7）

7号住居跡の調査

完掘状況

調査風景

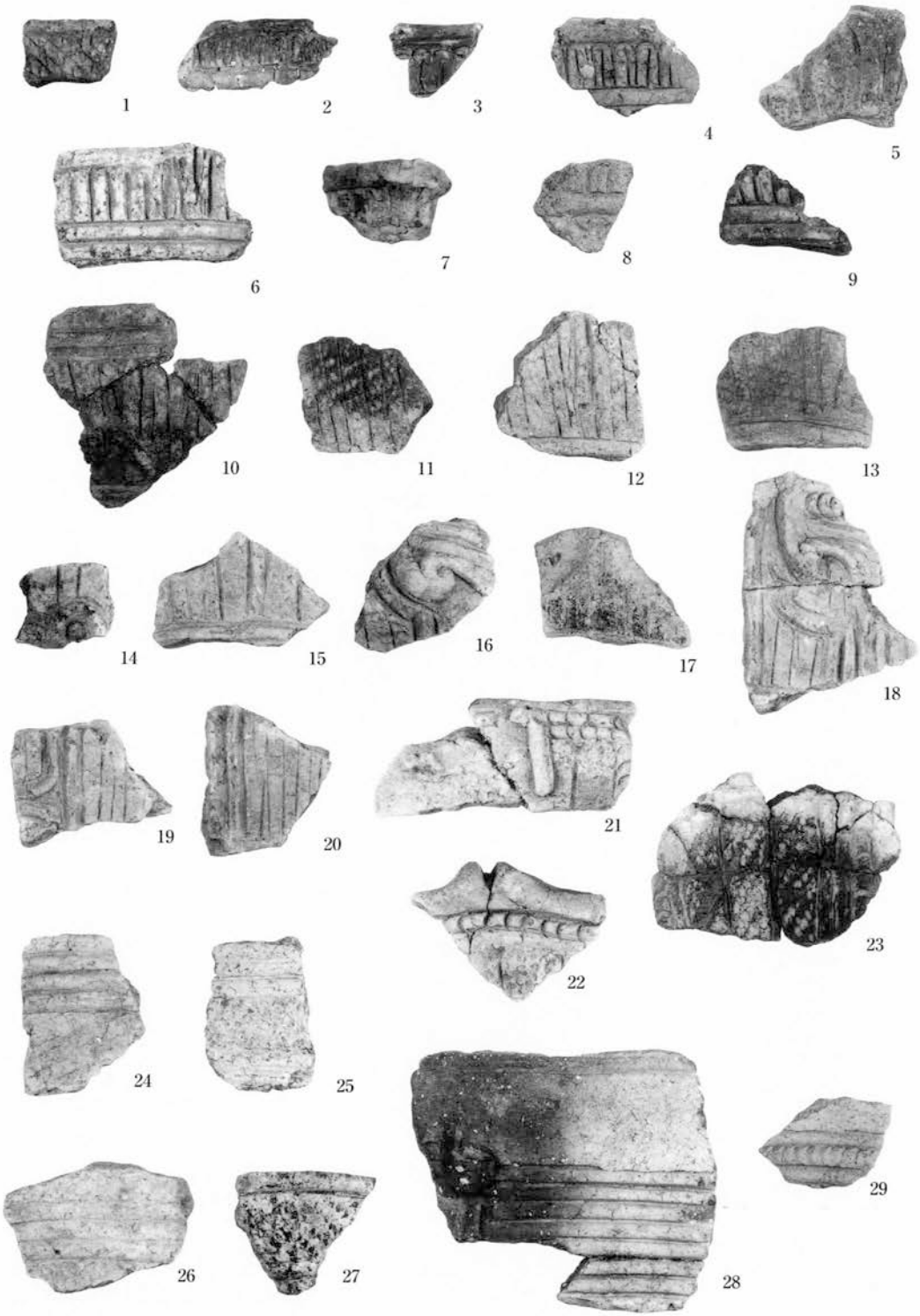
遺物出土状況

9号住居跡の調査

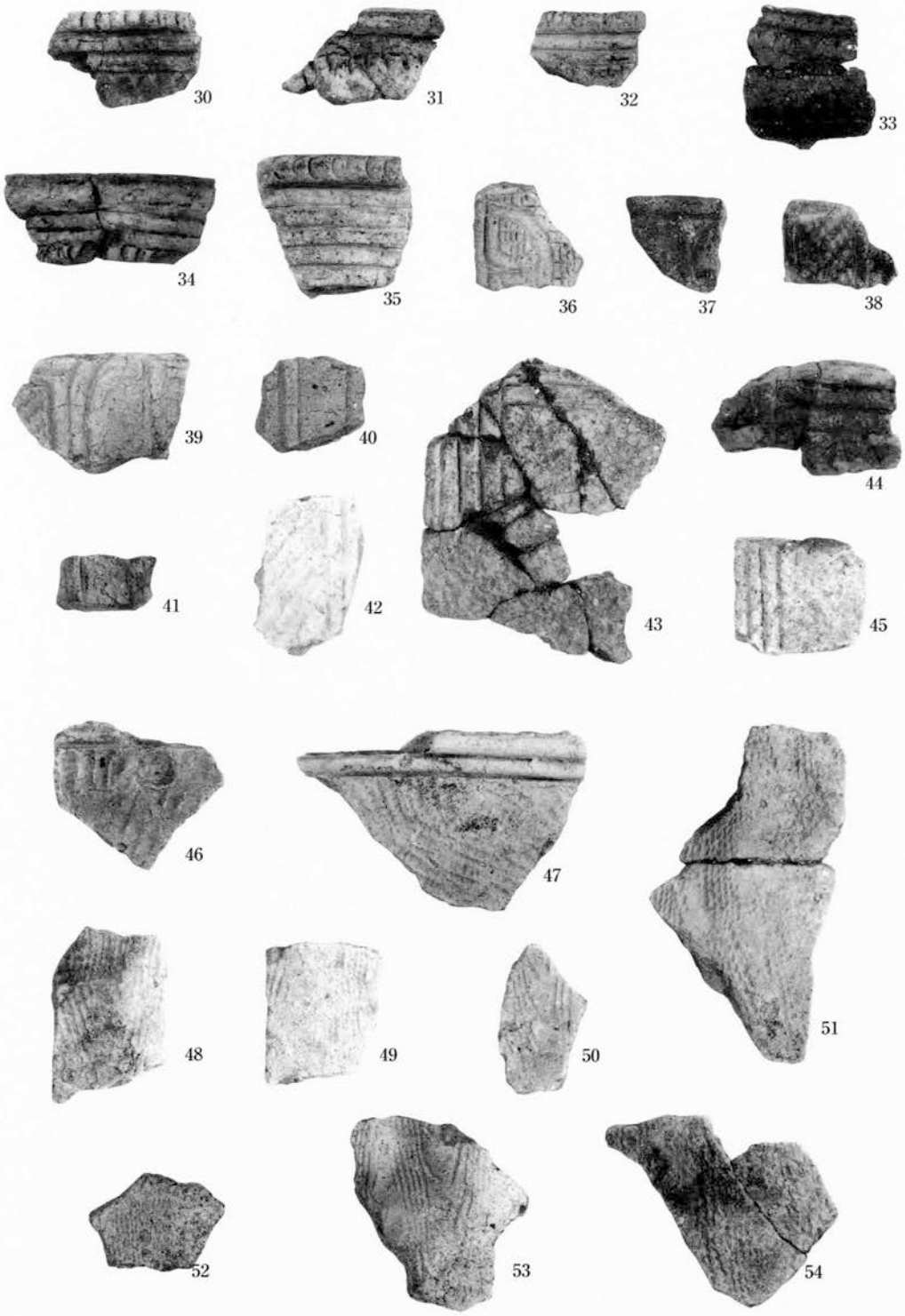
A遺跡からB遺跡 昭和59年度
調査区を望む（調査前）

同　上（調査中）

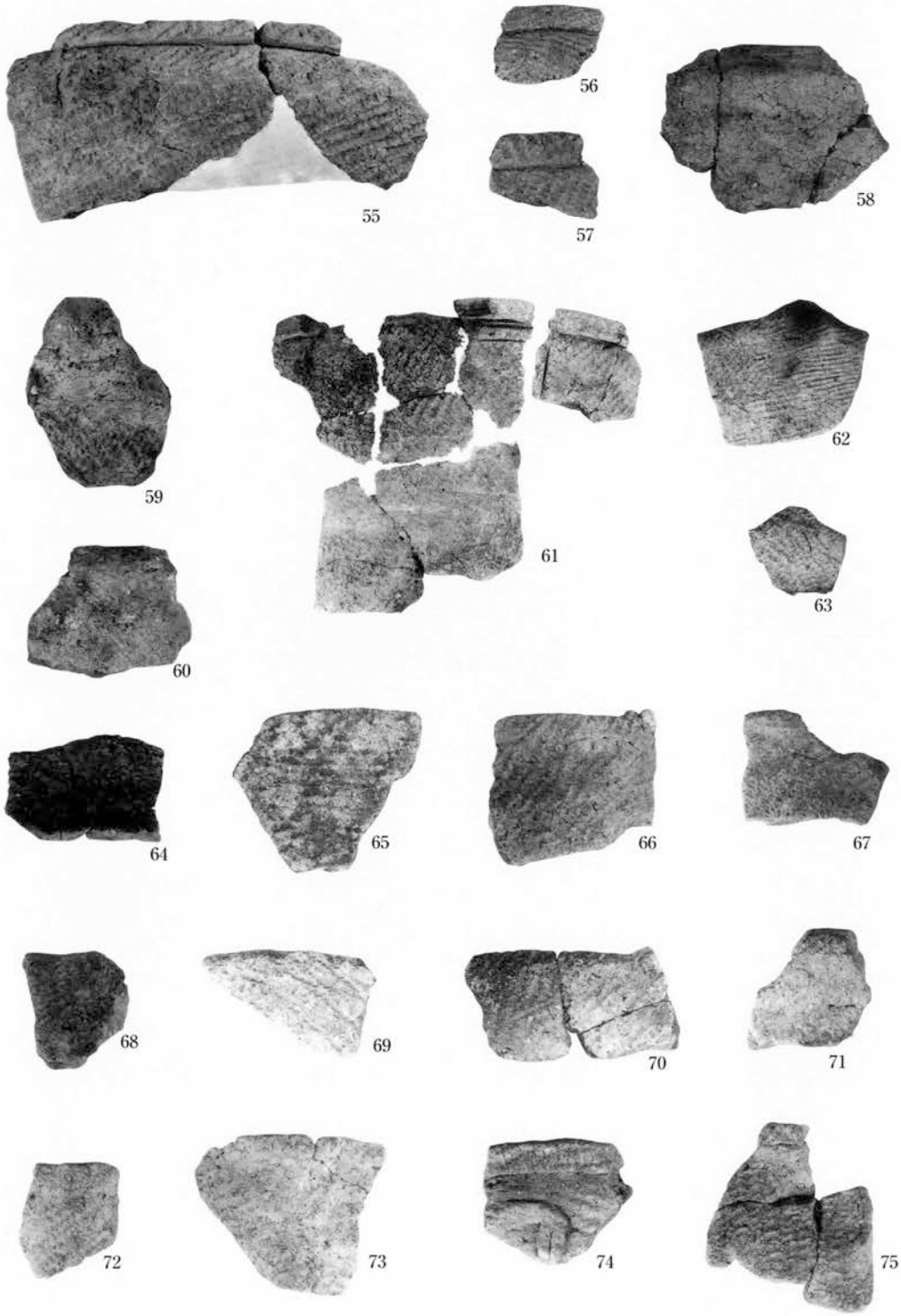
平成3年度調査区全景



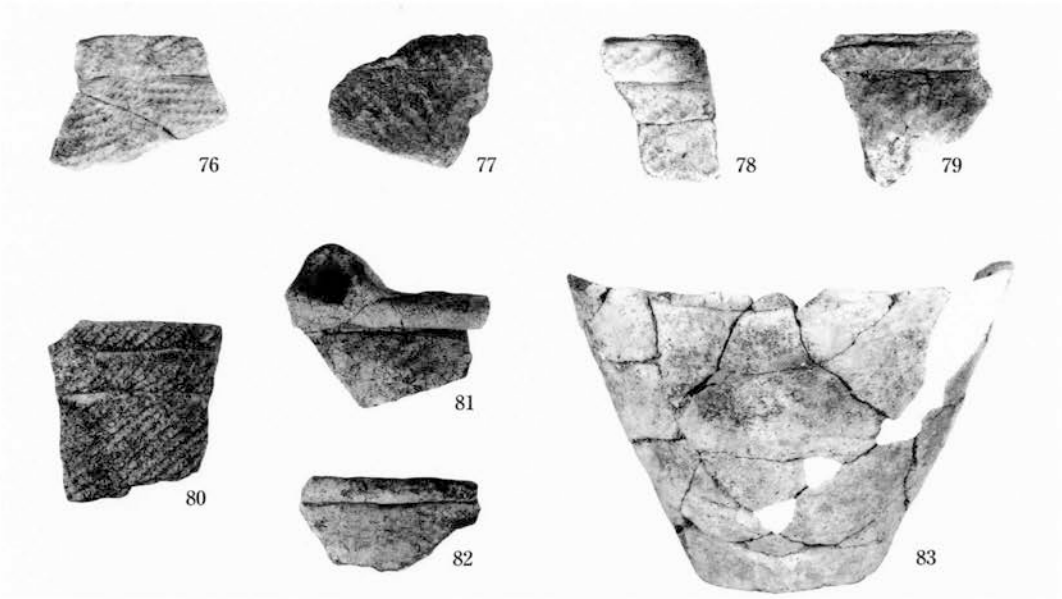
深鉢形土器　第Ⅰ群


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

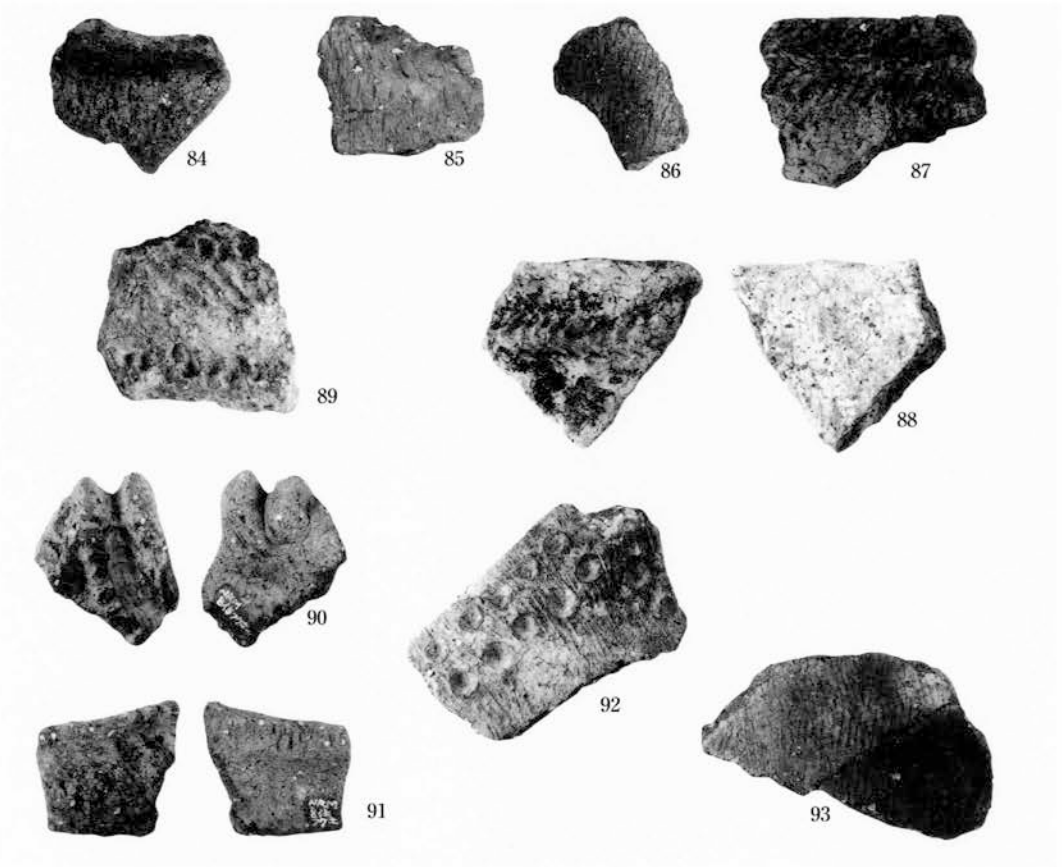
深鉢形土器　第Ⅰ群



深鉢形土器　第Ⅱ群

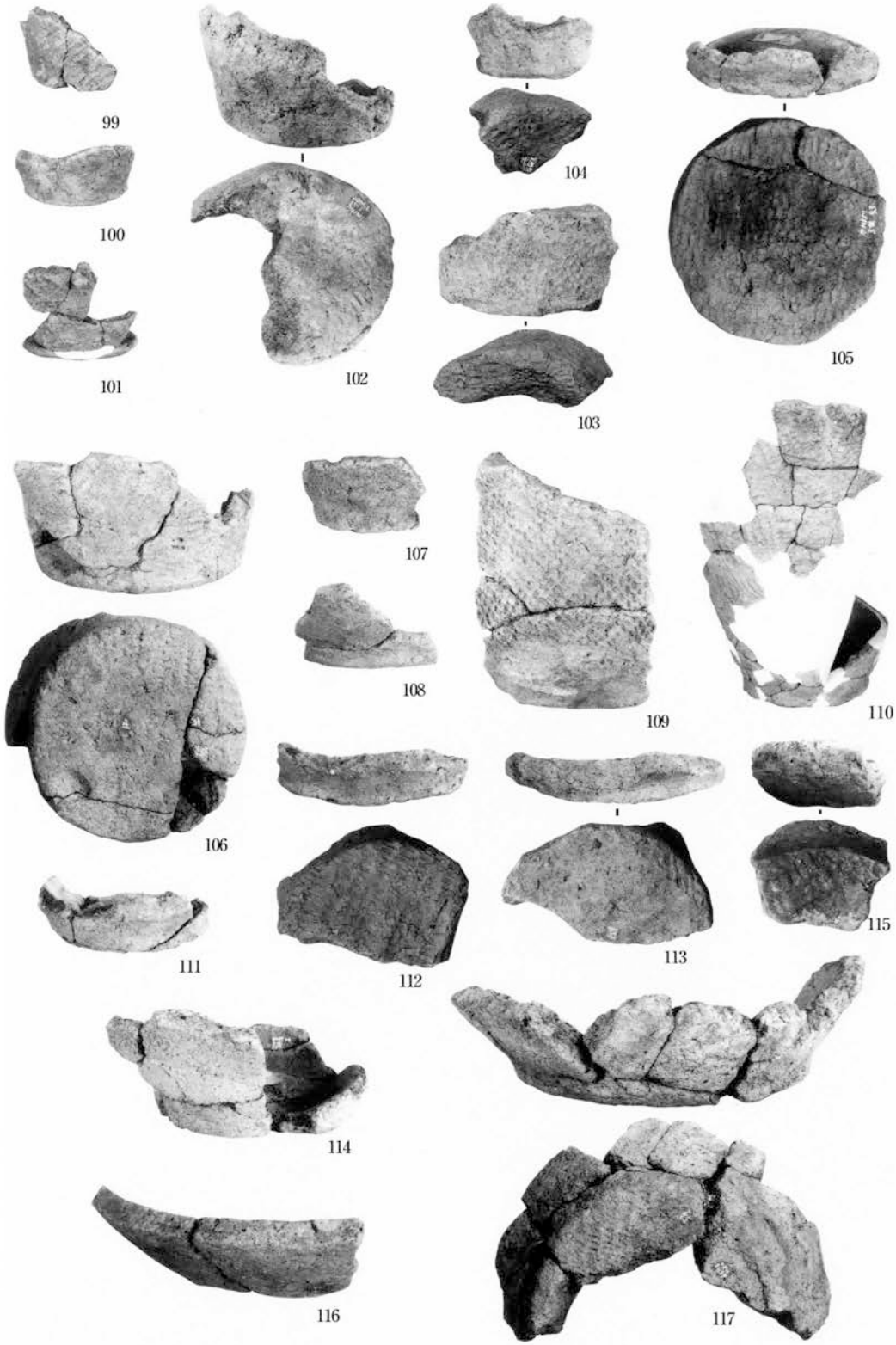


深鉢形土器　第Ⅱ群

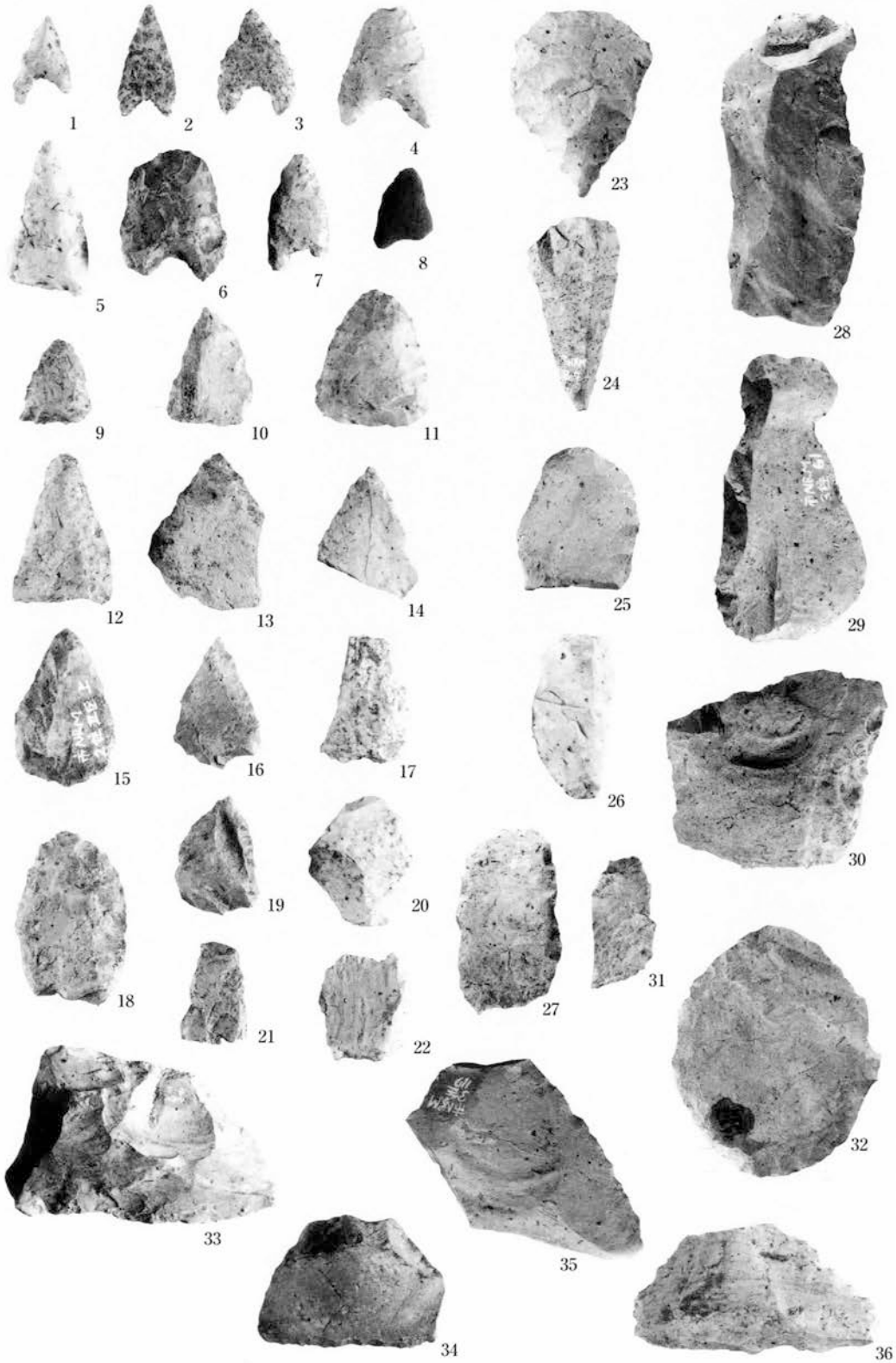


深鉢形土器　第Ⅲ群

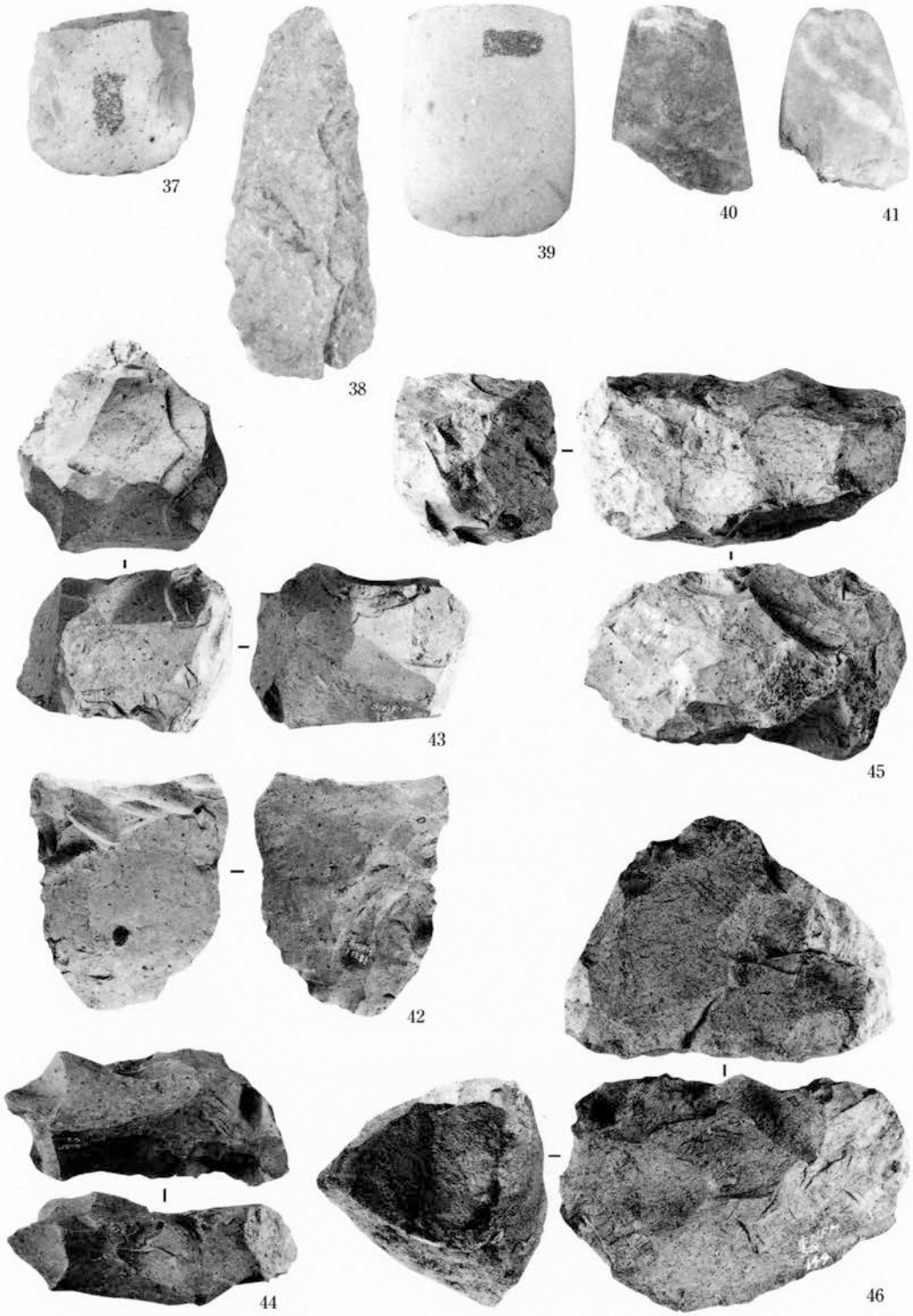
浅鉢形土器


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117

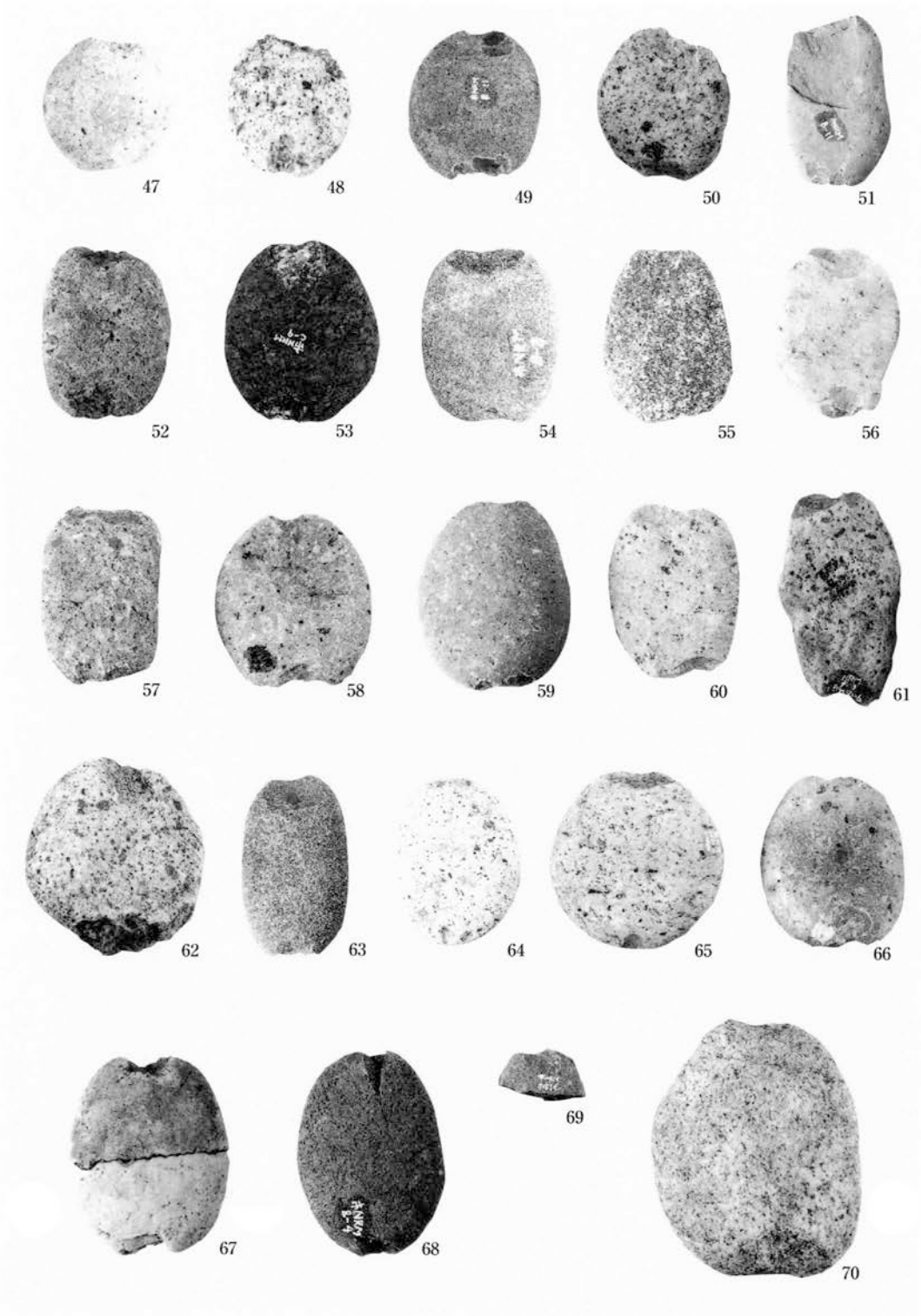
底　部



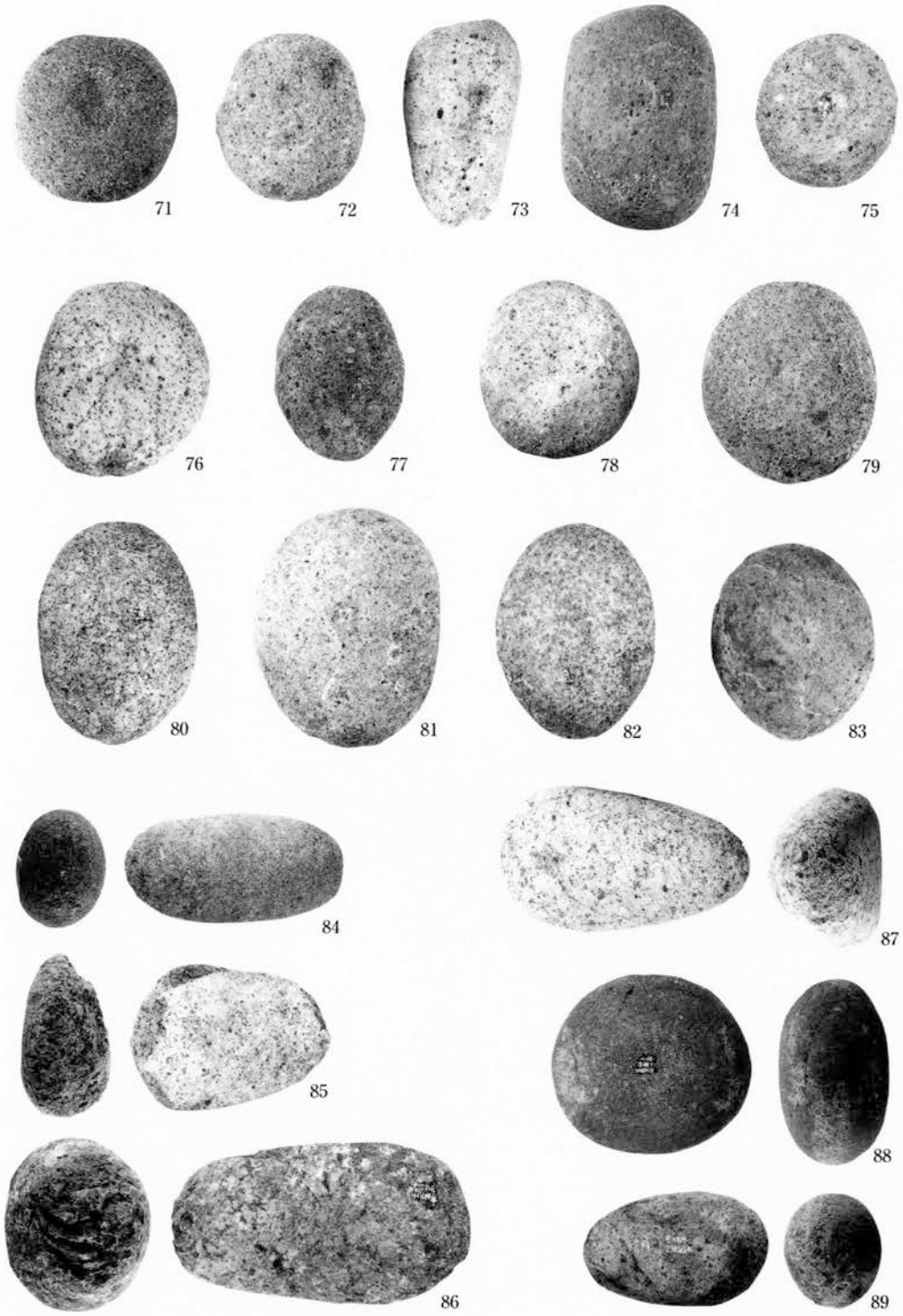
石鏃・石鏃未成品・石錐・スクレイパー類



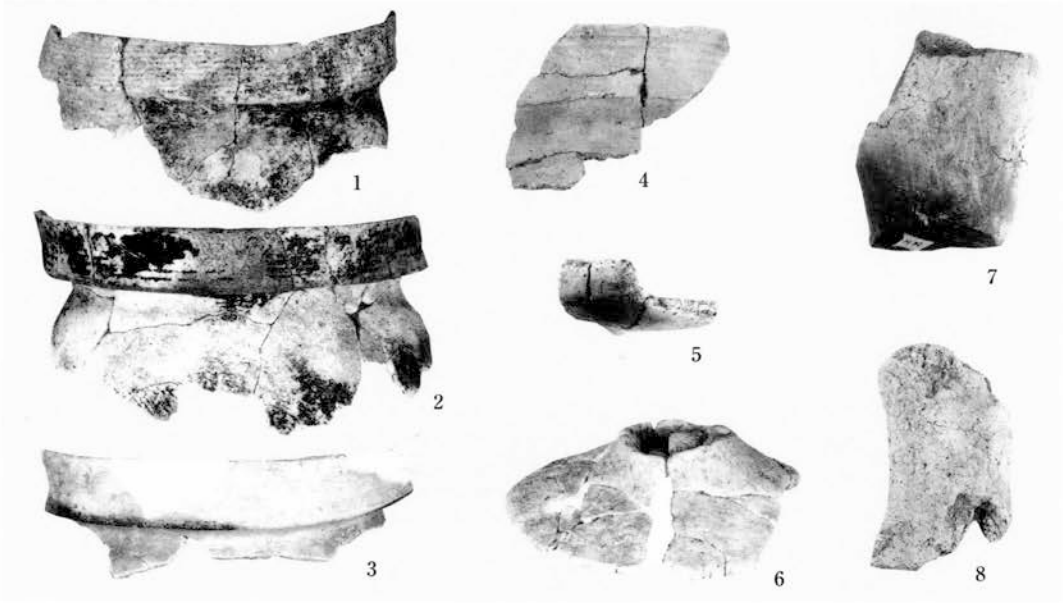
石斧・石核



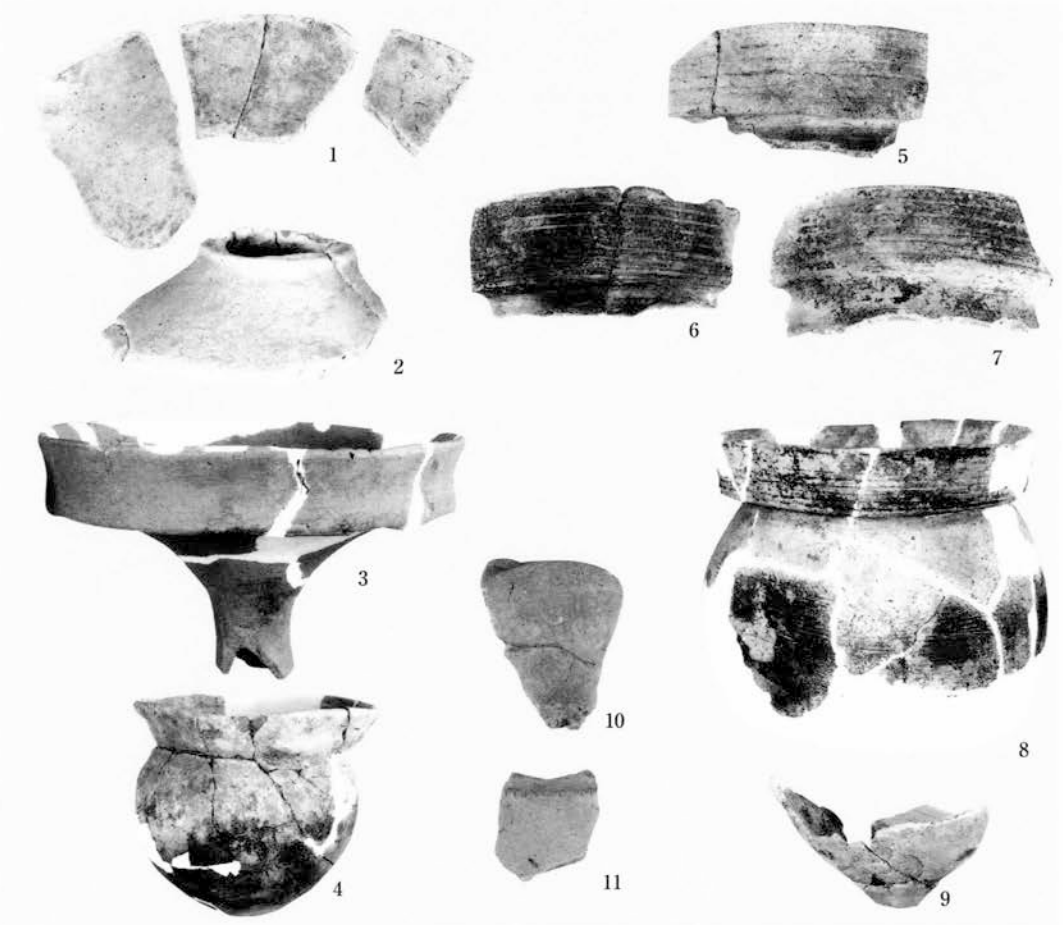
石　錘



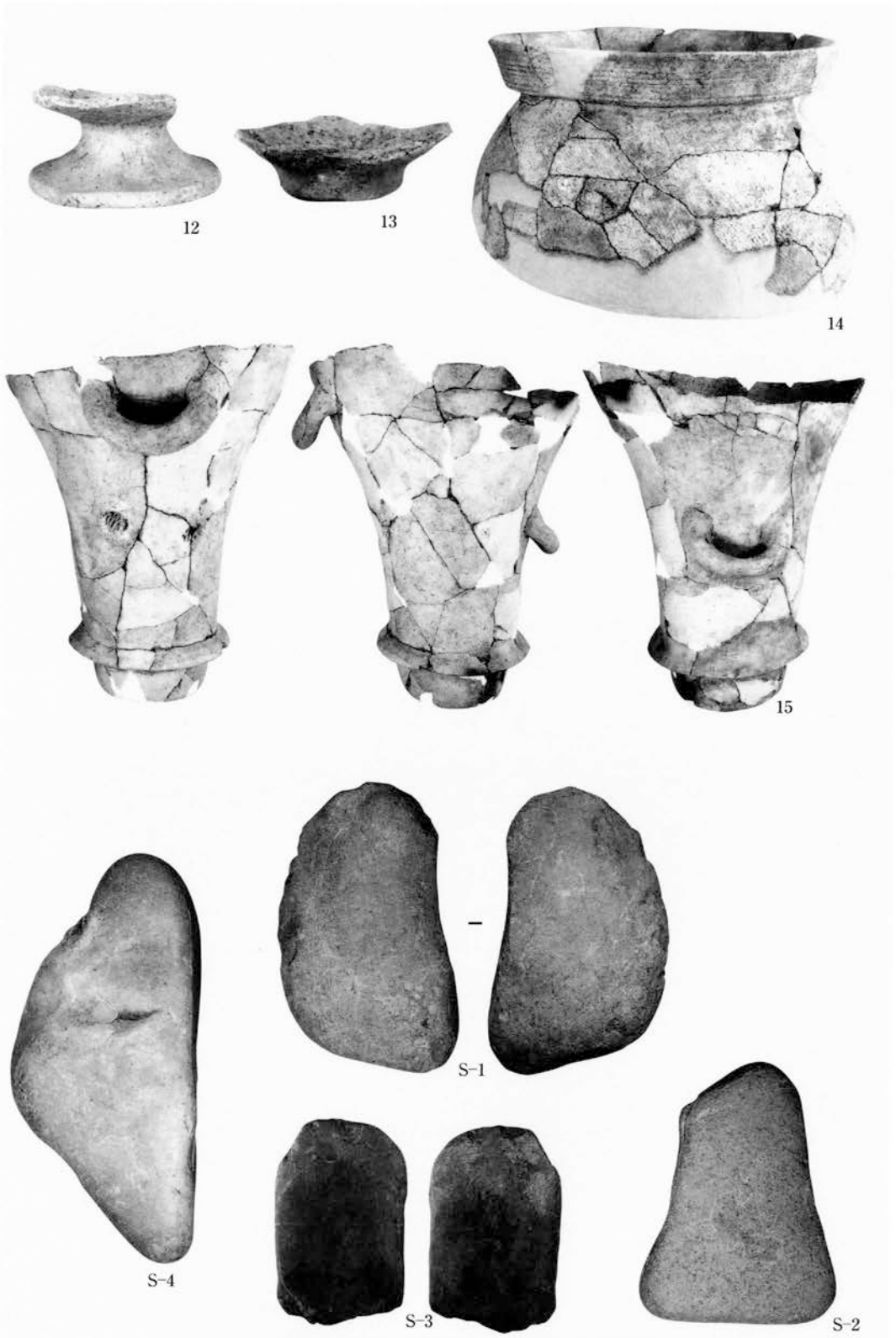
凹石・磨石類・敲石



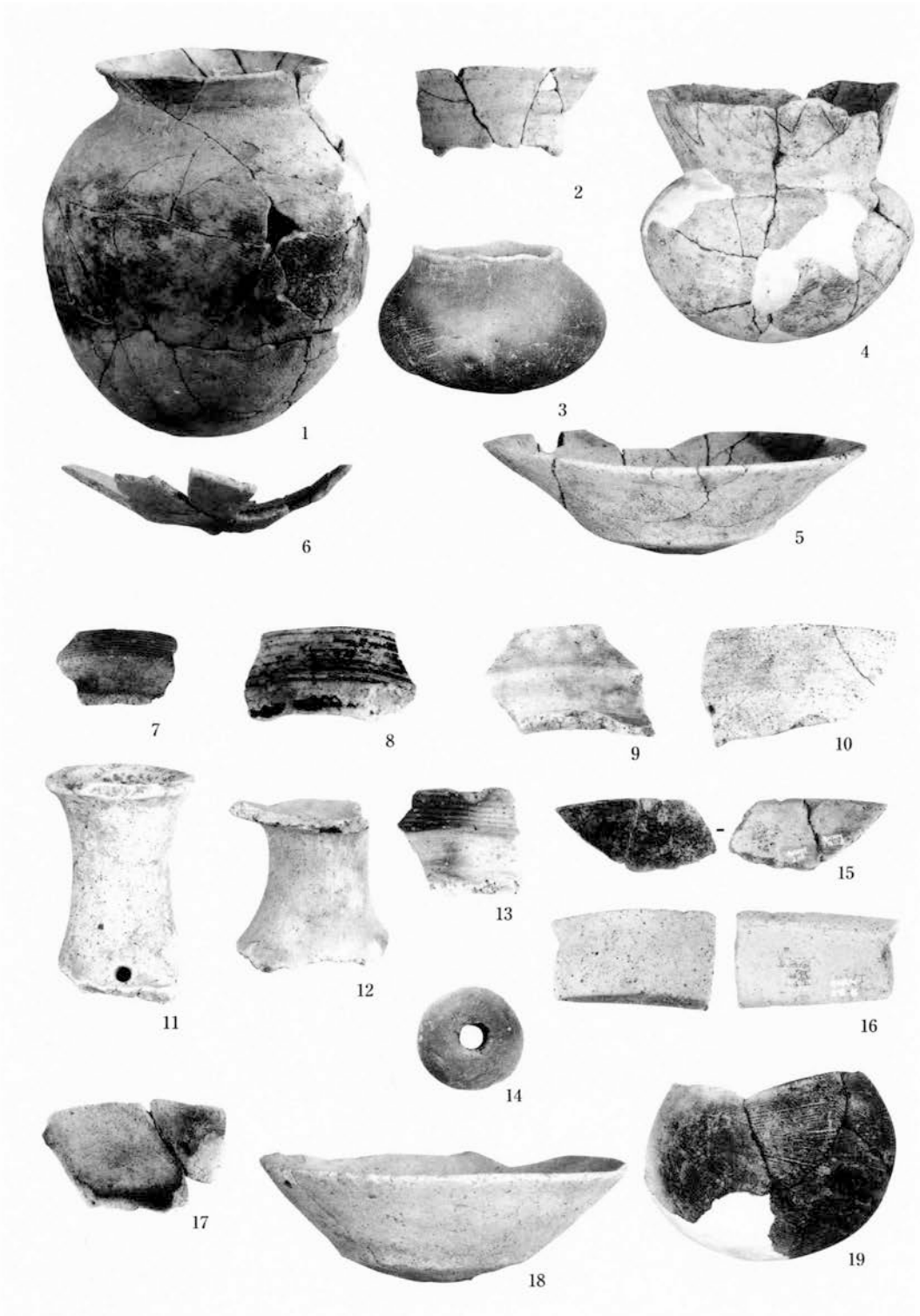
1号土坑出土遺物



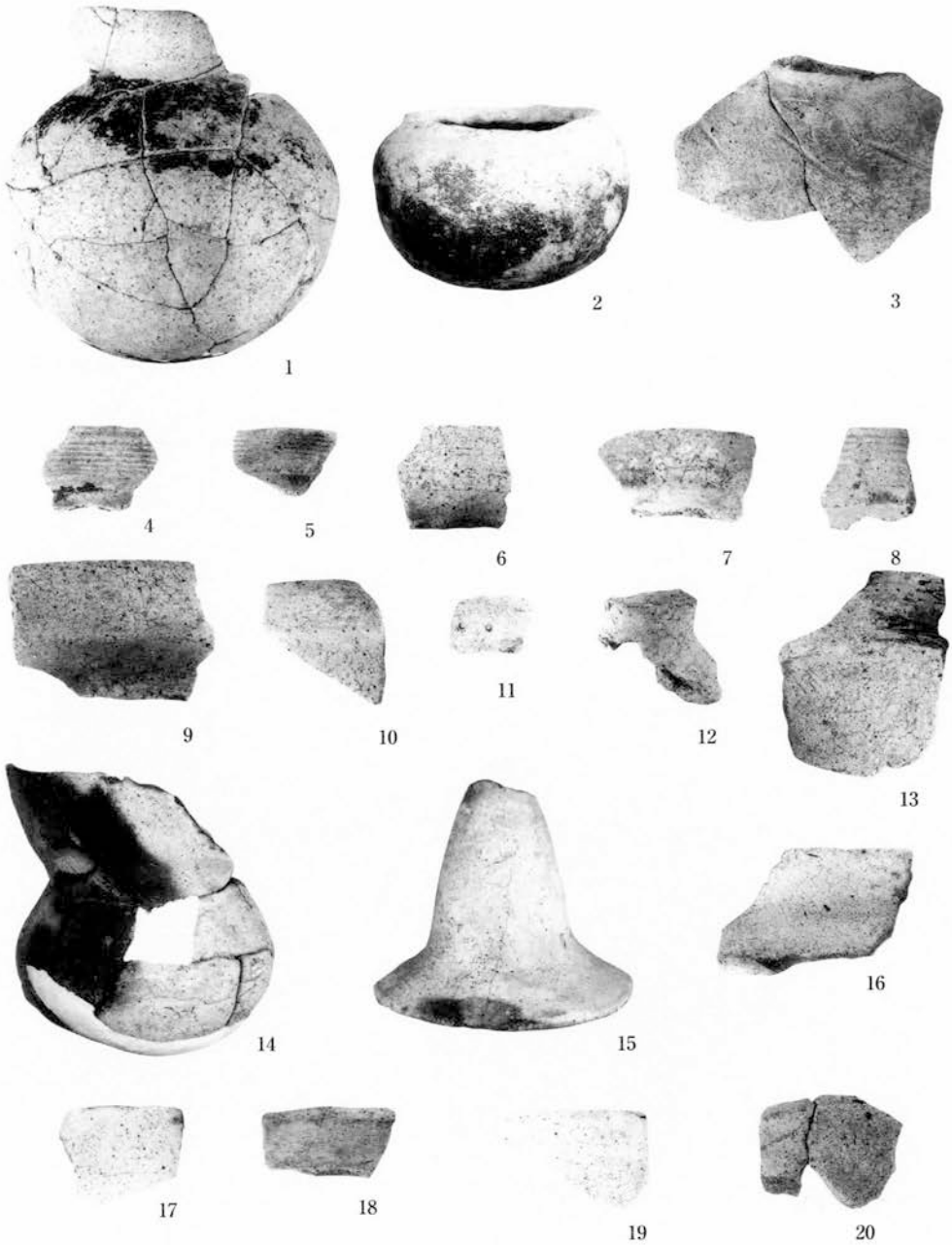
11号住居跡出土遺物（1～4：床面、5～11：覆土）



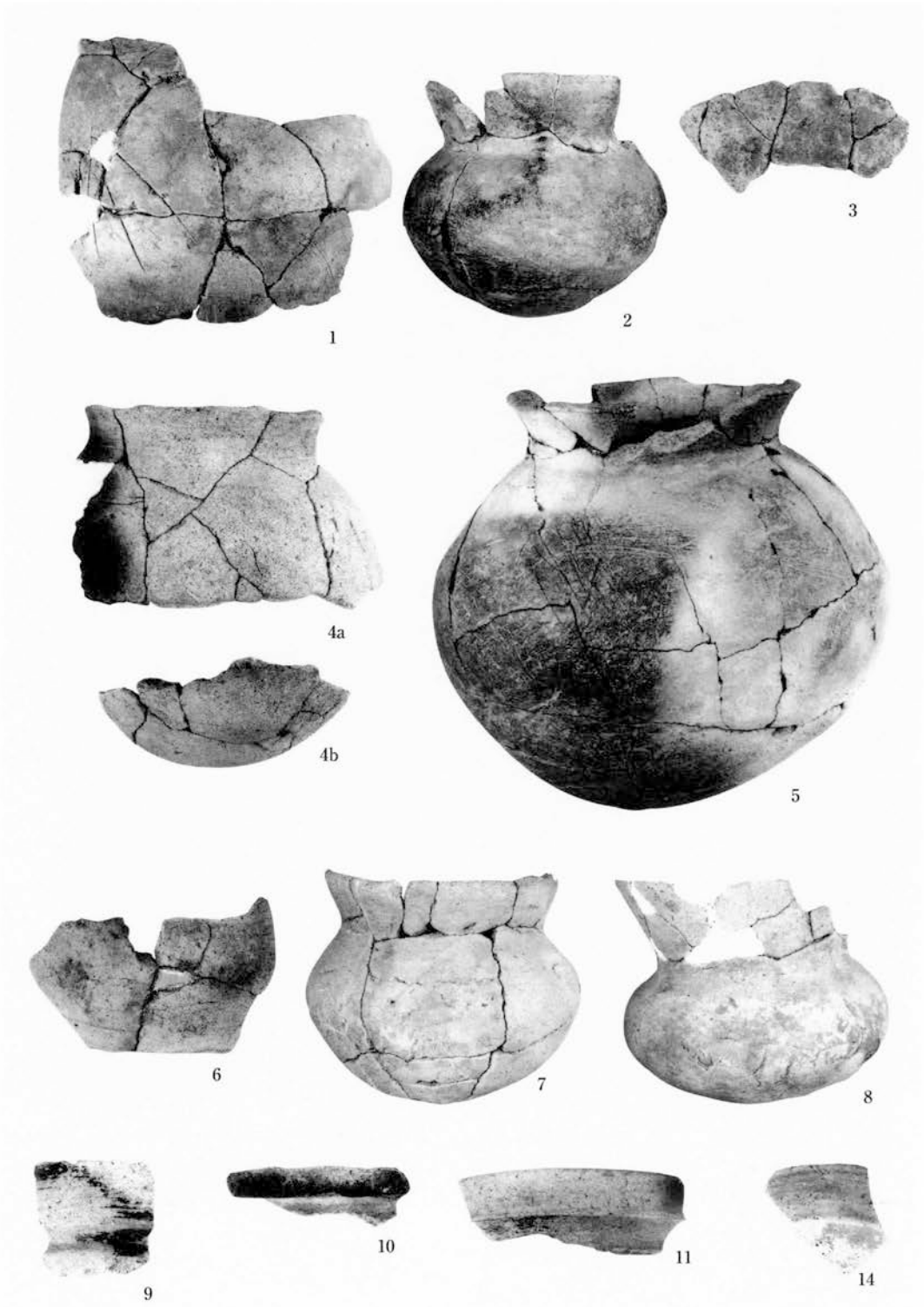
11号住居跡出土遺物（12～15：覆土、S1～S4：床面）



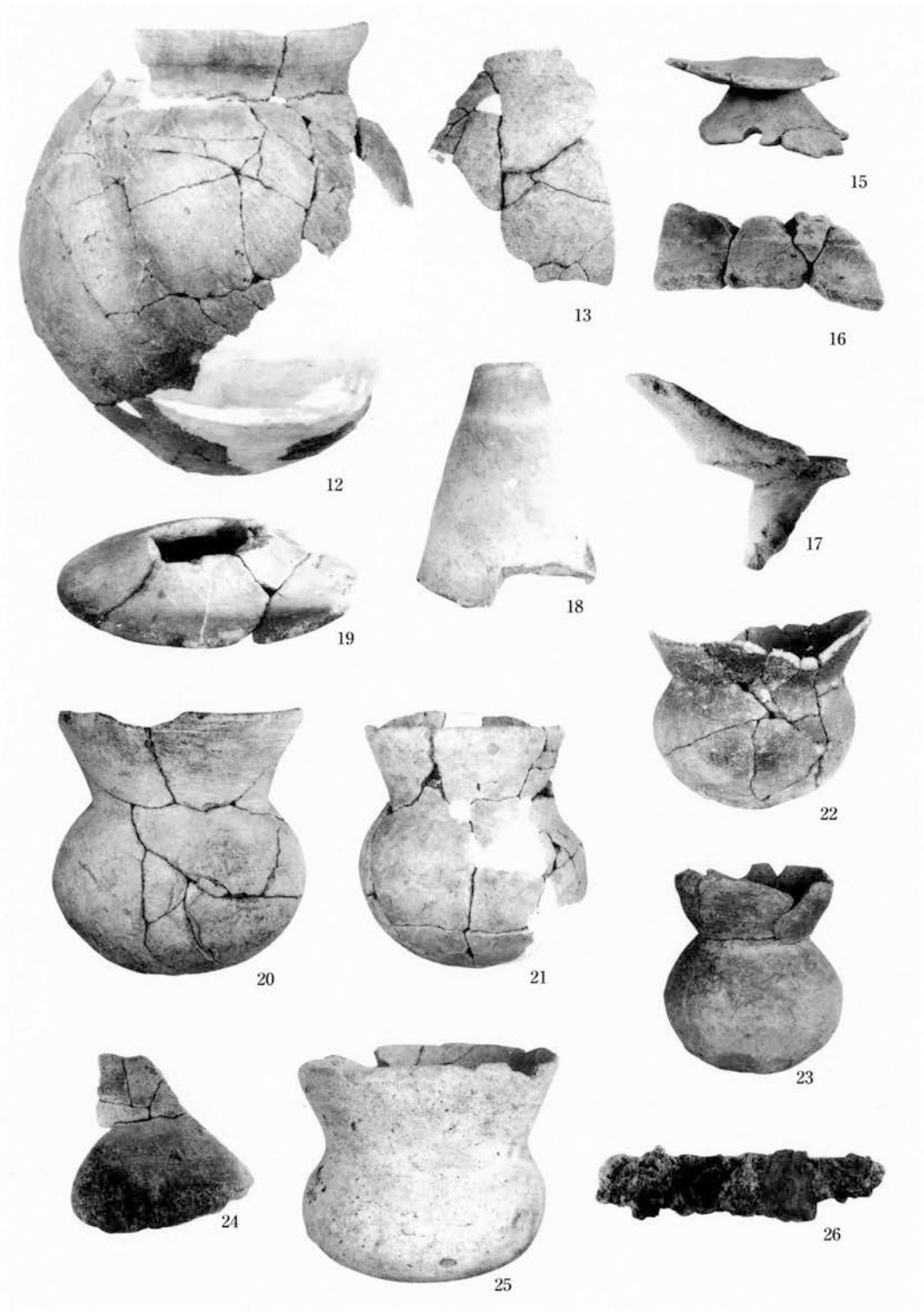
2号住居跡出土遺物（1～6：床面、7～19：覆土）



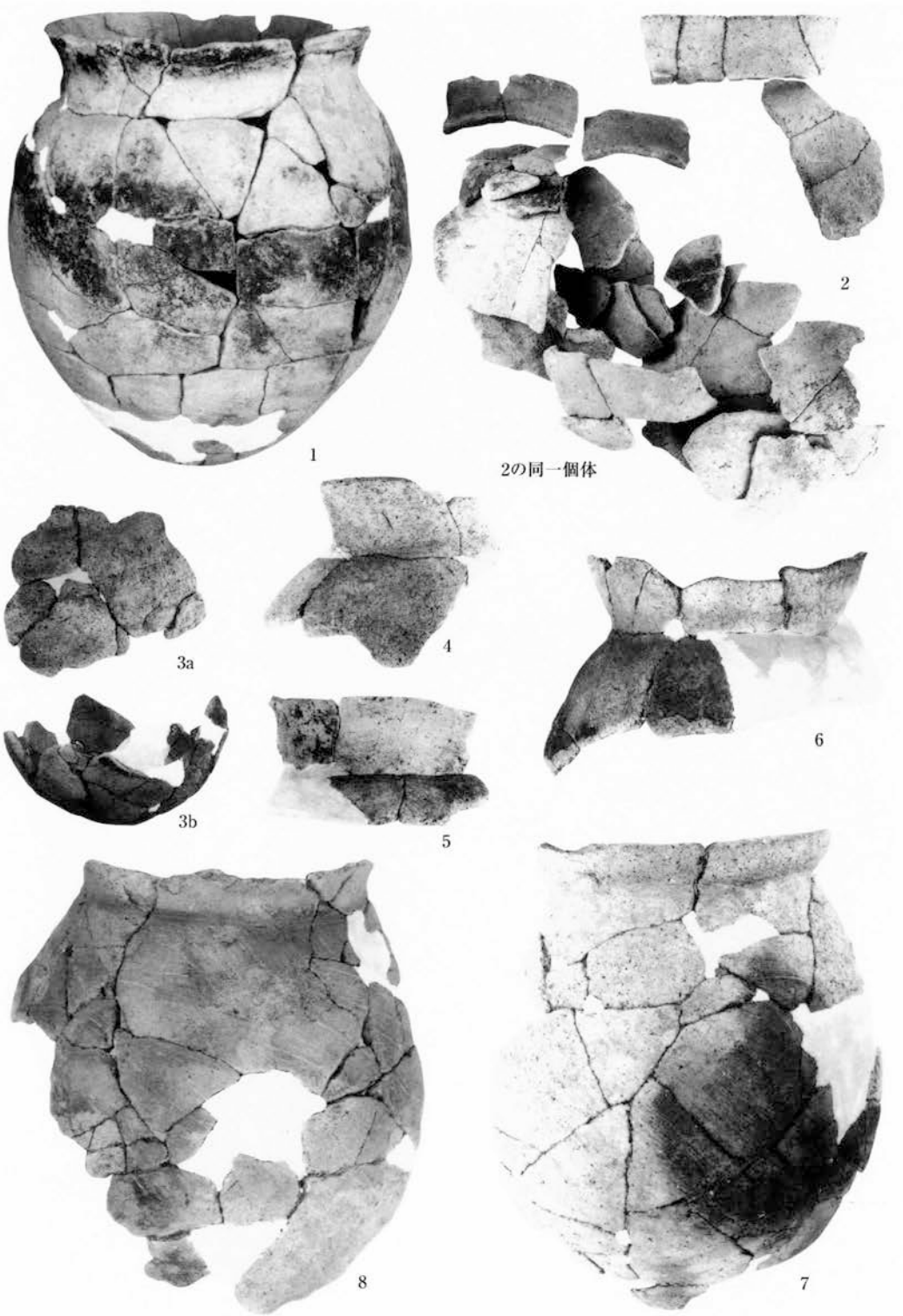
4号住居跡出土遺物（1～3：床面、4～20：覆土）



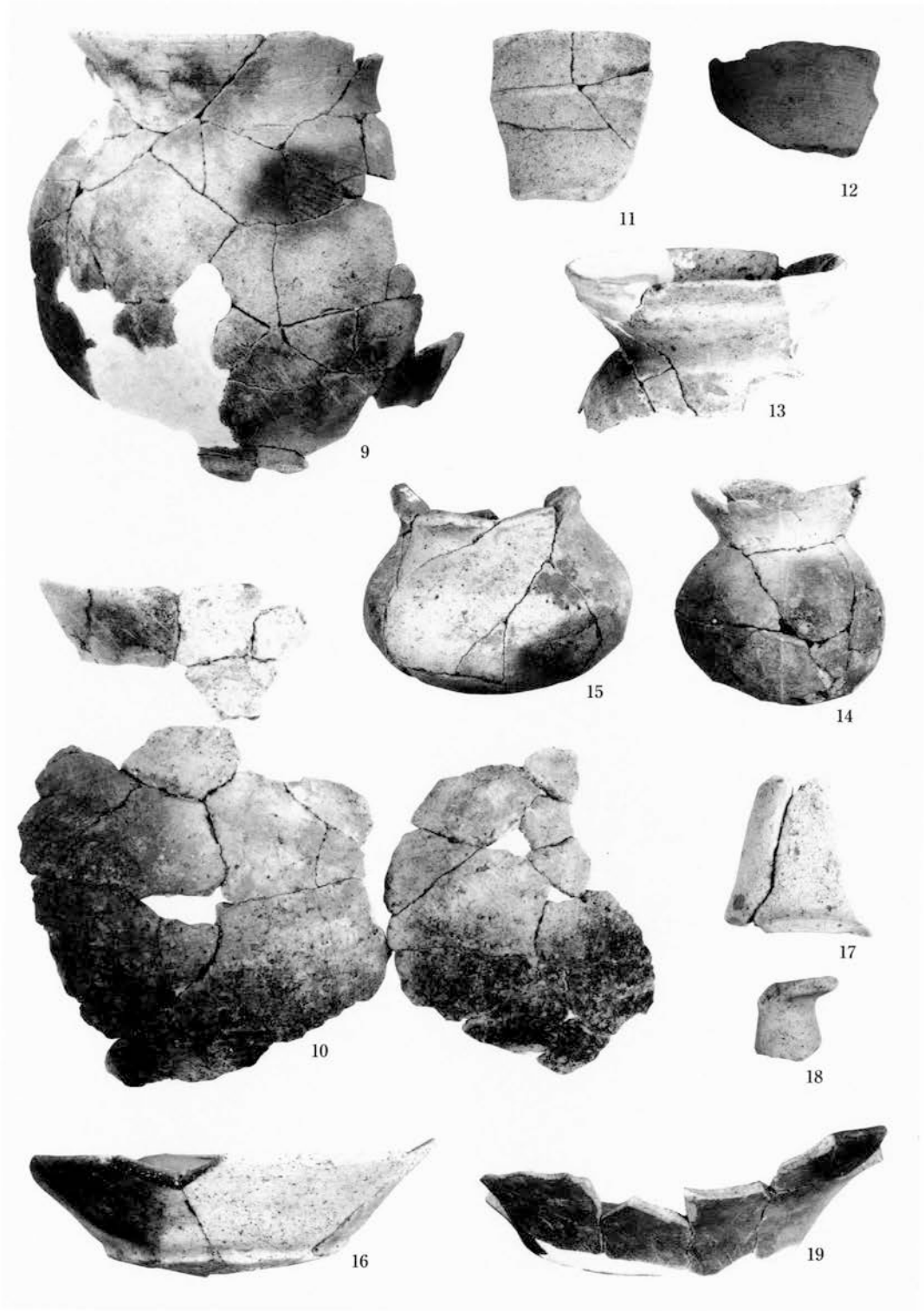
5号住居跡出土遺物（1～3：B住覆土、4～8：A住床面、9～11･14：A住覆土）



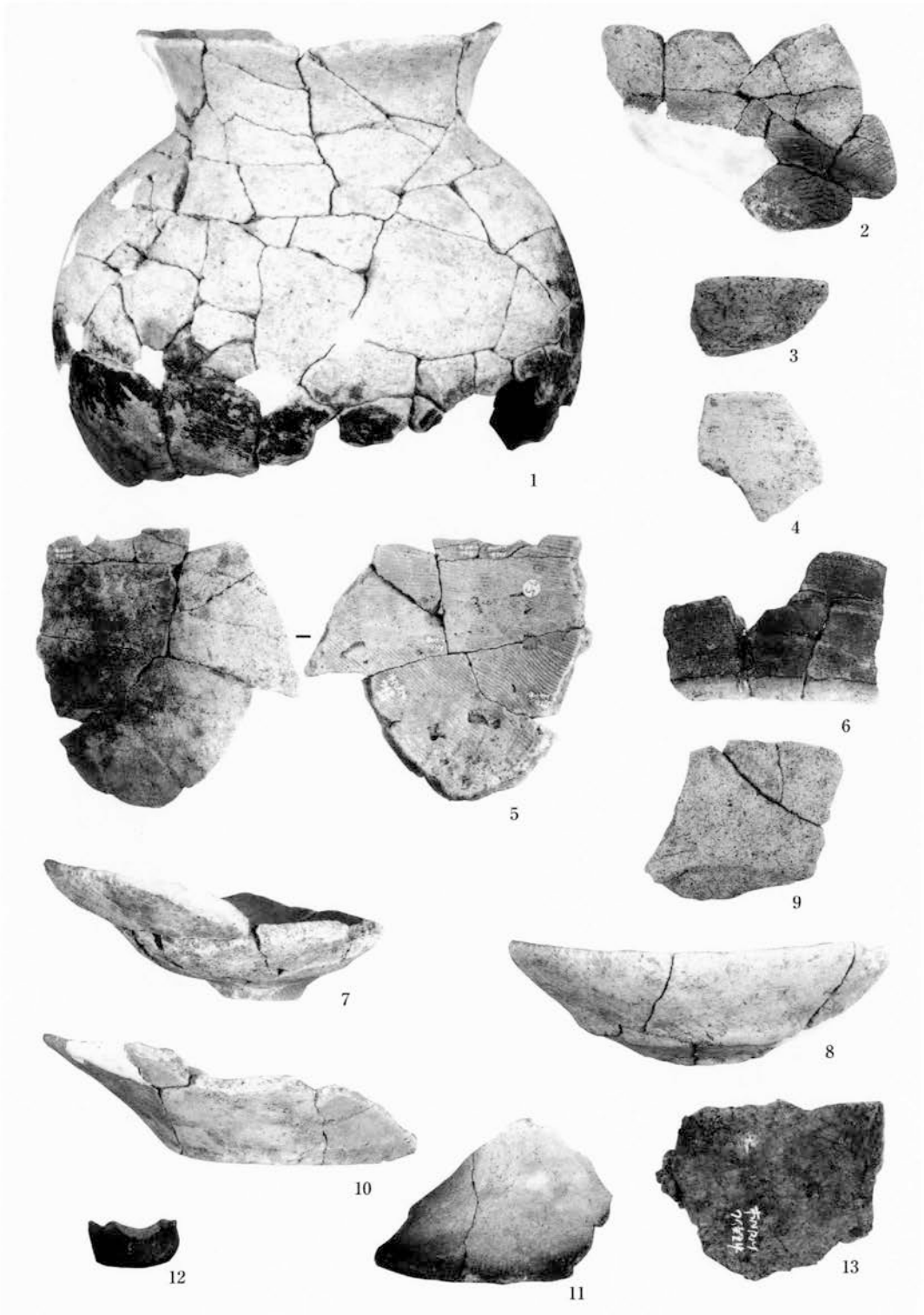
5号住居跡出土遺物（覆土）



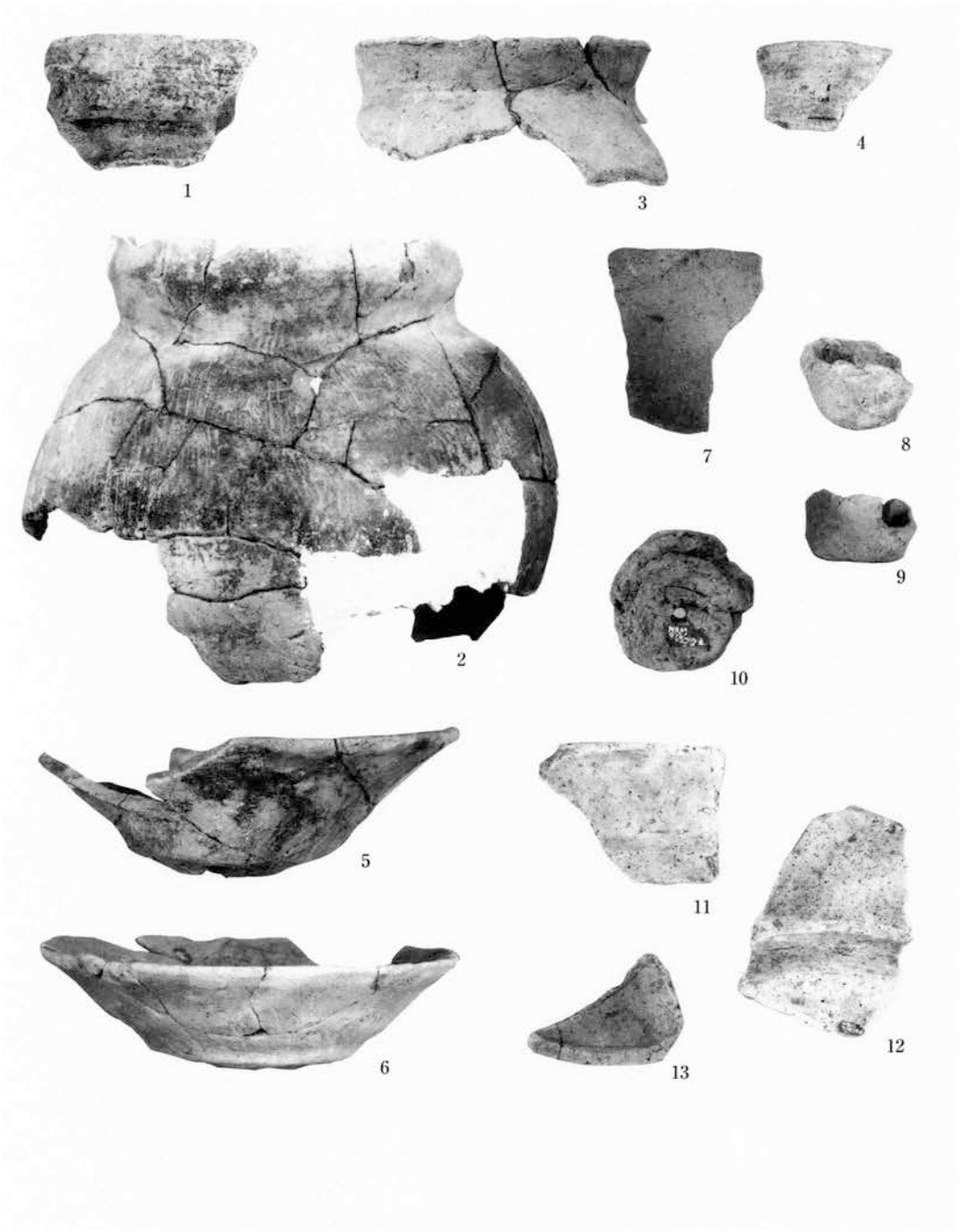
6号住居跡出土遺物（覆土）



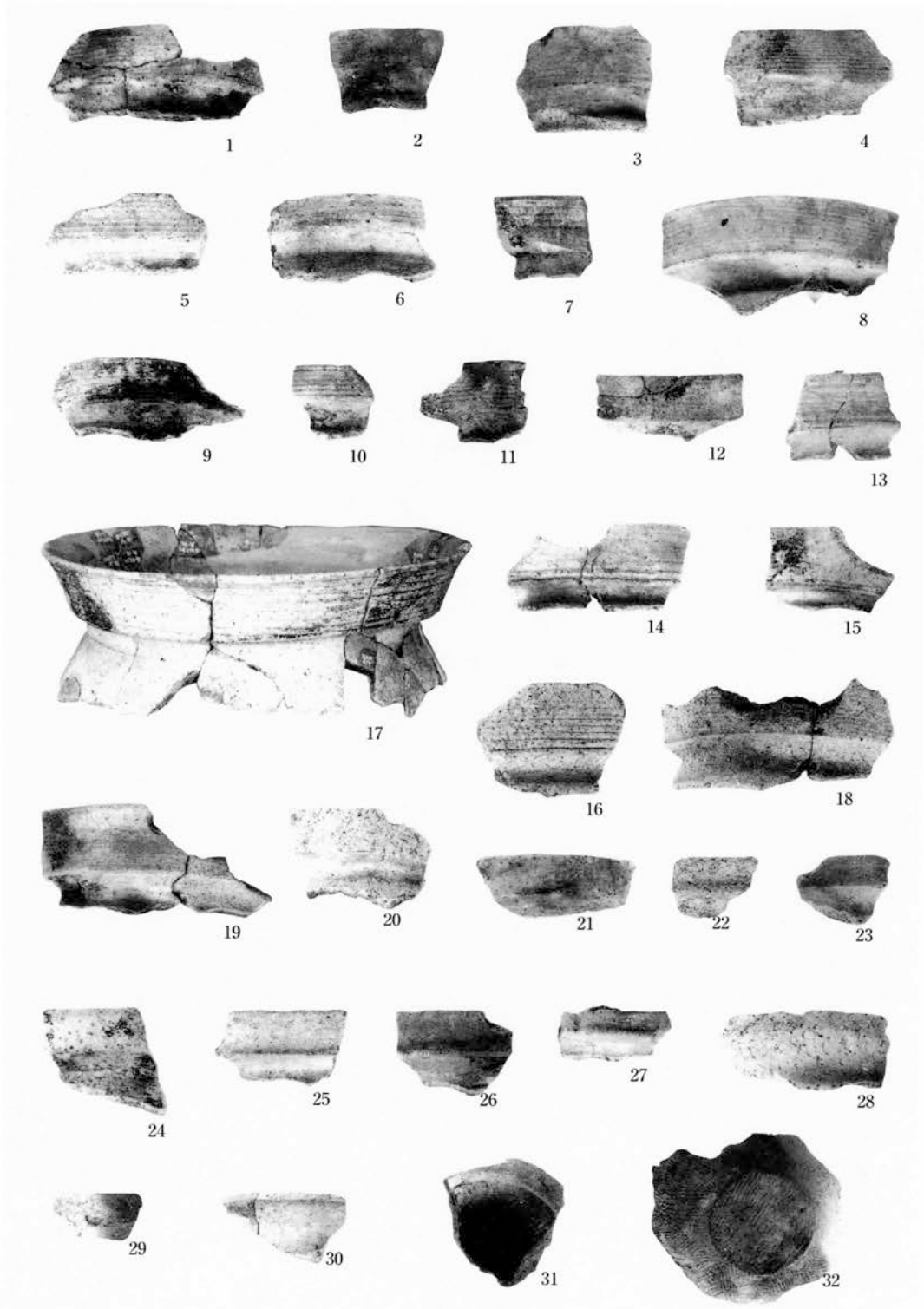
6号住居跡出土遺物（覆土）

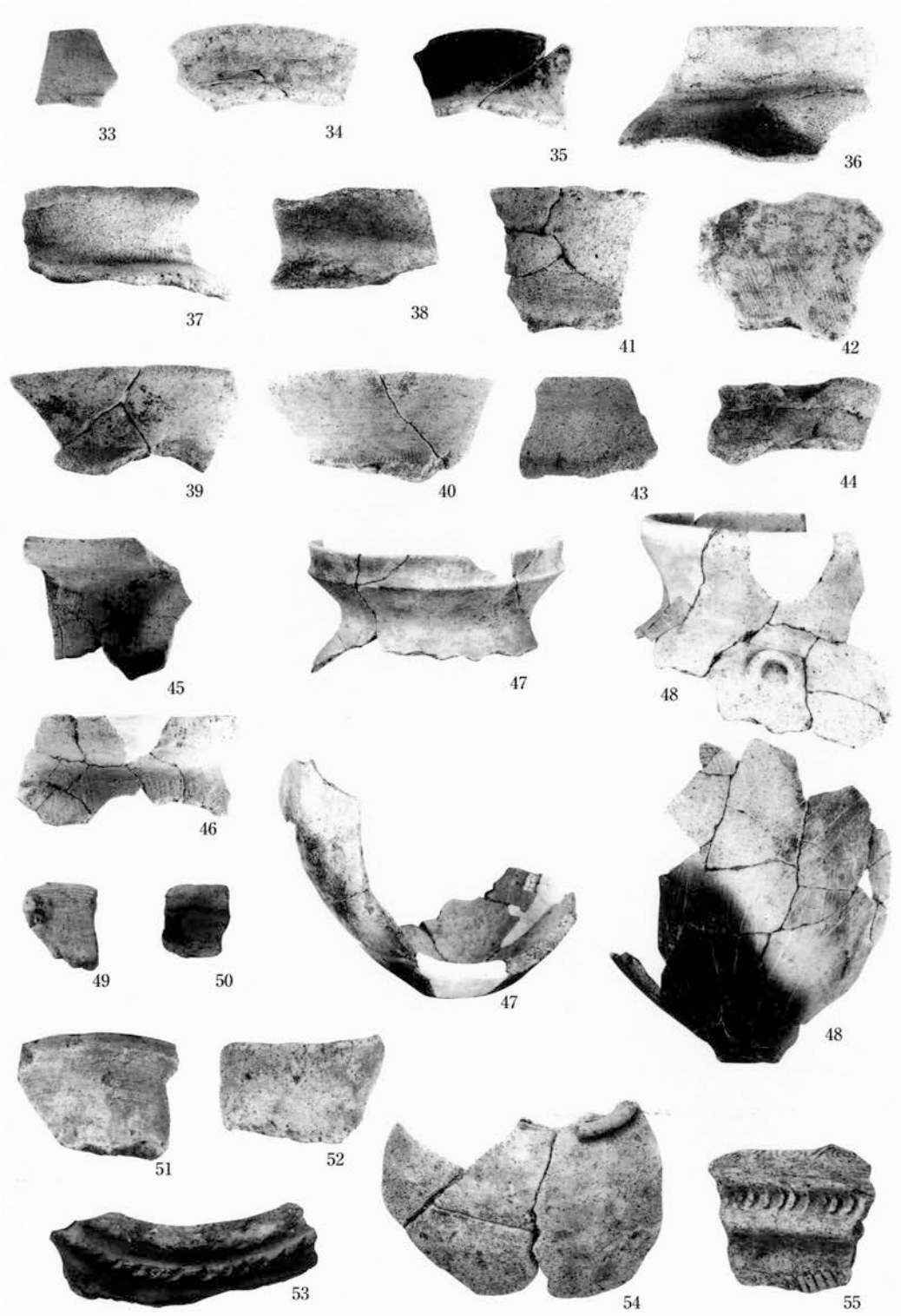


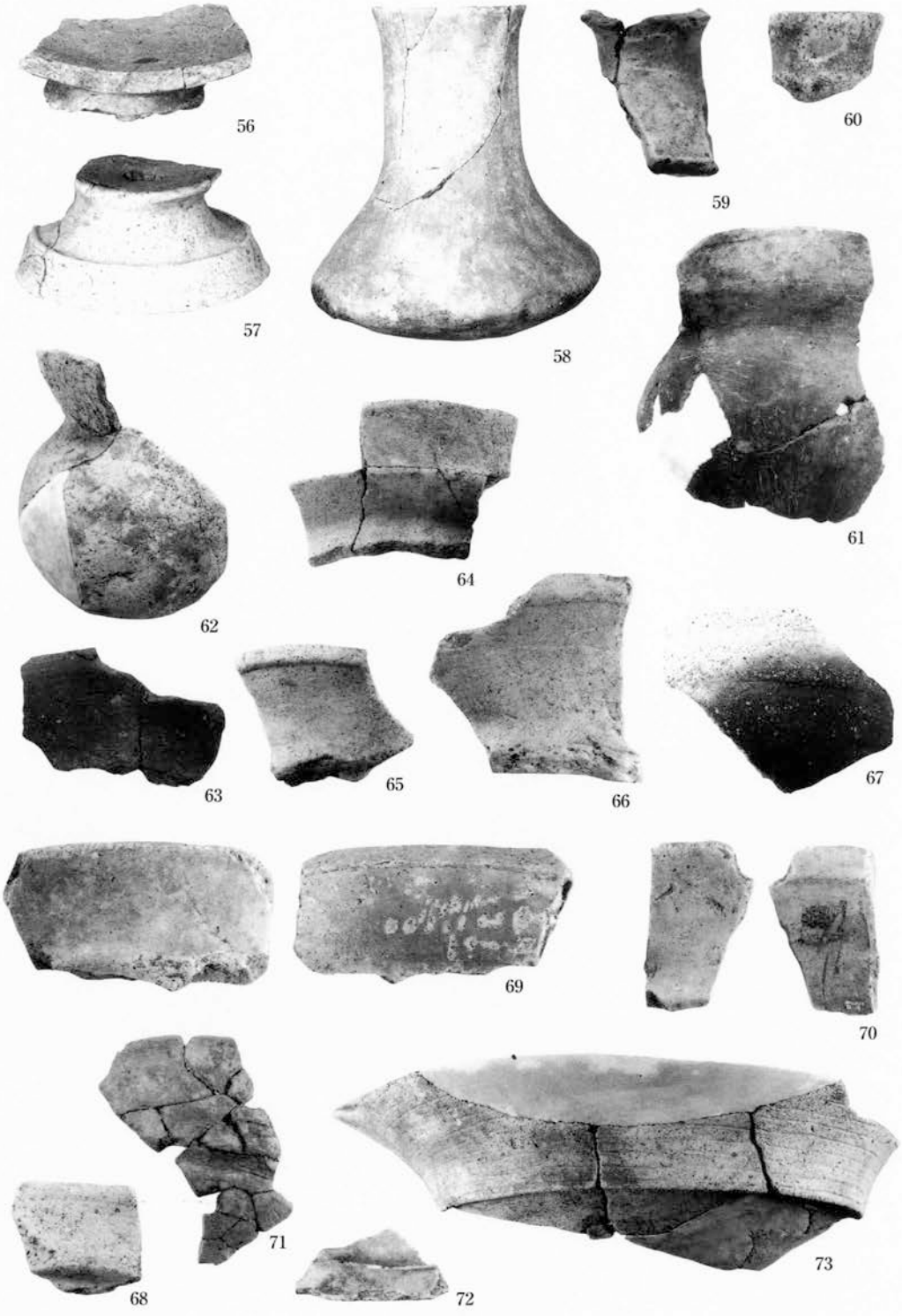
7号住居跡出土遺物（覆土）

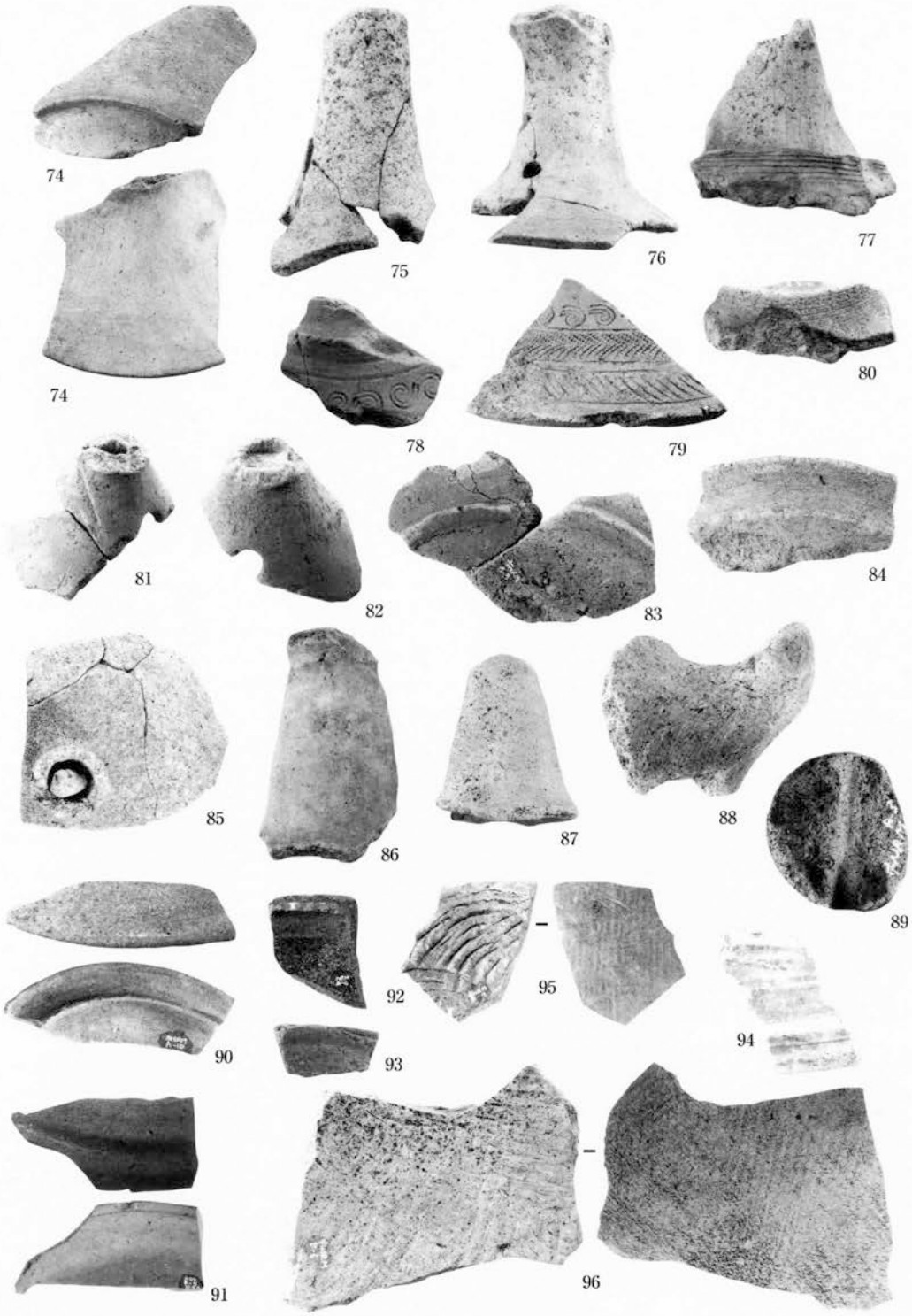


9号住居跡出土遺物（覆土）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32


33
34
35
36
37
38
41
42
39
40
43
44
45
47
48
46
49
50
47
48
51
52
53
54
55


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73


74
75
76
77
74
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

念仏林南遺跡 I
新設道路改良事業(市道建設)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日　1994年3月31日

編集・発行　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地

印　　刷　宏文印刷